0049705000

0049705-000

特２３４－４７１

新修国文教授資料

富山房編輯部・編

富山房

女学校用　巻１０

昭和１３

AHJ

特234
471

納本

冨山房編輯部編

新修國文

女學校用

教授資料

東京 冨山房發兌

新修國文　教授資料　に就いて

本書は新修國文の教授用參考書として編纂したものであります。全十卷の讀本に應じて本書も亦全十卷より成り、簡潔にして要を得ることを念願と致しました。卽ち地名、人名その他の名辭で殆ど常識といつてよい程普遍化されたものの註解は簡明に、修辭的、文法的に疑義の生じ易い點、若しくは異論の多い章句、講義上特に力說强調すべき個所は、繁を厭はず記述を豐富に致しました。以下實際御使用に際しての便宜の爲、本書の篇次に就いて略記致します。

扱　方　この篇では、實際教授に際していかにその教材を取扱ふべきかに就いての私見を述べました。これは讀本編纂に際して、編輯部がその教材を採錄し、その場所に配置した理由を明らかにし、更に全卷との有機的關係を示したものであります。素より私見でありますから、實際教授に當つては、教授者諸彦と見解を異にする所もあると思ひますが、一教材と全卷の關係を知る事は、教授者諸彦の教材取扱の態度を確立するに資するものあるを疑ひません。

教　授　この篇では、作者の略傳、引用書、語釋を擧げました。作者の略傳は簡明を旨とし、引用書は、その教材の實際教授に參考となると思ふ場合には、序跋等をも引き、古典にあつてはその文學史的價値にまで言及しました。語釋は章句に重きを置き、特に修辭的文法的解釋を下し、鑑賞に資せしめました。

鑑賞批評　この篇では教材の文學的鑑賞、批評を主とし、教授上特に注意すべき所を强調しま

した。而してこの鑑賞批評は、どこまでも教科書中の一教材としてといふことを標準として述べました。先の「扱方」と併せて教授者諸彦の教材取扱に對する態度を決定すべき資となるものが多いと思ひますから、「扱方」と併讀される事を希望致します。

參考　この篇では、教材の講義上、折に觸れ、事に應じて參考として授くべきもの、鑑賞批評に資すべきもの等を擧げました。時には又、全文の梗概、段落、詩教材に於てはその散文譯なども擧げました。

以上本書の概要を述べましたが、實際教授に當つて御氣附の點に就いては、その都度御批正を仰ぎ、本書のよりよき完成を期したいと存じます。

富山房編輯部

新修國文編纂係誌

新修國文　女學校用　教授資料　卷十

目次

一　かぐや姫の昇天……（竹取物語）　一
二　菊花の約……上田秋成　二
三　人格の表出……倉田百三　三五
四　法成寺の造營……（榮華物語）　四一
五　日本民族の獨創力……田中寬一　五三
六　萬葉集の歌……（萬葉集）　五八
七　都がへり……紀貫之　七三
　別離……七三
　海路……七六
　都がへり……七八
八　須磨の浦波……紫式部　八七
九　我が國各時代の代表的婦人……芳賀矢一　一〇四
一〇　羽衣（謠曲）……一二〇
一一　孔明出廬（詩）……土井晩翠　一三六
一二　光賴卿の參內……（平治物語）　一四三
一三　皇道……清原貞雄　一五八
一四　建國の大精神……永田秀次郎　一六四

附錄

江戸時代の文學……一七九
明治以降の文學……二〇八

（挿圖筆者略傳）

前田青邨……二三五
富岡鐵齋……二三五
佐藤靜湖……二三五
荻生天泉……二三五
增田牧山……二三五
寺崎廣業……二三五

一　かぐや姫の昇天

（竹取物語）

扱方　最後の學年として本卷には古典名著を數篇採つてある。今までも屢々古典教課には接して來たわけではあるが、その讀解力はもう相當に附いて來たであらうし、從つて又大抵の場合古典愛といふやうな氣持が生徒自身のうちに感じられて來るものであるから、そこの心理を巧みに捉へることを忘れてはならぬと思ふ。「かぐや姫の昇天」といふロマンチックな題名がすでにこの年配の生徒達を好奇的な世界に誘つてゆくと共に、非常な興味を湧かすであらう。讀後の感想も簇出する、それだけ竹取物語の國語教育價値があるわけである。中等學校に於ける古典教材の取扱にはまだ〳〵研究されるべき點が多からうと思ふが、本課のやうな教課に接して生徒自身が進んで勉學しようといふ興味を持たせることは大切であるし、同時に國文學史的背景を持たせる意味からみても本課を開卷第一に据えたのである。日本が藝術國であることは、事改めていふまでもないことだが、九世紀の中葉に、竹取物語が生れたといふこと——つまり散文藝術が確立されたといふことは、今更のやうに我々の胸を動かす一事でなければならない。九世紀といへば、海の彼岸の紅毛諸國は、まだ散文藝術の胚だも結ばず、詩歌の口吟に快い眠を貪つてゐた時代ではなかつたか。詩歌の全盛に酣醉して、我がこと足れりと思つてゐた時代ではなかつたか。その時代にあつて、日本の平安の都の雅客は、古事記、風土記のロマンス、萬葉集の詩から一躍して、散文藝術の創作に、樹立に、筆を呵したのであつた。我々は少くとも藝術方面に於ては、世界に對して大きなロが利けるのだが、就中、この一事は、最も誇るに足る事柄の一つだらうと思ふ。しかも、竹取物語を生んだ一個の天才者は、天才者として終つたのではなかつた。その後、十世紀の末葉から十一世紀の初頭にかけて宇津保、落窪、源氏といつたやうな傑れた散文藝術の實を結ばせて、遂に散文藝術の大きな流を、後世にまで押流したのである。つまり竹取物語の價値は、文學史的にいつて絶對無二の物だといふことが出來るだらう。そして、その上、それが——その時代にあつて既に完成された小説となつてゐることを思ふと、我々は殆ど奇蹟的な

感動を催されずにはゐないのである。もちろん竹取物語はロマンチックな說話ではある。が、決して荒唐無稽な——たとへば古事記に表れた稻葉の白兎の話の如きものではない。そのロマチックな衣の下には、切ないまでの現實的色調がにじんで居り、いはゆる世相描寫の心髓が鋭い底光りを放つてゐるのである。で、本課には、同書中のクライマックスたる、かぐや姫昇天の一條を採つたが、さうしたロマンチックな衣を被せた寫實的描法は、こゝに最も端的に、しかも渾然とした情趣を湛へて現れてゐると思ふ。國語讀本の本格的な課として、心ゆくまで綿密に鑑賞して頂きたい。

教授

引用書

竹取物語——「竹取物語は源氏物語繪合の卷にも物語のいでき初めのおやとしてあつて、伊勢物語と共に平安時代の物語の先驅となるべきものであらう。そして、その作られた時代については諸說がある。普通に竹取物語の作者を源順としてあるが、この說はたしかな證はないのである。宣長は玉小櫛に『いたく古きものとも見えず延喜よりは以來のものとぞ見えたる。』といつて居り、田中大秀は竹取物語解に『源氏物語に繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし。』といひ、更に文德淸和の頃或は弘仁の頃の作とする說がある。藤岡博士は大秀の說を穩健として延喜をへだたる遠くない時に作られたとしてゐる。そしてこの竹取の訓法に就いては顯昭は『タカトリ』であると述べてゐる（六百番歌合顯昭陳狀）がなほ『タケトリ』と訓すべきである。竹取物語は竹取の翁が竹の中から一少女を見出したといふ點から筆をおこして、その少女が輝くばかりの女性となつたために五人の公卿から愛を求められたが、難題を設けてすべてを失敗させ、終りに天皇の求婚にあつて月の夜昇天したといふ說話を扱つてある。この說話は神性を備へた女性と人間との戀愛を描いた神婚說話形式の變化であるとも見える。萬葉集の中にも竹取翁と九人の女性とをうたつた歌はあるが、それとは殆ど關係なく、竹から生れるといふことは、契沖もいふ如く大寶樓閣善位祕密陀羅尼經序品（「參考篇」參照）に見え、その他の說話形式は奈女耆婆經などに見えるのであつて、月中の女、不死の藥、蓬萊山、龍首の玉の如き支那神仙思想などを基礎として一編がつゞられたと思はれる。全篇が傳奇的傾向にみちて、歌物語とは別の敍事的傾向の著しいものである。文章もなほ簡素で、その初期の作品である事を思はせる。」（藤村作著、國文學史總說）

語釋

〔かぐや姫〕「かぐや」は身に光あつて、照り耀き、美しい故につけられた名で、赫哉姫、赫耶姫、赫奕姫、赫夜姫などと書き、竹取物語の冒頭には、次のやうにある。

「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹をとりつゝ萬づの事につかひけり。名をば讚岐造麿となんいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中ひかりたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうてゐたり。翁いふやう『われ朝ごと夕ごとに見る、竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり。』とて、手にうち入れて家にもて來ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。美しき事限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて後に竹をとるに、節を隔ててよごとに金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁やう〳〵豐かになりゆく。この兒養ふ程に、すく〳〵と大きくなりまさる三月ばかりなるほどに、よき程なる人になりぬれば、髮上げなどさだして、髮上げせさせ裳着す。帳の內よりも出さず、いつきかしづき養ふほどに、この兒のかたち淸らなる事世になく家の內は暗き所なく光滿ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹だたしき事も慰みぬ。翁、竹をとること久しくなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば名をば、三室戸齊部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。

〔參考〕——本課に採られた所の前の部分の梗概を記して置かう。——竹取の翁が、かぐや姫を得て、かぐや姫と命名する所までは前項に原文を引いたが、さてそのうちに姫の美しい評判が立つと、あちらからもこちらからも姫を見ようとする者が雲集して來始めた。が姫は斷じてこれに應ぜず、就中、就心の深かつた五人の者には、難題をかけて見事にはねつけてしまつた。その難題にはいろ〳〵面白いのがある。卽ち、天竺の佛の御石の鉢をとつて來いとか、東の海の蓬萊山の白銀を根とし、黃金を莖とし、白玉を實として立つてゐ

る木を一枝折つて来いとか、唐土の火鼠の裘を給へとか、龍の首の五色に光る玉をとり給へとか、燕のもつてゐる子安貝を一つとり給へとかいふので、所詮すべて不可能な事ばかりなのであつた。その内、遂に姫の美は、時の帝の御耳にも入るやうになり、帝も又姫を得給はうとして、「よしなくて、御方々（皇后、女御、更衣など）にもわたり給はず。かぐや姫の御もとにぞ御文を書きて通はせ給ふ。御返し（姫の帝への）さすがに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき木草につけても、（姫は）御歌をよみて遣す。かやうにて御心を互になぐさめ給ふほどに、三年ばかりありて――」以下本課へ續く。

〔常よりも〕 以前も、月の夜は、もの思はしいさまだつたが、春の初の頃から殊に――。

〔もの思ひたるさま〕 何か悲しく思つてゐる様子。

〔月の顔見るは忌むこと〕 月は、もの思はすものだとして、月の面を見ることは、忌み嫌ふこととなつてゐる――といつて。

〔人間には〕 人のゐない――見てゐない間には。

〔いみじく〕 甚だしく。なほ後出「いみじからん心地もせず云々」の項参照。

〔七月〕 フミヅキ。フヅキ。文月。

〔望の月〕 十五夜の滿月。「もち」は「滿ち」の意。

〔出でゐて〕 端近く（月の見える所に）――。

〔せちに〕 切に。しきりに。深く。

〔近く使はるゝ人々〕 姫の側近く仕へてゐる女たち。侍女。

〔竹取の翁〕 前出「かぐや姫」の項参照。なほ竹取の翁といふ名の始めて見えるのは、萬葉集巻第十六で、「昔有二老翁一號曰二竹取翁一」云々と詞書して、翁の作るところの長歌竝びに反歌二首が出てゐる。が、その長歌の内容は、竹取物語の内容とは全く異なつてゐる。なほ「竹取物語」解題参照。

〔例も〕 いつも。

〔月をあはれがり給ひけれども〕 月を見て悲しんでゐ給うたけれど。

〔この頃〕 七月頃。

〔たゞ事にも云々〕 普通のことではございますまい――何か深い仔細があるのでせう。「さんめり」は「さるめり」の音便で、「めり」は物事の狀態を然りと推量

していふ意の語。――やうである。

〔よく〳〵見奉らせ給へ〕 十分にその様子を御觀察なさい――と注意を與へた語。

〔なでふ心地すれば〕 どういふ氣持がするので。「なでふ」は「何といふ」の約で、どういふ、どんなどの意。また何として、どうして、いかでなどの意（後出「なでふものをか云々」の項参照）に用ひることもある。

〔うましき世に〕 樂しい世の中であるのに。「うまし」は、味のよい意から轉じて、良好の意となつた。で、こゝに「うましき世に」といつたのは、前出「かぐや姫」の項でもわかるやうに竹取の翁が、かぐや姫を見つけて以來「竹をとるに節を隔ててよごとに金ある竹を見つくること重なり」だん〳〵翁の家が富み榮えて來たこと、一方、姫自身にしても、多くの人々からちやほやされ、帝からさへいろ〳〵にもてなされて、極めて幸福――さうに見えたこと、この二方面からいつた語なのである。

〔かぐや姫のある所〕 翁、その後また――。「ある所」はゐる所。

〔あが佛〕 我が持佛のやうに大切に思ふ人の意――ここではかぐや姫を指す。「あが」は「我が」の古語。

〔思すらんこと〕 思つていらつしやること。

〔ものなん心細く覺ゆる〕 物事が何となく心細く感ぜられるまでです。

〔夕闇〕 宵闇ともいひ、十五夜の後、月がまだ上らないで、宵の間の闇なこと。

〔月の程〕 宵より月の見える頃。こゝでは、八月の上旬頃である。

〔これを〕 このさまを見て。

〔使ふものども〕 前にあつた「近く使はるゝ人々」を指す。

〔親をはじめて〕 竹取の翁夫婦をはじめ。親は姫の養ひ親の意。

〔何事とも〕 どういふ仔細があるのか。何事を思ふのか。

〔八月〕 ハツキ。葉月。

〔いたく〕 甚だしく。

〔人目も今は云々〕 今はもう人の見るのも憚からず。「つゝむ」はつゝしむの古語。

〔問ひさわぐ〕 大騒ぎをして問ひただす。

〔さき〴〵も〕 ずつと前(以前)からも。

〔必ず心惑はし云々〕 それを聞いたなら、きつと當惑なさるだらうと思つて。「心惑はす」は分別に迷ふ、心配する、心を千々に悲しませるの意。「し」は敬語「す」の連用形。

〔今まですぐし云々〕 今までそのまゝ月日を過して來たのでございます。

〔さのみやはとて〕 そんなにいつまでも申さずに置くべきことではないし、又かくしおほすべきことでもないから。「さのみやは」は、そのやうにむやみに、それほどまでになどの意で、下に「すべきでない」といふ意の語を置く——反語である。

〔うち出ではべりぬるぞ〕 今、それをうち明けて申上げるのでございますよ。

〔月の都〕 佛教にいふところの月宮殿である。卽ち月の中にある月天子(月天を領し、多くの天女を侍らしめて、歡樂を盡す)の宮殿。

〔昔の契ありけるによりて〕 前世の因緣——前世からの約束によつて。

〔まうで來りける〕 まゐりました。「まうで」は「まゐいづ」の音便で、卽ち參るの意。

〔今は歸るべきに云々〕 もはや歸らぬばならぬ時期になつたので。

〔元の國〕 本國、鄕國——月世界。

〔まうで來んず〕 やつて參らうとしてゐます。「來んず」は「來んとす」の約。

〔さらず罷りぬべければ〕 止むを得ずこの世界を去らなければなりませんから。「さらず」は避けることが出來ず、止むなくの意。是非なく。「まかる」(罷)はもともと退き去るの敬語だが、轉じて行く、來るの敬語ともなつた。

〔思し歎かんが云々〕 あなたがたが、それをお歎きになるだらうのが、私にとつて悲しいといふことを。

〔こは、なでふ事を云々〕 これはまあ、何といふ事を仰しやるのか——とんでもないことを仰しやる!

〔竹の中より見つけ云々〕 もと〳〵、あなたを竹の中から見つけ申したのではあるが。「聞え」は丁寧にいふ時に添へて用ひる語で、「——申し」「——奉り」などと同じである。

〔菜種の大きさ〕 あぶら菜の種子程の大きさ。前出「かぐや姫」の項に引いた所では、「三寸ばかりなる人」とあつたが、翁が、姫のまだ小さかつたことを非常に誇張していつたので、芥子粒などといつてもいゝ。因みに菜種は莢に一列に竝んで入つて居り、これより油を搾ることが出來る。

〔我が丈たち並ぶまで〕 我が身(翁)の丈と竝ぶほどに。——立ち竝んで甲乙のないまでに。

〔何人か迎へきこえん〕 何人も他に迎へ申す筈のものでない。

〔まさに許さんや〕 どうしてそれを許さうか——許すことは出來ぬ。「まさに」はこゝなどの場合、どうして、豈、いかでなどの意。宇津保物語にも「侍らましかば、まさに見で侍らましやは」、又源氏物語にも「まさにかくあやしき山賤を心とゞめ給ひてんや。」とある。

〔我こそ死なめ〕 もし姫を迎へて行くやうなことがあつたら、私は死んでしまはう。

〔泣きのゝしる〕 泣き騒ぐ。「のゝしる」は騒ぎ立てる、やかましくいひたてるの意。罵倒するの意ではない。

〔片時の間とて〕 わづかの間、この世界に居ようと思つて。

〔數多の年〕 後に「姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。」とある。

〔かの國の父母の事も云々〕 翁夫婦の愛情が深いので、彼の月世界にいます父母のことを思はず、忘れてしまつたやうで。竹取物語抄には「隔世卽忘とて、世を隔てぬれば、あとさきの事を覺えぬもの故、かの國の父母の事も知らずといふなり。」と註してある。

〔此所にはかく久しく云々〕 この世界に、このやうに久しい間樂しく暮しまして、翁夫婦の、生みの親にもまさつた御なさけに馴れ親しみました。この「此所」は此所の意の他に、わが身の意にも解せられる。(後出「こゝにも心にもあらで云々」の項參照)が、暫く前記のやうに解して置く。

〔いみじからん心地もせず〕 それ故、今、月世界に歸るのも、非常にうれしい氣持はしませず——。「いみじ」は甚だし、勝れてゐるなどの意で、うれしい、悲しいなど善惡の兩方に用ひられる語。

〔おのが心ならず〕 自分の心からではなく。不本意ながらに。自分の意志に反して。

〔年比ならひて〕 多年姫と馴れ親しんで。

〔立別れなん事を〕 今にも別れる事にならうといふことを。この下に「思ひ」などの語が略されてゐる。

〔あてやかに〕 上品で。

〔見ならひて〕 見馴れて。

〔こひしからん事の〕 姫の去つた後には、いかに戀しいことであらうといふことが。

〔湯水も飲まれず〕 湯も水も喉へ通らず。

〔同じ心に云々〕 翁夫婦と同じ氣持で歎かはしく思つたことだ。

〔この事〕 かぐや姫昇天の事。

〔帝〕 前出「昇天」の項參照。

〔御使遣させ給ふ〕 この次に原文には、次のやうにある。「御使に竹取いであひて、泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰もかゞまり、目もたゞれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには、片時になん老いになりにけると見ゆ。御使、仰せ言とて翁にいはく『いと心ぐるしく、物思ふなるはまことにか。』と仰せ給ふ。竹取泣く〳〵申す『この十五日になん、月の都よりかぐや姫の迎にまうで來なる。尊く問はせ給ふ。この望には人々賜はりて、月の都の人まうで來ば捕へさせん』と申す。御使、歸り參りて翁のありさま申して、奏しつる事ども申すを聞し召して宣ふ、『一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、あけくれ見馴れたるかぐや姫をやりてはいかゞ思ふべき。』

〔司々〕 〳〵は六衞のつかさ〳〵（後出）である。「つかさ」は役所、また「つかさびと」の約——卽ち役人。〳〵は前者。

〔少將〕 近衞府の次官。

〔高野大國〕 葛野に作る本もある。田中大秀は天界から下る人を防ぐべき使であるから高の字のある姓を用ゐたのだらうとしてゐる。加納諸平は葛野に從つて葛野連は物部氏の族で、物部氏は宮中の兵事を掌ることから、この大國に任命したと見るべきであらうと言つてゐる。

〔さして〕 差遣して。

〔六衞のつかさ〕 六衞府の役人。六衞府は左右近衞府、左右兵衞府、左右衞門府の總稱である。衞府は宮城警衞の事を掌つた役所で、その役人はすべて武官であつた。

〔築地〕 築泥の義。つきひぢ——ついひぢ——つひぢと轉訛した。ついぢ（築地）と混同するのは非。泥土を築き固めた墻——土塀。後世には、柱を立て板を心にし、泥土で塗り固め、瓦で屋根を葺いた垣のことをいふ。

〔家の人々〕 竹取の家に使はれる人々。

〔合せて〕 合體させて。一緒にして。

〔あける隙もなく〕 隙間もなく。

〔この守る人々〕 この竹取家の人々もまた（六衞のつかさと同じく）。

〔弓箭〕 弓矢。

〔帶す〕 持つ。携ふ。

〔母屋〕 廂の間、廊などに對して、家の中央の部分を指していふ語。おもや。後世では、物置、長屋などに對して、住居に用ひる家を指していふ。

〔嫗〕 翁の對。老女。竹取の翁の妻である。

〔塗籠〕 周圍を厚く壁で塗り、明り取りをつけ、妻戸を設けて出入するやうにしてある所。納戸のやうなもので、衣服調度を納め、又は寢所などにも用ひたのである。

〔戸をさして〕 鎖して。戸に錠をおろして。

〔かばかり守るところに〕 これほど嚴重に守つてゐる所では。

〔天の人にも云々〕 天から來る人（天人）にも負けることは決してない。

〔つゆものの空にかけらば〕 少しでも、何か空を飛翔するものがあつたなら。

〔ふと〕 ちよいと。

〔蝙蝠〕 かうもり。但し一本には「かはり」とあり、蚊、羽蟻の意とされてゐる。が、後に「外にさらさん」とあるから、それにしてはあまり小さ過るやうである。蝙蝠は、折からの夕暮の空を飛ぶものだから、この場合は、ふさはしいといふべきだらう。

〔一つだにあらば〕 一匹でも飛んだなら。

〔外にさらさん〕 その屍を外に出して、普く人々に示してやらう。なほこゝの「さらす」を晒しの刑に處する——さらしものにする意に解した古註もある。がいづれにせよ、天人の見せしめにしようとしたのであ

る。

〔さし籠めて〕　戸に錠をおろして、塗籠の内に押籠めて。

〔したくみ〕　下組で、かねての準備、もくろみ、計畫などの意である。

〔あの國の人を云々〕　あの月世界の人に對しては、戰ふことは出來ぬのである。「を」は「に」にあたる。

〔弓箭して云々〕　弓矢をもつて射ようとしても射られない。天人には矢の立たない術があるのだ。

〔あきなんとす〕　自然に戸があいてしまふ。

〔猛き心つかふ云々〕　一人殘らず勇氣がくぢけてしまふだらう。「よも」はまさかに、よしやの意。

〔長き爪して〕　——をもつて。

〔さが髪をとりて〕　その頭髪をつかんで。「さが」は、それが、その——などの意。但し、この「さが髪」といふのを、さか髪（逆髪——逆だつた髪）の意に解する古註もある。

〔かなぐり落さん〕　かきむしり落さう。引つぱり落さう。

〔さが尻をかき出でて〕　その尻をひんまくつて。古註では、この「さが尻」も、さか尻（逆尻——衣の裾をまくりあげて尻をあらはすこと）の意に解してゐる。

〔こゝらのおほやけ人〕　多くの役人。「こゝら」は數多、許多。「おほやけ」（公）は朝廷。

〔かゝる程に〕　この間に、原文には次のやうにある。「かぐや姫いはく『聲高にな宣ひそ。屋の上に居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを思ひも知らでまかりなんずることの、口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なくまかりぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親たちのかへりみを些かだに仕う奉らで、まからん道も安くもあるまじきに月頃も出でゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなんかく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなんことの、悲しく堪難く侍るなり。かの都の人はいとけうらにて、老いもせずなん、思ふこともなく侍るなり。さる所へまからんずるもいみじくも侍らず。老い衰へ給へる樣を見奉らざらんこそ戀しからめ。』といひて泣く。『翁胸痛きことなし給ひて、麗しき姿したる使にもさはらじ。』とねたみ居り。」

〔宵うち過ぎて〕　次第に夜が更けて行つて——初夜

（初更）も過ぎて。

〔子の時〕　眞夜中、卽ち今の午前零時頃。昔は一晝夜を十二支に配して、眞夜中を子（十二時——二時）とし、順次に數へて眞晝を午（十二時——二時）とした。

〔あかさ〕　明るさ。

〔ある人の〕　そこにゐる人の。

〔立ちつらねたり〕　立ち並んだ。

〔内外なる人〕　家の——。

〔ものにおそはるゝやうにて〕　何かにうなされたやうで、「おそはる」は夢の中に恐しいものの見えて、驚怖させられること。

〔辛うじて思ひ起して〕　やつと氣を取り直して。——奮發して。

〔取りたてん〕　執り直し、起てて、矢をつがはうとするが——。

〔なえかゞまりたる中に〕　手が（或は身體が）ぐにやぐにやになり曲つてしまつた人々の中で。

〔心さかしきもの〕　氣丈夫な者。氣のしつかりしてゐる者。

〔念じて〕　我慢して。こらへて祈念しての意ではない。

〔外ざまへ行きければ〕　矢がわきに外れて行つたので。

〔あれも戰はで〕　「あれ」は荒の意、荒れに荒れて、猛く戰ふことも出來ないでの意。

〔たゞしれにしれて〕　むやみにぼけてしまつて。「ただ」はひたすらの意。「しる」は愚かになるの意で、こゝは失心したさま。それを強調していつたのである。

〔まもりあへり〕　互に見るともなく物を見詰めて、茫然となつた。

〔立てる人ども〕　「地より五尺許あがりたるほどに立ちつらねた」天人たち。

〔裝束〕　こゝは、よそほひくらゐに解しておけばいゝ。

〔ものにも似ず〕　何物にも比べることが出來ない。比類がない。

〔飛車〕　空中を飛行する車。もちろん、かぐや姫を載せる料の車である。和名抄に「兼名苑註云、奇肱國人能作二飛車一。從レ風飛行。故曰二飛車一。」とある。

〔羅蓋〕　薄絹で張つた長柄の傘。天蓋ともいひ、貴人に側からさしかけるのである。

〔王と思しき人〕　かぐや姫を迎へに來た天人たちの

頭と思はれる人。もちろん月宮殿の王ではない。

〔「家に造麿まうで來」といふに〕「家にゐる造麿よこゝに參れ。」と、使をもつて、竹取の家にいひ入れたので、造麿は前出「かぐや姫」の項にもある通り、竹取の翁の名で、氏は讃岐といふ。

〔猛く思ひつる〕「御迎に來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶさん云々」といつたやうな猛々しい氣でゐた——。

〔ものに醉ひたる〕酒か何かに醉つぱらつたやうに、意識が朦朧として。

〔うつぶしに伏せり〕天人の前に出て來て、低頭平身した。

〔いはく〕「王と思しき人」いはく。

〔汝をさなき人〕汝、愚かな人間よ。これは、無量壽な天人の眼より見れば、この世界の人間は、いかに長壽だとはいへ、皆幼童に等しく、幼童の稚き智慧しかもつてゐないものだから、かういつたのである。些か輕蔑の語氣。

〔功德〕善き應報を受くべき所行。「功」は物を施すこと、「德」は己に歸すること。「功德をつくる」は、いはゆる善根を積む——善き應報を得らるべき、善き行をなすの意。

〔汝が助にとて〕艱難な境涯から救つて、幸福にしてやらうと思つて。

〔降しゝを〕姫をこの世界に下したのを。——下したのだが。

〔そこらの年比〕多年の間。

〔身をかへたるが如く〕別の人間になつたやうに富貴に——。

〔罪をつくり云々〕月世界で、或事で——。

〔罪の限りはてぬれば〕罪すべき期限が終り、從つて罪も消滅したから。

〔あたはぬ事なり〕この國に姫を留めることは不可能なことだ。いくら歎いても致し方のないことだ。

〔二十年〕ハタトセ。

〔片時と宣ふに〕天人は「片時のほどとて降しゝを」といつたのである。卽ち片時の間この世界へ下す豫定だつたのが——つい長引いて「そこらの年」を經たといつたのである。それを翁は聞き違へた——姫がこの世界に留つたのは片時だといふやうに聞き違へたので

ある。翁の意識は朦朧としてゐたと思はなければならない。

〔怪しくなりはべりぬ〕疑はしくなつて來ました。

〔異所に云々〕——かういふ風に年數の相違が甚だしいところをもつてみますと、あなたのお尋ねになつてゐるかぐや姫は、私の家にゐるかぐや姫とは同名異人で、恐らく別な所にいらつしやるのでせう。

〔え出でおはしますまじ〕こゝに出て、あなたにお會ひになることは出來ますまい。

〔返事〕天人の、それに對する——。

〔穢き所〕この世界(下界)は月世界から見れば、すべて汚く穢れた所なのである。つまり穢土で、竹取の家が特に穢い意ではない。

〔おはせん〕ゐられることが出來ませう。

〔立てこめたる所〕卽ち塗籠。

〔たゞあきにあきぬ〕自然に、さアーツとあいてしまつた。

〔格子〕細い四角な木を縱橫に——碁盤の目のやうに、組合せてつくつた、一種の戶。上下二枚あつて、上のは釣りあげ、下のを立てておくのが常であつた。

〔人はなくして〕自然に——。

〔たゞさし仰ぎて〕翁は、たゞもう呆れかへつたまま上を仰いで。なほこの所の主語を嫗としてゐる古註もあるが、次の「竹取心惑ひて泣伏せる所に云々」によつて見ると、どうもこゝの主語は翁とした方が適確なやうに思はれる。從つて、「嫗抱きてゐたる——」はたゞ「かぐや姫」の修飾句と解すべきであらう。

〔こゝにも心にもあらで云々〕私(かぐや姫自身)も不本意ながら、このやうにこの國を去るのであるから。この場合、「こゝ」は我が身、我、己の意。

〔昇らんをだに云々〕せめて私が昇天するのでも御見送りなさい。

〔何しに悲しきに云々〕なんで御見送りする氣になれませう——御見送りすれば別離の情に、悲しさはいやますばかりでございませうのに。

〔我をばいかにせよとて〕私をどうしろ——どんな歎をせよとて。

〔具してゐておはせね〕私を一緒につれて行つて下さい。「ゐて」は率ゐて。

〔御心惑ひぬ〕姫の御心も迷つてしまひなされたとい

ふ意。然し竹取物語俚言解の説のやうにこれ以下姫の言葉として、「あなた(翁)は大變御心が亂れて入らつしやいます。從つて、私の申し上げる事も、たしかにお聞取りになることは出來まいと思ひますから、手紙を――」。と解することも出來る。

〔こひしからんをり〳〵〕 私(姫)が慕はしくなつた折々。

〔この國に生れぬるならば〕 私が、(月世界でなく)この國に生れたものであつたなら。

〔歎かせ奉らぬ程まで〕 別れることを歎かせ給はぬ時まで――といふので、即ちおいやになるまでの意。

〔侍らで過ぎわかれぬる事〕 この國の――人間でない身の悲しさには、それまでお側に仕へることも出來ないで、かやうにお別れすることは。

〔かたみ〕 形見。亡き人又は別れた人などを思ひ出る種となるべきもの――記念。又形見として殘した品物――記念品。こゝは後者。

〔見おこせ給へ〕 月の方を御覽になつて下さい。

〔見棄て奉りて罷る〕 あなたたち御夫婦を見捨て奉つて、天へ昇り行くことですから。

〔空よりも云々〕 ――その途中、悲しさに心が惑うて空から落つこちはしないかと――いや、きつと落つこちるだらうと案ぜられます。

〔天人〕 「天人の中に」は、天人の中の一人に。

〔持たせたる筥〕 持たせてある――携へさせて來た箱。

〔天の羽衣〕 天人が着て自由に空中を飛翔するといふ輕く薄い羽の衣。

〔またあるは〕 天の羽衣の他に、又――。

〔不死の藥〕 不老不死の藥で、天上界の靈藥である。

〔壺なる御藥奉れ〕 この壺に入つてゐる御藥を召上りなさい。

〔御心地惡しからん云々〕 御心地がきつとわるうございませう。

〔少しかたみとて〕 この御藥も又少しばかり形見にとて。

〔脫ぎ置く衣〕 今まで着てゐた衣をぬいで、天の羽衣を着るのである。

〔ある天人〕 そこにゐる天人。「ある」は或の意ではない。

〔御衣〕 即ち天の羽衣。

〔衣著つる人は云々〕 天の羽衣を着たものは、天上界の心になつてしまつて、この國の事はすつかり忘れてしまふとのことである――だから。

〔心もとながり給ふ〕 待遠しがつて入らつしやつた。

〔もの知らぬ事な宣ひそ〕 人情を知らないことを仰しやるな。

〔おほやけに〕 帝に。

〔あわてぬさまなり〕 甚だ落着いた態度ではある。

〔許さぬ迎〕 この國に留ることを許さない迎の者。

〔とりゐて罷りぬれば〕 引きつれ參りますから。

〔口惜しく悲しきこと〕 殘念に悲しいことに存じます。「こと」の下に「こそ侍れ」などの語が略されてゐる。

〔宮仕つかうまつらず云々〕 帝の御側に御奉公することをお斷り申しましたのも。

〔わづらはしき身〕 月世界に本國あり父母あつて、事情の面倒な身の上。

〔心得ず思し召しつらめども〕 帝はそれを合點ゆかぬことと思し召しましたでございませうけれど。

〔心づよく承らず云々〕 剛情を張つて、きつぱりと帝の勅をお受けしませなんだことを。

〔なめげなるものに〕 無禮なものと。

〔思し召し止められ云々〕 いつまでも御心に思し召し殘してあらせられる(であらう)ことは。

〔心にとまり云々〕 氣がゝりで堪りません。

〔いまはとての歌〕 一首の意は、今は止むを得ぬこととて、天の羽衣を着ようとするが、一旦この羽衣を着れば、全くこの國の事を忘れはててしまふと思ふにつけて、(今までは心づよく君の思召に從はないで來たが、今となつては)さすがに君を思ひ出でて名殘惜しさに心が痛むといふのである。

〔頭中將〕 近衞中將で藏人頭を兼ねた人をいふ。但しこの人は竹取物語にこゝ以外に見えず、こゝで不意に出て來た人だが、恐らく衞府の人々を引率した人だつたのだらう。勅使は高野大國であるから別人であらう。

〔ふと〕 前にもあつたが、こゝでもやはり、ちよいとと譯していい。

〔いとほし〕 氣の毒だ。

〔失せぬ〕　心から消え去つてしまつた。

〔車に乗りて〕　飛車に――。

鑑賞批評　讀後第一に感じることは、物語の作者がちやんと小説道の骨法を體得してゐる一事である。そしてそれが泰西のボカッチオ以來の、あらゆる小説家が――おくればせに體得した骨法と、些かも變りないといふ事である。これは、まことに驚異すべき話ではないだらうか。我々は、この物語を讀んで行くうちに、ふとオノレ・ド・バルザックを感じ、アルフォンヌ・ドオデエを感じる――といつても、決して誣言とはならないと思ふ。現に物語の作者は、讀者を釣つて行く長篇小説家の最大手法に成功してゐるではないか。又、物語を進展させて行くテンポの緩急に鮮かな手綱を取つてゐるではないか。そして、その漸次クライマックスにまでせり上げて行くテクニック、クライマックスの情趣の醸し方などに至つては心にくいまでの成功を收めてゐると思ふ。一方、描寫の手法も、手に入つたものである。一の常識としては、竹取物語などといふと、いかにもロマンチックなもののやうに、――つまり夢幻的なお伽噺か何かのやうに考へるのが常だが、少くとも本課を一讀した後の我々は、この物語が甚だ現實の色調を濃く湛へてゐることがわかつたと思ふ。もちろん物語の筋は、ロマンチックに出來上つてゐるけれど、それは單に筋の事であつて、作者はさうした筋に假託して、人間のゆかしい人間的心情を寫さうとしたといふべきだらう。卽ち筋そのものは飽くまで假談であつて、作者の睨ひ所は筋にはなく、むしろ人間心理の寫實にあつた――とこんなにいつてそんなに誤ではないやうな氣がする。換言すれば、――ロマンチックな衣をかぶせた寫實小説だといふことになる。全く我々がこの物語で讀むところの心理描寫には、どこにもロマンチックな色合（ニュアンス）を見出すことは出來ないのである。たとへば始めてかぐや姫が自分の境遇を打明けるところ、それから竹取の翁が警備もの〳〵しく豪語するところなどの如き、――物語中の姫、物語中の翁は、直ちに我々が向ふ三軒兩隣に於て日々目睹する處女、老人と同じ一人の「人間」となつてゐるではないか。いふまでもなくその描寫は、甚だ簡素に出來てはゐる。卽ち「――かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て親どもも、何事ぞと問ひさわぐ。かぐや姫泣く〳〵いふ――」といつた程度である。或は又、『御迎に來ん人をば長き爪して眼をつかみつぶさん。……こゝらのおほやけ人に見せて恥見せん』と腹立ち居り。」といつた短さである。が、この簡短さは、決してありふれた簡短さではない。言葉の選擇と洗練との極致をおのづからにして示した簡短さである。それは「泣き給ふ」「問ひさわぐ」「腹立ち居り」などの言葉を、全文を背景にしてつら〳〵吟味して見れば思半ばに過ぎるものがあらう。竟りそれ等の簡素そのもののやうな言葉がもつてゐる、「味」「力」「響」が、いかに藝術的なものだかに問題は掛つてゐるのである。後半はいはゆるクライマックスの所で、さすがに緻密に出來てゐると思ふ。そして、色彩もなか〳〵豐かだ。飛車、羅蓋――作者は、筆を極めて天人降臨、天女昇天の場面の莊嚴感を紙面に躍動させようと試みてゐるが、しかもさういふ所までも、やはり寫實の手法を失つてゐないのは、感歎に値すると思ふ。我々は、「ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。」といふ言葉をどう讀むか「えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。」といふ言葉をどう感じるか。就中、姫と翁との別離の「愁歎場」の白は、劇的な緊張味をたゆたはせて絶妙の域に達してゐる。語句に捉はれず、どこまでも內容的に教授して頂きたいものである。

參考　本課以下結末までの本文――「その後、翁おうな、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置きし文を讀みて聞かせけれど、『何せんにか命も惜しからん、誰がためにか何事も益もなし。』とて、藥もくはず、やがておきもあがらず病みふせり。中將、人々を引具して歸り參りて、かぐや姫をえ戰ひ留めずなりぬることをこまごまと奏す。藥の壺に御文そへて參らす。展げて御覽じて、いたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣上達部を召して、『いづれの山か天に近き。』と問はせ給ふに、或人奏す、『駿河の國にある山なん、この都も近く天も近く侍る。』と奏す。これを聞かせ給ひて、

あふことも涙にうかぶわが身にはしなぬ藥もなにかはせん

かの奉る不死の藥の壺に、御文具して御使に賜はす。勅使には調岩笠（つきのいはかさ）といふ人を召して、駿河の國にあなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。峰にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の藥の壺ならべて、火をつけてもすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、つはものどもあ

また具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へたち昇るとぞいひ傳へたる。」

◇竹取物語類型說話（主なものを擧げておく）

（一）竹取翁於二篁中一見二付女兒一養立語

今昔――天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ、竹ヲ取テ籠ヲ造テ要ズル人ニ與ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ、翁籠ヲ造ラムガ爲ニ篁ニ行キ竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光リ有リ、其ノ竹ノ節ノ中ニ三寸許ナル人有リ翁此レヲ見テ思ハク我レ年來竹取ツルニ、今此ナル物ヲ見付タル事ヲ喜テ、片手ニハ其ノ小キ人ヲ取リ、今片手ニ竹ヲ荷テ家ニ返テ、妻ノ嫗ニ篁ノ中ニシテ此ナル女兒ヲコソ見付タレト云ケレバ、嫗モ喜テ初ハ籠ニ入レテ養ケルニ、三月許養ケルニ、例ノ人ニ成ヌ、其ノ兒漸ク長大スルママニ、世ニ並ナク端正ニシテ、此ノ世ノ人トモ思エザリケレバ翁嫗彌ヨ此レヲ悲ビ愛シテ傳ケル間ニ、此ノ事世ニ聞エ高ク成テケリ、而ル間翁亦竹ヲ取ラムガ爲ニ篁ニ行ヌ、竹ヲ取ルニ其ノ度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付タリ、翁此レヲ取テ家ニ返リヌ、然レバ翁忽ニ豐ニ成ヌ、居所ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住ミ、種々ノ財庫倉ニ充チ滿テリ、眷屬アマタニ成ヌ、亦此ノ兒ヲ儲テヨリ後ハ、事ニ觸レテ思フ樣也、然レば彌ヨ愛シ傳ク事限リナシ、而ル間其ノ時ノ諸ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ、女更ニ聞カザリケレバ、皆心ヲ盡シテ云ハセルケルニ、女初ニハ空ニ鳴ル雷ヲ捕ヘテ將來レ、其ノ時ニ會ハムト云ケリ、次ニハ優曇花ト云フ花有ケリ、其レヲ取テ持來レ、然ラム時ニ會ハント云ケリ、後ニハ打タヌニ鳴ル皷ト云フ物有リ、其レヲ取テ得サセタラム折ニ自ラ聞エムナド云テ會ハザリケレバ、假借スル人々女ノ形ノ世ニ似ズ微妙カリケルニ耽テ、只此ク云フニ隨テ堪難キ事ナレドモ、舊ク物知タル人ニ此等ヲ求ムベキ事ヲ問ヒ聞テ、或ハ家ヲ出テ海邊ニ行キ、或ハ世ヲ棄テ山ノ中ニ入リ、此樣ニシテ求ケル程ニ、或ハ命ヲ亡シ或ハ返リ來ヌ輩モ有ケリ、而ル間天皇此ノ女ノ有樣ヲ聞シ食シテ、此ノ女世ニ並ビナク微妙シト聞ク、我レ行テ見テ實ニ端正ノ姿ナラバ速ニ后ニセムト思シテ、忽ニ大臣百官ヲ引キテ彼ノ翁ノ家ニ行幸有ケリ、既ニ御マシ着タルニ、家ノ有樣微妙ナル事王ノ宮ニ異ラズ、女ヲ召出ルニ卽チ參レリ、天皇此レヲ見給ニ實ニ世ニ譬フベキ者ナク微妙カリケレバ、此レハ我ガ后ニ成ラムトテ人ニハ近付ケザリケルナメリト喜

ク思シ食シテ、ヤガテ具シテ宮ニ返テ后ニ立テムト宣フニ、女ノ申サク、我レ后ト成ラムニ限ナキ喜ビ也ト云ヘドモ實ニハ己レ人ニハ非ヌ身ニテ候フ也ト、天皇ノ宣ク汝然レバ何者ゾ、鬼カ神カト、女ノ云ク、己レ鬼ニモ非ズ神ニモ非ズ、但シ己ヲバ只今空ヨリ人來テ迎フベキ也天皇速ニ返ラセ給ヒネト、天皇此レヲ聞給テ此ハ何ニ云フ事ニカ有ラム、只今空ヨリ人來テ迎ケベキニ非ズ、此レハ只我ガ云フ事ヲ辭ビムトテ云ナリト思給ケル程ニ、暫許有テ空ヨリ多ノ人來テ、輿ヲ持來テ此ノ女ヲ乘セテ空ニ昇ニケリ、其迎ニ來レル人ノ姿此ノ世ノ人ニ似ザリケリ、其ノ時ニ天皇實ニ此ノ女ハ只人ニハナキ者ニコソ有ケレト思シテ宮ニ返リ給ニケリ、其ノ後ハ天皇彼ノ女ヲ見給ケルニ、實ニ世ニ似ズ形有樣微妙カリケレバ、常ニ思シ出テワリナク思シケレドモ、更ニ甲斐ナクテ止ニケリ、其ノ女遂ニ何者ト知ル事ナシ、亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケム、惣ベテ心得ヌ事也トナム世ノ人思ケル、此ル希有ノ事ナレバ此ク語リ傳ヘタルトヤ、

（今昔物語集第卅一）

（二）鶯姫

昔採竹の翁と云ふ者あり、女をかぐや姫といふ、翁が家の竹林に鶯の卵、子の形にかへりて巢の中にあり、翁養ひて子とせり、人となりて顏よき事たぐひなし、光ありて傍をてらす、嬋娟たる兩鬢は秋の蟬のはね、婉轉たる蛾眉は遠き山の色、一たび唉めば百の媚なり、見きく人皆腸をたつ、この姫は、先生に人として翁に養はれたりけるが、天上に生れて後は、宿世の恩を報ぜんとて、しばらくこの翁が竹に化生せるなり、憐むべし、父子の契の他生にも變ぜざる事を、是よりして青竹のよの中に黃金出來て、貧翁たちまちに富人となりにけり、其の間榮華の家、好色の道、月卿光を爭ひ、雲客色を重みして、艷言を盡し怨懷を抽で、常にかぐや姫が室屋に來會して絃を調べ歌を詠じて遊びたりける、されども鶯姫難詞を結びて、うちとくる心もなし、時の帝このよしを聞し召して、召しけれども參らざりければ、みかど御狩あそびのよしにて、鶯姫が竹亭に御幸し給ひて、鶯鶯の契を結び、松のよはひをひきたまふ、鶯姫思ふところ有て、後日を契り申しければ、みかど空しく歸り給ひぬ、かたへの天これを知りて、玉のまくら、金の釵、たまきはまだ手なれざるさきに、飛車下りて上りぬ。關城のかためも雲路に益なく、猛子が力も飛行にはよしなし、時に秋の半

月の光くまなき頃、夜半のけしき風おとづれ、ものをおもはぬ人ももの思ふ折ふし、きみのおもひ臣の懐舊、同じく袖をうるほす、彼の雲をつなぐにつなぎ得ず、雲の色慘々として暮のおもひ深し、風を追へどもおはれず、風の聲颯々として夜のうらみ深し、花民は奈木の孫枝なり、これは生きて去る、同じく別れて夜の衣をかへす、すべて昔も今も、好女は國をかたぶけ人をなやます、愼みて色に耽るべからず、

天つひめ戀ひしおもひの煙とてたつやはかなき大空の雲

（海道記）

（三）大寶樓閣善位祕密陀羅尼經序品

佛言乃往古昔不可思議。乃至有二三仙人一。乃至時彼仙人得レ法歡喜。心生二踊躍一。於二其住處一。便捨二身命一。所捨之身猶如二生酥一。消融入レ地。卽於二淺處一而生二三竹一。金爲二莖葉一。七寶爲レ根。於二枝梢上一皆有二眞珠一。香氣芬馥。常有二光明一。所有（アラユル）見者。無レ不二欣悅一。其竹生長十月。則自剖裂。各於二竹內一生二一童子一。顏貌端正。令二人樂一見。最勝端嚴。光色殊麗。相好成就。貶二三童子於二是時一。竹下結跏趺坐。卽入二正定一。至二第七日一。於二其中夜一。皆成二正覺一。其身金色。三十二相。八十種好。圓光嚴飾。貶彼三竹、皆變成二七寶樓閣一云々。

二　菊花の約

上田秋成

（雨月物語）

扱方　その怪奇的構成をもつて、雨月物語は日本文學中特異のものである。本課はその雨月物語卷一の第二話を採錄した「大丈夫は義を重しとす、功名富貴は言ふに足らず」といふ信義の義兄弟が、その信義の爲に或は一命を捨て、或は一命を賭して貫き通すといふ物語である。當時の、信義を重んじた武士氣質の一端は窺はしめると共に、讀者の反省を促し、更に「青々たる春の柳家園に種うる事勿れ、交は輕薄の人と結ぶ事勿れ」といふ作者の意を汲んで、友を選ぶ心得に就いて戒心する所あらしめたい。文章としては、その委曲をつくした、含蓄の多い筆致を味ははせ、その鬼氣讀者を襲ふ凄凉味を滿喫せしめたい。尙、秋成が國語學者でもある點からして秋成獨特な語法や語訓についても注意をさせておきたい。

教授

作者

上田秋成　ウエダアキナリ

國學者。浮世草子、讀本作者。本名は上田東作（藤作とも）、秋成（秋也とも）は字で、和譯太郎、剪枝畸人、無腸、二苦翁、鶉廼家、三餘齋等多くの號がある。享保十九年、大阪に生まれた。母は曾根崎の娼家の娘だとも遊女だとも言はれ、父は不明である。四歲の時孤兒となり上田氏の養子となつた。秋成の交友村瀨栲亭の秋成の傳に「吾が友無腸翁、狷介蚵直、富貴を視ること腐鼠の如く、俗士を以て蜣螂となす。世俗その病を忌み、畏れてこれを避く。その門に遊ぶもの蹇々如たり。然れども一毀一譽、翁に於てや何かあらん。翁初め城中に住す。その擾々を厭ひ、遂に瑞龍自ら安んず。翁博聞强識、過眼誦を成す。これを以て一書を蓄へず室中唯二三の茶具あるのみ。最も國學文章及び國風の詩に長ず。興到れば、卽ち一日數十百篇、言口より出づれば皆文を成す、著すところ數種、已に世に行はれ、また萬葉集訓話及び筆記八十餘卷あり、一日その徒に命じて、これを廢井中に湮めしむ。余これを聞くや遲し。奪ひ去つてこれを名山に藏すること能はず、嘆惜すれども及ぶなし。後翁に値ひその故を語る。翁笑ひて曰く、一時の漫筆、意未だ盡さ

さるもの頗る多し。然れども年力頽俊、區々として鉛槧の業に就くこと能はず、かつ夢中夢を說きて癡人に向かはんよりは、井に投じて我が魂を清むるに如かず。」とある。生來多病で五歳の時痘瘡のため兩手の指は不具に近くなつたり、父母の事情等で性格も大いに影響された。文化六年六月二十七日、京都百萬遍屋敷の羽倉信美邸に歿、年七十六。著書に雨月物語、春雨物語、藤簍冊子、冠辭考讀貂、靈語通、萬葉集見安補註、古來集よしやあしや、等名高い。上田秋成全集、秋成遺文に收む。

引用書

雨月物語——上田秋成の物語集。五卷五冊。明和五年（作者三十五歳）に創作せられたが刊行は八年後の安永五年（四十三歳）である。怪異小說としての白眉で、萬葉集の古歌、謠曲、支那の稗史小說、或は日本靈異記、年次拾遺などの傳說を基として、或ば史實を敍し、或は儒佛の道を論じ、佛道の廣大なこと等を述べたもので、幽靈の口を借り、精靈を用ひ、文章に活氣と凄味を見せてゐる。その筆致の巧妙なこと、壯烈なことは德川時代に稀に見るところである。本書五卷、卷一に白峰、菊花の約卷二に淺茅ケ宿、夢應の鯉魚。卷三に佛法僧、吉備津の釜。卷四に蛇性の婬。卷五に靑頭巾、貧福論がある。

語釋

〔菊花の約〕　菊の花の咲く頃（重陽の節句）に逢ふ約束をしたことからとつたのである。

〔家園〕　我が家の庭。

〔輕薄〕　うはべだけでまごゝろがすくないこと。輕佻浮薄。「後漢書」馬援傳に「勅二季良一不レ得レ陷爲二天下輕薄一。」こゝでは薄情な人の意。

〔楊柳〕　やなぎ。楊はかはやなぎ、柳はしだれやなぎ。

〔耐へめや〕　耐へることは出來ない。「や」は反語。

〔楊柳幾たび春に云々〕　楊柳は春にさへ會へば幾度も綠に染まるが、輕薄な不人情な人は一度交りが絕えると、又訪れて來る日はないの意。

〔加工の驛〕　播磨國加古郡加古川町。加古川畔に位して、姬路市の東南四里半にある。「うまや」馬屋）は街道の往來に旅人の便利をはかり、舟車人馬等を備へ置き、その求めに應じて、つぎたてをなす所。うまつぎば。しゆくは。宿。

〔博士〕　學者。ものしりくらゐの意。

〔淸貧をあまなひて〕　淸貧は心に汚れなくて、貧し

いこと。操行潔白であるが貧しいこと。「あまなひ」は憩ひのことで、甘んずること。心にかなふこと。滿足すること。

〔調度〕　手まはりの道具。又武家では弓矢をいふ。また、はかりごと。物事を適度に調理すること。租稅をとりたてることなどにもいふ。ここは友とする書物以外は、すべて道具などを持つといふ煩を厭つてゐたといふ意。

〔孟母の操〕　孟母は操を守つて孟子の敎育に心を碎き遂に孟子をして賢人たらしめた。その孟母の如き貞操孟母三遷の敎に就いて、劉向の「烈女傳」には次のやうにある。卽ち「孟軻之母、其舍近レ墓。孟子之少也、嬉戲爲二墓間之事一、踊躍築埋。孟母曰此非レ所二以居一レ子也、乃去舍レ市。其嬉戲爲二賈衒一。孟母曰、此非レ所二以居一レ子也。乃徙舍二學宮之旁一、其嬉戲乃設二俎豆一、揖讓進退。孟母曰、此眞可二以居一レ子矣、遂居レ之。」

〔紡績〕　麻を績み、絲をつむぐこと。

〔事として〕　仕事として。

〔志を助く〕　素志を貫かさうと助けること。

〔委女〕　季は末。末の娘。

〔母子〕　オヤコ。

〔娘子〕　ヲトメ。

〔事に託せて〕　何かの事にかこつけて。

〔口腹の爲に人を累さんやとて云々〕　口や腹を養ふ爲に、人にまで面倒をかけることは出來ないといつて、その贈物をちつともうけないといふのである。

〔伴ひ〕　友だち、伴侶をいふ。つれ。

〔一宿〕　一夜の宿。

〔卑しからぬと見しまゝ〕　その人は人品も卑しからず、士家の風貌があると思つたから。

〔起臥も思ふに任せず〕　身體が自由にならぬ。起きることも臥すことも、己が思ふまゝにならぬのをいふ。

〔いとほし〕　あはれなこと。氣の毒。不便。かはいさう。

〔思はぬあやまちし出で云々〕　おもひがけないおちどをしたと思つて心配してゐる。どこの人ともはつきりしないのに、こんなことになつて、自分もわるい事をしたと思つて、心配してゐる。

〔病苦の人のしるべなき云々〕　病氣に苦しむ人は、知邊もない旅先で、この病氣を患つて居られるのは、

殊に心配で心配で心苦しいことであらう。その病狀を見たいものだ。

〔わきて〕 取分け。殊に。

〔胸苦し〕 原文には「胸窮し」とある。心苦しいこと。

〔そのやう〕 その樣子。その病狀。

〔瘟病〕 虐。流行病をいふ。瘟は疫。

〔家童〕 家の子供。

〔死生命あり云々〕 人の生死は天命によるので人力の如何ともする能はぬをいふ。「論語」顏淵篇に「子夏曰、死生有レ命、富貴在レ天。」生きるも死ぬも天から授かつた生命である。何の病か人に傳染しやう。かくの如きことをいふのは、つまらぬ人のいふ言葉で、吾等はそんな說は用ひない。「輩」は、ハイ、トモガラとよみ、自稱に用ひる。

〔なみの人にはあらぬ〕 普通の人と違つて、どこか人品のあることをいふ。身分のありさうなこと。

〔方を案じ〕 醫療の術を工夫すること。處方を工夫すること。

〔煮て〕 ここは藥を煎じること。

〔漂客〕 一定の住所なく、さすらふ人をいふ。浪人、旅人の意。

〔壽命〕 人の命數をいふ。「壽命を過たず」は壽命にさはらないこと。

〔實やかに契りつゝ〕 眞心を籠めて約束して。

〔訓を盡し〕 御禮の言葉のありたけを盡して。

〔生業〕 職業。すぎはひ。いとなみ。又は渡世、家業、職業。

〔松江〕 松平氏の舊城地。今は人口約二萬七千餘の市。宍道湖畔にある山陰第一の都會。「鄕」はサトとよむ。

〔富田の城〕 出雲國能義郡廣瀨町。今、城址は月山にある。尼子氏及び天野、吉川、堀尾諸家の修築して據つた所、慶長中堀尾吉晴が、當城は鐵砲の術數に利なしといひ、末次に移つてから城は荒廢した。

〔鹽冶掃部介〕 尼子氏世々富田を鎭したが、經久に至り、六角貞賴のために放逐せられ、鹽冶掃部介がこれに代つた。文明十八年經久に襲はれ、殺されて、城を取返された。

〔佐々木氏綱〕 佐々木道譽は初め富田城を有したが、後その一族をして富田城を治めしめ、氏綱に至りてこれを失つた。

〔尼子經久〕 雲州の人、父を淸久といふ。幼より倜儻氣節あり、文明十八年鹽冶氏を滅して富田城を復した。遂に隱岐、因幡、伯耆を隨へ、安藝、備後を蠶食し、尼子氏は始めて强大となる。天文十年十一月卒、年八十四。

〔山中黨〕 山中鹿之介の一族。尼子經久が富田城を追はれた時、家人は江州の六角に仕へたが、山中鹿之介は國に留り、一族十七人ばかりを語らひ、穢多の頭賀麻といふ者に手引させ、文明十八年元日、城を陷れた。

〔語らふ〕 相談する。轉じて徒黨に引入れる。

〔不慮に〕 不意に。

〔守護代〕 守護代官、單に代官ともいふ。武家の職役。鎌倉幕府の時、守護に代つて庶務を行つた。慶長以後は全く絕えた。

〔三澤、三刀屋〕 何れも出雲の豪族。三澤は三澤城主爲幸、三刀屋は彈正左衞門爲虎。

〔外勇にして內怯なる云々〕 外面は勇氣があるやうで、心の內は卑怯な、愚鈍極まる大將である。

〔己が身一つを竊みて〕 自分だけたゞ一人ひそかに拔出て。

〔御恩〕 ミメグミ。

〔見る所を忍びざるは云々〕 人の窮してゐるのを見て堪へられないでこれに盡すのは、人たるものの心である。「論語」爲政篇に「見レ義不レ爲無レ勇也。」とある。正義を見てこれを行はざるは勇氣なきに由る。

〔厚き詞を納るに云々〕 お禮の厚い言葉を私が受入れるべきではありません。

〔もの皆平生に近くぞ云々〕 赤穴の容態がすべて元に復したの意。

〔諸子百家〕 支那で種々の學派に屬した諸家をいふ。百家は大數の意で、一家言をなした人をいふ。諸子の名は劉向の七略にある。儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縱橫家、雜家、農家等をいふ。

〔おろ〳〵語り出で〕 「おろ〳〵」は力なく十分ならぬさまにいふ語。あら〳〵。少しづつ。支那の多くの學者のことのあらましを談じだした意。

〔問ひ辨ふる心〕 質問したり又こちらの答を識別する心のたはらき。「とひ辨ふる心愚かならず」の次に原文には「兵機のことわりをさ〳〵しく聞えければ、ひと

つとして相ともにたがふ心なく、かつ感でかつよろこびて」とあり、そして「終に兄弟の盟をなす」と續いてゐる。

〔老母憐みて幼き心云々〕　老母もあはれに思つて、この至らない心をお受け下さるまいか。

〔青雲の便り〕　立身出世するよすが。高位高官に上る手づるをいふ。青雲は高き徳業、又は位地。殊に高位高官の稱。「史記」伯夷「閭巷之人、欲ニ砥レ行立レ名者、非レ附ニ青雲之士一、惡能施ニ於後世一哉。」また世外に超然たることにもいふが、ここは前者の意。

〔大丈夫は義を重しとす云々〕　義は正しきすぢみち。事物を裁制して各宜しからしめること。大丈夫たるものは、人の行ふべき道を大切とするので、勳功名譽富といふやうなことは詞にかけるには及ばない。

〔尾上〕　峰の上の義。山の高所。山のいただき。「萬葉集」巻二十「このくれの繁き乎乃倍(ヲノヘ)を時鳥なきてこゆなり今しくらしも」

〔涼しき風による浪に〕　たゞ涼しい風が水面を吹いて、浪が寄せるといふ敍景である。別に深い意味を含ませなくてもよからうと思ふ。

〔問はでもしるき〕　尋ねなくても明白であること。「しるき」は顯著なこと。

〔やがて歸り來り〕「やがて」は驟頓。そのまゝ。とりもなほさず。すなはち。ここでは、時を移さず、間もなく。おつつけ、たゞちにの意。原文にはこの次に「菽水の奴に御惠を返し奉るべし。」とある。菽水は、「禮記」より出た故事で、貧にして親によく仕へること。

〔兄長〕　子の上の義。第一の兄、又は姉に用ひる。又、自分より年長の人をいふ。

〔重陽〕　原文にはコヽヌカと訓ませてある。陰暦九月九日の節句。重九ともいふ。九は陽數。陽の日が重なる日。この日は佳き時節であるので、却つて魔がさしてはならぬといふので、祝ふとともに、凶をはらふ禁厭を行ふのが支那の風俗である。

〔情を盡して〕　眞心を盡して。

〔あら玉の月日〕「あら玉の」は年につゞく枕詞。あら玉の年とつゞく義には數說あるが、本居宣長は新々間(あたらあたらま)の移り行く年の義と解してゐる。又、年より轉じて、月、日、來、經、春といふ語につづく。「萬葉集」巻二に「荒玉のとしふるまでに」

〔下枝〕　シヅエ。

〔茱萸〕　茱萸は胡頽子科に屬する植物の總稱であるが、こゝは秋ぐみである。高さ丈餘、春の末に開花し秋、果實は熟する。大きさ南天のやうで楕圓形、赤くて白點があり、食べられる。

〔野ら菊〕「ら」は接尾語で、「の」に同じ。

〔にほひやかに〕　美しくつや〳〵してゐること。あでやか。香のたかいこと。香の多いこと。

〔席を拂ひ〕　室を掃除する。

〔囊をかたぶけて〕　財囊を拂つて酒食の準備をした。

〔八雲たつ國〕　出雲國のこと。素盞嗚尊の御歌に「八雲立つ出雲八重垣妻籠に、八重垣つくるその八重垣を。」とある。

〔今日とも定め難きに〕　今日歸るとも確かには定まらないのにの意。

〔ものす〕　ここでは饗應の準備をすること。

〔赤穴は信ある云々〕　赤穴は信義を守る武士であるから、きつと約束は違へないであらう、その來るのを見て準備するのは、いかにもあわてたやうで、赤穴にどう思はれるか恥づかしいといつて、酒を買ひ、新しい魚を煮て臺所に用意して置いた。

〔鮮魚〕　あざらけきは、鮮なるの意。いき〳〵した魚。

〔午時〕「鮮魚を煮て厨に備ふ。」と「午時も稍云々」との間に、原文には左の文がはいつてゐる。「この日や天晴れて、千里に雲のたちゐもなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、けふは誰某がよき京入なる。この度の商物によき德とるべき祥になんとて過ぐ。五十あまりの武士、二十あまりの同じ出立なる、日和はかばかりよかりしものを、明日より船もとめなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊は追ふべき。若き男は却物怯えして、錢おほく費すことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍りしものかたりしを思へばこのほとりの渡は必ず怯ゆべし。な恚みたまひそ。魚が橋の蕎麥ふるまひまうさんにと、いひなぐさめて行く。口とる男の腹だたしげに、この死馬は眼をもたげぬかと、荷鞍おしなほして追ひもて行く。」

〔宿り急ぐ足〕　外を通る旅人の次の泊へ急いで行く足。

〔まもらる〕 眼を放たずに見詰めること。外の方ばかり見やられて心の醉つたやうに夢中である。外の方はトノカタとよむ。

〔人の心の秋云々〕 變りやすい人の心を秋の天候に喩へたこと。古今集に「はつ雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋しうければ」（貫之）人の心は秋の空のやうに變り易くはないとしても、菊の色の濃い重陽の節の今日來るとばかりは限らない。歸つて來る信さへあつたならば、秋の空はたとひ急に時雨に變つても、信ある人の心は變らないはずだから、何も怨むべきことはない。

〔すかす〕 だますこと。又なぐさめなだめること。

〔銀河影消え云々〕 銀河は天の川。氷輪は月の異稱。凍つたやうな冷たい月。天の川の光もきれ〳〵で、冷たい月の光が自分のみを照らして實に淋しいのに、人の家の軒を守る犬の吠える聲も澄み渡り、轟く浦うつ波の音が、あたかもこの所へ打つて來るやうに近く聞える。

〔山の端〕 山と空との境をいふ。山の端にかくれて暗くなつたのでの意。

〔唯看る〕 偶然に見る意。

〔待ちわびて〕 待ちくたびれて。

〔夜をつぎて〕 日に夜をついで。

〔下物〕 酒の肴をいふ。カブツとよみ、又は、下酒物ともかく。

〔井臼のつとめ、はた云々〕 薪水のつとめ。顏淵延之陶處士諫に「井臼弗レ任、藜菽不レ給。」水を汲み臼を舂いて、貧しくて自らする勞力。貧しい自分が自分で骨を折つて仕度をしたのでは、歡待するに足らないけれども、これが私の心のいつぱいである、卑しんで下さるなといふのである。

〔長き息〕 ためいき。長大息。

〔饗應〕 もてなし。

〔現世〕 現在の世。原文には「陽世」とある。

〔きたなき靈の云々〕 けがらはしい靈魂が、假に形を顯してゐるのである。

〔狐疑〕 疑深いこと。狐は疑深く、氷河を渡るにかつ聽きかつ渡る故にいふ。

〔腹心爪牙〕 腹心は心を同じうし、德を同じうする臣。爪牙は鳥獸が爪を以て身を衞るところから、輔佐の臣に喩へていふ。ともに「詩經」にある。

〔家の子〕 元來子息をいつたが、後には同族、その他の主從關係ある者の稱となつた。

〔益なし〕 この語はやくにたゝぬ意であるが、ここは文字通りの意味、卽ち無益である。

〔人一日に千里を行く云々〕 出處未詳。

〔陰風〕 魔の吹く風。

〔約につく〕 原文には「約に赴く」とある。

〔陰風に眼眩みて〕 ここはインプウとよむ。

〔魚盛る〕 魚類を盛ること。

〔聲を呑みて泣く〕 聲を出さずに泣くこと。

〔明日若し來らば詞云々〕 もしも明日にでも來たならば、いふべき言葉がなからう（汝はどうしてそんなに心幼く、愚かなのであるかといつて）強く諫めること。

〔酒肴〕 酒とさかな。

〔牢裏に繫がるゝ云々〕 牢屋に繫がれてゐる人は、夢にさへも許されたことを見るし、渇してゐるものは夢にでも水を飮むといふことがある。お前も會ひたいと思ふから、そんなことがあつたのではないか。よく心を落ちつけなさい。「漿水」は飮料。漿は飮物。出處未詳。

〔まさなき〕 よしなきこと、正でないこと、眞でないこと。

〔相よびて〕 原文には「相呼びて」とある。互に泣きあつて。

〔身を翰墨によす〕 翰墨の林に遊ぶこと。學問に身を託すること。翰は筆をいふ。轉じて詩文、畫をかくにも用ひる。

〔今日を久しき日〕 今日を永い別れの日。

〔生は浮きたる泡の如く〕 人生のはかないことをいふ。人生は朝露の如し、人生夢の如しの意。生はよどみに浮んだ泡のやうなもので、朝に、夕を計り難いものであつても、直ちに歸つて參りませう。

〔賴み聞え〕 原文には「あつらへ」とある。委囑。

〔寒きに衣を忘れて云々〕 寒くても衣を着ることを忘れ、寢ると亡き兄赤穴の夢に泣きあかして、十日を經て富田の城についたの意。

〔いかに知らせ給ふべき云々〕 どうしてお知りなされたか、わけがわからない。

〔士たる者は富貴云々〕　武士たるものは、富や、身分の高くなることなどのたよりは、ともに言ふべきでない。たゞ誠に重んずべきものは信義である。「信義」は眞實のすぢみち、いつはりあざむかないこと。

〔士に尋ね參らすべき旨〕　士は貴殿の意で、卽ち赤穴丹治を指す。

〔魏の公叔座云々〕　「史記」の商君傳にある。

〔若し忌むべき事云々〕　若し御身に萬一のことがあらば。

〔社稷〕　國家の意。社は土の神、稷は穀の神。國土及び穀によつて人を養ふ故にこれを祀るのである。支那では建國の時に、壇を築いてこれを祀つた。轉じて朝廷又は國家の稱。「禮記」祭義に「建二國之神道一、右二社稷一而左二宗廟一。」

〔商鞅〕　秦の政治家。公孫鞅として知られる。刑名の學を好み、秦の孝公に仕へ、法令を峻嚴にして以て秦國を富强にした。商於の十邑に封ぜられて商君と稱せられた。

〔王許さゞる色〕　用ひないやうな樣子。

〔君を先にし臣を後にす〕　君は大切であるから、まづ君の爲をはかり、臣の事は後廻しにしたのであるの意。

〔舊交〕　ヨシミ。

〔骨肉〕　血統を同じうした親子兄弟。「呂子春秋」に、「父母之於レ子也、子之於二父母一也、此之謂二骨肉の親一。」

〔橫死〕　變死をいふ。非命の死をいふ。

〔榮利〕　榮達と利益。「後漢書」周盤傳「不下以二榮利一滑中其生術上。」

〔士家の風なきは〕　たゞ名譽利益にのみ走つて、義を重しとする、武士らしい風のないのはの意。

〔拔打〕　刀を拔くと同時に斬付けること。

鑑賞批評　本文執筆の目的は、その冒頭の「青々たる春の柳、家園に種うる事勿れ、交は輕薄の人と結ぶ事勿れ。……輕薄の人は絕えて訪らふ日なし。」といふ所にある、それ故に末尾に至つても再び「あゝ輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。」と繰返し、前後照應せしめて、一文に千鈞の重みを與へてゐるのである。だが、これは、少くともその表面の理由、對外的な理由で、作者が本當に心を動かし、その創作慾を搖すぶられたものは「午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず、西に沈む日に宿り急ぐ足もせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉へるが如し。……老母も今は疑はず、相呼びてその夜は泣き明かしぬ。」といふ約五頁に亘る事件である。秋成が、いかにこの場面にその創作慾が動かされたか、そしていかにその創作的手腕を發揮したかは、その行文の流麗にして凄壯、鬼氣讀者を襲ふものあるを以ても知られるであらう。「若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消えゝに、氷輪我のみを照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄渡り、浦浪の音ぞこゝもとにたち來るやうなる。」といふあたり、旣に衿元がぞく〳〵として來るやうに覺えるではないか。「……自ら双に伏し、今夜陰風に乘りて遙々來り、菊花の約につく、この心を隣み給へ。』と言終りて、涙湧出づるが如し。『今は永き別れなり。唯母公に能く仕へ給へ』とて、座を起つと見しが、掻消えて、見えずなりにけり。」といふあたり、鬼氣迫る感があるではないか。秋成は實際に幽靈とか妖怪變化とかを信じてゐたらしいと言はれるが、確かに自ら信じてゐたからこそ、かく鬼氣人を襲ふ迫力が筆端から迸り出たものであらう。「雨月物語」が、國文學に於て特異の存在を保つ理由もこゝにあるのである。秋成は、武士の出

であるだけに、文中の應待の言葉など全く武士氣質を見せてゐる、又、深い教養の程を示してゐる。それはいかにも文中の二人の主人公の性格の謹嚴さをも語つてゐるものとなつてゐる。これも普通の戲作者連中には眞似の出來ぬものであつたらう。こゝらもよく注意して、その用語の解說と共に、その精神をよく理解させたい。尙研究的立場から「菊花の約」の飜案態度を論ずべきであるが、それは參考欄の一文を以て替へた。

參考　雨月物語九篇、構成する各々にその扮本を明確に指摘し得るが、山口剛氏は「菊花の約」が「古今小說」（又は喩世明言）の「范巨卿雞黍死生交」を原據とすることからその飜案態度についての說を發表して（昭和六年九月創刊號國語國文）以來秋成に對する新しい解釋が下されるやうになつた。次に「菊花の約」に關して同氏の說を引く。

秋成のいくつかの支那小說の飜案を見ると、大方は輪廓をそのまゝに、少しく核心を動かして、彼と此との間に多大の變化を將來してゐる。變化は多く事象の上にあるよりも、之を伴ふ氣分の上にある。「蛇性の婬」の如きは其の好適な例であるが、「菊花の約」はなほ顯著な例であ

らう。其の冒頭の一節と原據「范巨卿雞黍死生交」の起頭詩の比較がすでに二者の異同を示し、また秋成の飜案態度を明かにする。

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ、交は輕薄の人と結ぶことなかれ、楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹に耐めや、輕薄の人は交りやすくして亦速なり、楊柳いくたび春に染れども輕薄の人は絶て訪ふ日なし。

種樹莫種垂楊枝、結交莫結輕薄兒、楊枝不耐秋風吹、輕薄易結還易離、君不見昨日書來兩相憶、今日相逢不相識、不如楊枝猶可久、一度春風一回首

「菊花の約」は播磨加古の驛のかくれた學者丈部左門が旅に病める武士赤穴宗右衞門を助けることに筆を起してゐる。赤穴は出雲の富田城主鹽冶掃部介の學問の師、命をうけて近江に來た其のかへるさ、左門と相識つたのである。赤穴は左門より齢が多い。左門これを兄として敬ひ、亦左門の母によく事へる。赤穴がさきに近江から出雲に急ぎ下らうとしたのは、富田城が尼子經久に陷られたからである。赤穴は是非とも國の動靜を知りたかつた。左門としばらく別れた。夏のはじめである。秋は九月九日菊の佳節に歸つて來ることを堅く約した。其の日左門は朝とく門に立つた、晝すぎても、夕迄たつても、宵となつても待つ人は來ない。夜ふけて來た人はつひに陽世の人でなかつた。幽魂風に乘じて姿を現はして菊花の約を果したのである。國に歸つた赤穴は從弟に要せられて今の城主尼子經久を見た。經久は其の人を惜しみもし、加古にかへるといふのを妬みもして、從弟をして監禁された。赤穴はやむなく自刄して約を全うしたのである。亡靈の言葉を聞いた左門は母に請うて出雲に下り、赤穴の從弟の不信不義を詰り、首うつて歸つた。

一篇、これ武士の義理のものがたり、事は理を盡し、理は情を昂めて「雨月物語」九章の中の、おづから特殊な位置を占めてゐる。

文辭としては、夜深く戸に立つ左門の前に、赤穴の靈が現はれるあたり、絶妙を以て評せられる。

銀河影きえ〴〵に、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼る聲すみわたり、浦波の音ぞここもとにたちくるやうなり、月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入んとするに、たゞ看るおぼろなる黑影の中に人ありて風の隨々來るをあやしと見れば、赤穴

宗右衞門なり。

これを原據に比較すれば、よく原據をわがものにしこなした秋成の工夫が見える。絶妙のよつて來たる、決して偶然ではない。

勘倚門醉如癡、風吹草木之聲、莫是范來、皆自驚訝、看見銀河耿々、玉宇澄々、漸至三更時分、月光都沒了、隱々見黑影中、一人隨風而至、勘見之乃巨卿也。

文中いふところの勘は張勘、「菊花の約」の左門である、巨卿は卽ち赤穴宗右衞門である。それはともあれ、殆ど原文のまゝで、飜譯ともいふべく、しかも短い一節の中にも、秋成の用意の細かさが窺はれる。原據にない波の音を利かせて、海近い加古の驛をしかと描き出したのが一つ、浦浪の音ぞこゝもとの一語、これを「源氏」の「須磨」の卷から藉りて來て、ゆかしさを添へたのが一つ、更にまた犬の聲を原據の外の箇所から移して來たのが一つである。外の箇所とは、張勘が晝の間、門に巨卿を待つくだりの「張勘聽得前村犬吠、又往望之、如此六七遭」とあるのがそれ。しかも前に引くところの文中の語「倚門如醉如癡」をも空しくしないのが秋成の用意であつた。秋成はこれを晝のほど左門が戸に待ちくたびれたところに移して、「西に沈む日に宿急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみ見まもられて心醉へるが如し。」といつてゐる。此の一事からも全篇の構想に對する秋成の飜案ぶりが考へられる。

「菊花の約」はかういふ細心の注意で原據を重んずると共に、許し難い理と弱きに過ぐる情には斧鉞縱橫の武斷を辭さなかつた。許すのも許さないのもすべて秋成の氣分を基準としてのことである。それまでの決意と決意に隨ふ完成の前に、幾度の推敲をあへてしたか、ほゞ想像される。

張勘は汝州南城の農、學成つて東都洛陽の擧に應ずべく母に別れて鄕里を出づ。幾日の後、洛陽を去ること遠からぬあたりに宿る。隣室に坤吟の聲を聞いて、瘟病の危きをかへりみず看護した。これも同じ應擧の士であつた。楚州山陽の人、姓は范、名は式、字は巨卿、商賈の家に人となりながら學を好み功を擧に成さうとして都門に入るの途、こゝに疾んだのである。張勘これと交はつて兄弟の約をなす。病後の療養に心を盡して、勘は試驗の期を逸したことも悔いない。かくて宿舍にあること半年、おの〳〵家に歸らうとした。別路の追分の酒肆に上

つて共に飲む。黄花紅葉秋光を粧點し、以て別離の興を助ける。杯中には茱萸が泛んでゐる。酒家に問へば、今日しも重陽の佳節と答へる。別れがてなの巨卿は來年の此月此日、賢弟の家に至つて尊母を拜さうといふ。劭は村里のかなしさ、もてなしに事は缺けど雞黍を設けてお待ちするといふ。二人は堅く約して袂を分つた。家に歸つた劭は母に事の始終を告げる。母もまたよき友を得たとて子の爲に悦んだ。

一年は夢と過ぎた。重陽の佳節となつた。「雞黍之約」これを重じて劭は弟を督し、その設をなして盟兄を待つ、待つ人はつひに來らず、來たのは其の幽魂であつた。靈の言にいふ、われ家に歸つて後、商賈妻子口腹の累にあひて忘るともなく「雞黍之約」を忘れはてた。たま〳〵人に茱萸酒を贈られて重陽の佳節なるを知つて、ひた呆れに呆れた。しかも千里の隔をいかにもなし得ない。ふと人不能行千里、魂能日行千里の語を想起して自刎した。死するに臨み、われ死しても葬るなかれ、弟張劭の來り弔ふを待つて土に入れよと妻子に遺囑したと。

劭は弟に母の奉養を賴んで山陽さして急いだ。そこに到つた日、まさに巨卿歿後十四日、妻子は隣人の勸め默し難く葬儀を營む。何等の不思議か、棺は墳前まで牽かれて往つたが、さゆらぎもしない。人皆驚異の眼を瞠つてゐた。劭は棺前に兄を祭つた、さて兄の墓側に葬りくれよといひながら刎した。

「范巨卿雞黍死生交」の梗概を說いて、あまりに荒きに過ぐるとはいふものゝ、なほ秋成が「菊花の約」でどんな飜案態度をとつたかを知るよすがにはならう。原據にはわが國情にふさはしからぬものがある、また理に合はぬふしも多い。國情にふさはしからぬものをしつくりと反を合はせるのは、秋成のいつもの態度であるが、この篇ではとりわけて理に背くものを理で訂すやうに努力してゐる。武家の義理ものがたりに仕立直したのもそれがため、秋成の好みからいへば、嬉しい奇怪の一事項、棺が墳前で動かなくなつたことをもカツトして惜しまないのはそれがためである。けれど其のカツトはもとより一篇構想の統一を主としてのことではあるが、其の小を惜しんで、千里の魂と相語る幽悽の度を削ぐ結果を懸念したことも多く計算される。いかに理を以て非理を訂したにせよ、秋成はつひに「英草紙」などの著者都賀庭鐘とは態度を異にしてゐた。（「國語國文」創刊號）

三　人格の表出

倉田百三（超克）

扱方　宗教的瞑想と哲學的思索とよりなる所感の一であるから特にこの點に留意されて、本學年の思索的教材としての意義を徹底させたい。人として何人といへども心せねばならぬのは人格の表出といふことである。然るに愛情の動きや意志の力の操縱の無關心から、他人の印象に醜い自己を映す場合が少くない。感情や意志は人間の本能的のものであるが、その表出に當つては、教養によつて或る程度までそれを抑へ、高尚な表出をなさなければならない。これは文明人として當然必要な嗜みであり、これによつて人は各の個性に適した高尚な表出を見出す。これが人間としての理想に近い域にまで人格を向上せしめるに最も適確な道であるといふのが、本課の要旨であるが、生徒の相互批評にまで及ぼして、これを十分理會せしめたい。教材が教材であるのでやゝもすれば、修身的取扱ひに傾かざるを得ないと思ふが、然し、あくまでも國語教育の上に立つものであることは忘れたくない。

教授

作者

倉田百三　クラタモモザウ

劇作家。小說家。明治二十四年二月二十三日、廣島縣庄原町に生る。中學卒業後、第一高等學校を中途退學した。大正五年頃、尾崎喜八、千家元麿、近藤經一、犬養健等と共に、同人雜誌「生命の川」を發行して試作してゐたが、戯曲「出家とその弟子」を發表して一躍文壇に有名となつた。代表作は戯曲では「出家とその弟子」「布施太子の入山」「處女の死」「歌はぬ人」であり、感想では「愛と認識の出發」「超克」「轉身」「靜思」等がある。

引用書

超克——倉田百三の著。感想集である。東京、改造社發行。

語釋

〔人格〕　人の品格品位。人がら、人品。

〔表出〕　外面に發表すること。

〔印象せしめる〕　Impress. 印象を與へる。印象(Impression)は或物事を見たり聞いたりすると、それが

心に印されて殘る、その印されたものをいふ「他人に印象せしめる機會である。」は、他人に對して自分の感情や意志を發表するといふ事は、自分の人格を相手の心に刻みこませる適當な折であるの意。

〔內面生活〕　人と交際したり、仕事の爲に奔走したりする外面的な生活に對して、心のうちの生活、卽ち精神上でいろ〳〵な事を考へたり思つたりすることを內面生活といふ。また精神生活とも內部生活ともいふ。

〔肉體的表出〕　顏にあらはれる表情とか、身體にあらはれる身ぶりとかを指す。

〔衝動〕　Impulse. 心理學上では、目的を意識せずに、たゞ何等かの行爲をなさうとする心の活動。

〔位置に置かれた時〕　さういふ場合になつた時。

〔對人關係の道德〕　互に他人に對する時守るべき道德。

〔制約〕　程度をこえぬやうに、ほどよく加減すること。

〔カルチュア〕　敎養。敎養。

〔標識〕　めじるし。

〔內面の狀態〕　卽ち內面生活の狀態。

〔隣人の愛〕　新譯聖書マタイ傳、第十九章第十九節に「父と母とを敬へ。」又「己の如く汝の隣を愛すべし。」とある。自分自身を愛するやうに、他の人々をも愛せよといふ意である。この「隣人」とは換言すれば、人類愛のことである。「隣人の愛に飢ゑた時」とは人々が自分を愛してくれない時——飢ゑて食を求める如く、他人の愛を求める時の意。

〔人間らしい孤獨の寂しさや飢渴〕　人間は社交的なものである。それが誰も交つてくれないで、誰からも見捨てられたやうな時の孤獨感、愛してもらひたいといふ心からのねがひ——その人間ならでは持ち得ないやうな淋しさ。心の飢渴。

〔哀願的に〕　哀訴的にともいふ。切に同情を乞ひ願ふやうに。

〔他人の感情に云々〕　他人の同情を惹かうとして願ひ求める。

〔未練がましく〕　きつぱりとあきらめられないで、思ひきりわるく。「がましく」は「らしく」に同じ。

〔愚痴つぽい〕　ともすれば愚痴をいふ傾がある。愚痴をいひがち。愚痴はいつてかひのない事をいつて歎くこと。

〔高貴の德と一致しない〕　高貴に反する——卽ち卑しむべきもの。

〔內面の現實〕　實際ありのまゝの內面生活。

〔彼等の苦痛や悲哀の原因云々〕　相手の人の心に苦痛や悲哀を與へる意。

〔これに對する云々〕　自分の苦痛や悲哀を訴へた相手の人が、どうしても、同情したり、一身を投出して力を借したりしないでゐられなくする。

〔ストイック〕　Stoic. ストア學派の人。ストア主義(Stoicism)はギリシャ哲學の末期——西曆前第四世紀の終頃アテネに起り、ローマに傳はり、當時の風敎に一大勢力を有した倫理宗敎を中心とした一派の哲學。キプロスの人ゼーノー(Zeno)の創立で、ストアの名は彼がアテネのストア・ポイキレに講筵を設けて學徒を聚めたのに創るといはれてゐる。倫理宗敎を中心とし、窮理よりも實踐を重んじ、克己主義、世界主義をとるもの。ここの「ストイック的な」はストア學派風の堅忍主義、禁慾主義、克己主義の意。

〔自己の負ふべきもの〕　自分の一身にひきうけなければならないもの。

〔蟲の良さ〕　自分の都合ばかりを計り、他を顧みないこと。身勝手。

〔過剩〕　ありあまつてゐること。

〔亂れた表情〕　取亂した、常態を失した表情。

〔靜的な表れ〕　靜かな表出。積極的に表出するのではないが、自然に靜かに表現されること。

〔人間らしい隔なさ〕　人間らしいうちとけた心。

〔理想〕　一番高い望。現在の立場に於て、實現の可能性を有つた最高最善最美の想像的境地をいふ。實現の可能性のないものは空想である。「理想の境地」はいはゆる理想境。理想とする所。

〔無礙〕　無碍。さはりのないこと。縱橫無礙などと熟する。ここは心の內がからつとして朗かで、少しの邪念もないこと。

〔ぶしつけ〕　不作法。だしぬけ。露骨。

〔こだはり〕　物事に拘泥すること。ここは自分の感情や意志を率直に表出し得ぬこと。

〔自己の醜さを他人に押しつけ〕　自分の輕々しさや、——馴々しさや、ぶしつけさなどを他人の前にさ

らけ出し——さういふもので、無遠慮に他人の心に迫り。

〔粗野な手を以て云々〕　無骨な野卑な態度で。

〔他人のベール〕　ベールは面紗。顔面を被ふ装飾を兼ねた塵除けの薄い絹布。ここで「他人のベール」といふのは、一つは禮譲心から、一つは靜かに自分を守るためにとる心の態度、構へ——あるつゝましさとでもいふべきもの。「拂ひのけ」は、さういふ態度を無視して。

〔泥足を他人の清堂に云々〕　前項に述べたやうに、他人がつゝましく、清らかに守り立ててゐる殿堂——心の内に、ぶしつけに、がさつに近づいたり、干渉したり。

〔他人の心の扉を覗きこんで〕　「心の扉」とは自分の内面生活を輕々しく表出しないやうに注意してゐることを、扉を閉してゐると形容したのであつて、その扉をのぞきこむとは、無理に相手に近づいて、相手の心をさらけ出させようとする意だ。

〔その靜けさをゆすぶる〕　相手の落着いた靜かな心を攪亂させる意。

〔縱な〕　身勝手な、放縱な。

〔寡默〕　言葉少なく默してゐること。

〔そのゝゝの特色を持ちながら〕　各異なつた特色を持つてはゐるが。

〔種々相〕　種々なかたち、すがた。

〔完全な自由を得ることは〕　どんな態度でも、自由に執ることが出來るといふことは。

〔私たちの人格の完成の云々〕　我々の人格が圓滿に出來上つたといふことの最も明瞭なしるしである。

〔表徵〕　Symbol. 表象。象徵。あらはれたしるし。色や形や音などで物事の意義を現すこと。たとへば、黑の悲哀に於ける、白百合の純潔に於ける、十字架のキリスト教に於けるが如き。

〔聖衆俱會〕　シャウジュクヱ。欄外に詳しい註がある「聖衆」は極樂淨土にあるもろ〳〵の菩薩をいふ。俱會は俱會一處といひ、彌陀の願力によつて、考少不定の娑婆から、前後遲速して死滅したものが、西方淨土に往生して、俱に一處に會合する事をいふが、この文では極樂をキリスト教の天國の事に替えて述べてゐる。

〔祝福せられた人たち〕　神から祝福せられた人々。

神の祝福を受けた人々。

〔傷つけず傷つけられず〕　自他の人格を傷つけず傷つけられず、互に自由にうちとけて交つてゐる意。

〔超人〕　Superhuman. ドイツの哲人ニーチェ（Nietzsche. 一八四四—一九〇〇）の特に意味深く用ひた語。各人の個性を十分に發揮し、勇敢に美的に、しかも卓越した識見を以て衆に秀でた人をいふのであつて、更に智力と直覺との結合が常人以上で、虛心平氣に、些些たる習俗謬信を超越して、自我の生活を重んずる人をいふ。が、ここでは、そんなむづかしい意にとらずとも、普通の人間よりずつと勝れた、偉大な人くらゐに解すればよい。

〔天使〕　エンゼル（Angel）。天國にあつて上帝に仕へる者。また上帝より派遣せられる使者。「天使らしさ」とは、天使のやうに清淨で純眞なこと。

〔より高い階段より見れば云々〕　階段も段階も同じで、階級のこと。一層高貴な人格を持つてゐる人から見れば、それより低級な人格の所有者の表出は、高貴の德が完全に備はつてゐないやうに見える。

〔甘く〕　幼稚で。

〔高く登り、遠く願ふに隨つて〕　だん〳〵高貴な德を磨いて人格を向上させ、一層高遠な理想を追及するやうになるに隨つて。

〔領域〕　領有する地域。ここは範圍位に解してよい。

〔自己の境涯にふさはしい表出〕　境涯は身分の程あひ。境遇といふに同じ。自分の人格の程あひに相應した表出。自分の人格以上の表出も出來なければ、自分の人格以下の表出も出來ない意。

〔自分が爰に擧げたのは云々〕　以上擧げて來たのは、人間としての程あひから見てもなほ卑しむに堪へたものばかりで、「いや、それはいかにも人間らしい、許すべき事だ」といひ得るやうなものは擧げなかつた何故なら後者のやうなものは、神も、あはれむべき、そして愛すべき人間たちよ、といふ風に考へて、とがめ給はないであらうから。

〔人間らしい表出として卑みに云々〕　人間としては自然の表出であるから、卑みとはならないやうな表出は。

〔愛するに堪へるもの〕　愛することの出來るもの。「愛するに堪へたものとなり得るであらうと信ずるか

らである。」の「からである」は、前の「自分がここに擧げたのは云々」にかゝる。「人間らしさの階段に於て卑しむべき表出である」ものばかりを自分がここに擧げたのは、人間らしさの階段に於て卑しまれない表出は、神の目に於ても云々と續く。この所、文脈が複雜であるから注意を要する。

鑑賞批評　我々の內面生活は非常に複雜である。絶えず樣々の意志、感情が去來し、一刻といへども休止することがない。このやうな複雜な內面生活を他人に對して表出したいといふ衝動は誰しも持つてゐるもの——人間のあらゆる行動は皆自己の表現慾望によらないものはないのである。しかしすべての本能的衝動がさうであるやうに、それが自然的な働きであるとの理由でそのまゝにさらけ出しても好いといふことはいけない。却つて自然的であるが故に强烈な意力を以て制御しなければならないことが實に多いのである。本課は、その內面生活を表出する場合にあたつて、いかなる省察をなすべきであるかを說いたものである。そして作者は、自分の意志、感情を、何等の考慮を用ひないで表出することの卑しさを高調する一方、根本的に人格の完成を說き、また高貴の德を磨けば、自然に表出も高貴となり、すべての場合に於ける態度が、行不踰矩の域に遠すると結論してゐるのであるが、これこそ卒業期に臨んでの眞に心して讀み味はふべき名篇であると信ずる。特に作者が重い脊髓病に惱まされながらもそれに打ち克ちつゝ深い思索的生活からにじみ出した所感であるだけに眞實性に富んだ尊い敎訓がある。それだけに、文章にもまことの强さや魅力があり、親しみがある。むだがなく、すつきりとした名文、そして穩かな調子のうちに燃えるやうな熱意の感じられるのが何より好いと思ふ。

尙、鑑賞に役立たせるためにここで作者について附言しておかう。氏は長らく起臥も思のまゝにはならぬ程な重い脊髓病に惱まされてゐるのであるが、その堪へ難い肉體的な不幸は、氏の精神生活にはこの上もなく幸したものともいふべく、氏をして深く宗敎的瞑想、哲學的思索の中に沈潛せしめ、そこに比類なき深遠なる氏の精神生活は展開されたのである。しかもあくなき生活慾は、氏をして表出なき思案生活の中に沈默せしめずに常に病軀を鞭つて、戯曲に、論文に、感想に、批評にと橡大の筆を揮はしめてゐるのである。

四　法成寺の造營

（榮華物語）

扱方　假名文國史の最初のものとして、又國史としての嚴正批判的に社會事象を鋭く凝視すべきであるのに、榮華物語といふ題名が示す通りに一個人藤原道長の讃美にのみ終始してゐて平安朝末期の世相を背景として生れた國史物語であるといふ點を、敎材としては採らなかつたが、同じ主題のもとに書かれた國史物語である大鏡と比較して、全く兩者正反對である點を比較敎授をされたら興味深い結果が得られるであらう。道長の四女はすべて宮中に入り、後一條、後朱雀、後冷泉の三天皇は悉くその外孫に當らせ給ひ、その莊園は天下に遍く、その富は皇室を超え、身は人臣の榮を極めて、文字通りの極樂世界をこの世に見た彼は、病を獲て、薙髮するに及んで、造營を思ひ立つたのが、實に法成寺である。この世ならぬ豪華を極めた大造營が富と權力と人力とを總動員して今着手されてゐる光景——かんばしく鼻を打つ木の匂、若の艷もまだ鮮な磐石の色、——工匠のぞめき、見物の喝采、そして、その上にはる〴〵とひろがる千年前の王城の紫紺の空の色、薄黃色く煙つた日の光、——そのすべてが渾然とした諸調を作りつつ、無縫の叙筆の中に飽和していみじく我々の前に展開してゐるのである。靜かに、ゆつたりと句から句を拾ひつゝ、この工半ばなる法成寺の境內をたどつて行くことこそ、我々の大きな喜でなければならないと思ふ。

敎授

引用書

榮華物語——「榮華物語は世繼ともいひ、藤原道長の榮華の一生を中心として描いた所に榮華物語の名があるのであらう。作者は赤染衞門と傳へられてゐるがこの考に就いて安藤爲章も疑ひ、その榮華物語考の中に女性の日記などを集めて堀河院より後の男性が記したものといつてゐる。全體が四十帖に分れ、卷ごとに優美なる卷名を附してあるが、編年體で宇多天皇から筆を起して堀河天皇の寬治六年までの記事である。第一帖『月の宴』から第三十帖の『鶴の林』までは、道長を中心として、その薨去までを記し、後の『殿上の花見』以後の十帖は、その薨後の記事である。そして、この兩者は、文體も相違

し、又佛語などの多寡によつて作者が異なるといふ說を伴信友が說き、更に信友は藤原爲業がその何れかを記したものではないかと唱へてゐる。藤岡博士もこの前篇、後篇に分つことに從つてゐるが、なほ同一人が後より記したものとしてゐる。要するに榮華物語の作者も未だ斷定するまでに至つてゐないのである。そして榮華物語の組織を見るに、道長を中心とした事は源氏物語が光源氏を中心としたと同一である、たゞ源氏が架空の人物であるに對して、道長が實在の人物であることが相違する。又榮華の前篇、後篇に分れることは、源氏に於ける初の四十四帖と後の宇治十帖の如きである。榮華物語の叙述は事實を叙述し、道長の榮華を讃歎するのみで、文學的の價値は餘り高くないが、なほ精細な事實の記述は源氏物語の背景としても興味があり、道隆の薨後、伊周、隆家の左遷、定子の哀歎を記した浦々の別れの如き讀むに足るものがある。」（藤村作氏著——國文學史總說）◇因に作者について最近三條西公正氏は上編は赤染衞門、下編は不明ではあるが、女性であらうといふ新說を出された。本課は第十五帖の「うたがひ」から採つた。

語釋

〔法成寺（ほふじやうじ）〕　道長が病を獲たのは寬仁三年三月十七日で薙髮して行覺（後、行覺と改む）と號したのは同月二十一日の事であつた。が、彼はその前から相當佛敎に凝つてゐて、早く淨明寺といふ寺を小幡（こばた）に造營してゐたのだが、出家して後は、いよ〳〵一大寺の建立を志し、遂に子の賴通をして京都京極の東、近衞の北に地を卜して工事を起さしめ、賴通は命を受けて役を諸國に課し、「もし公事を緩くすとも、この役を怠ることなかれ。」といつた命令を發して本文に見えるやうな「大騷動」を演じて、工を急いだわけなのであるが、同年十月、道長が奈良の東大寺で受戒を行ひ、その堂宇の宏麗なのを一見すると、彼の希望はいやが上にもすさまじいものとなり、自分の寺も當然この東大寺ほどの規模としたい旨を高調し、かくて定朝の手によつて丈六九體の阿彌陀像は作られ、いはゆる無量壽院——即ち京極の御堂は落成し、翌寬仁四年三月二十三日にはその開眼供養があり、次いで治安二年七月十四日には食堂、五大堂の開眼供養も行はれるに至つたのだが、法成寺の名は實にこの時命ぜられ、その儀式は御齋會に准じ、天皇行幸、太皇太后、皇太后、中宮、東宮の

行啓があつたといふ。その後藥師堂等の開眼供養が行はれたが、萬壽四年、道長は法成寺にあつて再び病を獲、天皇は行幸して病を訪ひ、封五百戶を寺に賜うたが、十二月四日、無量壽院の阿彌陀佛の前で遂に道長は六十二歲をもつて薨じたのである。で、法成寺の境域は凡そ方二町で、中央に金堂があり、これを大佛堂といひ、東に阿彌陀堂、西に五大堂、藥師堂、その北に釋迦堂があり、その他齋堂、三昧堂、經藏、寶藏、鐘樓並びに南大門、西大門等が甍を並べ、その規模は文字通り東大寺と匹敵し、結構の華麗は法成寺に比すべきものはなかつたといはれるが、その後、承久四年に炎上し、その敷地に賀茂川の水が流れ入つて、今はその礎さへも殘つてゐない。

〔今は御心地〕　もちろん道長の御心地である。道長の發病、並びに出家の日は前項で述べたが彼は出家してからもずつと病氣續きで、「日長く思さるゝまゝに、さるべき僧たち、殿ばらなどと、御物語せさせ給ひて、」わづかに氣をまぎらしつゝ、日を送つてゐたのである。——かくて世を背かせ給へども、御準備（おんいそぎ）は『浦吹く風』にや、今は御心地——」

〔例ざま〕　いつもの樣——平常の如く。「例ざまになる」は病氣の平癒したことをいふ。

〔御堂（みだう）のこと〕　寺院造營の事。この御堂は固有名詞（即ち法成寺の別名）にとらない方がよい。

〔攝政殿〕　藤原賴通。道長の子で、幼名は鶴君。累進して權大納言となり、三條天皇の皇女是子內親王降嫁。後一條天皇の卽位と共に內大臣に進み、次いで父に代つて攝政となり關白となり、康平四年、太政大臣に拜せられ、永承年中、宇治の別業を捨てて寺とし、平等院と名付けた。延久四年、薙髮、蓮花覺と號し、後、寂覺と改名、承保元年二月二日、宇治で薨去、年八十三。世に宇治殿と稱する。攝政は古へ幼帝又は女帝等の時、天皇に代つて大政を行つた職で、古くは皇族がこれに當られたが、中古より大臣の人がこれを兼ねるのが例となつてゐた。が、憲法發布の後は、天皇未だ成年に達し給はないか、又は久しきに亙る故障によつて大政を親らすることがお出來にならない時、天皇の名によつて大權を行ふものといふことになり、成年の皇太子、皇太孫をもつてこれに任ずるのを原則とし、もし皇太子、皇太孫がないか、又は成年に達し給はな

い時には、親王、王、皇后、皇太后、内親王、女王の順序によつて任ぜられるといふことに定められてゐることはいふまでもなからう。

〔國々まで〕諸國に對してまでも。

〔さるべき〕然るべき。相當した。

〔公事〕私事に對する稱、公務。朝廷の課役をいふ。（後には專ら訴訟聽斷の事に用ひる）

〔さるものにて〕然るべきものにして——そのまゝに差置いて。

〔先につかうまつる〕先に仕へまつる。先に命を奉じてはたらく。

〔殿の御前〕「御前」は尊稱に用ひる語、直接に「殿」といはないで、その前を指していふのである。こゝはもちろん道長を指す。

〔このたび生きたるは〕今度病氣が恢復したのは。

〔別事ならず〕他でもない——他事の爲に恢復したのではない。

〔この願〕御堂造營の願。

〔なめり〕「なるめり」の約。「めり」は、物事の狀態を然りと推量していふ意の語。——らしい。

〔他事なく〕他の事を一切顧みず。

〔方四町〕四町四方の面積。

〔こめて〕入れこめて。包んで。

〔大垣〕外圍の大きな垣。築地などをいふ。

〔瓦葺きたり〕大垣の屋根に瓦を葺いたといふので、その立派なことをいつたのである。

〔さま〴〵に思しおきて〕いろ〳〵と豫定して。

〔夜の明くるも心もとなく〕夜の明けるのを氣にかかり。「心もとなし」はおぼつかなく、氣がかりな意。これは夜を徹して工程を急ぐさまである。

〔山をたゝむべきやう〕山を築く樣を考へ。

〔池の掘るべきさま〕池をいかに掘るべきかを考へ。

〔栽ゑなめさせ〕植ゑ並べさせ。

〔方々さま〴〵作りつゞけ〕あれこれと堂から堂に廊下や渡廊下でつゞくやうに造り。

〔御佛はなべてのさまに云々〕堂々に安置する佛像は一通りのものであらうか——決して一通りのものではない。「なべて」は一通り、普通、一般、並々の意。

〔丈六の金色の佛〕一丈六尺の金色に塗つた佛像（常

に跌坐の像に造る）。

〔作りなめ〕造つて並べ。

〔そなたをば北南と馬道をあけて〕この語の意味は不明瞭で多分原文に誤脫があるのであらうと察せられるが、姑くこの語は「その佛像の方に向つて北とか南とかいふ風に、各所に馬道を設けて」と解して置いてよいと思ふ。「馬道」は殿内にある道、通廊下をいふ。めんだう。もと家屋内の一部を馬の通行の路に用ひた故にこの名が起つたといひ、平安朝の中葉以後は專ら長廊下の意となつた。

〔廊〕殿舍と殿舍との往來の爲にたて續けた細長い建物。

〔渡殿〕廊の橋がゝりになつてゐるもの。渡廊。

〔鷄の鳴くも久しく思され〕鷄の鳴くのが——卽ち夜の明けるのが待ち遠しく思はれ。

〔宵、曉の御行ひ〕朝夕の勤行。朝夕のおいのり。

〔安きいも大とのごもらず〕安眠し給ふこともない。「安きい」は安らかに寢ること。「い」は寢入ることをいふ。「大とのごもる」は大殿隱るの義で、「いぬ」（寢）の敬語。

〔御心にしませ給へり〕「心にしむ」は一心になること。

〔參り罷で立ちこむ〕出入して雜沓する。「まかで」は退出して、「立ちこむ」は群集する。

〔さるべき殿ばら〕然るべき高貴の方々。

〔宮々〕皇族の方々。

〔御封、御莊〕又はミフウ、ミシャウ。封戶、莊園の敬稱。封戶は親王又は諸王諸臣の勳功、位階、職分ある者に賜はる戶口をいひ、孝德天皇の時、中臣鎌足が封二千戶を賜はつたのが始であつて、大化二年に始めてその制が定まり、位封、職封、國封の三つに分たれてゐたが、こゝは國封の意で、藤原基經の薨去後は一國となつた。莊園は平安朝以來、勢力ある寺社及び人人の私有地で、莊號のある土地をいふ、莊は田舍の義で、田間にある家屋。園は苑の藩を設けたもので、樹木等を植ゑる所。莊地、莊所ともいふ。莊園は必ずしも無稅でなくて、輸租地と不輸租地との二種があつた。

〔夫〕人夫をいふ。

〔かしこき事〕すぐれたこと——よいこと。

〔思したち〕 お思ひ立ちになり。
〔國々の守〕 國司をいふ。國司は大化改新以後、日本六十六國及び二島に置いた地方官の稱で、くにのつかさ、じゆりやう、ずりやうなどともいふ。
〔地子〕 租稅の一で、公田及び官田を民に賣與し、これに對して納めしめた賃租をいふ。元正天皇の養老三年九月に一段の粟三升の地子を輸せしめた事が文獻に見えてゐるが、後世にはこの法は廢頽し、一種の雜稅となり、錢を納めしめて、これを地子錢といひ、その他田地子、林地子、畑地子などがあつた。
〔官物〕 又クヮンブツ。官に納める貢賦のこと。田租調庸のこと。
〔おそなはれども〕 遲れるけれども。「おそなはる」は遲くなる。
〔夫役〕 公用に使役するために人夫を徵發すること。
〔檜皮〕 屋根に葺く檜の皮。
〔多くまゐらする〕 多くさしあげる。
〔近きも遠きも〕 近い所の人も遠い所の人も。
〔品々方々〕 仕事の種類と方面をいふ。
〔あたり〳〵に云々〕 邊々——あつちでもこつちでも働いてゐる。
〔御佛つかうまつる〕 佛像を造る。
〔佛師〕 佛像を彫刻する職人。
〔同じくはこれこそ云々〕 同じ働くなら、この佛像を造るのが最も勝れてゐる觀があるといふので、佛像を造る仕事の最も光榮であることをいつた語。「めでたし」は愛づべしの義。
〔工匠〕 木材を用ひて物を造ることを職とする人。大工、木工をいふ。
〔えさゝさと〕 刀を入れる時の掛聲。えつさ！もつさ！と。
〔佛の御座〕 佛像を安置する座。佛座、蓮座、臺座、獅子座。
〔輝かす〕 輝くほど磨きつくる。
〔板敷〕 板を敷いた所。板の間。板の床。
〔とくさ〕 砥草の義。莖は一根から叢生し、中空で、高さは一二尺、寸餘毎に節がある。莖を乾かして物をすり磨くに用ひる。
〔むく〕 椋。楡科の木で、葉は樫に似、實は圓くて黑い。葉は器具を磨くに用ひる。

〔手ごとに〕 銘々に手を働かせ。
〔檜皮葺〕 こゝは檜皮で屋根を葺く人足の意。
〔壁塗〕 壁を塗る職人——左官。
〔瓦作〕 瓦師とも瓦燒ともいひ、瓦を燒く職人。
〔數を盡したり〕 數の限りを盡してゐる、殘らず聚つてゐる。
〔切りとゝのふ〕 正しく整つた形に切る。
〔力車〕 物を積んで人の力で引く車。荷車。
〔えも言はぬ〕 得もいはず——いふにもいはれない。「えもいはぬ大木どもに綱をつけて云々」は大木を力車に積んで、それに綱をつけて大勢で引く意だ。
〔叫びのゝしり〕 叫び騷いで。「のゝしる」は大聲にいひ騷ぐ。罵倒する意ではない。
〔のぼる〕 田舍から京へ——。
〔賀茂川〕 山城國（京都府）愛宕郡から出て、南流して上賀茂の西を過ぎ、京都の東邊を流れ、淀川に注ぎ攝津で——大阪灣に入る。
〔いかだ〕 筏と書く。竹木を編んで水に流して運漕するもの。
〔くれ〕 榑と書く。木材の意だが、主に檜、杉の木材をいふ。
〔磐石〕 大きな石にいふ語。
〔はかなき〕 ちよつとした——賴りない。
〔いひ盡し〕 悉くいひ表し。
〔まねびやる〕「まねぶ」は眞似する義で、こゝではその樣を人に告げることをいつたのだ。
〔方〕 方法。手段。
〔須達長者〕 蘇達多（Sudatta）とも書く。釋迦在世時代の舍衞國の富豪で、波斯匿國王の大臣である。性頗る慈悲心に富み、佛に供養する事を怠らなかつた。祇園精舍を建立して佛に奉り、又多くの財を投じて孤獨の者に給與した。
〔祇園精舍〕 中天竺舍衞國の祇陀園をいふ。精舍は寺の意。祇園は祇樹給孤獨園の略。須達長者が逝多太子と謀つて、これに精舍を建てて佛陀に獻じた。國都舍衞城の南十三四町の所に逝多林があつて、これが舊址であつたが、今は荒廢したといふ。當時は十二の浮圖七十二の講堂、三千六百の房舍、五百の樓閣があり、佛陀が最初に弘法した道場である。
〔冬の室、夏の風〕 淨飯王がその子である悉多太子

卽ち佛陀のために造つた宮殿。經文の冬室、夏堂を和解したのである。佛本行集經に「爾時太子漸向二長城一、至二年十九時一、淨飯王爲二於太子一造二三時殿一、一者暖殿、以擬二隆冬一、第二涼殿一、擬二夏暑一、其三殿擬二春秋二寢息一。」とある。

〔各ことゞ〳〵なり〕　各室いづれもまち〳〵で、いろいろの意匠を凝らしてある。「ことゞ〳〵」はまち〳〵、別々などの意。

〔かゝる御勢にそへて〕　以上のやうなすばらしい權力威勢に加へて。

〔いとゞ勝らせ給へり〕　いよ〳〵道長の權勢が加つた。「いとゞ」は「いと〳〵」の約。

〔なほなべてならざりける御有樣かなと〕　一層一通りでない尊い御有樣であると思つて。

〔近う見奉る人〕　この御堂を近くから見る人。

〔この御堂のあたりの木草とも云々〕　道長の御蔭を被らうと思つてゐる人。

〔そなたざまに赴けば〕　造營中の御堂の方に向つて行けば。

〔海の浪もやはらかに云々〕　海の浪の立つことも穩かで。

〔この御堂の物〕　この御堂造營に要するもの。

〔快く浮べもて云々〕　前の「磐石といふばかりの石を、はかなきいかだに載せて率て來れど沈まず。」と照應する。

〔なべてこの世の事とは見えさせ云々〕　普通一般の世の中の事と見えぬ——佛などがさうさせるやうに見える意を含めてある。

〔先づは〕　第一に。

〔長谷寺〕　眞言宗豐山派の總本山。大和國磯城郡初瀨町の山上にある。堂塔四傍に散在した大伽籃。元正天皇養老五年の創立とも、文武天皇の朝、德道上人の草創ともいふ。本堂は八棟造。本尊は十一面觀音。豐山神樂院と號する。別名は豐山寺。西國三十三所の第八番に當る寺で、古へから觀音大士の靈場として道俗の參詣が頗る多い。

〔いみじうして〕　甚だしく。ひどくして。

〔何かかく殿の御事を云々〕　どうして殿(道長)の御事をかれこれと批評なさるのか。

〔弘法大師〕　僧空海の諡號。幼名は眞魚。眞言宗の高

僧。讃岐多度津の人。寶龜五年六月十五日誕生。十八歲で京師に遊學し、二十二歲東大寺に入る。大和高市郡久米の道場で大毘盧舍那經を披閲し、深義を了解し難かつたので、入唐求法の志を起した。延曆二十三年、遣唐使藤原葛野麿に從つて入唐し、眞言密教兩部の祕奧を京城靑龍寺慧果和尙に承け、大同元年歸朝して大いにこれを弘布した。弘仁七年高野山を開いて本宗根本道場とした。承和二年三月二十一日、高野山に入寂、年六十二。延喜二十一年、弘法大師を追諡せられた。著には辨顯密二敎論、十住心論、祕藏寶鑰卽身義、聲字義等頗る多い。

〔佛法興隆の爲に云々〕　弘法大師が佛法を興隆させる爲に、道長に生れ代つて來られたものである。

〔天王寺〕　天台宗。大阪市南區天王寺元町にある。四天王寺ともいふ。聖德太子の創建。用明天皇の二年太子が蘇我馬子と共に物部守屋を攻められた時、四天王の像を造つて、戰勝を祈り、亂の平定後この寺を造營せられたといはれてゐる。初め玉造の岩上にあり、推古天皇の時現在の所に移された。古稱荒陵山難波寺、また三津寺、堀江寺。

〔聖德太子〕　厩戶皇子と稱し奉る。聖德太子はその諡號。用明天皇の皇子で、推古天皇の太子となられた。大臣蘇我馬子と謀つて佛法を興隆し、その他冠位及び憲法を制定する等、功業が頗る多かつた。薨ぜられた時、御年四十九。

〔御日記〕　四天王寺御手印記か、本願緣起をいふか不詳。

〔王城より東に云々〕　京都から東に佛法を弘める人、未來に現れたら、それを我(聖德太子)だと思への意。京都の東に法成寺を建立した道長は、この語によつて聖德太子の化身であるかも知れぬと察したのである。「王城」は帝王の住み給ふ城で、轉じては帝都の意となる。なほ法成寺が京都の東に當つてゐたことは、前出の「法成寺」の項を參照。

〔いづれにても〕　いづれにしても——それはともかく。道長が弘法大師又は聖德太子の化身であるかどうかといふことは、ともかくもの意。

〔おろそかならぬ〕　一方ならぬ。一通りでない。

鑑賞批評　法成寺入道前關白太政大臣藤原道長——。「この世をばわが世とぞ思ふ望月の缺けたることもなしと思

へば」——何といふ榮華の得意さであらう、この道長の豪奢に對する感激が一篇の基調をなして、誇張法が藝術的な香味に煙つてゐることは、この文をかくまで生彩づけ、かうした情景描寫に於てかくまでに見事な成功を贏ち得てゐることの最も大きな所以でなければならない。そして、この誇張法といふものは、東洋の藝術の（或意味での）生命をなしてゐるものであらう。遒勁な颯爽たる筆觸と、大まかな——太い線の中に、自ら纖細精緻な風情を籠めた筆調とは、正に東方の藝術家の獨壇場であり、王朝の物語作家の天稟的骨法だといふべきである。卽ち「——工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもを云々」「年老いたる翁などの、三尺許の石を云々」のあたりは、忠實な寫生に過ぎないが、漸次に——いひ得べくんば、作者の感激の火がひら〳〵と燃え盛つてくるに從つて、誇張の骨法が漸層的に表れ出でて、「磐石といふばかりの石を、はかなきいかだに載せて率て來れども沈まず。」となり、「かの須達長者の祇園精舍」となり、「冬の室、夏の風」となり、遂に「そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたち」となり、「河も水澄みて、快く浮かべ」となり、——「なべてこの世のこととは見えさせ給はず。」と結んで、それより以下文字通りの奇蹟的言辭を弄してゐる所、息をもつかぬ潑剌たる運筆である。しかもその誇張の中にちやんと描くだけのものは描きこなしてゐる手腕は、一體、何といつて批評したらいゝものか。つまり誇張が適度に鹽梅料理されてゐて、些かも遊離せず、すべてが內容と有機的な脈絡を保ちつゝ一つのペーソスとなつて讀者に迫つてくるのだ。「池を掘ると て四五百人おりたち、山をたゝむとて五六百人のぼりたち」といつたやうな、こんな概念的な數字さへ、作者はなか〳〵疎かならぬ用意の下に用ひてゐることは、少し注意して讀むものは誰しも氣のつくところだらうが、「賀茂川の方を見れば、いかだといふものに、くれ、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりもて云々」の「棹さして心地よげに謠ひのゝしりもて」の句にしても、いかにも高調味を帶びて、全體的の情景の上に、樂しく麗かな效果をもたらしてゐることは爭へないと思ふ。これを要するに、寫實と誇張と、客觀と主觀とが美しく渾融して、道長の權勢、豪奢を極めた造營の狀を力强く、飽くまで深嚴な重壓をもつて描き出してあるといふことになる。そして、結局、そこが味はへさへすれば、本文の妙趣は殆ど掬し盡し得たといつて、大過ないと思ふのである。

參考 榮華物語四十帖、各卷每に優美な面白い題名がついてゐるからあげてみる。

上編——一月宴、二花山、三樣々の喜、四見はてぬ夢五浦々の別、六かゞやく藤壺、七鳥邊野、八初花、九岩蔭、十かげのかづら、十一つぼみ花、十二玉の村菊、十三木綿四手、十四あさ綠、十五うたがひ、十六もとの雫十七音樂、十八玉の臺、十九御裳着、二十御賀、二十一後悔太將、二十二鳥のまひ、二十三駒のくらべ、二十四若枝、二十五嶺の月、二十六楚王の夢、二十七衣の珠、二十八若水、二十九玉の飾、三十鶴の林、

下編——三十一殿上花見、三十二歌合、三十三きるはわびしとなげく女房、三十四晩待星、三十五蜘蛛のふるまひ、三十六根合、三十七烟の後、三十八松の下枝、三十九布引の瀧、四十紫野、

◇「扱方」で述べたやうに榮花と大鏡との比較論を藤岡作太郎博士の「國文學全史」から引く。

「二書（榮華と大鏡）が道長を主として、藤家の榮華を寫せる目的も同じく、編成の時代もほゞ似たるが如し。少しく二書の異同を驗せんか。榮華は冗漫、大鏡は簡潔一見するに榮華の詳細なる記事を節約して、大鏡は成りたるが如し。されど大鏡は決して榮華のみに據りたるものにあらず。同時代の事を寫せば、同事實の多きは已むを得ざる事ながら、事實の撰擇彼此相異なり。榮華は立后任大臣など宮廷內の事を旨としたるに、大鏡には刀伊の入寇の如きかの書になき記事あり。事實の異同も處々に存す。師輔の女登子を榮華は登花殿內侍としたるに、大鏡は貞觀殿內侍とし、敦康親王の享年を彼は十七としたるに、此は二十九としたるが如し。しかのみならず榮華と大鏡とは批評の標準全く異なり。榮華は道長を以て人間の標本とし、完全無缺の貴紳とし、これと利害相反する人は、すべて惡し業にいふを常とす。大鏡は然らず道長を篇中第一の人物として、その隆運を祝するは同じといへども、徒らにその勢威に萎縮して、讃歎をのみ事とするものにあらず。是を是とし、非を非として、事實の直相を究むるを以ておのれが任とす。（中略）榮華は一篇の體裁、當時流行のつくり物語殊に源氏に擬したるものに過ぎずして、その特長の存することなし。大鏡はもと史記の體に倣ひたるものとはいへ、記述のさま、雲林

院の菩提講に二老翁が來合せて古事を語り、一人の青侍の時に口を挾むを、さながらに筆記したるが如くにし、彼一章、此一章、讀んで應接に暇なきは、こゝに文體に一特色を發揮せるものにして、後世の假名文の歷史がこれに則るもの多きも、深くこの體に感じたればなり。記事の緊張して、讀者をして厭かしめざるも、榮華の比にあらず、文章また頗る勁拔、たゞ「禍や〳〵」「思ひよるべきことかはな」「いと珍しきことよな」など感歎の辭を用ふること多きに過ぎ、「この御末ぞかし、今の世に源氏の武者の族は」など、屢々倒置の法を挾むが如く、ことさらに勁拔ならしめんとする痕跡を現せるを惜む。過差文盲、恪勤、閑散、追捕、遺恨、非常、詔曲、無賴、辱詁、人非人、勇敢幹了、甚深々々、希有々々など漢語を挾みたることの多きは、ことさらにしたるにあらずして當時通用語となれるものを用ひたるに過ぎざらん。」

五　日本民族の獨創力

田中寛一

扱方　あらゆる方面に躍進をつゞけてゐる日本民族を再吟味すべき機會を與へられてゐる今日、本課の如きは當に精讀內省に價するものである。論理的に統一せられた論旨を追うて、第一から第六までの例證を一つ〳〵まとめつゝ教授を進めてゆけば、作者の言はんとする點は把握し得るであらう。かやうな論文を取扱ふにはやはり數回の通讀を經ることが肝要である。語句そのものには困難さはないが、內容が相當に多岐にわたつてゐるから、部分的な詳述は避けるやうにして大綱を逸せぬやう注意せしめたい。又西洋流の考へ方と東洋流の考へ方との區別の如きは、餘り偏することのなき程度に於いて正しい認識を持たせるやう指導すべきであらう。

教授

作者

田中寛一　タナカクワンイチ

文學博士。東京文理科大學教授兼東京高等師範學校教授。明治十三年九月岡山縣に生まれた。同四十年、東京高等師範學校本科英語科卒業。山梨、岡山師範學校教諭等に歷任し、大正二年、京都帝國大學文科哲學科を卒業、更に東京帝國大學大學院に入り、大正八年文學博士の學位を受け、東京高等師範學校教授に任ぜられ、同十一年米、佛、獨、英各國に留學し、同十三年歸朝、昭和三年附屬中學校主事を命ぜられ、同四年東京文理科大學教授東京高等師範學校教授を兼任して今日に至つてゐる。「教育測定學」「教育學」「心理學」「論理學」等の著がある。

語釋

〔自明の事實〕　自明とは何等の證明を須たずしてそれ自身で已に明かなこと。ここはわかり切つた事實。

〔歷史に徵しても〕　歷史の上に當つてみても。

〔先進國〕　後進に對し、文化的にいち早く榮えた國。先輩的位置にある國。

〔經濟的な方法〕　ここは自國で苦心して文化を創造するよりは、先進國のそれをそのまゝ取入れた方が手つとり早いの意。

〔隋性〕　ここはいきほひの意。明治開化の世を迎へた時、西洋文化の鵜のみ的攝取をしたのが、そのまゝず

るすると續き續いて、今日でも西洋文化といへばそのまゝ取舍選擇せずに受け入れることをいつてゐる。

〔手本から脫化す〕　手本の眞似ばかりせず、ぐつと拔きでて新しい價値を創造する意。

〔これをしも云々〕　これをこそ獨創だといはないならば、一體何を獨創といふのかと、反語的に強めて。

〔フイエ〕　Alfred Jules Emile Fouillée　フランスの哲學者。（西紀一八三八—一九一二年）

〔隱れた調和〕　どこか共通するものを持ち。模倣と獨創とを全然別箇のものと見做すことは出來ない。

〔タルド〕　Jean Gabriel Tarde　フランスの社會學者。（西紀一八四三—一九〇四年）

〔摸倣は合流して云々〕　模倣が盛に行はれ、それぞれの模倣が一つの共通點に於て一致する時、そこに獨創的能力を生じて發明となる。

〔三絃樂や謠物〕　西洋の管絃樂は、その音階の上からいつても、また和聲を主とする點からいつても獨得の存在價値を持つてゐる。これに反して三味線音樂は單音を以て行はれ（所謂ハーモニーを重んじない）て全く形式を異にし、且つ謠物（いひ換へれば敘事詩）の伴奏樂として特殊の發達を遂げたものである。

〔フェンシング〕　外國の劍道は、細身でよく撓ふ鋼鐵刀を用ひ、突きを主とし、又一線上で爭ひ、その態度の美醜等で採點する等、日本の劍道と大いに異る。

〔ボクシング〕　西洋の拳鬪の歷史は相當に古く、古代ギリシヤに既にその發達があつた。中世以後イギリスに盛んに行はれたが、それも所謂ペアナツクル（グローブなしで空拳で打ち合ふ）の試合で、試合回數、時間等の制限なく、凄慘なものがあつた。近代に至り、クヸンスベリー法が制せられてからは、鬪技者は各々一定のグローブを著け、體重に應じて別けられた階級同志によつて試合が進められ、且つ反則（フアウル）を設けて殺伐な試合となるのを避け、スポーツとまで昇格するに至つた。フライ・バンタム・フエザー・ライト・ウエルター・ミッドル・ヘビイ等體重によつて階級を別つことは、レスリングと同じである。

〔後藤子爵〕　政治家。伯爵。名は新平。岩手縣の人。昭和四年歿、年七十二。

〔百濟河成〕　平安時代の畫家。仁壽三年（一五一三年）歿、七十二。

〔巨勢金岡〕　平安時代の畫家。

〔惠心僧都〕　平安時代の天台宗の僧。名は源信。寬仁元年（一六七七年）寂、年七十六。

〔雪舟〕　室町時代の畫僧。名は等楊。永正三年（一一六六年）寂、年八十七。

〔元信〕　室町時代の畫家、狩野氏。永祿二年（一二一九年）歿、年八十四。

〔探幽〕　江戸時代の畫家。狩野氏、名は守信。延寶二年（一一三三四年）歿、年七十三。

〔光琳〕　江戸時代の畫家。尾形氏、名は道崇。享保元年（一一三七六年）歿、年五十九。

〔道元〕　鎌倉時代の僧。曹洞宗の始祖。建長五年（一九一三年）寂、年五十四。

〔藤樹〕　江戸時代の儒者。名は原、近江聖人と言はれた。慶安元年（一三〇八年）歿、年四十一。

〔仁齋〕　江戸時代の儒者。名は維楨。京都の人。寶永二年（一一三六五年）歿、年七十九。

〔素行〕　江戸時代の儒者、兵學者。名は高祐。會津の人。江戸に住んだ。貞享二年（一一三四五年）歿、六十四。

〔關孝和〕　江戸時代の數學家。上野の人。寶永五年（一一三六八年）歿、年六十七。

〔高峰讓吉〕　科學者。藥學、工學博士。アドリナリン、タカヂアスターゼ等を以て知られる、永く米國に在つて科學に精勵、大正十一年彼地で歿した、年六十九。

〔長岡半太郎〕　科學者。理學博士。元大阪帝國大學總長。慶應元年肥前國に生まれた。

〔ビタミンA云々〕　從來人間や動物が成長し、又健康を維持するに必要な榮養素は、蛋白、脂肪、炭水化物、並びに無機鹽類の四種であると考へられ、食物の榮養價はそれに含まれる以上四榮養素の量で評價されて來た。が、その後の榮養上の種々の試驗、研究の結果、これ等の榮養素だけでは動物の發育の出來ぬことが分り、それ以外の未知榮養素が必要であるといふ事になつた。ボーランドのフンクは種々研究の結果、一九一一年にこれを發見してビタミンといふ名を附けた。この學說の基礎は我が國の農學博士鈴木梅太郎氏によつて作られたものである。その後の研究によつてビタミンは單一のものではなく、數種あることが明らかになり、これに、A・B・C・D等の名を附して區別してゐる。その中Aは、これを缺く時は代謝機能が不

整となり、疾病に對する抵抗減退し、榮養不良となり、呼吸器病に罹り易くなる。之を多量に含む物は肝油・牛乳・バター・卵黄等である。高橋博士の抽出に成功したビタミンAは今理科學研究所から發賣されてゐる。

〔高橋克己〕　農學博士。和歌山縣の人。大正十四年歿、年三十六。

〔二宮忠八〕　ライト兄弟より先だつこと十年、今日の如き飛行機の發明をし、これを階軍省に持參したところ、長岡外史將軍が却けた爲にその研究が挫折したといふのであるが、それも模型であつて、實際にライト兄弟の如く人を乘せて飛翔したのではない。

〔政權の存在が云々〕　ここは戰國時代とか、武家時代とか、政治上の權力者に變動があり、爲に民衆は一貫した方針によつて獨創力を生かすべく仕向けられなかつたことをいふ。

〔家族に固定す〕　即ち職業の世襲の爲、各人が各々好むことに入ることが出來なかつたことをいふ。

〔分析を主とす〕　所謂西洋流の考へ方である。即ち複合によつて構成せられた事物を、各箇の根元に分ち解くことを主としてゐるのである。

〔綜合を主とす〕　所謂東洋流の考へ方である。事物を箇々別々に判斷することなく、大綱をぐつと摑んで、大まかな性情を直觀すること。

〔卓見〕　すぐれたよい意見、みかた。

鑑賞批評　近く三百年の鎖國の歷史を有する我が國が、一朝開國に決して諸外國と交を結んでより、僅かに數十年を出でずして、忽ち水準以上に頭角をあらはし、文明的に先進してゐた諸外國に伍するに至つたことは、一つの大きな驚異であらねばならない。かくも偉大な成功をかち得たのは、畢竟するに日本人の模倣性の特殊な發現であると結論づけるものもある。これに對して、その非を述べ、寧ろ日本人は獨創力に富む國民であることを論じ、その例證を擧げて、眞の偉大性は日本人の獨創力にあり、而して今日の文化はこの獨創力の然らしむるところであることを强調したのが卽ち本課の文章であるが、本課の文をたゞ表面的に見る時は、單なる自大思想、若しくは排外思想の羅列としか感じられないであらう。だが眞に內面的に味讀すれば作者が本文中で力說してゐるのは外來文化に對する心構と、我が民族の歷史的檢討であることに氣付くに至らう。實際我が民族の歷史を檢討

することは、我が民族の思想、風俗、習慣道德、宗教の眞諦を自覺せしめ、外來文化の誤らざる理解は、我が民族本來の文化を更に研磨し、精練することとなり、採長補短の實を擧げ得ることとなる。從つてそこに日本民族の輝かしい將來が建設されるのは當然至極のことでなければならない。作者が、この歷史的檢討と、外來文化に接する心構とを力說し、これに大部分の紙數を費してゐることも決して無理はない。よくこの意を體して、十分にこれを生徒に理解させるやうにしたい。

六　萬葉集の歌

【扱方】萬葉集から、比較的平易で、しかも代表的なもので、古來から愛誦せられた歌數首を抜萃した。萬葉集は、近江朝、奈良朝、若しくはそれ以前の時代の上下の人々によつて詠まれたもので、我が國最古の歌集であることはいふまでもない。集中の歌の悉くが眞率な思想感情の發露で、長い年月を經た現在の我々の胸にも、その感情がひた〳〵と染みて來るところに、この歌集の不滅の生命がある。本課は集中のほんの一斑に過ぎないが、ゆつくり味ははせて、この我等の祖先の、素朴な感激と、純眞な情感とに浸らせたい。まづ語句を解釋し、全歌の大意を說き、その後は舌頭に千轉させる程度に讀誦させて、萬葉調とか、その思想、感情などをおのづからに悟らしめるやうにされたい。尙、各歌の批評は語釋中にしておいたから、鑑賞批評の項は省いておく。

【教授】

語釋

〔萬葉集〕「これを大づかみにいへば、萬葉集は、今より千數百年以前に、我々の祖先が懷いてゐた思想、感情の極めて直接的な現れである。上は天皇より、下は下賤の一村娘に到るまで、かく感じ、かく思想し、かく歌ひ、かく歎いた、その時そのまゝが萬葉集二十卷の裡に籠り、そこに千數百人の民族が、聲となり、幻影となつて今もなほ生息してゐるのである。これを詳しくいふならば、上は第十六代仁德天皇の頃（今より千六百年前）より第四十七代淳仁天皇の天平寶字三年正月一日（今より千五百五十七年前）まで、ざつと四百四十六年間程の歌、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合せて四千四百九十六首を收め、卷は二十に分たれてゐる。」（尾山篤二郎氏著―萬葉集物語―）が、第三十四代舒明天皇以前の物は極めて少い。舒明以後のものを三期に分ければ舒明より第四十代天武に至る約五十年間が前期であつて、主として明日香地方に朝廷のあつた時代である。それから第四十一代持統、第四十二代文武兩帝約二十年間が中期であつて、主として藤原に朝廷のあつた時代であり、萬葉集としては、歌の最も頂上に到達した時であ

る。それから以後は奈良朝といはれる時代になるのであつて、第四十三代元明より淳仁に至る約五十年が後期になるのである。第一期には未だ特別な歌人といはれる人が出て居らず、第二期に入つて人麻呂、赤人の如き代表的歌人が出て居り、第三期には山上憶良、大伴家持などの代表的歌人が出てゐるが、この期の代表的歌人は、いづれも人麻呂や赤人に比すべき歌人ではなく、却つて無名の作家、たとへば、關東から西陲の守備に遣された防人などの歌に生き〳〵したものが見えて居り、狹野茅上娘子の始き一少女の歌に痛切な叫が聞かれてゐるといふ有樣である。」（島木赤彥氏著―萬葉集の鑑賞及び其批評）

〔吉野宮〕所謂花の吉野山ではなく、六田から二里半許吉野川を遡つた中莊村大字宮瀧の地。應神天皇の朝に始めて離宮が置かれ、雄略天皇も行幸あり、その後齊明、天武、持統、文武、元正、聖武の諸天皇の行幸があつた。本歌は持統天皇が行幸された時、駕に從つた柿本人麻呂の獻つた歌である。

〔柿本人麻呂〕大和の人、近江の人、石見の人の三說があるが、石見の人といふのが、最も普通である。持統、文武兩朝の間の人で、持統天皇の初年頃から、文武天皇の末年頃まで、歌人として活動した。餘り身分の高い人でなかつたらしく、詳細な傳記は不明である。最初皇太子草壁皇子の舍人を務め、次に高市皇子、輕ノ皇子、長ノ皇子などの舍人をしてゐた。後近江の縣屬となり、また前後二回石見の地方官廳に勤務し、奈良に遷都となる以前、石見國に班田使となつて行き、そこで命を終つたらしい。官位は六位以下であつた。

〔やすみしゝ〕大君の枕詞。契沖は八方を知ろしめす君といひかけたので、ヤスミシラスのラを略したものといふ。次田氏は「やすみ」は安見の字義の通りで（安は形容詞の語辭で、見といふ體言を修飾してゐる）「しし」は佐變の語尾「せ」に敬語法の副語尾の「す」がついたもので、ヤスミセス（神さびせす、旅宿りせすの類）といふのが元來の形である。それがミの母音イの同化作用によつてセがシとなつて、ヤスミシシとなつたのであると思ふ（萬葉集新講）といつてゐる。

〔わご大君〕我が大君、我等の天皇。

〔神ながら〕天皇は現つ神であるからといふ意。ナガラのナはノと同意の助詞、カラは故といふ意の副詞。

〔神さびせす〕　神らしくふるまひ給ふとてといふ意。「さぶ」は專らそれらしい振舞をする意の接尾語。「せす」は「爲」といふ動詞に敬語の助動詞「す」の添うたもの。この句は、天皇が神としての行動を遊ばすといふので、下の「高殿を高知りまして云々」の句を起す前提である。

〔芳野川〕　和歌山縣紀の川の上流で、奈良縣東南部、三重縣境に近い大臺ケ原邊から發し、西北流し、吉野山の北麓を流れて、西流し、紀の川に注ぐ。

〔たぎつ河內〕　水が岩に激して急湍となつてゐる河內、卽ち吉野宮の風景をいつたのである。「河內」は川が曲折してゐて、三面水にかこまれた地をいふ。

〔高殿を高知りまして〕　高殿を宮居としてお住みになさいまして。「高知る」の「高」は高殿といつたから、調を整へる爲に附けたもので、「知る」とのみ見てよい。「知る」は領する意。卽ち、こゝは皇居としてお住ひになる意である。

〔國見〕　普通民情視察のために、山上から國土を視ることをいふが、又單に見晴らして、樂しむことをもいふ。こゝは後の場合である。

〔たゝなつく〕　眞淵の說によると、疊なはりつく山といふ意で、卽ち山が重なり合つてゐる形容、下の「青垣山」の枕詞となつてゐる。

〔青垣山〕　青い垣をめぐらしたやうな山脈のこと。

〔山神〕　山を掌る神、卽ち大山津見神をいふ。

〔奉る貢〕　「奉る」は獻る、祭るなどいふ意味から轉じては、動詞の下につく敬語の助動詞ともなる。こゝは獻る意味に用ひられてゐる。が、下の句の「仕へ奉る」の「奉る」は助動詞である。「貢」は御供給の意で、「つぎ」の敬語。特に調、卽ち稻穀以外の物品の貢納をいふ。但し、こゝは、山神が天皇に供する物品をいつてゐる。

〔春べ〕　「べ」は接尾語で、別に意味はない。

〔花かざし持ち〕　山上に花の咲くことをいつたのであるが、恰も山の神がそれを天皇に捧げ奉つてゐるやうに見なしたのである。

〔ゆふ川〕　「遊副川」と宛てゝある。吉野川の上流の古名であらう。

〔大御食〕　「大御」は敬語の接頭語。「食」は食物の古語。「大御食に」は御食の御料としてといふ意。

〔上つ瀨〕　上方の瀨。「つ」は「の」と同意の助詞。「天つ風」、「沖つ波」等。

〔鵜川をたて〕　これに二說ある。一は鵜川とは鵜に魚をとらせる事で、その鵜川をする人を立たせることを「たて」といつたのであるとする說、一は「鵜川」は同樣であるが、「たて」は立たせる事でなく、催すの意である。「たつ」といふのは四意あり、一、出で立つ意、二、人を立たせる意、三、物を据ゑる意、四、催す意の四つで、この第四番目が、この場合に當たるといふ。次田氏は、「据ゑる」の意にとり、鵜漁の出來る川を備へ設ける意に解したら、穩當であらうと思ふ、といつてゐる。

〔小網さし渡し〕　「小網」は和名抄に「佐天、網如二簀形一狹レ後廣レ前者也」とある。現在でも手網のことをサデといつてゐる地方がある。こゝの小網をさし渡して魚を捕るのは、宮仕の人がする事であるけれども、それを川の神が仕へ奉るといつたのである。

〔山川もよりて仕ふる云々〕　かくの如く山の神も川の神も歸依し奉つて、大宮人と共にお仕へ申上げる貴い神の御代であるといふので、初めに天皇を現つ神としたゝへてゐるから、結びをそれと照應させて、げに神の御代であると歌ひ收めたのである。一首の解を左に。

わが大君は現つ御神であるから、神のわざをあそばさうとして、吉野川の水の激して流れてゐる景色の佳い河內に、高殿高くお構へになつて、その高殿にお登りになつて國見を遊ばすと、重なり合つてゐる四方の、青い山のその山の神が獻る物として、春は美しい花を插頭して捧げ奉り、秋になると美しい紅葉を插頭して奉る。又ゆふ川の神も御食の料にさし上げようとして、上の方の瀨に鵜川を設け、下の瀨には小網をさし渡し、山の神も川の神も御威光になびいてお仕へ申上げる、げに神の御代であることだ

——山川の神までが、依りなびき奉つてお仕へ申上げてゐることを叙べて、御稜威の畏こさをたゝへたのである。（次田氏譯）

〔反歌〕　カヘシウタ、ミジカウタ、タンカ、ハンカなど讀む。元來長歌は漢詩の一體の賦に擬したもので、反歌は賦の一篇の總括を述べた反辭に擬したものに相違ないから、音でハンカと讀むべきであらう。反歌は反辭と同じく、長歌の內容を總括したり、或は長歌に

詠みもらしたことを歌つたものである。

〔山川も云々〕　山川の神も歸依して仕へ奉るわが大君は、景色のよい河内に、貴くも現つ神として、舟をお浮べになつてゐる、まことに貴いことであるの意。（次田氏譯）尙この歌は卷一に見え、長歌は二首、反歌二首の後のものを擧げたのである。

〔山部赤人（やまべのあかひと）〕　奈良時代の歌人。柿本人麿と相並んで、歌聖と稱せられる。傳記は詳かではないが、人麿よりは少しく後れて、聖武天皇神龜年間をその全盛時代としてゐる。屢々聖駕に陪して近畿の名勝を探り、西の方遠く道後の溫泉に浴し、東は富士山の秀容を仰ぎ、至る所にその吟詠を遺してゐる。「天平八年幸二于吉野宮一應レ詔作歌」を最後として、その以後の作は見えない。その歌は簡勁にして雅麗、最も短歌をよくし、殊に叙景の詠に體を得てゐる。

〔天地（あめつち）のわかれし時ゆ〕　天と地と始めて分れた開闢の時から。

〔かんさびて〕　かうごうしくてといふ意。

〔天の原ふりさけ見れば〕　空に仰ぎ見れば。

〔渡る日〕　大空を渡る日。太陽。

〔かげもかくろひ〕　日の光もかくれて。「かげ」は「ひかげ」卽ち光。「かくろひ」は「かくり」の延言で、繼續的の意味を表はす語形であるから、この句の意味は、日の光が富士の大きな姿に遮られて、どつと隱れてしまふといふ意になる。

〔い行きはゞかり〕　行きかねてゐるの意。卽ち、雲も、山の尊嚴を犯さぬやうに近づきかねて、中天に遠ざかつてかゝつてゐること。「い」は接頭語。

〔時じく〕　非時、若しくは不時の字を訓ませてゐる。何時といふ定まりもなくの意。

〔語りつぎ言ひつぎ行かん〕　この句を、代匠記には「將來も此の山の事は言ひつゞけんとなり」といひ、萬葉考には「吾が行く道の先々に語りつぎ云ひつぎなんと云ふなり」といひ、萬葉集古義には「末の代にも未だ見ぬ人にも語り傳へ、言ひ繼ぎゆかんとなり」といつてゐる。代匠記の說に對して、萬葉集新考に於ては、永久不滅の山を後の世に語り繼ぐのは不理合であるから、同時の人の未だ見ぬ人に語りつぐといふ意に解すべきであるといつてゐる。次に一首の大意をのべておく。

天と地と始めて分れた時から、神々しく高く貴い姿をして、屹立してゐる駿河にある富士の高嶺を、大空に仰いで見ると、空を行く日の光も山に隱れてしまひ、夜照る月の光も山のために見えなくなる。又白雲さへも山に近づきかねて中天にかゝり、頂上には時の見さかひもなく、雪が眞白に降つてゐる。この崇高なる富士の高嶺のさまを、未だ見ない人に普く語り傳へたいものである。——天地開闢の時以來と歌ひ起して、先づ時間的に莊重な感を與へ、「渡る日の」以下の八句で、空間的に姿の高く且つ大きいことを述べ、終りの三句で人々に普く語り傳へようといつて結んである。結構修辭共に巧みで、思想が頗る崇高であつて、叙景詩人としての赤人の手腕を示した作である。——次田氏譯

〔田子の浦ゆ云々〕　「うち出でて」のうちは接頭語。この「田子の浦ゆうち出でて見れば」の句に對して、「打出て田兒の浦より見れば」とか、「田兒の浦より東へうち出て見れば」とか、「田兒の浦より沖の方へ」とかいろ〳〵いはれてゐるが、「ゆ」を「に」の意と見て、只田子の浦に出て見ればといふ風に見るのがよい。一首の意は、田子の浦に出て見ると、青空にそびえてゐる富士の高嶺に、雪が眞白に降りつもつてゐるのが見える。——契沖が古今の絕唱と歎稱した歌である。兎に角、富士を詠じた多くの歌は、これほど大きく自然に歌はれてゐない。仰ぎ見た時の感じが素朴に表はされてゐるので、無限の味はひがあるのである。初めの字餘りの悠々迫らざる口調が頗るよい。——次田氏。

尙この歌は卷三に見える。

〔惑情（わくじやう）を反せしむ〕　まどひあやまつた氣持を、正常に反させるの意。この詞書の次に、「或有レ人知レ敬二父母一、忘二於侍養一、不レ顧二妻子一、輕二於脫履一、自稱二長俗先生一、意氣雖レ揚二青雲之上一、身體猶在二塵俗之中一、未レ驗二修行得道之聖一、蓋是亡二命山澤一之民、所以（ソレユエ）指二示三綱一更開二五敎一、遺（オクル）レ之以レ歌、令レ反二其惑一、歌曰」と記してゐる。以て、感情の如何を察知出來ると思ふ。

〔山上憶良（やまのうへのおくら）〕　大寶元年遣唐小錄となり、三年粟田眞人に隨行して入唐し、慶雲元年七月歸朝した。聖武天皇の朝、筑前守に任じ、天平五年六月歿、年七十四。歌林類聚の著がある。叙事的傾向ある長歌を作るのが特徴とされ、その作中人生の無常を詠じ、人倫の道を說

いたものが少くない。

〔めぐし〕「めぐむ」と同じ系統の形容詞で、いとほしといふ意。

〔うつくし〕「いつくし」と同じで、かはゆしの意。

〔のがろえぬ〕こゝから「友垣の、こと問ひかはす」までは、拾穗本にあるので、當然かうした句がなくてはならぬ所であるが、果して原文であるか、後人の補つたものがわからない。「のがろえぬ」はのがれる事の出來ない。

〔はらからうから〕兄弟親族。同じ親の胎内から出た兄弟、血緣の人の意。

〔友垣（ともがき）〕ともだち。交を結ぶを垣を結ぶにたとへていふ。

〔こと問ひかはす〕互に訪ねあふ。

〔かくぞことわり〕このやうなのが自然の道理である。

〔もち鳥〕鶫にかゝつた鳥。「かゝらはし」の枕詞である。

〔かゝらはしもよ〕「かゝらはし」といふ形容詞に、感動の助詞「も」「よ」をつけたのである。「かゝらはし」は拘泥或は系累の意で、とかく足手まとひになるものだとの意。

〔行方知らねば〕さらばといつて、人間はこの係累の多い世の中を振りきつて、行くべき所もないからの意。

〔うけぐつ〕穿ち破れた沓、卽ち穿き古るしの沓。穴のあくことを古く「うぐ」といつた。

〔ぬぎつる〕「ぬぎうつる」の約であらう。「棄つ」の古語を「うつ」といつたから、これは、ぬき棄てるといふ意となる。

〔ふみぬぎて〕踏み脫いで。

〔行くちふ人は〕行くといふ人は。「ちふ」は「といふ」の約まつたもの。

〔なりでし人〕生まれ出た人。

〔汝（な）が名のらさね〕あなたの名を仰つしやい。「のら」は告げるといふ語の敬語で、「ね」は願望の意の助詞。

〔天（あめ）へ行かば〕天に昇るならば。

〔地ならば云々〕土地に住んでゐる以上は、大君がいらつしやるから、自分の思ふまゝにはならぬといふ意。

〔天雲（あまぐも）のむかふす極み〕遠い所にある雲が、遙かに見やると、こちらに向つて伏してゐるやうに見える、その果て。祈年祭の祝詞に、「皇神（すめがみ）の見霽（みはる）しまします四方の國は天の壁立（かきた）つ極み、國の退立（そきた）つ限り、青雲の靄（たなび）く極み、白雲の墜坐向伏（おりゐむかぶ）す限り云々」とあるのによつたものである。

〔谷ぐくのさわたる極み〕「谷ぐく」はひきがへる（蟾蜍）のこと。「さわたる」の「さ」は接頭語。ひきがへるが行く土地の果てまでといふので、如何に狹い谷の隅々までもといふ意。これも、祈年祭の祝詞に「皇神の敷きます島の八十島は、谷蟆（たにぐく）のさわたる極み」とあるによつたものである。

〔きこしをす〕こゝは君臨するといふ意。「きこしめす」と同じ意味である。天下を治め給ふといふこと。

〔國のまほらぞ〕「ま」は接頭語、「ら」は接尾語。「ほ」は秀の意で、著しく目に立つものを指す言葉で、こゝは、人の住むに適した美しい國土といふやうな意味に用ひたものである。

〔かにかくに〕角に角に。

〔しかにはあらじか〕さうではあるまいといふ意を問ひかけの形でいつたのである。一首の大意は、父母を見ると尊い心が起り、妻子を見るといとしく可愛ゆい情が起る。（人爲を以てのがれることの出來ぬ兄弟親族の情、老幼の間がらの親愛、友達同志の交際等、すべて人性の自然である。）世の中はかうあるのが道理である。鶫にかゝつた鳥のやうに、とかくそれらが手足纏ひになるものである。さうかといつて、人間はこの煩はしい世の中を振り切つて、行くべき所はない筈であるのに、恰も弊履を腹ぎ棄てるやうに、此等の者を振り棄てて行くといふ人は、岩か木からでも生れ出た人であるのか、その名を名乘つて見よ。若し天へでも昇るなら、それはお前の思ふまゝになるであらう。然し地上に居る以上は、此の國土には大君がましますから、さう勝手な振舞はできない。この日月の照してゐる天が下は、雲が遙か彼方の空に垂れて見えるその遠き果てまでも、又、蝦蟇が歩いて行く隅々までも、殘る處なく、大君が君臨し給ふ所の結構な國土であるのだ。兎にも角にも、汝の欲するまゝに行つて、それでよいものか、さうではあるまい。——奈良朝の當時、佛教や儒教の影響を受けて、極端な外來思想の心醉者

を生じた……この長歌は、さういふ時代に、老莊の學說などにかぶれて、世を拗ねて俗界を超脫することを高尙だとし、その結果現實生活を卑しめ、人倫常道をさへ顧みない者が多かつたのを慨歎して、彼等に三綱五常を示して誤れる外來思想から目覺めしめ、本心に立ち返らしめようとしたのである。時代の思想が窺はれ、作者が愛國詩人であつたことも知られて、極めて興味ある歌である。（次田氏譯評）

〔ひさかたの云々〕「ひさかた」（久方の）は天の枕詞。「天路」は天へ昇る道。「なほ〳〵に」はすなほに、又は世間なみに。「にほ」は「ね」と同じく、希求の意の助詞。一首の意は、天へ昇つたら思ふまゝに振舞へるけれども、その天へ昇る路は遠いから、やはり世間並に家に歸つて、家業をはげむがよい。（次田氏譯）

〔額田王（ぬかだのおほきみ）〕額田女王、額田姫ともいふ。第四十代天武天皇（天智天皇の同母弟）の妃、大和國平郡郡額田鄕に住して、その居地を名とせられた。日本書紀に「天武天皇初め鏡王の女額田姫王を聚りて十市皇女を生む」とある。十市皇女は則ち弘文天皇の妃である。次の歌を初め萬葉集所收のその歌を見ると、天智天皇にも召されたしい。萬葉集中の女流歌人として傑れた歌が多い。この作は、詞書によつて見ると、春の色々の花と秋の美しい紅葉と、何れが勝つてゐるかを群臣に御下問のあつた時、額田女王が答へられた歌である。

〔冬ごもり〕春の枕詞。生物はすべて冬季は籠つてゐて、春になると張り出るから、ハルに云ひかけたのである。

〔春さり來れば〕春になると。「さりくれば」は「しありくれば」の約音で、「し」は指示する意の助詞。

〔鳥も來鳴きぬ〕「ぬ」は完了の助動詞であるが、こゝは調子の上から輕く添へたまでである。鳥も來て鳴く。

〔花もさけれど〕花も咲くけれども。

〔山を茂（し）み〕山が茂つてゐる故に。

〔秋山の〕この句の上に、「これに反して」といふ意味を補つて見ると、明白になる。

〔黃葉〕紅葉した葉。

〔しぬぶ〕こゝでは賞美する意。

〔置きてぞ歎く〕手にとるに忍びずして、枝においたまゝ賞する。

〔そこし〕それが。「し」は指示の意の助詞。

〔秋山われは〕秋山を私は面白いと思ふといふ意。一章の大意は、春になると、これまで鳴かなかつた鳥も鳴き出し、含んでゐた花も咲きはするが、春は兎角木が繁つてゐるので、山に登つて花を手折ることもせず又、草が深いので、花を手に取つても見ない。然るに秋の山の木々の葉を見る時には美しい紅葉を手にしては賞し、青い葉は枝ながら眺めて美しいものだと思ふ。さういふわけだから、私は秋山が勝れてゐると思ふのである。——假案抄に此の歌を評して、額田王は婦人の身であるから、春山に花は咲くけれども、草木が茂つてゐるので、分け入つて見る事も、手折る事も出來ないから、春山に對しては恨が多い意を叙べ、次で秋山は分け入るに易く、手折り易いから、秋山に心が引かれる事を叙べたのである。併し、秋山とても絶對に恨がないわけではなく、秋山の紅葉の中にもなほ染めあへぬ枝もあるから、手折らずして差置く恨があるが、春山に較べれば、さまでの恨ではないから、秋山を春山よりも勝るものと判じたのが、面白い所であると言つてゐる。是は「青きをばおきてぞなげく」の解釋を異にしてゐるのであるが、その作者の心に深く立ち入つて考察した批評の態度は參考になるから、委にその概要を揭げたのである。春秋の優劣を鬪はせることは、古くから支那に行はれた遊であつて、それを模倣してわが國にも行はれたのであるが、物にあらはれたのはこの歌が最初である。これより後には、花と紅葉、若しくは鶯と郭公などの優劣を競はせた例が見えてゐる。貫之の歌にも「春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつる心は」（拾遺集）といふのがある。（次田氏）尙この歌は卷一に見える。

〔太宰少貳（だざいのせうに）〕太宰府の次官。大貳の下に位する。

〔小野老（をののおゆ）〕頭註參照。

〔あをによし云々〕「あをによし」は奈良の枕詞。この「あをに」に就いては、種々の說がある。從來重きを置かれてゐる說は、昔奈良から繪具の青丹を產したので、產物を以て枕詞としたのであるといふのである。「にほふ」は、香るの意でなく、照り映える意である。一首の大意は、奈良の都は咲き盛つてゐる花のやうに今や全盛の時である。——平城京の極盛期に會つて、

當代を諷歌した名高い作である。平明な歌であるが、溢れるばかりの滿足と喜悅が一首に流れてゐる。（次田氏）――この歌は卷三に見える。

〔大伴宿奈麻呂（おほとものすくなまろ）〕　大伴安麿の第三子で、旅人とは異母兄弟である。傳未詳。

〔うちひさす云々〕　「うちひさす」は宮の枕詞。代匠記に、宮殿の構造は高いから、內に日がさす宮といひつゞけたのだといひ、冠辭考には、麗しき日のさす宮と續けたのだといつてゐる。後說がよい。「宮に行く子」は宮仕に出る乙女。續紀に「養老三年備後守正五位下管二安藝周防一國一」とあるから、その頃、その國から女子を奉つた時の歌であらうと、萬葉考でいつてゐる。「まかなしみ」の「ま」は接頭語、「かなし」はいとし、かはゆしの意、「み」は「……さに」の意を添へる接尾語。一首の大意は、宮仕に行くこの乙女がかはいいので、國に留めたくはあるが、留め置くことは苦しい。さうかといつて、都へやるにはやられぬ。どうしたらよいか迷ふことである。――萬葉考にある通り、この女は地方の郡司か何かの娘であつて、この度采女となつて、宮仕に行くことになつたのであらう。そしてこの少女は、かねて作者に愛せられてゐたのであらう。（次田氏）卷四に載せられてある。

〔筑紫の娘子〕　筑紫のある乙女が、大和の方へ行く人に贈つた歌である。

〔家思ふと云々〕　「家思ふと」は家を思ふとての意。「こゝろ進むな」の「進む」は「すさむ」と同じで、家鄕を慕ふあまりに、波風を恐れず、強ひて船を乘り出すやうな事をするなとの意、「風守り」は順風を待ち伺つて、「よくして」は、上に續けて、よく風待ちをしての意。他に說もあり、御無事に、とか、危險のないやうによく見計らつて、とかいふが、前述のやうに解した方がよい。「いませ」は行き給へ。一首の大意は、家を慕ふあまりに、冒險なことをなさるな、天候をよく伺つていらつしやい。あの波風の荒い海のことでございますから。――不安な波路を凌いで歸る、都の人を送る鄙の乙女の細やかな心遣ひが、可憐に歌はれてゐる。（次田氏）この歌も卷三に見える。

〔秋風はすゞしくなりぬ云々〕　一首の大意は、秋風が涼しく吹きわたるやうになつた。人々よ、馬を並べて野に遊びに行かうではないか、美しい萩の花を見に。――馬を並べて萩を見に行くといふのが、如何にも奈良朝らしい。（次田氏）尙この歌は、卷十に見え、同じく萩を詠んだ四首の中の一である。他の三首も擧げておく。

この夕べ秋風吹きぬ白露にあらそふ萩の明日咲かん見ん

我が宿の萩のうれ長し秋風の吹きなん時に咲かんと思ひて

人皆は萩を秋といふよしわれは尾花がうれを秋とはいはん

參考

各歌を萬葉假名であげておく。

幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麿作歌

安見知之、吾大王、神長柄、神佐備世須登、芳野川、多藝津河內爾、高殿乎、高知座而、上立、國見乎爲波、疊有、青垣山、山神乃、奉御調等、春部者、花挿頭持、秋立者、黃葉頭刺理、遊副川之、神母、大御食爾、仕奉等、上瀨爾、鵜川乎立、下瀨爾、小網刺渡、山川母、依氏奉流、神乃御代鴨。

反歌

山川毛、因而奉流、神長柄、多藝津河內爾、船出爲加母。

山部宿禰赤人望二不盡山一歌一首並短歌

天地之、分時從、神佐備而、高貴寸、駿河有、布士能高嶺乎、天原、振放見者、度日之、陰毛隱比、照月乃、光毛不見、白雲母、伊去波伐加利、時自久曾、雪者落家留、語告、言繼將往、不盡能高嶺者。

反歌

田兒之浦從、打出而見者、眞白衣、不盡能高嶺爾、雪者零家留。

令レ反二感情一歌一首並序

（序は本文語釋中に記した）

父母乎、美禮婆多布斗斯、妻子見禮婆、米具斯宇都久志、遁路得奴、兄弟親族、遁路得奴、老見幼見、朋友乃、言問交、余能奈迦波、加久叙許等和理、母智騰利乃、可可良波志母與、由久弊斯良禰婆、宇既具都遠、奴伎都流其等久、布美奴伎提、由久智布比等波、伊波紀欲利、奈利提志比等迦、奈何名能良佐禰、阿米弊由迦婆、奈何麻爾麻爾、都智奈良婆、大王伊麻周、許能提羅周、日月能斯多波、阿麻久毛能、牟迦夫周伎波美、

多爾具久能、佐和多流伎波美、企許斯遠周、久爾能麻保良叙、可爾迦久爾、保志伎麻爾麻爾、斯可爾波阿羅慈迦。

反歌

比佐迦多能、阿麻遅波等保斯、奈保奈保爾、伊弊爾可弊利提、奈利乎斯麻佐爾。

天皇詔二内大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時額田王以レ歌判レ之歌

冬木成、春去來者、不喧有之、鳥毛來鳴奴、不開有之、花毛佐家禮杼、山乎茂、入而毛不取、草深、執手母不見、秋山乃、木葉乎見而者、黄葉乎婆、取而曾思奴布、青乎婆、置而曾歎久、曾許之恨之、秋山吾者。

太宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹吉、寧樂乃京師者、唉花乃、薫如、今盛有。

大伴宿奈麿宿禰歌一首

打日指、宮爾行兒乎、眞悲見、留者苦、聽去者爲便無。

筑紫娘子贈二行旅一歌一首

思家登、情進莫、風候、好爲而伊麻世、荒其路。

詠レ花

秋風、冷成奴、馬並而、去來於野行奈、芽子花見爾。

○尚次に島木赤彦氏の文を借りて、萬葉集の一般鑑賞をのべておく。

萬葉集時代の人は、心が單純で、一途で、調子が大まかで、太くて強いところがあつたやうであります。それが宛らに歌に現れて居ります。單純一途であるから、原始的な強さと太さと持つて居り、子供の如き純粋さと自由さを持つて居ります。それがさま〴〵の相となつて生長して、あるものは、藝術の至上所と思はれる所にまで到達してゐるのでありますが、さやうな所に到達することが、原始的の素朴さや純粋さから離れることを意味してゐないのでありまして、その所が萬葉集の眞の力の生れる所であり、どの歌を見てもいかにも生き〳〵としてゐる所であらうと思ひます。今の世の藝術（歌に限りません）の力の弱さ、輕さ、甘さが、いかなる所に胚胎してゐるかを考へるものの參考にならうと思ひます。萬葉集の作者は平安朝以後の歌人の如く、歌を上品な遊戲品として取扱つて居りません。歌ふ所は、皆、必至已むを得ざる自己の衝迫に根ざして居ります。これは、萬葉人として當然の行き方でありまして、萬葉集のすべての歌の命は、一括して、ここにあるのだといひ得ると思ひま

す。これを內面からいへば、全心の集中であり、外面からいへば直接な表現であります。直接な表現でありますから、打てば鳴り、斬れば血が出るのでありまして、さやうな緊張した表現が、上代簡古な姿と相待つて、藝術として氣品を持してゐるのであります。全心集中から生れない歌は、生れない先から歌でありません。さういふ歌に限つて、表現がなまぬるくなり、間接なものになり安易輕薄なものになり、しまひには、詞の上の遊戲に陷つて、洒灑や虛假おどしの駢列に終ります。今の世の人は、生活精神が幾つにも分岐してゐますから、歌を讀む時になつても、素直に心の集中が出來ず、その割合に、世間氣の方が多く發達して居りまして、歌の氣品を餘計に低下させるやうであります。つまり、純粹な歌の心から惠まれない時代に我々は生息してゐるやうであります。それゆゑ、我々は自分では全心を集中させたつもりでも、案外力のない一人ずましのものであるのが實際のやうであります。さういふ我々でありますから、歌に入る時から、歌に果てる時まで、萬葉集に親しむことが結構でありまして、それは、ちやうど歌のお血脈を身につけてゐるやうなものであらうと思ひます。（歌道小見）

七　都がへり　紀貫之

（土佐日記）

扱方　假名日記文の最も古いものと稱せられる土佐日記の抜萃である。貫之が土佐守の任滿ちて、承平四年十二月二十一日國府を出發し、土佐國大津より舟出し、泊々を追うて、或は風波にさまたげられ、或は海賊におびやかされて、「苦しく心もとなく」また「いとわびし」いながらも、なほ海原の月を賞し、波白くうち寄せる巖の上に集る海鳥に心を寄せ、磯の松原の雨後の晴色に古人をしのんで、和泉の灘から難波の河尻に至り、難波堀江から淀川を溯り、翌年二月十六日夕京に歸るまでの船路の日記である。日記といつても實は紀行が主體となつてゐる點、平安朝文學に多い日記文學とは種類を異にしてをるし、伊勢物語、枕草子などのものを比較させてその特長を知らせ、紀行文としての鼻祖であるといふ點に文學史的價値を認めさせるべきである。そして日記と和歌との不即不離な關係に立つといふことが平安朝文學の共通した特長であるといふことも認めさせておきたい。本課はさうした問題を考察せしめるによい課であるが、さうした古典的常識ばかりでなく、内容は淡々とした叙述のうちに冗漫に流れず、一脈の哀愁を持つた詩篇となつてゐることに留意させ、あくまでそこを深く味讀させたいのである。古今の名文は内容樣式ともに秀でた點にあるからである。

教授

作者

紀貫之　キノツラユキ

平安朝初期の歌人。延喜五年、醍醐天皇の勅命により紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と古今集を撰したことは周知のことで、同集の代表歌人である。同六年二月御書所預となり累進して土佐守に任じ、良吏の聞えがあつた。承平四年、その任が滿ちて、京に歸る時に草した日記が、有名な土佐日記である。又、新撰和歌集、大井河行幸和歌序等の撰がある。天應八年三月、從四位下木工權頭に進み、同九年十二月歿、年七十餘歳と八十餘歳との兩説があるが、前説をとるべきであらう。明治三十七年その文學上の功勞を思し召され、從二位を贈られた。百人一首の「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香ににほひける」（古今集卷第一、春歌上）は人口に膾炙してゐる。

引用書

土佐日記――「土佐日記は醍醐天皇の延長八年に土佐守となつて、赴任した紀貫之が、朱雀天皇の承平四年に都へ歸る時の日記である。景樹の説によれば、貫之が七十三歳の頃の作である。首に『男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。』とあるが如く、未だ男性は漢文のみで記して假名文を用ひなかつた時である爲に、故意に女性として筆を執つた物である。その意味に於て、土佐日記は假名文の創始の上に力あるものであり、貫之の古今集序などとともに文學史的意義も高いのである。が、平安時代初期は物語、歌に於ても見得る如く、土佐日記にも快活な明るい色調が中心となつて居つて、失つた子をいたむ悲痛な心情をも、洒脱な稽滑的筆致でおほつてゐる感がある。」（國文學史總説）

語釋

○別　離

〔九日〕　承平四年正月九日。出立より十八日目である。前年十二月二十一日國府を出立して同日大津に至り、同二十六日まで同所に滯留して二十七日浦戸に、二十八日大湊に至り、大湊で承平五年の元日を迎へて、なほ八日まで滯留し、正月九日卽ち本課に採つた文の日に始めて那波の港に向けて出立したのである。滯留は人々の饗留又は風波等の爲である。九日の前日（八日の記事は「八日。さはることありて、なほおなじ所（大湊）なり。こよひ、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の『山のはにげて入れずもあらなん』といふ歌なんおぼゆる。若し海べにてよまましかば、『波たちさへて入れずもあらなん』とよみてましや。今この歌を思ひいでてある人のよめる。

照る月の流るゝみれば天の河いづる湊はうみにざりける。

とや。」

「つとめて」　早朝の意。「九日のつとめて」の「の」の字は土佐日記抄（季吟本）には無いが、定家本及び群書本には有る。意は「九日の朝早く」と續かねばならぬ。「つとめて」は朝早くの意ではあるが昨夜の事よりかけて言ふ詞であるから、ここも前夜は夜ふけまで樣々の事をして、さてその翌九日の早朝といふ意である。この日記の書樣が「何日。何々」といふ日次式になつてゐる

るもののうちで「九日のつとめて云々」の如き書様は、注意すべきであらう。

〔大湊（おほみなと）〕　土佐の長岡郡と香美郡との間の港であるが、今は不詳。

〔那波（なは）の泊（とまり）〕　那波は土佐の安藝郡にあり、今は奈半利村といふ。奈半利川の河口である。「泊」は舟の泊する所、湊に同じ。

〔おふ〕　追ふ。おひつく。及ぶ意で、ここは、或る地點に及び着かうと急ぐこと。

〔これかれ〕　誰も彼も。

〔國の境のうちは云々〕　國の境界の內はお互に見送らうと云つて、追つて來る人は多くあつたが、追々と去りつくしてしまつて、その中でも藤原言實云々といふ意。「國の境」は中村秋香の如く、「國の區域」と解することも出來るが、多くの說に從つて「國の境界」の意味に解しておく。「國」といふのは守部が「舟の直路」に「ココニ國ノサカヒト云ヘルハ、土佐一國ノ界ヲ云フニアラズ。「大湊紀行」ニ云フ『コハ長岡郡、國府一郡ノ內ナレバ、國ノ界ノ內トイヒ、東ハカガミノ郡ヘウツリテ、界ヲ異ニセレバ、カクハ云ヘルナリ』トアル如シ」と云ふやうに、長岡郡と香美郡との郡界をいふのである。

〔藤原言實〕　以下三人は傳不詳。國司の屬官であらう。

〔御館（みたち）〕　土佐日記の出立の日の記事に「或人あがたの四とせ五とせはてて、例の事ども、皆しをへて解由など取りて、住む館（たち）より出でて、船にのるべき所へわたるとある。」「住む館」即ち國府である。國府は「こふ」ともいひ、國司の常在して國務を執る廳。國司は中古以來諸國に配置して、地方の政務を執らしめた職名である。土佐國長岡郡日吉村に國府があつたといふから、そこであらう。今同郡に國府村がある。高知市に近い。

〔出で給ひし日〕　前述のやうに承平四年十二月二十一日である。敬語を用ひたのは、土佐日記は「をとこのすなる日記（にき）といふものを、女もしてみんとてすなり。」と冒頭にまづいつてゐるやうに、又所々「或人」といふ語が用ひてあるやうに、すべて第三人稱のやうな風に、自分を客觀して書いたものであるから、敬語を用ひたのである。

〔こゝかしこに追ひ來る〕　あとを慕つて、諸所の湊へ尋ねて來る。

〔志ある人〕　厚意ある人。自分に厚い志をもつてくれる人。篤志。

〔これより今は漕ぎはなれ云々〕　浦戸、大湊、那波と海岸に沿つて航海して來たが、こゝからはすつかり陸を離れて、遠く大海に乘出す意。

〔まに〳〵〕　まゝに。

〔舟の人も見えずなりぬ〕　假に「海のほとりに留る人」即ち見送る人となつて、「舟の人」即ち自分たちの姿が遠く距つたことをいつたのである。

〔岸にも云々〕　岸に留つた人も言ひたい事もあらう。又こちらにも思ふ事はあるが、今は是非もない。

〔かゝれど〕　かくあれどの略。かひなしとは思ふけれどの意。「かひなし」は詮なしと同じで、ここでは致し方なしの意。

〔おもひやるの歌〕　岸に見送る人々の事を思ひやる我が心は海を渡つて遙か後方の岸にとどくけれども、手紙をするべきすべがないから、彼の人々は知らずにをるであらうといふ意。「ふみ」は文と踏むとにかけてある。

〔宇多〕　香美郡の赤岡、岸本から手結崎の海岸にある。

〔いくそばく〕　幾十許。「いくばく」に同じ。その數の何本であるかを知らないの意。何本となく。

〔本（もと）ごとに〕　松の木の本をいふ。根の際のこと。

〔たへずして〕　實に興趣の深い景色であるといつて見てゐるだけでは、我慢が出來なくなつて。

〔舟人〕　舟に乘つてゐる或人。作者自身である。

〔見わたせばの歌〕　「うれ」は末の古言。梢のこと。木の末端をいふ。「どち」は達。思ふどち、友どちのどちで仲間のこと。「べらなり」は「べくあるなり」の約か。べきやうである、さうらしい樣子に見える意。古今集時代の語で貫之の好んで用ひた語法である。宇多の松原を見渡せば、松の梢ごとに鶴が棲んでゐるのは、その松を千年の友と思ひ賴んでゐるに相違ないやうである意。崇高な風色を詠んだもの。

〔とや〕　とかいふ歌なりの意。

〔所を見るに云々〕　實景よりは劣つてゐるの意。

〔かくあるを見つゝ〕　かやうな景色を見ながら。

〔楫取（かぢとり）の心にまかせつ〕　夜が更けて方角もわからな

いやうになつたので、やむなく天氣模樣のことは船頭の考に一任してしまつたの意。船頭は天氣をよく見るものとはいへ、任してしまふのは不安であるが、暗夜のことゆゑ、餘儀なく一任したといふのである。

〔男もならはぬは〕　男でも、かうした航海に馴れない者は。

〔まして女は〕　作者自身も亦、女のつもりで書いてゐる。

〔ふなぞこに頭をつきあてて〕　舟の底に小さくなつて俯伏してゐるさま。

〔音をのみぞ泣く〕　聲を立てて泣く意。

〔かく思へば〕　このやうに皆恐しく思つてゐるのに。

〔舟子〕　楫取が船頭であるのに對して、舟子はその部下である。

〔ふな歌〕　舟を漕ぐとてうたふ歌。櫂歌。漁歌。

〔思へらず〕　「思ひあらず」の約轉。「何とも思へらず」は何とも思はない、平氣である。

○海路

〔十六日〕　正月十六日。九日大湊を後にして那波の泊に向ひ、翌十日は同所に滯留。十一日に室津に至り、二十一日同所を出立した。十六日は室津滯留中の一日である。

〔同じ所〕　土佐國安藝郡室津。今、羽根村に屬してゐるといふ。前日十五日の記事は「十五日。けふ小豆粥にず。くちをしく、なほ日のあしければ、ゐざるほどにぞ、けふ二日あまり經ぬる。いたづらに日をおくれば、人々海をながめつゝぞある。女のわらはのいへる。

たてばたつゐれば又ゐる吹く風となみとはおもふどちにやあるらん

いふかひなき者のいへるには、いと似つかはし。」

〔たゞ〕　語を隔てて、下の「思ふを」にかゝる。

〔何時しか〕　いつか〳〵と待ち急ぐ意で、早くともいふ意。

〔深崎〕　室津の三四里東南にさし出た東方の岬で、俗に門崎といふ。今は津呂村に屬する。

〔或人〕　これも作者自身である。以下「或人」とあるはすべて貫之だと思へばよい。

〔霜だにもの歌〕　南海は暖く、霜さへ置かない方だと聞いてゐたが、波の中には雪が白く降つてゐること

であるよの意。波頭の白く立つさまを雪と見たのである。

〔二十餘り五日〕　前に引いた十五日の記事にも「けふ二十日あまり經ぬる。」の句が見える。諸所滯留のために空しく日の過ぎることを數くのである。

〔曉月夜〕　曉の月夜をいふ。

〔雲の上も、海の底も云々〕　空は海に映り、海は空を浸して、空も海も同じさまに見える意。有明月が澄みわたつて月光が海に銀粉を散らしてゐるさまを形容したのである。「海の底」は「雲の上」に對した語で、いづれもたゞ單に「海」「空」の意である。

〔うべも〕　むべと同義。げにも、成程。

〔昔のをのこ〕　唐の賈島を指す。

〔棹はうがつ云々〕　漁隱叢話に「引二今是堂手錄一云、高麗使過レ海有レ詩云、水鳥浮還沒、山雲斷復連。時賈島詐爲二稍人一、聯二下句一云、棹穿波底月、舡壓水中天。麗使嘉數久レ之、自レ此不二復言一レ詩。」と。舡は音コウ、ふね。「棹はうがつ波の上の月を云々」の意味は、波上に映つた月光を小竿はかき散らし、海に映じた空を舟は分けて進む意。

〔聞きさしに云々〕　聞きかじりに聞いたといふに同じ。ことさら「聞きさしに聞けるなり。」といつたのは漢詩などの事を云々するのは、女には不似合であるからに外ならない。

〔水底のの歌〕　水に月が映つて底に月があるやうである。その上に舟を浮かべて漕いで行けば、全く大空を漕ぐやうな心地になる。その折から、操る水竿の先にさはる物は恐らく彼の月に生えてゐるといふ桂の枝であらうといふ意。「上より」は「上を」といふのと同じやうであるが、「より」はその動作の起點を主として指示する意の助詞である。月の桂は月の中に生ふるといふ高さ五百丈の桂、この歌は勿論「棹穿波底月」の意を歌つたものである。

〔かげ見ればの歌〕　「かげ」は大空の影をいふ。波の底は大空の影が映つてゐるその上を漕いで行く我は、大空の中に獨りとり殘されたやうな孤獨感に襲はれ、實に寂しいといふ意。「ひさかた」は天にかけていふ枕詞。轉じて天空の語意に關係あるあめ、あま（雨、天、蜑）、月、雲、空、夜、星、光等に續け、又、天の都、天の鏡といふを略して、都、鏡などにもかける。「ひさ

かた」の語原については諸説あり、一定しない。

〔かへしてん〕 かへしませう。「てん」は未來に關して願ふ意をあらはす語。

〔かへる〕 室津の泊へ途中から引返したのである。

○都がへり

〔十一日〕 承平五年一月十一日。土佐の國府を立つたのは前年卽ち承平四年十二月二十一日で、大津（土佐國長岡郡）より船出し、泊々を追うて、大湊（長岡郡）に至り、ここで承平五年の元旦を迎へ、正月九日、大湊を後にして、那波（同國安藝郡）の港を經て、十一日に室津（同郡）に至り、次いで二十一日に室津を發し二箇所ばかりの泊に滯留した後、同三十日に和泉の灘に入り、又二箇所ばかりの泊に寄り、二月六日「みをつくしのもとよりいでて、難波の津をきて河尻に入」つた。そして七日より難波堀江を溯り、淀川に出で八日には鳥飼御牧に滯留、九日には宇土野に至り、十日は同所に留り、十一日山崎に向けて出立した。十日の記事は「さはることありてのぼらず。」とある。難波堀江は仁德天皇の穿たしめ給うた堀江で、今大阪市内を貫流する天滿川に當る。日本紀に天皇十一年宮北の郊野を掘つて南水（河內川）を引き西海に入るとある。當時高津宮の北郊は澤であつて霖雨にあへば河內川が氾濫してゐたので、この堀江を作つたのだといふ。後に淀川の末がこの堀江に通じ堀江川と稱する。物部守屋等排佛の徒が、嘗て佛像をこの堀江に投じたので有名である。

〔さしのぼるに〕 棹上るの義で、水が深いからけふは綱かけて曳くことを止めて棹をさして上つたのであらう。二月九日の記事には「心もとなきに明けぬから船をひきつゝのぼれども、川の水なければゐざりにのみぞゐざる。」といふのがある。

〔八幡の宮〕 石清水八幡宮。官幣大社。山城國綴喜郡八幡町なる男山の山上に鎭座する。祭神は品陀別命、息長帶姬命、比賣命の三座。男山八幡宮ともいふ。

〔山崎の橋〕 山崎は今の山城國乙訓郡大山崎村。橋は淀川に架し當時、宇治橋、勢多橋と併せて三大橋と稱した。聖武天皇神龜三年行基菩薩が造つたといふ。

〔相應寺〕 山崎の橋は東西に架つてゐたが、その西詰の南にあつて、權僧正壹演の開基であつたといふ。

〔とかく定むることあり〕 種々入京の支度などを彼

此と定めること。「定むること」は相談をいふ。

〔さゞれ浪の歌〕 「さゞれ浪」は、さゞ波、細波、樂波、小波とも書く。「あや」は色々の模樣あることで、「いと」「織る」の緣語。一首の意は、小波の打寄せる水の綾（波紋）に、岸の青柳の影を映じて、その細い枝の絲をもつて織物を織つてゐるやうに見えるといふ意。

〔十六日〕 十二日から十五日までの記事が省略してある。

「十二日。山崎にとまれり。

十三日。なほ山崎に。

十四日。雨ふる。けふ、車、京へとりにやる。

十五日。けふ車ゐてきたれり。舟のむづかしさに、舟より人の家にうつる。この人の家、よろこべるやうにてあるじしたり。このあるじの、またあるじのよきを見るに、うたておもほゆ。色々にかへりごとす。家の人のいでいり、にくげならず、ゐやゝかなり。」

〔京へのぼるついで云々〕 十五日の記事に見える通り、貫之は山崎から舟を棄てて車に乘つたのである。以下は車の上から見たもの。

〔たな〕 店。町の店。

〔小櫃〕 繪櫃のこと。藤の花や梅の花などの彩色繪のある飯櫃形の曲物で、昔、雛節供に飯を入れて女兒のもてあそび物とした。

〔まがりの法螺の形〕 米麥の粉を飴で和げて固め、法螺の形にねぢ曲げて油で揚げたもの。これ等は女の子供の好きさうな玩具や菓子に特別に貫之が目をとめたのは、土佐の國で失つた寵愛の女兒を懷ふからである。五年前、やはりこれ等のものを見つゝ京を下つた時には、女兒と一緒であつた。「かはらざりけり。」の一句に貫之の切な心情が籠つてゐることに注意を要する。九日の記事にも「都のちかづくをよろこびのぼる。かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、みな人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ子生めるものどもありあへる。みな人、舟のとまる所に、子をいだきつゝおりのぼりす。これを見て、昔の子の母（貫之の室）かなしきに堪へずして

なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくて來るが悲しき

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかゞあら

ん。かうやうのこと、歌このむとてあるにしもあらざるべし。もろこしもこゝも、思ふこと堪へぬ時のわざとか。」といふ文がある。「まがり」は環餅。米麥の粉を飴で和げて固めたもの。

〔賣る人の心云々〕　小楯の繪も、まがりの法螺の形も、すべて以前と變つたところはないけれども、それを賣る人の心は變つてゐるかどうかわからぬとの意。貫之の百人一首で有名な「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける」の歌を聯想させる。

〔鳥坂（しまさか）〕　乙訓郡塔寺の南にある。

〔あるじす〕　主人をする、卽ち饗應する。

〔必ずしもあるまじきわざ〕　饗應などは無用なことであるの意。

〔來る時〕　歸り來る時。

〔とかくありける〕　とやかくにもてなす。大變にもてなしてくれる。「人はとかくありける。」は人情は常にさうだ、利にのみつく人情のほどが見え透いてあさましい意。

〔これにもそれにも云々〕　それぞれ皆返禮をした。「かへりごと」は返事。

〔夜になして〕　夜になつてから。人目を避けて、ことさらに日を暮し、夜になつて入京しようといふのである。

〔急ぎしも〕　「し」は意を強める助詞。

〔桂川〕　山城を流れる川で、丹波桑田郡に發し、保津川となり、大井川となる。桂の渡から下流を桂川といふ。古くから禁河で、鮎を產する。紀伊郡で賀茂川を合せ、久世郡淀町で宇治川に合し淀川となる。

〔飛鳥川〕　大和國高市郡にある。稻淵山に發源し、飛鳥村を經て北流し、磯城郡に入り初瀨川に合する。淺い川であるが少し雨が降ると、すぐに水が增し淵瀨が變化するので、かはり易いことに譬へられ、古來多く歌などに詠まれてゐる。古今集卷十八、雜歌下に「題しらず。讀人しらず。」の歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀨となる」とある。

〔ひさかたの歌〕　一首の意は、月の中に生えてゐるといふ桂をその名としてゐる桂川のことであるから、淵瀨のかはらぬのみか、底に映つてゐる月影も昔のままであるといふ意。月影は變らないが、人の心も果して變らないであらうかとの餘意を含んでゐる。「あひたる」は「月に生ひたる」と「名に負（お）ひたる」と兩方の意味にかゝつてゐる。

〔天ぐものの歌〕　「天ぐものの」は天雲のやうに——の意で、「はるか」の枕詞と見てよい。「そでをひづ」は袖を浸すこと、濡らすこと。一首の意は、土佐の國から遙かに隔つた心持がしたこの桂川をかくも近く渡つてしまつたわいといふ意。これに月の桂を含ませたのである。「月の桂」は月中に生ふるといふ高さ五百丈の桂の木をいふ。

〔かつら川の歌〕　一首の意は、桂川は自分の心に通つて流れるわけでもないけれども、自分の心と同じ深さで流れるやうである。卽ち再び京に歸つて來たことを自分は心に深くうれしく思つて川を渡る、そして川も底深く流れてゐる、この兩者を併せて「おなじ深さ」といつたのである。「べらなり」は、「べくあるなり」の約か。べきやうである、さうらしい樣子に見えるの意で、古今時代の慣用語。

〔いふかひなく〕　いうて效ないこと。いうて詮ないこと。言葉にかゝらぬ。話にならぬ程甚だしい意。

〔こぼれ破る〕　崩壞、頽廢などの意。

〔家を預けたりつる人〕　留守を賴んで置いた人。

〔心も荒れたる〕　邸宅の荒れたのみならず、預けて置いた人の心も荒れた、卽ち情の疎遠になつたこと。

〔中垣（なかがき）〕　隣との境の垣をいふ。

〔のぞみて〕　先方から希望しての意。

〔されば〕　定家本、群書本に「さるは」とあるのがよい。「さるは」は、しかもその上、それだのにの意で相反した事實を肯定する接續詞である。ここは「いふかひなくてぞこぼれやぶれたる。」「荒れたるなりけり」「中垣……あづかれるなり」の三箇所をうけて「さるは」と接續させたのである。「されば」であると「のぞみてあづかれるなり」の一箇所のみをうけることになる。

〔たよりごと〕　土佐にゐた間も、幸便のあるごとに。

〔もの〕　金銀などをいふ。

〔今宵かゝることと云々〕　歸京の今宵だけでも掃除などして置くべきに、このさまは餘りにひどいと人々が大聲にいはうとするのを、おしとゞめて。

〔つらく〕　薄情、不親切なこと。ひどいこと。

〔志をばせん〕　自分の心の程を表して、贈物をしようの意。お禮だけはしよう。

〔池めいて〕 池らしく。もとは立派な池であつたが、今はたゞそれと知られるだけであるの意を含んでゐる。

〔水づける所〕 水の溜つてゐる所。

〔五年、六年〕 貫之が土佐にあつた間。

〔千年や過ぎにけん〕 千年も經つたのであらうか。千年の壽を保つ松が五六年のうちに枯れるといふことはあるまい。恐らく隣の人が伐つたのであらう。一方の枝はなくなつてゐる。

〔片枝〕 定家本の「かたへ」とあるのがよい。「かたへ」は半ば、一部分の意。數本あるうち一部分はなくなつてしまつたといふ意。

〔あはれとぞ〕 たゞ、あはれに悲しいことだと。

〔思ひ出でぬことなく云々〕 かく荒れはててゐるのを見るにつけて、色々の昔の事を思ひ出でこひしい中にも。

〔この家にうまれし女子も云々〕 承平四年十二月二十七日の記事に「京にて生れたりし女子、こゝ（土佐）にして俄にうせにしかば、この頃のいでたちいそぎをみれば、何事もえいはず。京へ歸るに、女子のなきのみぞ悲しみこふる。ある人々も堪へず。このあひだに、或人のかきて出せる歌

都へと思ふも物の悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

又或時には

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらととふぞ悲しかりける」

〔いかがは悲しき〕 いかばかり悲しきぞの意。

〔舟人も云々〕 舟人はこゝでは舟子の意でなく、同船した人々であらう。同船して來た人々は子供を抱いてうれしさうに騒いでゐる。「のゝしる」は聲高くいひ騒ぐこと。なほ「まがりの法螺の形」の項參照。

〔ひそかに〕 自分一人の悲しみであるから——。

〔心知れる人〕 自分の心中を察し、同情してくれる人。こゝは自分の妻であらう。

〔うまれしもの歌〕 一首の意はこの家で生れたが、歸つて來ない女の子があるのに、自分たち夫婦が歸つて來て、留守の間に生ひてある小松のあるのを見るのが、いかにも悲しいといふのである。小松で兒を聯想したのである。

〔なほあかずやあらん云々〕 一首では滿足出來ないで、又かうも詠んだといふ意。「かくなん」の下には「よめる」といふ語が略されてゐる。

〔みし人をの歌〕 「見し人は」なくなつた女子をいふ。「遠くかなしきわかれ」は他界に赴く別れ、卽ち死である。その子を、この松が千年も久しく榮えてゆくであらうやうに、末長く見ることであらうならば、遠く離れて、二度と會へない悲しい別れをしようか、さうした悲しいことはあるまいものをの意。

〔口惜しきこと〕 殘念な事。

〔えつくさず〕 書き盡すことが出來ない。

鑑賞批評 「扱方」にて指摘しておいたが、本課に漲る者は旅と亡娘へのやるせない追憶、——萬斛の哀愁を旅心でなぐさめてゐるといふ作者の心持には讀者をしてその哀情に浸らせる。文章そのものとしてはすでに定評のあるもの、特に觀察の鋭敏なこと、語法の簡潔なことは最も注意すべき點である。殊に語法の上から見ると、平安時代初期に、竹取物語、伊勢物語などとともに純粹の國文の創始期のものであるから、幼稚といへば幼稚でもあらうが、平安時代中期の源氏物語などに比して頗る簡樸で引締つた文章である。この點で注意もすべく、また一方その內容に於ても、「山崎の橋見ゆ。」といふあたりから以下の如き、作者の微妙な心境が手に取るやうに讀者の心に傳はつて來る。「京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。」といふ一句も、まことにしつくりと作者の心持を傳へるものである。最後のところ「え盡さず。」の次に「とまれかくまれ、疾く破りてん。」とあつて、それで、本文、並びに、土佐日記全文の結末となつてゐるから、ゆつくりと十分に、殘る隈なく鑑賞の眼を及して頂きたいものである。

參考 土佐日記の本文によつて貫之の旅程表を作つてみる。

第一日——第六日（承平四年十二月二十一日——二十六日）廿一日午後八時に住みなれた（延長八年赴任、滿四ケ年在任）長岡郡の國府を出發して、大津の船渡場に向つた。この間、二十六日まで送別宴やら何やらで日を費してゐる。

第七日（廿七日）大津から乘船、浦戸に向ひ、浦戸に泊る。

第八日（廿八日）浦戸出發。大湊に向ふ。

第九日——第十七日(廿九日—一月八日)大湊に泊る。
第十八日(九日)大湊出發、宇多の松原を過ぎる。(本課の「別離」にあたる)
第十九日(十日)那半に泊る。
第二十日(十一日)出發。室津へ向ふ。
第二十一日——第二十九日(十二日—二十日)室津に泊る。この間風浪荒く一行氣を揉む。(本課の「海路」にあたる)
第三十日——第三十七日(二十一日—二十八日)室津出發。この間阿波の海上に碇泊す。
第三十八日(二十九日)鳴戸に近い土佐の泊りに泊る。
第三十九日(三十日)夜半出發。阿波の水戸を渡り、和泉の灘に入る。
第四十日(二月一日)黒崎の松原、箱の浦を過ぎる。
第四十一日——第四十三日(二日—四日)碇泊。
第四十四日(五日)小津、石津、住吉を過ぎる。
第四十五日——第四十六日(六日—七日)難波の津に來り、河尻に入る。
第四十七日(八日)鳥養の御牧に着、碇泊。
第四十八日(九日)和田の泊、渚の院、宇土野に着、碇泊。
第四十九日(十日)碇泊。
第五十日——第五十三日(十一日—十四日)山崎に泊る。
第五十四日(十五日)上陸。
第五十五日(承平五年二月十六日)島坂を經て、桂川を渡り、入京。(本課の「都がへり」にあたる)

◇土佐日記と伊勢物語との比較論を藤岡作太郎博士の「國文學全史」から引く。

古今集序と土佐日記とを並べみよ。序は、文に抑揚頓挫あり、秩序整然、名將が三軍を率ゐて行進するが如くなれども、華美に過ぎ、語句の雕琢を主として、情熱に闕くところあるが如し。これを措いて日記に向へば、鰻鱺の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいふべからざる興趣のその中に存するをみる。これすなはち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を歎稱する所以なり。しかれども理路の整頓を喜び、行文の莊嚴を尚ぶ勅撰集の序と、一時の興に乘じて情感の動くに任する日記の文とを、同じ尺度を以て測らんとするは、測る者の過にあらずや。彼は珠玉を碎き金銀を切りて彩華炫燿たる三尊來迎の畫幅に

して、此は一抹の墨痕に雲煙の影を留むる、墨繪の卷物なり。彼は花の宴に錦を張りたる幕の陰より舞ひ出づる蘭陵王にして、此は曉暗く袂冷やかなる馬道に虫の音にまがふ朗詠なり。かくの如く風姿全く異なる二文を比較せんよりは、むしろ土佐日記を以て、語句の素樸に、記事の輕妙に、文脈の純粹なる國文たるにおいて相似たる伊勢物語と比較するの恰當なるに如かず。

人みな日記の素樸にして輕妙なるを賞す。さらばその一例を見よ。

二十三日、八木のやすのりといふ人あり。この人國に必らずしもといひつかふ者にもあらず、これぞ正しきやうにて馬の餞したる。守がらにやあらん、國人の常として今はとて見えざなるを、心あるものは耻ぢずになん來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

その文單簡なるとはいへ「しも」といひ、「ぞ」といひ「なん」といふ如き助辭多く、これを前に伊勢物語の章にあげたる竹取、伊勢の二例に比すれば、素樸輕妙の點において、遙かにかれらに劣れり。日記に歸京の折のことを記して曰く、

家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ敗れたる、家を預けたりつる人の心もあれたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。されば便ごとにものもたえず得させたる。こよひかゝることと聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。さて池めいてくぼまり水づけるところあり。ほとりに松もありき。五年・六年のうちに千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞ交れる。大かた皆あれにたれば、あはれとぞ人々いふ。

伊勢物語には、情人を訪へども在らず、過ぎにし春を懷ふことを記して曰く、

またの年の正月に、梅の花さかりなるに、去年を戀ひていきて、立ちて見、居て見、みれど去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

物語の文、簡短にして情趣纖綿、日記の長々しくかい列ね、あはれなるが如くにして、あはれならず、をかし

きが如くにしてをかしからざるとは、同日の談にあらず、また世人多く日記の滑稽を賞すれど、その實は記するところ「舟路なれど馬のはなむけす」、「潮海のほとりにてあされ合へり」、「一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」の類、徒らに言語の上の諧謔を弄するものにして、高尚なるをかしみは求むれども得べからず。素樸なりといひ、輕妙なりといへど、情熱の熾なるものなく、行筆の重くろしきを強ひて輕くせんとして、口調も諸持に荷ひ出し、うなり出せる感なきにあらず。

八　須磨の浦波

紫式部（源氏物語）

扱方　源氏物語は平安朝物語史の上でその發達の頂點を示すものであるばかりでなく、日本文學史上の金字塔である。「引用書」や「參考」に引いた說明を豫備として、源氏の史的價値や作品價値を知らせて、その白眉と稱せられるものは須磨明石の兩卷であるが、本課はそれから採つたのであるから、短章とはいへ、それによつて源氏の一班を知らせ得ることと思ふ。そして源氏は當時の貴族社會が如實に描寫せられてゐる點で、寫實小說であると同時に、かくあるべき人や、生活や、世界やが描かれてゐる點で理想小說である。といふことも一通りは說明しておかれたい。又既習の伊勢物語、竹取物語、土佐日記、枕草子、などの文學形態や描寫態度や題材などの比較をさせる事によつて、文學史的取扱ひにまで進めるべきであらう。そして源氏が如何に凡ゆる點に勝れてゐるか、我等の祖先、而もその女性が遺したものとしての誇りに注意を向けて、心ゆくばかりこの傑作に味はひ浸らせたいものである。

教授

作者

紫式部　ムラサキシキブ

生歿年は未詳であるが、大日本史の考によると天延三年（一六三五年）に生れて長元四年（一六九一年）五十七歳で歿したといはれてゐる。藤原冬嗣の六男良門五世の孫に當つてゐて、父は正五位下越後守（後、越前守）爲時で、曾祖父は堤中納言物語の作者であり、母は常陸介爲信の女であつた。彼は幼少より聰慧で、兄惟規（のぶのり）が史記を習ふのを傍で聽いてゐて先に覺えてしまつた、父は「この兒男ならましかば」と歎稱したといはれてゐる、同族の宣孝に嫁し大貳三位賢子と辨局との二女をあげたが、夫が早世したので、そのまゝ寡居生活に入り、上東門院（第六十六代一條天皇の中宮彰子（あきこ））に仕へ、才筆にまかせて書き綴つたのが五十四帖からなる源氏物語（出典の項參照）であつた。そして「日本紀の局」と稱せられたりしが、自分の生活を書いたものに紫式部日記及び紫式部集が傳はつてゐて、これ等をも參考することによつて、彼の文才や大作の源氏物語の作者としての人となり等が

知れる。彼の人物は謙遜家であつて、中宮に白氏文集や日本書紀などを進講したが、決して辭讓の態度をば捨てなかつた。藤原道長の挑みに對して、應じなかつたといふことは著名である。又、彼の人生觀は靜的、理智的であり、因果應報觀は當代人に泌みこんでゐるが、殊に强かつたらしい。又彼は和歌に長じ、梨壺五歌仙の一人であつて、小倉山百人一首に「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな」の歌が撰ばれてゐる。「紫式部」の名稱の中、式部は父か兄かの官名によつて附したといふ說は今日認容されてゐるが、紫といふ名は諸說あつて定らないが、要するにペンネームであつて、その實名は未詳である。それにして日本文學史上、いや世界文學史上特異な文學的價値を有する源氏物語の作者として、彼の名は永久不變である。

引用書

源氏物語——紫式部作。五十四卷。前半は桐壺卷より幻卷までで、源氏を中心とした華かな生活と戀との種々相を寫してゐる（源氏一歲より歿年の五十二歲まで）後年は匂宮卷より夢の浮橋卷までで、源氏の子薫を主とし匂宮を客とし、淋しい宇治に悲しい實を結んだ戀、大君中君、浮舟のことを寫してゐる。又「宇治十帖」ともいふ（浮舟出家に擱筆、薫二十八歲）。作者については一般に紫式部とされてある。式部は夫宣孝死別後の寂寥、人生に對する憂愁などが、作者の藝術家的感情を刺戟してこの大作をなしたと思はれる。で、長保三年春から寬弘三年冬まで（一六六一——一六六六年）の間に書いたらうと見られてゐる。題材については、準據說が鎌倉時代から起つたが、源氏物語の以前の古物語に題材を求めるもの、歷史上の事實や、梵漢の書に求めるもの、物のあはれを表現したものとして別にモデルを認めないものもあるが、手塚昇氏の藤原道長說は注意されてゐる。源氏物語の價値として文學史的には竹取物語式傳奇物語と、伊勢物語式歌物語とが合流して、寫實小說の性質を有する理想小說となつて展開し、遂に源氏物語に到つて、寫實的理想小說となつた點にある。藝術品としては、その構想が雄大であること、自然及び人生の觀照ならびに表現に必然性と正確さとがあること、浪漫的傾向を含みながらも、精密な寫實的傾向を失はないこと、文章が流麗で情趣のある名文であること等は源氏物語の持つ特殊性であり、そして比較にならぬ絕對價値でもある。源氏物

語五十四帖は道長公の榮華にも比較される光源氏の君の一生の榮耀と、これを廻る社會とが眩いまでに輝き、これを部分的に見れば幾百人の人物、美しい女性が示されてゐる。實に宮廷の運命史、貴族中心の社會史、美しい女性史でもある。いや描かれた生ける人間の相、これが源氏物語の永遠價値である。後世の文學に影響した點亦大であつた結果多くの異本がある、河內本、靑表紙本、兩者に屬せざる本との三種に大別される。河內本は鎌倉時代に最も行はれた。室町時代には靑表紙本が盛んになり、湖月抄本以下現行のはこれに屬し、河內本はその實物すら知られなくなつたが、定本源氏物語新解本はこれである。

語釋

〔須磨〕　今は神戶市の一部に編入されてゐるが、もとは須磨村といふ海濱の一寒村であつた。風光明媚を以て知られ、古來歌枕として名高く、又古戰場でもある。西部の山と海と相迫つてゐる處を一ノ谷といひ、そこから淡路の繪島ケ磯まで約五海里の地勢にある。源氏物語の主人公光源氏は年二十六歲の時三月二十日にここへ謫居されたのである。（ここの前後は參考欄の梗概を參照されたい）「須磨には」は、須磨では、須磨に於てはの意である。

「參考」——敎授進行の都合上、ここで本篇の主人公光源氏の君の略傳を源氏物語によつて作つておく。——光りかがやくやうな美皇子でおはしたのでこの名がある。父は桐壺の帝、母はその更衣。三歲の時に母に死別された。非常な利發者で學問の他に琴笛まで御堪能であつた。人相見の「帝位になるべき方だがさうすると國が亂れる、帝の補佐役として考へると結構な相だ」といふ詞を信じて臣籍に降し源氏の姓を賜はつた。君は極く端正で四歲も年上の葵の上と婚したが、それを嫌つて、亡き母に生寫しであるので父帝が入內させた藤壺（義母）を慕つてゐたが、十八歲の時遂に之と契つて自分に生寫しである御子（後の冷泉院）を生ませたので、二人は良心の呵責に苦しんだ。二十二歲の時葵の上は夕霧を生んだが物の怪の爲悶死した。で、藤壺の兄の娘である紫の上と婚した。二十三歲の時父帝は崩御された。藤壺は尼になつた。君は世をはかなんだ。その上いつも排斥されてゐた春宮の母の弘徽殿方の策謀もあつたので、遂に決意して須磨にわび住ひす

ることとなつた。それは二十六歳の春であつた。（本課の記事はこの頃のである）二十八歳の時に都に召還されて員外の權大納言に任ぜられ、間もなく內大臣に昇つた。三十一歳の春いよ〳〵出家入道の志を立てたが、新帝（冷泉院）の御成長を待つてからと考へた、でも嵯峨に御堂を建てさせた。藤壺は三十七歳で病歿された。新帝は源氏の君が實の父であることを知つて君に讓位しようとしたが、君はそれも太政大臣の位をも固辭した、が三十三歳の時太政大臣になつた。三十九歳の時女三の宮と婚した。三の宮は柏木と通じて薫を生んだので、君はこれも我が身の報と今更にその因果應報に驚いた。冷泉院は卽位十八年にして讓位されたので、君も太政大臣の職を退いた。五十一歳の時紫の上も同じく悶死した。君は宿願である出家遁世をするために、今まで取交した手紙を全部燒き捨てて、過去の一切から遠退かうとした。その中に君は五十二で薨去された。以上が源氏の君の一生であるが、君は藤原道長をモデルにしたのだともいはれてゐる。

〔いとど〕　いといとの約。いよ〳〵甚しく。ひとしほ。いよ〳〵益々。副詞であつて下に來る用言を限定するのが本來であるが、ここは下の「心づくしの」を用言の如くに用ひて、之を修飾した形となつてゐる。

〔心づくしの秋風〕　「心づくし」は心のありたけをつくす、心の限を使用するといふ意味から、色々物思ひをそゝることをいふ。古今集四秋、詠人不知「木の間より漏來る月の影見れば心づくしの秋は來にけり」須磨では、ひとしほ物を思はせる秋風が吹いて、源氏の御住居は——といふ意。

〔海は少し遠けれど〕　源氏の君の御住居は、海からは少し離れてゐるけれど。

〔行平の中納言〕　在原行平。平城天皇の皇子阿保親王の第二子、弟業平と共に在原姓を賜はつた。仁明、文德、清和、陽成、光孝の諸朝に仕へ、正三位中納言兼民部卿となつた。致官後寬平五年薨、年七十六又、寬平七年八十二歳歿との說もある。奬學院を創立し、子弟の研學につとめた。源氏物語須磨卷は行平をモデルにしたといはれてゐる。

〔關吹き越ゆる〕　續古今羇旅に「津の國すまといふ所に侍りける時よみ侍りける」と詞書して、頭註の歌がある。かつて、光孝天皇の御代、事によりてこの須

磨に謫居せしめられたことがある。「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」古今雜下）といふ詠はこの時である。又、この浦に關のあつたことは、平兼盛の「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寢覺めぬ須磨の關守」（百人一首）の詠によつても知られる。

〔よる〳〵は云々〕　その須磨の浦風に荒れる波の音が、夜になるといつも間近く聞えて來て——。

〔またなくあはれなるものは云々〕　この上なく淋しいものは、かういふ所の秋ではある。ここの「あはれ」は單に淋しいとか、悲しいとかいふ言葉では表現出來ぬ自然、人生に卽してにじみ出るやうな、しみじみとした哀愁感をいふのであつて、宣長のいふ「物のあはれ」はかうした哀愁感を誘發する對象そのものを中心として言つて言る。ここの文意もそのつもりで深く味讀してゆかないと、本課全篇にわたる源氏の君の、人の胸にせまる哀愁感が感得出來ないであらう。

〔御前（おまへ）に云々〕　源氏の君のお側に侍つてゐる人數も多くなく。

〔うちやすみわたれるに〕　皆寢靜まつてゐるうちに源氏の君はひとり——。「わたる」は源氏の外の人々があまねく寢靜まつてゐる樣をあらはす。

〔枕をそばだてて〕　枕につけてゐた耳をそばだてて。「そばだつ」は（欹つ）一端をあげておこす意。

〔波たゞこゝもとにたち來る心地して〕　浪がすぐ此處へ打寄せて來るやうに思はれて——。

〔枕浮くばかりになりにけり〕　何となく心細くなつて、いつか淚がとめどなく流れ出て、枕も浮くほどになつてしまつた。古今六帖五、柿本人丸の歌「ひとり寢の床にたまれる淚には石の枕も浮きぬべらなり」拾遺集十九雜戀、人丸の歌「淚川水まさればやしきたへの枕の浮きて止まらざるらむ」

〔琴（きん）〕　上古支那から傳來された七絃の樂器。支那最古のものは五絃で周代から七絃となつた。胴は表を桐、裏を栗とし、表面はすべて黑漆塗。長さ三尺六寸、幅六寸。左手指で絃の各部を按じ、右手の爪で彈ずる。「和琴（わごん）」は長さ六尺四寸位、六絃である。普通これをコトと言つてゐる。キンとは別であることを注意すべきである。

〔我れながらいとすごう聞ゆれば〕　自分ながら餘

りにすごい音に響くので。

〔ひきさし給ひて〕　弾きかけてゐたのを半ばでやめて。「さす」は中途でさしおく義。

〔こひわびての歌〕　歌意は浦波の音が都戀ひしくて堪へられず泣く自分の聲に似通うて聞える。きつと戀人の住んでゐる方から風が吹いて同じやうに泣くその聲を載せて來るのであらうといふ意。「思ふかた」は戀しく思ふ方角。玉葉集十五雜、凡河内躬恒の歌「波立たば沖の玉藻もより來べく思ふ方より風は吹かなむ」といふのがある。

〔驚きて〕　意外なことにあつて心騒ぐ、びつくりすること。目を覺ます。ここは後者。

〔めでたう〕　めでたくの音便。「めでたし」には一、愛づべし、賞すべし、二、うるはしい、特によい結構だ、三、祝ふべし、慶賀すべし、とある。ここは二の意。

〔しのばれて〕　がまん出來ないで。堪へがたくて。

〔あいなう〕　あいなくの音便。「あいなし」には、一、愛相がない、二、面白くない、味氣ない、三、かひがないとある。ここは二の意で、力なくしよんぼりと位の意。

〔鼻をしのびやかに云々〕　人々が彼も此も涙を催して、源氏の君には聞かれないやうに、しづかに鼻をかみ、すゝり泣きすること。「わたす」は前出のやうに多數の人の行動をあらはす語。この邊の意は、人々が目を覺まして、感歎するにつけても、胸の中の悲しさを抑へきれず、ただ力なげに起き上つて坐りこんで、みんな忍び泣きをするのであつたといふ意。

〔げにいかに思ふらん〕　ここから「かく惑ひあへる」までは源氏がお側に奉仕する人々の心中を推察すのである。

〔我が身一つにより〕　自分（源氏自身）一人のために。

〔親兄弟云々〕　親兄弟と片時も離れともなく、めいめい身分の差はあつても、思ふ心は變らぬ家郷を去つてこんな所に流浪して悲しい思ひをしてゐるのも、みんな自分一人のためだとお考へになると——。

〔いみじ云々〕　大さう氣の毒になつての意。善惡邪正に通じて「甚だしい」意に用ひられる。

〔いとかく思ひ沈むさまを云々〕　「自分が、こんなに大そうふさぎこんでゐては、なほ心細く頼りなく思ふであらう」と思召すので——。

〔畫はなにくれと戯れごと云々〕　「こと」は言。畫間はつとめて何やかやと冗談を言つては、お側の者の氣分をまぎらし、御自分はしよこいなさにまかせて、いろ〳〵な紙をつぎ合はせては、それに字を書いてみたりしなさる。

〔手習（てならひ）〕　文字を書くことを學ぶこと。習字。

〔唐の綾（あや）〕　浮織にした綾で、支那から傳來したもの。今の綸子の類。

〔かきすさぶ云々〕　慰みに描かれたりしたが、屏風の面の繪などはまことに立派に巧く出來た。「見所あり」は見る價値がある。

〔人々の語り聞えし云々〕　都においでの頃、人々がお噂申上げた（若紫卷に見ゆ）國々の海山の有樣をただ遙に想像していらつしやるばかりであつたが、今かうして須磨に來て直接眼の前に御覽になると、なるほど心も言葉も及ばぬ磯邊の景色を、又となく面白く幾枚も〳〵おうつしになつた。

〔たゝずまひ〕　立つて居る樣。ある樣子。景色。

〔二なく〕　又となく。比類なく。

〔この頃の上手にすめる〕　この頃の上手として評判の。「める」は「めり」の連體形。「めり」は現在推量を強調する助動詞。

〔千枝、常則〕　二人とも當時の繪師。細流抄に「千枝常則皆繪師也」とある。傳不明。

〔作繪〕　墨繪に彩色すること。又その繪。ここは前者。河海抄「つくり繪とは、すみかきのうへを彩するを云也、源氏のかゝれたる繪を彼輩に色とらせばやと也、彩色は畫師の口傳ある也云々」とある。

〔つかうまつらせばや〕　源氏の君の御墨繪に彩色をさせてみたいものだといふ意。

〔心もとながりあへり〕　もどかしがるのであつた。

〔懐かしうめでたき御有樣に云々〕　人々は、懐かしく美しい源氏の君の御容姿を見てゐると、心配も何も忘れてしまつて、唯かうしてお側近くお仕へしてゐられるのが嬉しく有りがたくて、四五人ばかりはいつも離れずにお附き申してゐた。

〔前栽（せんざい）〕　庭前に植ゑた草木。草木を植ゑつけた庭前。

〔花〕　秋の草花が——。

〔おもしろき夕暮〕　風情の面白い暮方に——。

〔ゆゝしう清らなるに〕　驚くばかりうるはしいの

で。「ゆゝし」は、一、忌み憚るべくあり、二、甚だしい、一通りでない、すばらしい、三、天晴なり、非凡なり。ここは二の意。

〔所がらまして云々〕　その上に、かやうに風景の絶佳な場所であるから、源氏は、この世のものともお見えにならない。（その御様子のうるはしさは人間世界のものとは思はれないの意）

〔うち亂れ給へる御さまにて〕　この前文に「白き綾のなよゝかなる御衣、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れ」が略されてゐるが、補つて敎授されたらここの描寫は一層明瞭とならう。それでここは、「帶をだらりと結んでいらつしやる御容姿で――」と解しておく。

〔釋迦牟尼佛弟子〕　經文を讀誦する時に、初めて唱へる詞であつて、「釋迦牟尼佛弟なにがし、歸命頂禮」などといふ。

〔ゆるゝかに云々〕　經文をゆるやかに讀誦遊ばす御聲も、――。

〔船どもの歌ひのゝしりて云々〕　沖からは、だみ聲で舟唄か何かわめきながら漕いで行く舟人どもの聲なども聞えて來る。

〔ほのかにたゞ小さき鳥の云々〕　もつと遠くの海上にゐる舟は、ぼんやりと、まるで小鳥の浮かんでゐるかと見えるやうなのも心細い感じがするのに――。

〔黒木の御數珠にはえ給へるは云々〕　おん涙がこぼれ落ちるのを、御拂ひになる御手つき、その眞白な御手が、それにかけられた黒檀の御數珠に對照して、見榮えのする美しさのために、故郷を慕はしく思ふお側の人々の心持が、皆なぐさめられるのであつた。

〔ふるさとこひしき人々の心地、みな慰みにけり〕　「ふるさとこひしき人々」は原文にはふるさとの女戀しき」とあつて以下多くの都を慕ひ想ふ記述があるが省略する。これで須磨卷が終り、この場面は引續いて次卷の明石卷へと展がつてゆく。

〔曉より風いみじう吹き〕　夜明方から風が非常に吹いて。――この文は明石卷の冒頭から續くのであるが、この前文は「なほ雨風やまず、神鳴りしづまらで日頃になりぬ。いと物わびしきこと數知らず。來しかた行くさき悲しき御有樣に心強うしもえ思しなさず。いかにせまし。かゝりとて都に歸らんこともまだ世に許さ

れもなくては人笑はれなる事こそまさらめ。猶これより深き山をもとめてや跡絶えなまし。」と思すにも、「波風に騒がれて、など人のいひ傳へんこと後の世までいと輕々しき名をや流しはてん。」と思し亂る。御夢にもただ同じ樣なるもののみ來つゝ、まつはし聞ゆと見給ふ。雲間もなく明け暮るゝ日數にそへて、京の方もいとゞ覺束なく、「かくながら身をはふらかしつるにや」と心細う思せど、頭さし出づべくもあらぬ空のみだれに出で立ち參る人もなし。二條院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そぼち參れる。道かひにてだに人かなにぞとだに御覽じわくべくもあらず、先づ追ひ拂ひつべき賤の男の、あはれに睦まじう思さるゝも我ながらかたじけなく、くしにける心の程思ひ知らる。御文には「あさましくをやみなき頃の氣色にいとゞ空さへ閉づる心地してながめやるかたなくなん。『浦風やいかに吹くらん思ひやる袖うちぬらし波間なきころ』あはれに悲しき事ども集め給へり。ひきあくるより、いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地し給ふ。「京にもこの雨風いと怪しき物のさとしなりとて仁王會など行はるべしとなん聞え侍りし。內裏に參り給ふ上達部など

も、すべて道とぢて政も絶えてなん侍る」など、はかゞ〳〵しうもあらず、かたくなしう語りなせど京の方の事と思せばいぶかしうて御前に召し出でて問はせ給ふ。「たゞ例の雨のをやみなく降りて風は時々吹き出でつゝ日頃になり侍るを、例ならぬ事に驚き侍るなり。いとかく地の底とほるばかりの氷ふり、雷のしづまらぬことは侍らざりき」など、いみじき樣に驚きおぢてをる顏のいと辛きにも心細さまさりける。かくしつゝ世は盡きぬべきにやと思さるゝに、その又の日の曉より風いみじう吹き――と續くのである。

〔潮高くみちて〕　波が高く一ぱいにうねつて。

〔巖も山も殘るまじき氣色なり〕　巖でも山でも崩してしまひさうな有樣である。「氣色」はけはひ、やうす、有樣。

〔いはん方なくて〕　全くいひやうがなくて。いひ表すべき方法がないの意。

〔落ちかゝりぬと覺ゆるに〕　頭の上に落ちかゝつたと思はれるので。「ぬ」は現在完了形。

〔ある限りさかしき人なし〕　源氏のお供をしてゐる人々として氣をたしかに持つてゐるものはない。「さか

し」はつよし、いさましの意。他に才智多し、まさりけり、さかしらなりの意もある。

〔我はいかなる罪を云々〕　源氏のお供の人々の歎いた詞。自分たちはいつたい何の罪の報で、こんな悲しい目にあふのだらう。「我は」は我等はとした異本に従ふべきである。

〔悲しき妻子〕　愛らしい妻子。「悲し」は「かなし」とすべきである。

〔——死ぬべきこと〕　妻子の顔をも見ないで死んでしまふとは。上の「我はいかなる罪をかして、かく悲しき目を見るらん」に返る文脈である。

〔君〕　源氏物語の主人公である光源氏の君をさす。前項「須磨にの「参考」を参照。

〔御心をしづめて〕　御心を落着けて。靜かに思ひめぐらして。

〔何ばかりのあやまち云々〕　源氏の君が心中で思ふ詞。自分は何程の罪があればこの濱邊で命を失はなければならないのか、それ程の罪もないのに、そんな間違つたことがあるものかと、氣を張つて居られるけれども。

〔——命を極めん〕　命を極めんやの意で、反語。

〔強う思しなせど〕　心強う氣を張つて居られるけれども。——思つて居られるけれども。

〔いろ〳〵の幣帛〕　源氏物語新釋に「本は置座に滿てしめて奉る物を總て『みてぐら』とはいへど、中頃より專ら絹布の幣をいふ事となりぬ。然ればこゝに『色色の』といふは、式などに見ゆる五色絹布の幣をいふなるべし。」とある。

〔住吉の神〕　住吉大神と稱す。住吉神社は大阪市住吉區住吉町にある。祭神は表筒男命、中筒男命、下筒男命の三神、後に息長帶姫命を加へて四座とする。歷代朝廷の尊崇篤く、海外へ赴くもの必ず幣帛を奉つて海上平安を祈る。後中古以後は玉津島と共に和歌神として歌人より最も尊崇された。今は官幣大社。

〔近き境〕　自分の居る須磨に近くあるので、さういつたのである。近いこゝら一帶の意。

〔まことに跡を云々〕　そのやうに本當に住吉に鎭座して、國土をお守りになる神樣ならば。

〔自らの命をば云々〕　自分の命の惜しさは勿論であるが、それは姑く措き、源氏の君ほどの立派なお方が

前例もない様な御最期をお遂げにならうのが、ひどく悲しいので、一同は發憤して。「さるものにて」は惜しいには勿論惜しいのであるがの意。

〔少しもの覺ゆる限りは〕　多少正氣のあるたしかな人々はみな。湖月抄に「誰も本性の人なし、その中に少し性のしづまれる人をいふ也。」

〔とよみて〕　湖月抄に「と文字すむ也」とある。響動の義。立ち騒いで。がや〳〵騒いで。

〔諸聲〕　大人數一緒に聲を出して。

〔帝王の深き宮に云々〕　お供の人々の言葉。細流抄に「源氏の罪なき由を空にうつたふる也、聊も世の煩などはし給はざりし人也、德陰陽報あるべきことをと也。」「帝王の深き宮」は帝王の住まはせ給ふ九重の宮の意。

〔深き御うつくしみ云々〕　深い御慈悲が隅々までも行渡つて、悲境に沈んでゐる人々を澤山お救ひになつた事こそあるのに。

〔大八洲〕　大倭豐秋津洲（中州）と伊豫二名洲（四國）と淡路と筑紫と壹岐と對馬と隱岐と佐渡との八洲の合稱で、「大」は美稱、すなはち大日本國の異名。

〔しか〕　過去の助動詞「き」の已然形。

〔こゝら横ざまなる波風には云々〕　非常に横暴極まる波に溺れ死になさることがあらうか。「こゝら」は非常に。「波風」は單に波といふに同じ。「おぼほれ」は溺れの延語。

〔天地ことわり給へ〕　天地神明も理非を判斷して下されたい。「天地」は孟津抄に「てんちときつと讀むべし」とある。

〔境を去りて〕　生れた鄕土を去つて。細流抄に「公卿非二公事一不レ越レ境とこそいへるに、いかなる事にかと也。」

〔この世のをかしか〕　現世で犯した罪の爲か。

〔御社の方〕　住吉の方。

〔さま〴〵の願を立て〕　源氏物語新釋に「是までは候ふ人々の誓也」とある。

〔また海の中の云々〕　源氏物語新釋に「是より源のせさせらるる也」とあるに從ふ。源氏の君もまた海底の龍王や多くの神々に願をお立てになつたが。「給ふに」の「に」はそれだのにの意を含めてゐる。又は、——お立てになるといふ意。

〔おはします〕 御座所。おはします所の義。

〔心たましひなくて〕 肝がつぶれて。一同おど〳〵してゐる狀。

〔大炊殿（おほひどの）〕 食物を調進する雜舍。

〔――と思しき屋に移し奉りて〕 大炊殿らしい雜舍に源氏の君の御座所をお移し申し上げて。

〔上下（かみしも）となく立ちこみて〕 上下の人々皆一緒に雜居して。「上下」の讀方について、孟津抄は「じやうげと音もきつとよむべし」といひ、湖月抄には師說の「かみしもと讀みても可也」に從つてゐる。

〔らうがはし〕 孟津抄の「亂りがましき也」の說が好い。亂の字の音便である。或はむさくるしの意もある。

〔――泣きとよむ聲云々〕 ひどく秩序を亂して泣叫ぶ聲が雷にも劣らない。非常に亂りがましき狀態をいつてゐる。

〔空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり〕 この後の源氏の君の行動は、參考欄の梗概を參照されたい。

鑑賞批評 語釋中にも指摘しておいたが本課は源氏物語の壓卷須磨、明石の兩卷から特に定評ある節々を抜萃したものであるが、今、島津久基博士の源氏物語講話から本課前半（須磨卷）の批評を引く。

「いつ讀んでも飽きない美しい文であります。（本課に採つた文章を指す）物語詩と私が申しました。詩もあり繪もあり、音樂もあり、（それは、源氏が朗詠せられる詩、かきすさみ給ふ屛風の繪、彈きならされる琴、この場面に盛り込まれた材料の上についてばかりでなく、すべてが詩であり、繪であり、音樂であります）源氏物語五十四帖の全篇の調子と味ひとを代表するに、先づ大體に於て遺憾なき一節かと思はれます。これを內容から申せば源氏の第十二帖目、次の明石の卷と引續く配所生活の卷であります。右大臣一家の羽振りのよくなつたところへもつて來て、朧月夜の內侍のかみの一件が問題を起しかけ、內々配流せられようとの評議もあると漏れ聞き、公然と恥辱を受けぬ前にと自分から身を引いて、一方それは藤壺との罪惡の報とも恐れ責める心もまじつて、何となく世間から暫く離れて見たいと自ら望んで都を去つたのでありますが、やはり住み馴れた家を捨てゝそして多くの愛人達を殘しての海士の鹽燒く海邊の佗住居は、日の經つにつれて漸く鄕愁の念を深めて參りました。泣きの涙で都を別れた出立の日の前後、明るく希望多い目的地へではない心細い旅路、とだん〳〵あはれ深く漸層的に叙して來て、到着した所は、（本課はここからである）昔行平の中納言の流されて藻鹽たれつゝ住み暮したといふ、悲しい歷史と、傳說とに包まれた土地、その起き臥す家は昨日の都二條院の玉樓に引替へて、茅の屋根、葦を葺いた廊、全く蜑が苫家の佗住居であります。秋はふける。枕に響高い浦波、眼の冴える夜、物凄い嵐の聲、ひし〳〵とさすらへ人の悲哀が身にせまつて來る。涙がたゞ流れに流れる。心を紛らさうとして彈いた琴の音が却つて凄愴の響を立てる。堪へきれぬわびしさ、感傷の吟詠、御側に休んでゐた人々がそれに眼をさまして、鄕愁の哀切な感じに一緒に泣きひたるあたり、いかにもよく描かれてゐます。海の見渡される廊に出て、秋草の唉亂れた前栽を前に佇んで、靜に經を讀誦する此の世のものとも見えぬ人の淸楚な姿、殊にその著物の色の配合、形の面白さ、白魚のやうにやさしい手つき、それに映える眞黑な數珠、この人物を中心としての一幅の詩的な繪、それに說明を加へつゝ伴奏させるさま〴〵の音色の種類と、その調和、それから人々の一人づつの吟誦といつたものであるが、今、島津久基博士の源氏物語講話から本課前半（須磨卷）の批評を引く。

「いつ讀んでも飽きない美しい文であります。（本課に採つた文章を指す）物語詩と私が申しました。詩もあり繪もあり、音樂もあり、（それは、源氏が朗詠せられる詩、かきすさみ給ふ屛風の繪、彈きならされる琴、この場面に盛り込まれた材料の上についてばかりでなく、すべてが詩であり、繪であり、音樂であります）源氏物語五十四帖の全篇の調子と味ひとを代表するに、先づ大體に於て遺憾なき一節かと思はれます。これを內容から申せば源氏の第十二帖目、次の明石の卷と引續く配所生活の卷であります。右大臣一家の羽振りのよくなつたところへもつて來て、朧月夜の內侍のかみの一件が問題を起しかけ、內々配流せられようとの評議もあると漏れ聞き、公然と恥辱を受けぬ前にと自分から身を引いて、一方それは藤壺との罪惡の報とも恐れ責める心もまじつて、何となく世間から暫く離れて見たいと自ら望んで都を去つたのでありますが、やはり住み馴れた家を捨てゝそして多くの愛人達を殘しての海士の鹽燒く海邊の佗住居は、日の經つにつれて漸く鄕愁の念を深めて參りました。泣きた、詩と繪と音樂との美しい融合、その後での新月に對しての一段と深い懷鄕の情、特に藤壺と、朱雀院に對しての盡きぬ想出、何といつてもやはり入神の技であると思はせられます。」

後半（明石卷）は、右の場所からずつと飛んだ部分であるが、前と同じ須磨の佗住居である。翌年三月上巳の日に源氏の君は開運の祓をしようとして海岸で暴風雨にあひ、一行はやつと住居に辿りつく。豪雨に雷鳴さへ加はつて、わびしさが一層つのる。京でもこの雨風は怪しき物のさとしだといつて仁王會など行はれた。かれこれ十日ほど經つた或日、曉から風が特に强く吹いて（本課後半はここより）潮が高く住居近くまで迫つて聞える。お側の人々は「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらん。父母にもあひ見ず、悲しき妻子の顏をも見で死ぬべきこと」となげく。源氏の君はより以上に過去の事も思はれてその報いかとそらおそろしくお思ひなさつて、ただ住吉の大神に幣帛ささげて祈願するのであつた。烈しい雷鳴とともについにお住居の廊に落雷してそこを燒いてしまつた。あはただしくもおそろしく、「空は墨をすりたるやうにて、日も暮れ」て行つた。ここで本

課は終つてゐるが、何といふお氣の毒な目にあひなすつただらうといふ感が湧く。それも「さきの世のむくいかこの世のをかしか」とあきらめて、ただ神佛を祈る源氏の君の姿が、いぢらしくも見取れるではないか。「須磨には、いとど心づくしの秋風に――」といふ書出しで續く本課は、全篇を通じて看取されるものは「物のあはれ」である。「あはれ」は淋しいとか悲しいとかといふ言葉では表はせないやうな、自然、人生に卽して誘導されて來る骨身に徹するやうな、しみ〴〵とした哀愁感をいふのである。本居宣長のいふ「もののあはれ」は本課に漲つてゐるやうな哀愁感から出發した文學論でなければならない。短文ではあるが、本文がそれだけ深く尊い價値を持つてゐるのである。源氏物語は全篇を讀まずとも、「須磨源氏」といふ名稱があるやうに、須磨明石だけ讀めば好い、といはれるのも一理があるのである。一つの傳說――この須磨といふ卷が昔から名高いが、それは作者、式部が上東門院の命によつて、源氏物語を書くことの祈願のために、石山寺に參籠し、折よくも琵琶湖にうつる八月十五日夜の滿月の光を眺めながら、ふと浮んだ構想をそのまゝ筆にしたのが、この須磨の卷であり、以下前後の卷々を書いたのだといふ傳說があるが、如何に須磨の卷が名作であるかを如實に物語つてゐるものと思ふ。心ゆくばかり鑑賞させたい。

參考 源氏物語五十四帖の梗概を簡記しておく。

「桐壺の更衣は桐壺帝の寵愛ことの外にて皇子、光源氏を生む。されど家格卑しくてよき後見者もなければ、同僚の嫉妬を身に負ひかねて夙に逝く。光源氏は容姿端麗擧止閑雅ことのほかなれば、母の更衣を惡みし人々も之を愛せざるはなし。さる程に藤壺の女御とて桐壺に似通へるが帝に召されぬ。源氏は之を我が亡き母の再生かとばかり懷き、藤壺も我が子の如くいつくしむ。長ずるに及びて遂に藤壺と道ならぬ契を結びて一男をあぐ。父帝はさる事と知る由もなく我が子と思ひて之を朱雀院の春宮に立て、源氏をばその後見者とす。源氏の本妻は十二歲の時に結婚せし葵の上にて四歲の姉嫁なり。睦まじといふにはあらねどやがて一男をあげぬ。後程もなく六條御息所の嫉妬によりその生靈にとりつかれて逝く。その後本妻なくして好色に日を送れる源氏は、幼き紫の上を北山に得て愛育せり。紫の上は才色兼備の婦人にて源氏の理想に叶ふ。然るに源氏は、朱雀院の時、朧月夜といふ尙侍に通ぜし事あらはれて、遂に須磨に流さる。（本課はここの記述である）猶も懲りざる源氏は謫居の間にも明石の上に女子を生ませたり。さる程に春宮受禪（冷泉院）の事により、京に召し歸されて、內大臣、太政大臣を經て太上天皇に准ぜらる。その間に於て或は齋院、薰生などに思をかけ、又朱雀院の女三宮に契りて薰大將を生ませり。されど薰は柏木大納言の胤なり。其の後最愛の紫の上逝きたれば源氏も快々として世を樂しまず、間もなく五十四歲を以て逝く。「雲隱」の卷は名のみありて本文なく源氏の逝去を暗示す。次の「匂宮」「紅梅」「竹河」三帖は夕霧、薰大將等の事を記せども竟畢宇治十帖に至る連鎖なり。「橋姫」より終りまでは、桐壺帝の第八の姫宮、今は世をはかなみて宇治の片山里に住して姫君を持つ。光源氏の子薰大將及び匂兵部卿宮は屢々その邸を訪ふ。程なく八宮は逝去し、薰大將はその姉姫に懸想する事一方ならねど、姉姫は感ぜざるのみならず、幾何ならずして病歿しぬ。薰も今は其の妹の中姫をと思へどこは旣に匂宮に從ひたり。然るを思ひかねて屢々挑めば中姫はせんかたなく緣者の浮舟を媒介す。浮舟は故姉姫に似通へるを以て薰の心にかなふ。然る所、好色の聞え高き匂宮は又浮舟に思をかけ、通ふほどに浮舟も匂宮の姿に恍惚として、契るともなき一夜の契を重ね、二夫に見えたる罪の怖ろしく遂に身を宇治川に投ぜしが、死に至らずして尼となりぬ。薰之を聞きつけて、浮舟の實弟をして消息すれど浮舟つひに答へずと。（國文學書目集覽より略述）

◇源氏物語についてまとまつた評論として島津博士の說を引く。

「源氏物語は、平安朝文學の代表作品であることは勿論のこと、我が國文學を代表する一大作品であります。（略）しかしこの源氏も、作者式部の天才が產み出したものであるとは言へ、之をひろく文學の展開の上から眺めると、やはり偶然に突如として現出したものではないのであります。奈良朝以來の和歌の發達、萬葉から古今へと推移して來た抒情精神の流れは、傍系として伊勢物語大和物語といつた歌物語を生み出し、一方に於て古事記以來の叙事精神は、その童話的な空想と結びついて、竹取物語、落窪物語、宇津保物語、その他今日傳はつてゐない多くの物語を、次第に發達させて來、又他方に於ては、自己の經驗を日記と

して記し、且それを小説化しようとする意志が既に、式部の先輩である右大將道綱の母の蜻蛉日記などに動いて居ります。これらのすべての時代の心の動きが、意識的に或は無意識的に、天才式部によつて源氏物語の大作に集成渾一せられたものと看られ得るのであります。

かく今述べた源氏以前の物語から直接の影響をうけてをりますが、又實際、作者式部は自分の目撃した事實と人物とを材料として、巧に之をとり入れても居ります。この點では物語といふものを、架空な夢から出來る限り實人生の出來事に近づかせようと努力してゐるといふべきであります。だからその結果が寫實小說の觀をなしてゐるのであります。しかもそれだけではないのであります。物語中の主な人物は又、彼女の性格、趣味、心情、理想の具象化せられた片影であるといつてもよいのであります。紫の上、明石の上、空蟬にも、夕顏にも、槿にも、大君にも、浮舟にも、藤壺にも、薫大將にも、光君にも彼女の全面或は半面の、乃至は或瞬間の彼女の心の姿を見得るのであります。この意味では彼女の心境小說であるともいひ得るのであります。卽ちこの點では日記から小說への、一人稱から三人稱への轉移であります。

源氏は詩であります。この點からは和歌の物語化した歌物語の延長であります。だから源氏の各卷叙述の間に必ず和歌が挿入せられ、或は中心となつたりして、情趣が一段と濃くせられて行つて居ります。これは實際に於て、取扱はれてゐる平安貴族の生活が卽ち、花を觀ては歌をよみ、月を眺めては歌を詠じ、嬉しきにつけ悲しきにつけ、又殿上の卽興、戀人との間の贈答、殆ど歌の生活だともいへるほどなのである爲でもありますが、又竹取、宇津保などに於ても行はれてゐる叙述の方式からの承繼でもあります。（略）彼女の源氏物語の創作に於て企圖したところは、宮中生活の寫實といふことでもなく、又戀愛の心理そのものを細かに描き分けようとしたのでもなく、幼時から物語、文學が好きであつた彼女はたゞ他の多くのこの時代の人々がなしたと同じやうに、面白い物語を心ゆくばかり書いて、その中に自分をひたしてみたかつたにちがひない。伊勢のやうに斷片的でなく、竹取・宇津保のやうに空想的傳奇に煩はされない、落窪の樣に訓蒙的でもない、さりとて日本紀のやうな形の外的に整へられた、ひからびた歷史でもない、もつと〳〵完全な、纏まつた、そしてほんたうの人間の心の相をま

さ〳〵と描き出した物語を作つてみたかつたのではないでせうか。（略）さうして飽くまでつゝましやかな、まじめな、涙を用意した眼で、彼女の周圍を見まはした時に彼女の物語るべき材料は、之を遠く印度や支那の傳說に借りるまでもなく、過去の歷史の外面的推移の記述に範を求めるまでもなく、自分の生きてゐる世界がそのまゝ淋しい美しい相となつてひた〳〵と彼女をつゝんで來たのではなかつたでせうか。さうして自分に惠まれなかつた現實生活の矛盾や不幸やを、自ら創作してゆく人々の生活の上に滿し慰め、解き難き人生の謎を作中の人物と共に解かうとする歡びと、解き得ない悲しみに、共に喜び共に泣いたのでありませう。

さうして源氏のすぐれた點は、その物語としての構成の整正といふ上によりも、主人公をはじめ各人物の性格の精細な描出によりも、又、時代生活の外面的な寫實といふ上によりも、人生そのものを、人間の心そのものを靜かにみつめようとしたところにあり、そしてそれを味はうとしたところにあり、さうして其處から作者の心を最も强く恐ろしく打つた人生の僞りなき事實と、作者が最も深く豐かに味ひ得た生活の情趣とを、卽ち人生の中から、生活の中から、觀照し得た眞と美とを、理想と愛とを、哲學的なものと藝術的なものとを、作者の主觀によりて統一融合した姿に於て、まざ〳〵と、そして又それを、作者の胸の奥から流れ出る感情のリズムのまゝにしかも形象とことばとその律動とが美しく調和渾一した形に於て、表現し得たところにあると思ひます。抒情詩的小說といひ、物語詩と呼ぶ所以は此處にあります。」

◇源氏物語各卷の題名。

一桐壺、二帚木、三空蟬、四夕顏、五若紫、六末摘花、七紅葉賀、八花宴、九葵、十賢木、十一花散里、十二須磨、十三明石、十四澪標、十五蓬生、十六關屋、十七繪合、十八松風、十九薄雲、二十槿、二十一乙女、二十二玉鬘、二十三初音、二十四胡蝶、二十五螢、二十六常夏、二十七篝火、二十八野分、二十九行幸、三十藤袴、三十一眞木柱、三十二梅ヶ枝、三十三藤裏葉、三十四若菜上、三十五若菜下、三十六柏木、三十七横笛、三十八鈴蟲、三十九夕霧、四十御法、四十一幻、四十二雲隱、四十三匂宮、四十四紅葉、四十五竹河、四十六橋姫、四十七椎本、四十八總角、四十九早蕨、五十宿木、五十一東屋、五十二浮舟、五十三蜻蛉、五十四手習、五十五夢の浮橋。

九　我が國各時代の代表的婦人

芳賀矢一

扱方　時代精神を最もよく表明した婦人を史上に求めて、その傳記と人と爲りの大略を述べた文である。現代の婦人としての修養を心がける上に、過去のかうした代表的人物の事蹟を知つておく事は、極めて必要で、また女性の地位が進みつゝある。今日に於ては、一層史上の女性の事蹟を心に留めておく必要があると思ふ。單に過去の婦人が爲した事蹟のみを鵜呑みに知るだけに止まらず、それに對して現代女性としての正しい批判に照らしてみたならば「成る程女性の力も亦偉大なり」といふ事が自覺されるであらう。そして各自が少くとも敬愛する女性の一人や二人を本文の中から見出されるであらうが、それ等生徒の批評感想を交換し合はせるのも面白い。要するに、史上の女性を正しく認識させると同時に、自らの修養に資すべき理想の人物を持たしめる事が出來たら、本課教授の眼目は十分に果たされたものといふべきであらう。

教授

作者

芳賀矢一　ハガヤイチ

文學博士。慶應三年五月、越前國福井に生れた。大學豫備門を經て明治二十五年東京帝國大學文學科を卒へた。第一高等學校教授兼高等師範學校教授より東京帝大助教授に任ぜられ、三十三年ドイツに留學してベルリン大學に學び、英佛を巡遊して三十五年に歸朝した。歸朝後直ちに東京大學教授に任ぜられ、三十六年文學博士となる。大正五年再度の渡歐をしたが、大正十一年教壇を退いて名譽教授となつた。その間國語調査委員會、教科圖書調査委員會の各委員に擧げられた。これより先、大正十年、皇太子殿下歐洲見學を卒へさせられて御歸朝あそばされるや、東宮職御用掛を拜命して國文學を御進講申上げた。昭和二年二月六日、大正天皇御大葬の前日國學院大學學長現職のまゝ薨ず。年六十一。著書に「國文學史十講」「國民性十論」「日本人」「東海道五十三次」「月雪花」「攷證今昔物語集」等の他、「芳賀矢一遺稿」（二卷）があり、教科書に「國文讀本」「明治讀本」「帝國讀本」「女子國文」等がある。

語釋

〔天照大神〕　高天原の主神で、且つ皇室の御祖先であるため我が國では一番崇敬せられる神である。今伊勢の內宮に奉祀せられる。御名は大日靈貴尊。伊弉諾、伊弉册兩神の御子で、素戔嗚尊の御姉に當らせられる。伊弉諾神が不淨國に到つて身體が汚れたので禊をして淨めんとして、左眼を洗はせたまふとき御降誕あらせられ、生まれて光華明彩、六合の內に照徹したといはれてゐる。皇孫に神勅を下されたことや、天の岩戸に籠りましたことなどは有名なことであるから今更いふにも及ぶまい。なほ天照大神の字面は日本書紀には天照大神、古事記に、天照大御神、又一書には天照皇大神とある。

〔神勅に基づいて天孫の降臨云々〕　天照大神は天孫瓊々杵尊に三種の神器を授け「豐葦原瑞穗國はこれ我が子孫の君たるべき地なり、爾皇孫就きて治めよ、寶祚の隆えまさんこと天壤と窮なかるべし」と宣ひ、且つ「この鏡は吾が御魂として吾が御前にいつくが如く、いつきまつれ」と詔して、天兒屋根命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉祖命等の神々を副へて天降らしめられた。天忍日命、天津久米命は弓箭長仗を執つて從ひ、伊勢五十鈴川上に居られた猿田彦命が先導として、日向の高千穗峯に降られたのである。

〔天鈿女命〕　女神。天照大神の天の岩戸に入り給ふや、諸神と謀つて、窟前に歌舞し、命も異裝して槽底を踏んで一座を哄笑せしめ、遂に大神を誘ひ出された。又、天孫降臨の時は、衆、地神猿田彦神を怖れて進まなかつたので、命、これを說いて先導とせられた。子孫の姓を猿女君といふ。

〔石凝姥命〕　天兒屋根命の孫、天糖戸神の子。始めて鏡を作られた御方で、伊勢大神宮に奉祀せる八咫鏡はその作である。天孫に從つて中國に降り、鏡作連の祖とならられた。

〔寶冠章〕　婦人に賜ふ勳章。勳一等より勳八等まである。楕圓形、中央寶冠を金にてあらはしてゐる。綬は黃色に赤の小緣のあるもの。勳一等は大綬を以て右肩より左脇へ垂れ、副章は左脇に佩び、勳二等以下は結蝶形の綬を以て左脇に帶びる。

〔神功皇后〕　仲哀天皇の皇后。御名は息長足姫。天皇熊襲を親征し筑紫の豐浦の宮に崩ずるや、喪を祕して

知らせず、一將を留めて熊襲に當らしめ、親ら舟師を率ゐて三韓を征服した。卽ち年貢八十艘を定めて歸り、爾後天智の朝に至るまで、三韓は我が隷屬であつた。應仁天皇立つに及んで政を攝すること七十年にして崩ぜられた。

〔女帝〕　我が國の女帝は、三十三代推古天皇、三十五代皇極天皇（重祚されて三十七代齊明天皇となる）四十一代持統天皇（天武天皇皇后）、四十三代元明天皇（草壁皇子妃）、四十六代孝謙天皇（重祚されて四十八代稱德天皇となる）、百八代明正天皇、百十六代後櫻町天皇である。

〔夫唱婦隨〕　夫がまづ唱へて然る後に婦がこれに隨ふこと。古事記によると伊弉諾、伊弉册二神が淤能碁呂島に天降られ天御柱といふものを立て、そこへ八尋の御殿を建てられ、これよりも國土を生み固められることになつた、二神は御夫婦の契をせられて、その天神柱を右と左からグルリと御廻りなられたが、伊弉册神から「あな意哉愛男子を」と唱へ出された所が、伊弉諾神がこれを聞いて「女が男に先立つて物言ふは宜しからず」と咎められた。そこで天御柱を廻り直され今度は伊弉諾神の方から「あな意哉愛女子を」と唱へられた。二神はこれより大八洲を生み更に山川草木を掌る神々が生まれたのである。關尹子に「天下之理、夫者唱、婦者隨、牡者馳、牝者逐、雄者鳴、雌者應」とある。

〔歷史的女性〕　歷史上から見た女性。ここは史上に偉績をのこした婦人をいふ。

〔一旦事ありと見れば云々〕　古事記、宇氣比の神話の一節に「故於是速須佐之男命の言したまはく『然らば天照大御神に請して罷りなむ』とまをしたまひて、乃ち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土皆震りき、ここに天照大御神聞驚かして我が那勢の命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんと欲すにこそと詔り給ひて、卽ち御髮をとき御角髮に纏かして、左右の御角髮にも、御髮にも、左右の御手にも、各八尺の勾璁の五百津の美須麻流の珠を纏持たして、背には千入の靫を負ひ、比良には五百入の靫を附け、又八つの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立てて堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて待問ひ給はく、何故上り來ませると問ひ

給ひき」とある。

〔雄たけび〕　前項參照。「男建び踏建び」とある。「雄建び」は男らしく叫ぶこと。女神でありながら雄々しく進まれたことをいふ。

〔典型〕　かた。のり。手本。支那では日を陽卽ち男とし、月を陰卽ち女とする。西洋の神話も亦日を男性、月を女性としてあるのに、獨り我が國に於ては日に女神を配し、月に男神を配してゐるが、日の狀態を考へて見ると、溫情孳々として、物に臨み、萬物を慈育して終始渝ることのないのは、いかにも婦人の德性に似てゐるではないか。我が國民性より見て、日に配するに女神を以てしたのは、意義あることといつてもよからう。

〔日本武尊〕　御名は小碓。また日本童男。景行天皇の皇子。容貌魁偉、雄傑業に絕してあられた。天皇の二十七年に熊襲がそむいたので勅を奉じて、御年十六でこれを討平せられ、また、同四十六年再び敕を奉じて東夷を征伐し、歸途近江國膽吹山を過ぎて病に罹られ、伊勢國能褒野で薨じられた。御年三十。

〔海底の藻屑となる〕　海の中に入つて死ぬことをいふ。「藻屑」は水の中にある藻などの水草の屑やその他種々の屑をいふ。海底の屑のやうになるといふことから、海に入つて死ぬことをいふ。

〔弟橘姬〕　穗積氏忍山宿彌の女で、日本武尊の妃となつた。尊の御東征の時、相模より上總國に行く海上で、暴風が起つて船が覆らうとしたので、姬は尊に代り奉るべく、海に投じて歿した。爲に海上靜穩に歸して、尊は事なく海をお渡りになることができたのである。

〔犧牲的精神〕　自分の身を投げ出して主君または主人或は團體のためにつくすやうな精神をいふ。犧は色の純なる牛、牲はまだ殺されない牛の義で、昔支那で天地宗廟を祭る時に供へたいけにへのこと。それから轉じて、或る目的のために他の事を投げうち、また自分の身命を捧げて顧みないことを犧牲といふ。

〔三韓〕　太古の三韓は馬韓、辨韓、辰韓をいつた。後幾多の變遷があつて、新羅、百濟、高麗の三國となつた。ここは後者の意。

〔大葉子〕　調伊企儺の妻。欽明天皇の二十三年、調伊企儺は新羅と戰つて、敵に捕へられ、その妻の大葉子も亦捕へられたが、最後まで節を全うして、日本のこ

とを忘れなかつた。大葉子の勇烈な最期を悲しんで歌つた歌に「韓國の城のへに立ちて大葉子は領布振らすもやまとへ向きて。」

〔凛として忠勇義烈の奪ふべからざる志〕　けだかくして立派で動かすことの出來ない、忠勇義烈の精神をいふのである。たのみとした夫は既に殺された。たださへ、敵中に虜にされては心弱い女の身の弱くなりまさるものであるのに、大葉子は異國に虜にされてゐながら、毫も屈しなかつたなどは日本婦人のため、萬丈の氣焰を吐いたものといふべきである。論語、子罕第九に「子曰、三軍可レ奪レ師也。匹夫不レ可レ奪レ志也。」とあるが、そんな自信と覺悟とを持つてゐたのを指したのである。

〔武士道〕　昔時の武士の實踐履行すべきものとした道德。節義を重んじ、生死を輕んじ、體面を尚びて利慾を賤しみ、廉恥武勇を奉ずると共に、悔懦貪慾を斥け君父のためには身家を犧牲とし、家名のために一身、一族の身を犧牲にすることを期してゐること。

〔義烈心〕　操が最も堅くして心のしつかりしてゐること。義烈は操の最も堅いこと。又すぐれてあつい忠勇の心。

〔推古以後佛法が流行して云々〕　推古は推古天皇のことで欽明天皇の御三皇女、第三十三代の天皇である。佛教は欽明天皇の十三年十月、百濟の明王が金銅釋迦佛像一軀、並びに經論幡蓋などを献じ、表を上つて大法流通の德を稱揚した。これが佛教の我が國に公然傳來した初めである。その後佛教崇拜の傾向に向つて來たが、殊に推古天皇が卽位せられると、厩戸皇子（聖德太子）は、蘇我の馬子とともに大いに佛教の流通を圖られたので、非常な勢を以て弘通して來た。殊に奈良時代には、天皇、皇后までが佛教に歸依されて弘通につとめられたので、益々宣傳された。

〔光明皇后〕　藤原不比等の第二女。聖武天皇の皇后。幼時から聰慧で遂に立つて皇儲妃となられた。天皇が卽位されると、從三位を受けられ、孝謙天皇及び皇太子を生み給ひ、正三位に叙せられ、天平元年八月に皇后に立ち給うた。孝謙天皇受禪後、皇太后となられた。天平寶字四年六月七日崩、御年六十。光明皇后は體貌殊麗で、光輝あるほどであつたので、名づけ奉つたのだといふ。厚く佛教を崇信し、天皇に勤めて東大

寺を建て、且諸國に國分寺を創め、悲田院、施藥院を置いて、天下の悪病を療養したまうた。また先妣の供養として、山階寺に西金堂を建て、或は金字一切經律論を手寫して納められた。また書を好くし、文が巧であられたといふ。

〔悲田院、施藥院〕　前者は京中の貧困な病者、棄兒及び行旅病者などを救濟療養した所。式京職式「凡京中路邊病者孤子、仰二九箇條令一、其所レ見所レ遇、隨レ便必令レ取二送施藥院及東西悲田院一。」後者は、施の字を省いて訓むのを例とする。窮民に施療した所。續紀十、天平二年四月辛未「殆置二皇居宮職施藥院一。」

〔儒教〕　孔孟の教。仁義禮智信の五常を守り、以て人道を修むると同時に、國家の治平を致さんとする教。卽ち己を修め人を修める教である。

〔和氣廣蟲〕　清麿の姉。貞順で節操を守り、大いに孝謙天皇に寵せられた。神護景雲二年、清麿が道鏡の意に反した爲に、大隅國に流されたが廣蟲も連座して、備後に流された。光仁天皇の御卽位の後召還せられ、正四位上典侍に進んだ。延曆十八年、七十三歲で歿した。

〔藤原仲麿〕　武智麿の第二子。孝謙天皇の寵幸を受け、姓名を惠美押勝と賜ひ、官位累進した。淳仁天皇がお立ちになると、威權益々朝を傾けたが、孝謙天皇の寵を僧道鏡に奪はれるに及んで、これを除かうとし寶字八年亂を謀つて誅せられた。年五十九。

〔清麿〕　和氣清麿。奈良朝末、平安朝初期の忠臣。稱德天皇に仕へた。時に僧道鏡異圖あり、天皇清麿を宇佐八幡に遣はし、道鏡清麿に說いて大臣の位を約したが、これに誘惑されず、宇佐から歸つて神教を奏した。大隅に配されたが、寶龜元年光仁天皇卽位したまひ、これを京師に徵して官を復した。桓武天皇の平安遷都に際して造宮大夫となつた。延曆十八年歿、年六十七。孝明天皇の朝護王神社に祀られ、明治天皇の時正一位を贈られた。

〔道鏡〕　奈良朝末期の僧。俗姓は弓削氏。河內の人。義淵の弟子となり、葛城山に籠つて法術を修め、遂に內道場に出入して孝謙上皇の信任を得た。上皇重祚（稱德天皇）したまふに及び、大臣禪師に進み、遂に法王の位を授けられた。道鏡これより日に驕傲、服食一に供御に準じ、大小の政盡くその手に決した。時に太

宰主神習宜阿曾麿、道鏡に媚び、宇佐八幡の神託と號し、道鏡をして皇位に卽かしめば天下泰平ならんと稱した。清麿敕を奉じて神教を請ひ、道鏡を除くべきことを復奏するや、道鏡大いに怒つてこれを大隅に流したが、稱德天皇崩ずるに及んで依るところを失ひ、下野國藥師寺別當に貶せられ、寶龜三年配所に歿した。

〔典侍（てんじ）〕「ないしのすけ」ともいふ。內侍の司（つかさ）の次官。卽ち宮中に奉仕する最高女官の一。內侍の司は後宮の十二司の一。天皇に常侍し、奏請傳宣をなし、女孺を檢校し、かねて內外の命婦の朝參にあづかり、及び後宮の禮式などを掌る所、尙侍、典侍、掌侍、女孺等の職員を置いたのである。

〔光仁天皇〕第四十九代。御名は白壁。天智天皇の御孫、施基皇子の御子。御母は紀諸人の女贈太后橫姬である。稱德天皇の崩御後藤原永手に擁立され給うた。卽位の後は銳意弊政を改められ治國の道を計られた。在位十二年、天應元年崩御、年七十三。陵は大和國添上郡にあつて田原陵といふ。

〔その選を殊にする〕そのともがらは異にしてゐることで、ここはその面目が全く異なつて優れたものであるの意。

〔文藝〕學問と技藝。

〔憂身（うきみ）をやつす〕みなりを顧みずして、或る事に熱中すること。一所懸命になること。或る事に夢中になること。

〔優美な假名文〕やさしい假名交り文をいふ。ここでは、源氏物語、枕草子など、平安時代において、女流文學者の手になつたものをさす。

〔隋唐の文明〕西曆五百八十一年北朝に於ける、北周の外戚、楊堅、北周を簒ひ帝位に卽き長安に都し文帝と稱し、その子明帝（煬帝）次いで卽位したが、六百十八年に至り李淵（唐の高祖）に亡ぼされ、僅かに三十七年にして亡びた朝廷であつて、ほんの南北朝時代より唐朝へと移る短い中間の朝廷であつたのである。西曆六百十八年唐の高祖、隋を亡ぼし、長安に卽位してより、太宗、高宗、中宗、睿宗、玄宗、肅宗、代宗、德宗、順宗、憲宗、穆宗、敬宗、文宗、武宗、宣宗、懿宗、僖宗、昭宗を經て二十代哀帝に及び、九百七年、全く朱全忠に簒奪されるまで二百八十九年の長き朝廷であつて、制度、文物よく備はり、美術隆興して、いはゆる、物質文明は支那空前の發達をなした時代である。この時代は我が國で、外國的交際を始め、兩國の交通が、次第に盛になるとともに、彼の學術技藝が盛んに傳へられて、我が國の學問技術工藝の進步を促したのである。

〔顏色なからしむ〕恥ぢいつて顏の色を青くすること。面目を失はせること。

〔鬱勃たる發展的勢力〕非常な氣慨を以て進展しようとする勢をいふ。「鬱勃」は意氣のあがるさまで、天をも呑むやうな氣慨をいふ。

〔源氏物語〕五十四帖。紫式部の作。量に於ても質に於ても假名物語中他に匹儔を見ない大作である。桐壺から紅梅までの四十四帖は、桐壺帝の皇子光源氏を主人公にして、これに多くの婦人を配し、男子を加へて上流社會の生活狀態を寫したもので、大きな結構（スケール）で出來てゐる。爾餘の橋姬から夢浮橋に至る十帖は宇治十帖といつて、光源氏の子薰大將が主人公になつてゐる。中古物語を集大成したものとしても、當時の宮廷生活の詳細な報道としても、平安氣分の橫溢した一種のロマンチツク文學としても、我が國文學史上に重要な地位を占めるものである。

〔紫式部〕實名は詳でない。平安時代中期の有名な女流文學者。越前守藤原爲時の女。梨壺五歌仙の一。左衞門權佐藤原宣孝に嫁し、大貳三位を生んだ。幼より學を好み、和漢百家の書を讀み和歌に巧であつた。長保三年宣孝が歿して後は節操を守つて再嫁せず上東門院に仕へた。藤原道長がその才色を愛して、權勢をたのんで、これを私しようと試み、屢々事に託して挑んだけれども、遂に應じなかつた。その著源氏物語五十四帖は千古の傑作で、清少納言の枕草子と竝べ稱せられる。その他紫式部日記及びその家集がある。歿年は明らかでない。百人一首に「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲かくれにし夜半の月かな」の歌がある。

〔清少納言〕清原元輔の女。正曆年中一條天皇の皇后定子に仕へ、才學紫式部と匹敵した。男女を問はず一世の名流と才華を闘はし、名聲大いに揚る。皇后崩御の後は出でて仕へず、遂にその終が分らない。著枕草子は隨筆體のものとして範を垂れたといふ點から、我が國文學史上に一異彩を放つてゐる。家集一卷。紀行

には松島日記があるが、僞作である。百人一首「夜をこめて雞のそら音はかはるとも世に逢坂の關は許さじ。」の歌は、支那の孟嘗君の函谷關の故事を聯想したものとして有名である。

〔和泉式部〕　平安時代中期の女流歌人。越前守大江雅致の女である。初め和泉守橘道貞に嫁し小式部を生んだ。道貞の死後藤原道長に召され、上東門院に仕へた。この冷泉天皇（六十三代）の第三の皇子爲尊親王に愛せられ、親王が薨ぜられて後、第四の皇子敦通親王式部の容色を愛して「あなこひし今も見てしか山賤の垣穂に生ふる大和なでしこ。」といふ歌を贈られたのに對して「こひしくば來ても見よかし千早ふる神のいさむる道ならなくに。」といふ歌を詠んで奉り、親王の寵愛を受けた。後更に丹後守藤原保昌の妻となり丹後に下つたが、死亡の年月は詳でない。和歌に長じ、寛弘前後の第一の歌人として知られ、赤染衞門と並稱せられた。著書に、和泉式部日記一卷、和泉式部集五卷、續集二卷がある。藤原公任の推奬した歌に「津の國のこやとも人のいふべきに隙こそなけれあしの八重葺。」といふのがある。

〔赤染衞門〕　大隅守赤染時用の女。一說には衞門の母は初め平兼盛に嫁し、懷姙中離緣して家に歸り、女子を生み、その後、これをつれて時用に嫁した。時用は養つて子としたといふ。藤原道長の妻倫子に仕へて衞門と稱した。後大江匡衡に嫁した。才藝あつて和歌を善くし、和泉式部と名を齊しくした。曾て子擧周が病んだ時、住吉神社に祈り、歌を三本の幣に書いて奉納し、忽ち病が癒えた。人は皆その歌德を賞揚した。また匡衡が藤原公任のために中納言を辭する表を作り、結構に苦しんだ時、衞門は腹案を告げてこれを助けたといふ。女子を生み、江侍從といつて、また和歌を以て著れた。又榮花物語の著者と稱せられてゐるが、確證はない。

〔伊勢大輔〕　神祇官伯、大中臣輔親の女。父の輔親が伊勢の祭主であつたので伊勢大輔と號したのである。上東門院に仕へ和歌に巧であつた。宮仕への初め會〻八重櫻を御前に獻じたものがあつた。門院の父道長がその才を試みようとして歌を大輔に求めた。卽ち詠じて「古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな」とやつた。道長は嘆賞して才媛の名これから宮中に高まつたといふ。後に筑前守高階成順の妻となつたといふ。

〔才媛〕　文才のある女。主として學問詩文に長ずる女をいふ。

〔大立者〕　芝居でその一座中、技倆最もすぐれた名題役者、延いてその社會にて、一際目立つて重きをなす人物をいふ。代表的人物。「立」はダテと濁音。

〔妥當〕　おだやかなること。穩當。又、文章の字句、言論の要旨の適切なことにもいふ。

〔優美婉麗〕　「優美」はしとやかで、美しいこと。けだかく品よいこと。「婉麗」ははでやかに美しいこと。

〔藤原の榮華〕　藤原氏の榮華を指していふ。

〔文字通りの才媛で云々〕　單に才媛といふだけで、日本の婦人としての圓滿な人格者ではなかつたことを指す。

〔虛榮に憧れる〕　虛榮心にとらはれること。「虛榮」は外見のみの美を衒ふこと。みえ。

〔鎌倉となつては〕　鎌倉時代となつてはの意。

〔節義〕　とりまもつて失はない道義。みさを。

〔白拍子〕　鎌倉時代の遊女などが水干を着て舞ふ舞をいひ、又その遊女をいふ。もと水干に立烏帽子をつけ、白鞘卷の太刀を佩いて舞つたから、男舞ともいつた。鳥羽天皇の時、鳥の千歲、和歌の前といふ二人の遊女が舞ひ始めたものといひ、又藤原通憲が磯の禪師に舞はせたのが始であるともいふ。「はかない白拍子」とは、身分の卑しい無力の白拍子を言つたのである。

〔堂々有髯男子〕　堂々は盛大、嚴肅、公正等の形容。ここは口ひげをはやした立派な男子をいふ。

〔瞠若たらしめる〕　呆然たらしめる意。「瞠若」は目を見はり、呆れ果つるさま。莊子に「顏淵問二於仲尼一曰、夫子步步、趨亦趨、夫子奔逸亦絕レ塵、而回瞠二若于其後一」とある。

〔常磐〕　初めは身分の低い女であつたが、義朝の妻となり、平治の亂に義朝が敗死した時、今若、乙若、牛若の三子を携へて大和國に落ちた。けれども母が清盛に捕はれたことを聞いて自ら六波羅に行つて、母に代らんことを請うた。遂に清盛の妾となつて、その爲に三子皆赦された。清盛の寵が衰へてからは、出でて藤原長成に嫁した。

〔靜〕　源義經の妾。磯禪師の女で、京都の白拍子であつた。歌舞に長じ、艷麗花のやうな美女であつた。義

經が京都を落ちた時、これに從ひ、吉野山に隱れたが吉野大衆に攻められ、多武峰へ向ふ途中、義經と別れ風雪の中をさ迷ふうちに捕らへられた。後鎌倉に送られ、義經の行衞を訊問せられたが、知らぬ由を申して鎌倉に留められた。賴朝の夫人政子は、靜が歌舞を善くすると聞きこれを召して見んとした。靜は病と稱してこれを辭したが再三召されるに及んで、力及ばず鶴岡八幡宮に於て歌舞を奏した。工藤祐經が鼓をうち、畠山重忠が銅拍子を拍つた。時に靜、義經を慕うて曰く、「吉野山みねの白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞこひしき」次に別離曲を奉して後、謠うて曰く、「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな。」と。聲態絶妙、滿座哀を催して、袂を絞らぬものはなかつた。靜はやがて子を擧げたが、賴朝は命じてこれを奪ひ、由井ケ濱に棄てしめた。後靜は京師に放たれたが、その終る所は詳かでない。

〔巴（ともえ）〕 飯綱御前として知られてゐる。中原兼遠の女、今井兼平の妹。源義仲の妾。容色すぐれ且武技に長じてゐた。義仲に從つて屢々出陣して功を立てた。義仲の死後、尼となつて越後國友松にゐたといふ。その末年は詳でない。

〔板額（はんがく）〕 鎌倉時代の初期における越後の勇婦。城九郎資國の女。驍勇にして射に長じてゐた。その乳子小太郎資盛が源賴家に討たれたとき、櫓の上から射撃して奮戰し、遂に信濃の人藤澤清親に射られ、捕へられて鎌倉に送られた。淺利義遠がその勇を稱し、請うて自分の妻とした。

〔おみな生活〕 みえをはらぬ生活。まじめな生活。生活振が質素なこと。

〔青砥藤綱の儉約話〕 上總國の人。藤滿の子。北條時賴、時宗の二代に仕へて左衞門尉、引付衆となつた。性質が勤儉にして仁慈であつた。嘗て滑川を渡つた時、錢十文を川中に落した。そこで五十文の松明をつけて、これを拾はしめ「十文と言つても天下の通貨である。これを川中に棄ててしまうのは天の下の財を空しくするものである。」といつた話は、眞僞は別として、その勤儉のほどが察せられる。

〔松下禪尼〕 北條修理亮時代の室。時賴の母。秋田城介安達景盛の女。性節約にして賢婦の譽が高い。時賴の治世の安泰は主としてこの人の教によるものである

といふ。小野務の松下禪尼と題する歌に「おほかたは知らじな松の下蔭にのりとる尼の深き心も」と又賴山陽の詩「補窓紙」に曰く「窓勿ニ新糊一破輒補。老婦剪レ紙親辛苦。我窓有レ格自ニ父祖一。及レ時綢繆誰敢侮。何知他日狂童子壞裂。風飄雨搖不レ可レ綴。」とある。

〔執權〕 ここは執權職を指す。中古武家の職名。將軍を輔佐し幕府內外の政務を統轄した重職であつて、鎌倉幕府草創の際、大江廣元が政所別當として政務を執行したのを始めとする。尋いで北條氏の世襲となつたが、室町時代になつて空名となつた。

〔時賴〕 北條時賴。北條第五代の執權。時氏の子。小名は戒壽、五郎と稱した。出家として最明寺入道道崇といふ。最明寺は鎌倉山之內、今の圓覺寺の近くである。寬元四年執權となり、建長元年相模守に任じ、康元元年病によつて職を辭し、剃髮した。弘長三年卒す、年三十七。甚だ質素で名望が高かつた。謠曲「鉢の木」は時賴の諸國行脚に材をとつてものしたものである。長澤伴雄の北條時賴と題する歌に「白雪のとけてひとよも語らずば深き心も世には知られじ。」とある。

〔障子の切張〕 禪尼が障子の切張をした話は徒然草第八十四段に出てゐる。ひろく人口に膾炙してゐることでもあるから、ここにはあげない。

〔味噌で酒を飮む云々〕 この話は徒然草第二百十四段に出てゐる。

〔鳶は鷹を産まぬ〕 すぐれた子はすぐれた親に生まれるといふことで、親がそれほど利巧でなくて、子供ばかりが優れて賢いことはないとの意。「瓜の蔓に茄子はならぬ」ともいふ。

〔瓜生保（うりふたもつ）の母〕 越前の國の人。その姓名は未詳。延元中保は弟義鑑等と杣山城に據つて義助の弟脇屋義治を奉じ、高師泰と戰つたが兵敗れ保も義鑑も甥の七郎時成も倶に討死した。保の弟源琳は敗殘の兵を收めて杣山に還つたが、城中の軍士は多く死亡して皆色を失ひなすところを知らなかつた。この時、保の母は神色自自として、義治に謁して「妾が家の兒童もと郎君の爲に大義を起したのである。苟も賊を平げなければ、千百の子甥を亡ふも、固より悔ゆる所ではない。三子がなほある以上は再擧を期すべきである、是こそ妾が哀しみを轉じて喜となす所以である。」といつて、起つて義治のために酒をすゝめ、義治及び部下の殘卒の士氣

を鼓舞したことは古來有名な話である。

〔楠木正行の母〕　楠木正成の妻。その事蹟については持佛堂に於て正行を訓誡したる以外は文獻の徵すべきものがなかつた。大日本史烈女傳序の一節にも「楠木正成妻果毅明敏過人又又豈區々詞章之比哉」とあるのみで從つて夫人出生の如きは諸說紛々としてゐた。然るに先年織田完之、加藤鎭之助兩氏の辛苦檢討によつて夫人は南江備前守正忠の妹で後二條天皇の嘉元二年金剛の麓なる甘南備字矢佐利の里に生まれ、名は久子といつたことが發表された。夫人は後醍醐天皇の元亨三年二十歲にして楠公に嫁した。楠公は三十歲にしてその殉節は四十三歲であるから、夫人は三十三歲にして未亡人となり、六人の男子を教育されたのである後村上天皇の延元三年正行四條畷に戰死すると同時に夫人は剃髮落飾して法衣をつけ敗鏡尼と稱へ、甘南備の峯條山の觀音殿に隱栖し、正平十九年十月十七日正儀以下の愛子に擁せられ心靜かに永久の眠に就いた。享年六十一であつた。

〔大義名分〕　「大義」は人として最も重大なる義理。臣民の君主又は國家に對する義理。「名分」は人倫の關係で、君臣、父子、夫婦等の名によつて表された人倫上の分際、卽ち臣としては臣たる分際があり、子としては子たる分際がある類。熟しては人として行ふべき大なるすぢみちの意。左傳隱公四年に「君子曰石碏純眞也。惡三州吁一而厚與焉。大義滅レ親、其是之謂乎。」又莊子に「易以道二陰陽一、春秋以道二名分一。」

〔王事に殉ず〕　天子のために、身命をなげうつて忠勤をつくすこと。

〔義〕　君臣の間の道德。五倫（君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり）の一である。又、五常（仁義禮智信）の一としては、正しいすぢみち、事物を處理するものの意にいふ。ここは前者の意。

〔細川忠興の妻〕　明智光秀の三女。容貌はすぐれて美であつた。天正七年忠興に嫁したが、同十年光秀が弑逆を行つたので、忠興は怒つて夫人を三戶野山中に幽閉した。既にして光秀は誅に伏して擧族は亡滅し、支族も皆誅せられた。家來は「婦女でも誅を免れないだらう。逆臣の子として坐して戮せられるよりも自殺したがましであらう。」といつた。しかし夫人は良人の

命を聽かない中は死ぬことも出來ないと答へて謹愼してゐた。かくして夫人は、孤獨で節を守ること十二年秀吉はその貞節を憐んで忠興を諭して復歸させた。慶長五年忠興家康に從つて東征に從つた後、石田三成が人を遣はして夫人を人質にしようとしたが、承知しなかつたので、三成の兵數百に圍まれ、遂に門を閉ぢて二兒を刺し、城に火を放つて自殺した。古來烈女としてその名を殘してゐる。

〔杉原忠興の妻〕　忠興は天文の頃、尼子氏の爲に盡し、その亡後、毛利氏に從つた。武勇絕倫の士で當時威を近隣に振うた。妻は伯州山名豐清の女、豐清戰死の時二歲、美作に潛居してゐた。後、忠興に迎へられた。忠興戰陣に向ふに臨んで、他に嫁せんことをすゝめると、髮を切つて決意を示したので、忠興は大いに感嘆した。忠興の歿後、藝州奴田の佛通寺に入つて朝夕、忠興の靈を祀つた。

〔烈女〕　かたく操を守つて動じない女。節義の強い女。心のしつかりしてゐる女。

〔山內一豐夫人〕　天正六年一豐は祿五百石を食んで安土に在つた。時に陸奧から駿馬を引いて來た。一豐

心に欲しく思つたが價が高いので手が出せず家に歸つてふさいでゐた。妻がそのわけを問ふと一豐は、今會々駿馬を鬻ぐ者がある。これを得て功を樹てたいと思ふが、價が高くて購ふことが出來ぬ。それで色にあらはれたのであるといふ。妻が價は幾何ぞと問ふに、黃金十兩と曰ふ。妻乃ち十兩を鏡匣から取出し、一豐をして駿馬を購はしめ、主公信長をして、尙武心の渥きを嘆賞せしめたといふ事實がある。一豐は尾張の人。盛豐の次子。父の死せし時、年甫めて十三、初め織田信長に仕へ、後秀吉、家康に歷事し、功を以て土佐二十四萬石に封ぜられた。慶長十年卒去、年六十。妻は近江國淺井氏の士若宮友興の女。一豐に嫁して內助の功が多い。大阪の變の起つた時、田中孫作を遣はしてこれを一豐に知らせる。一豐はそこでこれを家康に告げた。ここにおいて始めて關西の狀況を知ることが出來たといふことも逸話になつてゐる。元和三年、六十一歲で京都に歿した。

〔貧苦に甘んずる〕　貧苦な生活に滿足してゐること。

〔その用意、その深慮〕　その平常の心がけと、さきざきに對しての思慮分別。

〔家を齊へる〕　家政を處理すること。

〔不倶戴天の仇〕　父の讐には倶に天を戴かないといふ意。轉じて必ず讐を求めてこれを殺し、同一の天地に生息しないといふ意。禮記の曲禮上篇に、「父之讐弗ニ與共戴ヒ天、兄弟之讐、不レ反レ兵、交游之讐、不レ同レ國。」とある。

〔津田八彌の妻〕　名は勝子、織田信長の侍女。八彌は農家の子で、信長に仕へて寵遇が厚かつたので、老臣佐久間七郎左衞門はこれと肩を並べるのを潔しとせず、人をして八彌を殺さしめ、美濃に入つて齋藤道三によつた。信行は信長に賴んで七郎左衞門を取返さうとしたが、道三は承知しない。勝子は信行の許を辭して美濃に入つた。或日、道三の子が鷹狩の途で、勝子の容儀を認め、召して侍女とした。かくて勝子は齋藤家に仕へて居る中、騎射の名簿中に七郎左衞門の名があるのを見て、その日請うてこれを見物し、不意に七郎左衞門に斬りつけてこれを殺した。道三夫婦は勝子の貞烈に感じ、金を與へて去らしめた。勝子は岡崎に赴き家康の城中に居たが、七郎左衞門の兄盛政が信長によつて勝子を受取らうとしたが家康は肯んじない。盛政怒つて刺客をして勝子を殺さうと謀つた。家康命じ二人の刺客を誘つて見附にさらした。信長大いに怒り、難の起らうとした時、勝子は我がために國難を構へるのは、我が本意でないといつて、謝恩の一書を遺して自盡した。

〔尼崎理也女〕　丸龜藩の足輕幸左衞門の女。二歳の時岩淵傳内の爲に父を討たれ、翌年母を亡くしたので、叔母の家に養はれた。成長して、身の素性を聞いて復讐の志を起した。その後藩士村瀨藤馬に從つて江戸に來り、諸家に仕へ苦心慘憺の中に身をおくこと十二年最後に本庄の幕臣、坂部安兵衞に仕へ、同じく同家に居た仇の傳内を殺して仇を報じた。

〔原元辰の母〕　原元辰は總右衞門と稱し、赤穗四十七士の一人、赤穗侯淺野長矩に仕へて、足輕頭として三百石の臣であつた。復仇後、死を賜つた時、年五十六。急變の起るや、即夜馳せて赤穗にこれを報じた。また母は遺書を遺して自殺し、元辰の志を激勵したことは人の知るところであらう。

〔赤穗四十七士〕　元祿十四年(百十二代東山天皇、五代將軍綱吉)勅使が江戸に下向した時、播磨赤穗の城

主淺野長矩は饗應役を掌つたが、高家吉良義央に辱められたのを憤り、殿中に於て義央を傷けた。爲に長矩は死を賜ひ、改易に處せられた。長矩の遺臣大石良雄等四十七士は、主君の讐を報いんがために具に艱苦を嘗め、翌十五年十二月義央の邸を襲うてこれを殺し、直に幕府に自首しその罪に服した。世人相傳へて美談とし、稱して赤穗の義士といつた。この事蹟は後、小說演劇、歌謠等によつて益々世に弘められ、世道人心に影響したことは尠くなかつた。

〔歌人〕　太田垣蓮月尼。野村望東尼などはその代表的歌人といふべきである。

〔俳諧者〕　俳人。捨女、園女、梢風尼、智月尼、秋色、千代等は江戸時代の女流俳人として名高い。「俳諧者」は俳諧を作る人。俳諧に巧みな人。「俳諧」は俳句に同じで五七五の句からなる季節の詩である。和歌を遊戲化して上の句と下の句とを連續せしめて樂しむ連歌の發句(第一句)のみが獨立したのが即ち俳句の濫觴である。

〔歷史家〕　「月の行方」、「池の藻屑」の著者荒木田麗女などはその代表的のものである。

〔勤王家〕　幕末に於ける野村望東尼、松尾多勢子、村岡局(津崎氏)の如きは女流勤王家として著はれてゐる。

〔後生恐るべし〕　「後生」は後に生まれたもの、即ち少年の意。少年は年富み、力强く、以て學を積んで待つことあるに足る。故に少年はその勢畏るべきであるとの意。論語子罕篇に「子曰。後世可レ畏。焉知ニ來者之不レ如レ今也。四十五十而無レ聞焉、斯亦不レ足レ畏也已。」

參考　各婦人の傳記は解說中に詳說しておいた。又これ等に關した參考資料は數限りなくある事故、適宜活用されるに委ねて、ここでは一篇の核心を簡單に述記するに止めたい。

神代は措いて、上古に弟橘姫、奈良時代に光明皇后、平安時代に紫式部、鎌倉時代に松下禪尼、吉野朝に瓜生保や楠木正行の母、戰國時代の山内一豐の妻、江戸時代に原元辰の母を、それ〳〵各時代の代表的婦人として擧げてある。これ等によつて示される德目は、犧牲の精神、貞節、慈悲、溫雅、節儉、忠烈、深慮、義勇などである。これ等を右にあげた各婦人が有することは即ち各時代の精神を、おのづから表現してゐるのであるが、我々として心がけるべきは、これ等の德目を一身に兼備することが理想的婦人であることを自覺することである。

一〇 羽衣（謡曲）

扱方 近古文學を代表するものといはれる謡曲のうち、最も優美な曲として、よく知られてゐる羽衣の一曲を採つた。室町時代の澁い趣味、思想、優長な世態人情がこつてこの藝術が生まれたものであり、後世の演劇の源流をなしてゐる點に於て、文學上重要な地位を占めてゐることは、今更いふまでもあるまい。羽衣の一曲にこもる當時の思想、趣味、世態の一面を窺はせることは勿論であるが、演劇の源流としてのそれを知らしめる爲には、出來るなら能狂言を見學させたいものである。それが出來ぬ場合には、先生がこれを謡つて頂きたい。それも出來ぬ場合は、生徒を各役にあてて對話式に讀み合せることもよい。尚參考として、羽衣の能を擧げておいたから、詞章と振りとの關係を說明され、生徒各自が能を舞ふつもりで、對話させるやうにされたい。

教授

語釋

〔羽衣（はごろも）〕 鳥の羽で作つた輕い衣。天人がこれを着て、自由に空中を飛翔するといふ。天衣ともいふ。こゝは勿論能の曲名で、いはゆる祝言ものとして最も有名なものであり、五流ともにある。シテは天人、ワキは漁夫白龍、他にワキツレとして他の漁夫が登場する。作者は結崎（後、觀世と改む）清次（觀阿彌）の子、卽ち觀世元清（世阿彌）といはれる。

〔シテ〕 爲手。一曲の主人公たる役。

〔ワキ〕 脇。爲手の相手。

〔ツレ〕 シテ、又はワキの副名。連れの義。シテヅレ、ワキヅレがある。

〔一聲（いっせい）〕 謡ひぶりの名。シテなりワキなりが舞臺に出て來て、まづ一聲に我が心、又は當面の景を謡ひかける章句をいふ。五七五七五、又は七五七五の調が常である。

〔風早（かぜはや）の三穗云々〕 萬葉集卷七、雜歌の「風早（かぜはや）の三穗の浦曲を漕ぐ舟の舟人さわぐ浪立つらしも」に據る。又玉葉集卷十五雜歌には「題しらず、讀人しらず。」として「風はやみ三保の浦曲を漕ぐ舟の舟人さわぐ波たつらしも」とある。風早の三穗の浦は紀伊にある。こ

こは同じ名所から轉じて、駿河國に用ひたのである。三保は三穗ともかく。駿河安倍郡にあり、駿河灣中に突出した長さ四十町餘、幅十町乃至二十町の砂嘴、風光明媚で、三保松原又は三保崎ともいふ。萬葉集の歌の意味は、風早の三穗の浦を漕いで行く舟に乘りこんでゐる水手どもが騒いでゐるが、恐らく海に荒い波が立つてゐるのであらう。「も」は感歎詞で、こゝはこの歌を引いて、三保の浦曲は荒海に續いてゐて、波風が荒いことを述べたのである。

〔浦曲〕 浦の灣入してゐる所。浦囘。

〔浦人〕 浦のほとりに住む人。漁師。

〔浪路（なみぢ）〕 波の上の船の通ふ路すぢ。ふなぢ。航路。「浦人騒ぐ浪路かな。」は浦人が騒ぐほどの波立つた海面であるの意。

〔サシ〕 謡ひぶりの名。詞に節を附けて謡ひ掛けるといふ程の意。

〔白龍（はくりょう）〕 漁夫の名。白鶴漁服の義にとつたのであらう。說苑、正諫篇に伍子胥が吳王を諫める話の中に「昔白龍下二清冷之淵一、化爲レ魚、漁者豫且射中二其目一、白龍上二訴天帝一、天帝曰、當是時一、若安置二面形一、白龍對曰、我下二清冷之淵一、化爲レ魚、天帝曰魚固人所レ射也、若レ是豫且何罪。」とあるに出たもので、貴人の微行に喩へた語である。一に伯良とも書く。魚に緣があるのでこの語を用ひたのであらう。

〔萬里の好山云々〕 頭註に較せた詩人玉屑の句に據つたもの「雲乍（たちまち）斂（おさまり）」を「雲忽ちに起り」としたのは、傳寫の際斂の字を讀得なかつた爲と思ふ。詩人玉屑の句の意味は、遠方にその美しい姿を見せる山々の連嶺にたなびいてゐた雲は見る〳〵消えうせてしまひ、高殿の上に雨後の月が明らかに照りわたつたといふのである。「げに長閑なる」明媚な景を形容したのである。詩人玉屑は宋の魏慶之の撰。二十卷。玉屑とは美稱であつて、魏志衞覬傳に「昔漢武神仙の道を信じて求め謂ふ、常に雲表の露を得、以て玉屑を餐すべしと。故に仙掌を立て以て高露を承く。」とあるのに本づいたのであらう。度宗の時に作つたもので、多く南宋人の詩話を收めてゐる。

〔時しもや〕 「しも」は感動詞の「も」に、語勢を强めるため「し」を添へた助詞。「や」もまた感動詞である。

〔春のけしき松原〕 春の景色を待つに松原をいひか

けたのである。

〔浪たちつゞく朝霞〕　松原が並みたちつゞくといふのに、浪が立ちつゞくを掛け、それに又朝霞が立ちつづくを掛けてある。

〔月も殘りの〕　有明の月をいふ。

〔天の原及びなき身〕　天に海人をかけ、美しく霞んだ大空の景色を賞するなどといふことは、漁夫のやうな卑賤な身には、とても及ばない意。

〔心そらなる〕　心が恍惚として無我の境に陷ることに、「空なる景色――空の景色」をかけてある。續後拾遺集巻十一、圓融院御製に「いかならばなき世とか思ふ見るからに心空なる天の羽衣」

〔歌〕　謡ふ部分。節付も細かに拍子に合せて歌ふ。

〔忘れめや〕　續古今集巻十、羇旅歌に「旅のこゝろを」として出てゐる中務卿親王の詠「忘れずよ清見が關の浪まよりかすみて見えし三保の浦松」に據つたもの。「忘れめや、山路をわけて清見潟云々。」とは、山路を分けて今この清見潟に來たが、こゝから眺めると遙か向ふに見える忘れようとしても忘れることの出來ない三保の松原へ、さあ一緒に連れ立つて行かうの意。山路を分けて來た清見潟にかけ、はるかに見た三保にかけてある。

〔清見潟〕　駿河國庵原郡興津町の南方海灣。古へこゝに關を置かれた。その址は興津の西の清見寺の邊であらう。歌枕の地である。潟は海岸の遠淺で、潮來れば隱れ、去れば現れる所。

〔風向ふ雲の浮浪云々〕　冷泉爲相の瀟湘八景の歌の中に「遠浦歸帆」として頭註の歌が出てゐる。歌の意味は、眞向ふから強く吹いてくる風に、あたかも雲の浮立つやうに荒い波が立ちはじめるに相違ないと見てとつて、舟人はまだ釣もしない前に匆々として引上げて行くといふ意。この歌を引用したのは、勿論前の「三保の浦曲を漕ぐ舟の浦人騒ぐ浪路かな」と照應させたのである。

〔待て暫し春ならば〕　舟人よ、暫く待ち給へ。慌てて歸るには及ばない。風が吹けば浪は立つが、その風にもいろ〳〵ある。今は春であるから、春の風は波を起す程に暴くはない。長閑なものとの意。

〔松は常磐の聲〕　松は永久變らず松籟を起してゐるものぞ。松は常磐樹であるから、松風も永久に絶えぬといふ意。松籟を聞いて俄に疾風だなどと思ふのは、間違であるといふ意が寓してある。

〔朝なぎ〕　朝風。朝、海軟風と陸軟風と交迭する時、一時風がやんで波が靜かになること。夕なぎもある。「なぎ」は風が止んで波が穩かなこと。

〔我三保の松原にあがり〕　すでに山路をわけて清見潟に出で、清見潟から三保の松原に來たことをいふ。

〔虚空に花ふり〕　虚空は大空のこと。これは印度思想であつて、瑞兆には、天、蓮花をふらし、天人樂を奏するのが例である。こゝも天女が將に人間界へ降らうとするのでこの現象がある。

〔靈香四方に〕　貴い香、神聖な香、又は靈現のあらはれるやうな感のある香が、四方ににほふこと。

〔これなる〕　これにある。この所にある。

〔色香妙〕　色香がすぐれてめでたいこと。

〔いかさま〕　いかにも。なるほど。

〔なう〕　人を呼びかける聲。

〔何しに召され候ぞ〕　どうして御持去りになるのですか。「召され」は「召す」の敬語。こゝはお持ちになる意。

〔候よ〕　「よ」は語意を強めていひきる時に用ひる。

〔天人〕　佛教では天界に住する半人半神の女。天女ともいふ。元來佛教以前の印度の神話では、水神女(Apsaras)といふものがあり、水中の靈で、又同時に水靈として空中に飛翔するものであつたが、佛教ではこれと一般の女神(Devata)とを混交し、或は元來天上の靈であつた者、或は人間の死靈で天上に生れた女神を總括して、これを天女(Devata)と呼ぶやうになつた。天女のうちには一定の名稱があるものがあるが、多くはその個性が明らかでない。天女は天衣をまとうて空中を飛行し、或は夜中光輝を放つて現れ、又は林間、水邊に現れて佛道修行者に敬意を表し、これに奉事し、或は又道を聽き、人に交はることがあるといつてゐる。

〔さもあらば〕　さうであるならば。それなら。

〔末世の奇特〕　末世は道德の地に委した世をいふ。澆世。澆季。奇特は珍しく、尋常に勝れてゐること。「末世の奇特に」は、末世としてはいかにも珍重すべきものとしての意。法華經に「海有二奇特殊勝法一。」

〔飛行の途〕　ヒギャウノミチとよむ。

〔さりとては〕　さうとは、さうとしてもの意。こゝもワキの末世の奇特云々の語を受けて、さやうであらうが返して下さいといふ意。かくなる上は頼むより他に道がないからいつたのである。

〔力を得〕　圖にのるといふ程の意。

〔心なき、天〕　「心なき」は情知らずのこと。無情なこと。心なき海人に天をかけてある。

〔下界〕　佛教の語。天上に對してこの世界の稱。

〔とやあらん、かくやあらん〕　あゝもしようか、かうもしようかといふこと。「や」は疑の意。

〔せんかたも、涙〕　せんかたも無しを、涙にかけてある。

〔地〕　對話でない説明の條の文。能では樂座で歌ふことを、地とも同音とも同吟ともいふ。

〔露の玉かづら〕　露の玉から玉で飾つた鬘にいひかけ、かざしの花の萎れるのに續けてある。かづらは古昔、鬘草を頭髪の飾としたものであるが、玉鬘は多くの玉を緒に貫き、頭に懸けて飾としたもの。古事記下巻に「卽爲二其妹之禮物一、令レ持二押木之玉鬘一而貢獻一」

〔かざしの花も云々〕　これは天人五衰の一に、花鬘忽ち萎むことがあるからである。「かざし」は挿頭花。古昔、冠又は頭にかざした花枝、又は造花の稱。「しを」とは萎れるさま。

〔天人の五衰〕　佛教語。欲界の天人が結終の時に表す五種の衰相。諸説があり、天人因果經には「身淨不レ受二塵垢一（中略）福盡之時五衰相現、一者頭上華萎、二者眼瞬、三者身上光滅、四者腋下汗出、五者自然離二於本座一」とあり、俱舍論には「一者衣二染塵埃一、二者花鬘萎悴、三者兩腋汗出、四者臭氣入レ身、五者不レ樂二本座一」とある。不樂本座とは、我が居所を樂します、心の安くないこと。

〔あさまし〕　興さめたり、あきれるばかりの意。

〔天の原ふりさけみれば云々〕　「あまのはらふりさけみれば霞たち家路まどひてゆくへしらずも」に據つたのである。この歌の意味は、（無情な老夫婦に追出された天女が涙を拭つて嗟歎して歌つたものであるが）大空を仰いで見ると、霞がほの〴〵と、たな引いてゐて、再び天上へ歸ることも出來ず、といつて下界にも身を寄せる所もなく、いづこに行つたらいゝのかまことに心細い事であるの意。「ふりさけみれば」は振仰いで遠望することで、阿倍仲麿の「天の原ふりさけみれば云々」もこの例である。

〔雲路〕　家路をいひ換へたのである。家路を家にかへる路とすれば、雲路は雲を分けて天上にかへる路である。

〔迦陵頻伽〕　迦陵頻迦とも書く。極樂淨土に棲むといふ鳥。不死の鳥で、その聲は微妙で、如來の音聲以外に天人もこれに及ばぬといふ。常に天人に從つて遊ぶ。面は美人の如しといふ。教鳥、妙音鳥、逸音鳥などと意譯する。

〔なれ〳〵し聲今更に云々〕　迦陵頻伽の聞きなれた啼聲も、今となつては辛うじて耳に殘つてゐるばかりであるの意。

〔天路を聞けば〕　春であるから雁は北に歸る。我が住みなれた天路を歸り行く雁が音を聞けばの意。天路は大空の路である。雁が音は雁の啼聲、後、雁そのものをいふやうになつた。

〔千鳥かもめの沖つ浪〕　沖の浪の上を千鳥、かもめが飛び交うてゐるのを目前に見るので、かういつたのである。「行くか歸るか」は寄せてはかへるといふやうな意味で浪に附け、更に春風が吹き來り吹き去るにも掛けてある。

〔空に吹くまで〕　空に吹いてゐる春風までも（ゐるのさへも）懷かしい。空を飛行するものをすべて懷かしがる天女の切な心情を表したものである。

〔いかに申し候〕　呼掛けて、「やあ」とか「まあ」とかいふやうに、感動を含んだ語である。「申候」には別に意味はない。

〔申さうずる〕　申さんとするの意。

〔暫く〕　暫く待つて下さいの意。

〔承り及びたる天人の舞樂〕　舞樂は舞の伴なふ雅樂。奈良時代に作られた天人樂といふ雅樂がある。大食調であるが今は傳はらない。こゝはそれを指す。

〔歸らんことを得たり〕　すでに還ることが出來たほどの喜であるから、時の完了を用ひ、「得たり」と斷定したのである。實に力の籠つた表現である。

〔とてもさらば〕　いつその事に、ぢやあ。

〔人間の御遊のかたみの舞〕　人間の御遊の一助にもと、天女が降つた記念としての舞樂を留め殘さうといふ意。御遊とは管絃を奏して歌舞すること。

〔月宮を廻らす舞曲〕　月は月宮殿に住む天子で、衆多の侍女が常にそのまはりに舞遊んで、空中に旋轉するといふ。「めぐらす」は感動させる意といふ説もあるが、無理な解と思ふ。

〔世のうき人〕　憂世の人といふに同じ。天人に比して憂き事が多いからいふ。

〔さりとては〕　「しかありとては」の約。それにしても。何にしても。

〔天にや上がり給ふべき〕　天に昇つて、おしまひになるだらう。「や」は疑問。

〔疑は人間にあり天に僞なきものを〕　天人には僞といふ惡はない。僞と疑とは人間界にのみあるものであるといふこと。丹後風土記に天女の言として、「凡天人之志、以レ信爲レ本、何多二疑心一、不レ許二衣裳一。」とあるに據つたもの。本篇の主眼點である。

〔霓裳羽衣の曲〕　唐樂の曲名。唐の玄宗皇帝が或夜天上月宮殿に遊ぶと夢み、仙女の舞容の美しく、聲妙なるを忘れかね、天樂に象つて作つた曲。龍神錄に「八月望日望明皇、與二申天師一遊二月宮一、寒氣逼レ人、霜露霑レ衣、過二一大門一、在二玉光中一、見二一大府一、榜曰二廣寒淸虛之府一、少前見二素娥十餘人一、皓衣乘二白鸞一、笑二舞於廣庭大桂樹下一、樂音淸厲、止皇歸製二霓裳羽衣曲一。」とある。今日はこの曲は傳はつてゐない。霓は蜺と同じく「にじ」である。霓裳羽衣といふ名稱は、仙女の衣裳を形容して名づけられたものである。

〔天の羽衣風に和し〕　羽衣が春風のまに〳〵吹かれる意。長恨歌に「風吹二仙袂一飄々擧。」

〔雨に潤ふ花の袖〕　前の「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵」と照應する。雨に濕うて花の色がいよいよ增すやうに、涙に濡れた袖も今羽衣を返し與へられた喜のために、一層華やかになつたといふ意を含んでゐる。

〔東遊の駿河舞〕　東舞とも駿河舞ともいふ。遊は今日いふところの遊戲の意でなく、古へは歌舞を演奏することに用ひた語で、前出の「御遊」といふのもこれと同意である。卽ち音樂のこと。一歌、二歌、駿河歌、求子歌、大比禮の五種があり、古への東國地方の風俗歌を合せた舞で、六人摺衣で舞ふ。歌四人、笛、篳篥、和琴各一人、琴持二人を一組とする。中古以來神事に用ひられ、今は春秋二季の皇靈祭に宮中賢所の庭上で

奏せられる。新井白石の樂對に「東遊といふ事は歌舞の內にして風俗の部の一なり。その舞の始は、駿河有渡濱に神女降りて、舞遊ぶ事ありしに起る由申し傳ふるなり、安閑帝の事にぞありける。」又豐原統秋の體源抄に「丙辰記云、人王二十八安閑天皇御宇、敎到六年（丙辰の歲）、駿河國宇戶濱に天人あまくだりて歌舞し給ひければ、周瑜が腰たをやかにして、海岸の春柳に同じく廻雲のたもとあがりて、江浦の夕風にひるがへりけるを、或翁いさご堀りて、中にかくれてゐて見傳へたりと申せり。今の東遊とて、公家にも諸社にも行幸には必ずこれを用ひらる。神明ことに御受納ある故なり。その翁はすなはち道守氏にて、今の世までも傳るとかや。」「あづま」は吾妻で日本武尊が碓氷峠に登り、その妃、弟橘姬を追懷し給ひ、東方を望んで「あづまはや」といはれた故事より出た東國の稱。

〔この時や始めなるらん〕　前項東遊の起源に就いて書いたやうに、天人の初めて舞ひだしたといふ傳說をこれに引當てていつたのである。

〔久方の〕　天にかけていふ枕詞。轉じては天空の語意に關係あるあめ、あま（雨、天、蜑）、月、雲、空、夜、星、光につゞけ、又、天つ都、天の鏡といふのを略して、都、鏡などにもかける。「ひさかた」の語原については諸說あり、一定しない。

〔いつぱ〕　「いふは」を強めていつた當代語。

〔二神出世〕　伊弉諾、伊弉冊の二神出現をいふ。

〔十方世界〕　東西南北と、四維卽ち東南、東北、西南、西北及び上下の十方の世界。

〔限りもなければとて〕　かぎりもなく廣く、永久につゞくところから——。

〔月宮殿〕　起世經に「佛告二比丘一、月天子宮殿縱廣正等四十九由旬、四面垣牆、七寶所レ成、月天宮、宮殿純以二天銀天靑瑠璃一而相間錯、二分天銀淸淨無レ垢、光甚明、餘之一分、天靑瑠璃亦甚淸淨、表裏映徹、光明遠照、亦爲二五風攝持一而行。」

〔玉斧の修理〕　月宮殿にふさはしい斧で行つた修理をいふ。玉斧は斧の美稱。月斧ともいふ。方回詩に「玉斧難レ修舊二月輪一。」の句があり、西陽雜俎を見ると、「月桂高百丈、下有二一人一恒祈レ之、樹創隨合、人姓吳名剛、西河人、學レ仙有レ過、謫令レ伐レ樹。」とあつて、ここでは謫居といふやうな意はなく、單に月宮の修理は

不斷に行はれて、佳麗なことをいつたものである。

〔白衣、黒衣の天人〕　月宮殿には三十人の天人がゐて、その一半は白衣、一半に青衣を着する。十五人が月宮に入り、青衣の十五人が外に出るので白光の滿月となる。十六日には白衣十四人、青衣一人である故月少しく黒くなり、次第に一夜一人づつ交替する。月の盈虧はこれがためであると、佛典に説いてゐる。これは天女に見立てて青衣を黒衣とした。

〔數を三五に分つて〕　三五十五人づつの二組に分けて、白衣、黒衣の天人が各部署を定めて、月宮殿に奉仕する意。

〔一月夜々の天少女〕　一箇月三十日の毎夜を三十人の天女が、順番にかはる〳〵奉仕する意。

〔我も數ある〕　我もその三十人のうちに數へられる一人であるといふ意。

〔月の桂の身を分けて〕　月の中に桂の木があるといふ支那の傳説により、桂の實に身をかけ、われ月界に住む身を分けて、假に下界の東に降つて、駿河舞を舞ふとの意。「身をわけて」は桂の實が落ちるといふ傳説もあるから、それに關聯して天人の降下の意も寓してあるのであらう。月の桂は月の中に生ふるといふ高さ五百丈の桂の木。「舞をする」を「するが舞」にかけてある。

〔クセ〕　謡ひぶりの名。昔の曲舞の名殘で、一番中の骨子ともいふべき大切な部分。

〔春霞たなびきにけり云々〕　天上の戀しき心を霞に寄せたのである。後撰集卷一、春歌上に「延喜の御時歌めしけるに奉りける。」といふ詞書で頭註の歌が出てゐる。歌の意味は、春霞がたなびく頃になれば、下界の草木ばかりでなく、月の世界の桂木までも花咲くであらうの意。

〔花かづら色めく〕　花かづらは時節の花を絲に貫いて挿頭にするもの。「色めく」は色が生ずる、色が美しく見える意。前の「かざしの花」と照應する。かざしの花までも色めくは、春になつたしるしであらうとの意で、羽衣を取返した喜びのまざ〳〵と顯れたさま。

〔こゝも妙なり〕　こゝは下界。天上だけでなく、下界にも妙なる眺はあるとの意。

〔天津風〕　古今集卷十七、雜歌上に「五節の舞姫を見てよめる良岑宗貞」として「天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばし留めん」といふ歌が出てゐる。良岑宗貞は、僧正遍昭の俗名である。天を吹く風よ、雲の通ふ路を吹閉ぢてくれ。さうすれば天少女は天へ歸る事が出來ないで、その美しい姿を暫く下界に留められようの意。でこの歌を引いて、暫く下界にとどまるから、雲の通はないやう空吹く風に賴む意である。

〔春の色を三保が崎〕　春の色を見るを、三保にかけてある。

〔月清見潟〕　月清を地名に掛けたのである。

〔いづれや春の曙〕　いづれ（いづこ）から春は明けそめるかといふのと、いづれか春の曙にふさはしからぬ景色なるべきぞといふのと掛けてある。有明月のかかる清見潟、眞白な富士の雪、いづれも劣らぬ春曙の景色であるといふ意。

〔たぐひ浪〕　類なしを浪にかく。

〔天地は何を隔てん〕　隔てといつたので、玉垣を緣語とし、垣といふので內外といひ續けた。玉垣は神社の周圍に設ける垣で瑞籬、神垣ともいふ。內外の神は伊勢の內宮、外宮の神をいふ。下界（こゝでは日本）はこの內外の神（天照大神）の御子孫の知ろしめす御國

なれば、天上界と隔てることはないといふ意。外宮は豐受大神を祀つてあるが、こゝの內外の神は、單に天照大神を指したものと解してよい。玉垣內國は日本國の古稱である。

〔君が代は云々〕　拾遺集卷五、賀に「題しらず、よみ人しらず。」として頭註の歌が出てゐる。奥儀抄に「經にいふ。四十里四方の岩を、三年に一度梵天より下りて三銖の衣にて撫でつくしたるほどを一劫といふ。君が代はかやうになでても盡きぬ巖ならんとなり。」とある。「まれに」は稀で、稀に來て撫でても盡きないの意。羽衣を稀に著てと來てにかけてある。

〔聞くも妙なり〕　上の君が代の歌と、下の東歌との双方にかゝつてゐる。

〔東歌〕　萬葉、古今等に載つた東國人の詠歌をいふ。但しこゝは東遊の歌の意である。東遊の舞曲に用ひられた歌で樂譜に載つてゐるのは一歌二歌、駿河歌、求子歌、加太於呂之等で、延喜二十年の敕定とある。

〔笙〕　竹で作つた樂器、十九管又は十三管を、立てて横から吹く一種の笛。しやうのふえ。

〔笛〕　口で吹く管簫類の樂器。神樂笛をはじめ、横笛

高麗笛等その種類が多い。

〔琴〕　七絃である。倭琴に對して唐琴ともいふ。長さ三尺七寸。

〔箜篌〕　竪箜篌と臥箜篌との二種がある。前者は體曲つて長く、二十五絃又は二十三絃あり、地に立て竪に抱いて兩手で齊しく奏するもの。後者は形が琴に似て五絃あり、撥を用ひて琵琶のやうに彈く。又、それに鳳首の飾のあるのを鳳首箜篌といふ。もと印度より起つて支那に傳はり、百濟を經て我が國に入つたから、百濟琴ともいふ。

〔孤雲の外〕　大江定基入道寂昭が竹林寺で終焉の折、詠じた詩「草庵無レ人扶レ杖立、香爐有レ火向レ西眠、窒歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」に據つたもの。又「雲の上に仄かに樂の音すなり人にとはばやそらきかすとも」といふ歌もある。「孤雲」はたゞ一片のはなれ雲、「聖衆」は極樂にある諸菩薩たちをいふ、「孤雲の外に充ち滿ちて」は、孤雲の外まで響きわたる意。

〔蘇命路の山〕　須彌山、梵語 Sumeru の音譯。修迷樓、蘇迷盧、略して迷盧ともいふ。妙高山と意譯する。落日の紅は、染色にかけたのである。佛說に水陸分れる時、金、銀、瑠璃、玻璃の四玉を淘汰して須彌山となさしめ、一世界の中央金輪の上にあつて七山七海環り列つた。水面から高さ八萬由旬、縱橫またこれに同じである。日月はこれによつて廻り、諸天もこれに居し、六道四生二十五有界みなこれに住むといふ。山の東面は白銀(白)、西面は玻璃(赤)、南面は瑠璃(青)、北面は黃金(黃)から成る。その四玉が赫々として天上を射映し、四方の空色を染出すといふ。紫式部の歌に「北は黃に南は青く東白西くれなゐにそめいろの山」とあり、謠曲の文と語の續きも似てゐる。卽ち蘇命路を染め色にかけ、こゝでは富士山を蘇命路の山に見立てたのである。「うつす」は反映する意。

〔浮島が佛ふ〕　浪に浮くを浮島の地名に浮島が原を拂ふにかけたのである。「綠は浪に」の綠は浪の色。「拂ふ嵐に花ふりて」は前の「虛空に花ふり」と照應し「拂ふ嵐」は袖を振る形容である。浮島が原は駿河國駿東郡愛鷹山の裾、須戶沼附近の原野四五里の間の稱で、古來歌枕として有名な地である。

〔雪を廻らす〕　落花粉々を雪にたとへたもので、廻雪といふ舞曲の名を、白雲の袖に續けたのである。

〔白雲の袖〕　天女の衣の袖を白雲に見立てた語。

〔南無歸命〕　南無は梵語 Namaḥ の音譯。意譯して歸命、敬禮、歸敬などといふ。有難さに命をさし出して佛の恩德に依賴し、佛の救に歸依すること。

〔月天子〕　佛敎語。月宮殿に住して月世界を統治する神。月の神。月光菩薩。日天子に對して、月をいふ。

〔本地大勢至〕　本地は垂迹の對。衆生濟度の方便として佛菩薩がかりに神明と現れた垂迹神に對して、その根本の眞實身たる佛菩薩を本地といふ。大勢至は菩薩の名。淨土三尊の一。鎌倉の初葉盛んに唱へられた兩部習合の說に依れば、天照大神は日天子で觀音の垂迹素戔嗚尊は月天子で勢至の垂迹であるといふ。(諸神本懷集)卽ち月の本地を大勢至菩薩としたので、空の月は無意味に廻轉してゐるやうでも、その實は大勢至菩薩で、我々を救ひ導く爲に、假に月の形となつて、我我に接するのであるといふ。大勢至菩薩は觀音とともに阿彌陀の挾侍として右に立つてゐる佛。南無以下は月を拜む詞。

〔春立つ〕　立つは裁つに通じ、衣の緣語。前句及びこの句は、ともに舞衣を形容したのである。

〔裳裾〕　古へ腰より下部に著けた衣の稱。

〔さいうさ〕　古への舞踏に左へ行き、右へ行き、又左へ行く振がある。が、こゝは必ずしも左右左とばかりは限らぬ。單に舞ふさまをいつたのである。

〔さいう颯々〕　左の音から颯々にかゝる。颯々は風の音。すべて颯爽たるさまをいふのである。

〔東遊の數々〕　東遊の歌曲には前記(東遊の駿河舞の項參照)のやうに數曲を含んでゐるから「數々」といつたのである。

〔その名も月の宮人〕　「その名も」とは東遊の歌名にも掛けて、名が永く傳はつて盡きぬを月にいひかけ、又數々盡きぬ宮人の多きにも通はしてある。

〔三五夜中〕　陰曆の十五日の夜を三五夜といふ。特に八月十五日の夜の稱。

〔滿月眞如〕　願望十分に足つて本然の眞心にかへるをいふ。滿月の形を所願の缺けることなきに比べる。眞如は月の一點の曇もないやうに煩惱の雲が解けてあらはれ出た心の本體を指す。心地觀經に「凡夫所レ觀菩提心相、猶如三淸淨圓滿月、於二胸臆上一、明朗而住。」

〔御願圓滿、國土成就〕　月の本地たる勢至菩薩が高

く虚空に月となつて現れ、人の願を叶へ、國土を泰平豐饒ならしめること。

〔七寶充滿の寶〕　七寶は七種の寶物。阿彌陀教には金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲、赤珠、瑪瑙をいひ、法華經には金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、眞珠、玫瑰をいふ。又、金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀ともいふ。七寶充滿の寶とは數々の寶といふに同じ。誓願成就の結果これを降らすのである。

〔三保の松原云々〕　三保の松原から浮島が原へ、富士の高嶺へ、そして終に大空の霞の中に天女が消え失せてしまつた意。

〔愛鷹山〕　雲の脚を愛鷹山にいひかけてある。この山は足高山とも書く。駿河國駿東郡と富士郡とに跨る。富士山の東南麓。沼津の西北に位し、高さ三九一七尺、徳川時代には牧場の設があつた。三保の松原からは駿河灣を前にして富士の右手に見える。

〔霞に紛れて云々〕　さきに「春霞たなびきにけり」に對して、戀しいところに歸り行つた天女を惜しとの餘情を添へたのである。

鑑賞批評　數多い謡曲の中でも、羽衣は最も優美なロマンティックなものである。この中には悲しみがない。いや「涙の露の玉鬘かざしの花もしを〳〵」と天人の歎き悲しむ悲しみはあるが、しかしそれも何といふ美しい、悲しんで反つて美しいやうな悲しみであることだらう。漁夫が濱邊の松に掛つてゐる羽衣を見てすつかり悦に入つてしまひ、天の羽衣と聞いて益々手離せなくなるその氣持、天人ともあらう者が、その漁夫に「さりとては返したび給へ。」と哀願し、「とやあらん、かくやあらん」と悲しみ迷ひ、天翔る雁を羨み、空高く吹く春風をなつかしみ、ひたすらはるかなるふるさとの月の都を慕ふその氣持、また、その天人のなげきを見て氣の毒になつて、遂に羽衣を返さうといふ漁夫、返さうと聞いて、「あらうれしや、……うれしや」と喜ぶ天人、——それ等の單純なナイーヴな心の動き、すべては我々のたましひをくすぐるやうな愛らしさと美しさを持つてゐるのである。幼い時母の懐に抱かれて夢みたその夢のやうな、懐かしさ、夢幻美を持つてゐるのである。更に、天人が漁夫の懇望にまかせて「月宮をめぐらす舞曲」を演じながら、「空も水も一つ色に澄みわたつて、遙かに見るや富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と天と地を、青と白に染分けてゐる」三保の松原に演じながら——いつとはなしに、「天つみ空の霞に紛れて失せて」行くあたりになると、正にロマンティシズムの極致といふべきであらう。いふまでもなく能は詩劇である。そして本課はその臺本たるべき詩——謡曲である。従つて我々は、意味の不徹底や言葉の矛盾などを穿鑿してはならない。たゞ、作者のここに盛りこんだ詩美の魅力、それを歌ひ表した、目もくらむばかりの技巧的な言葉づかひの魅力に恍惚として浸ればよいのである。が、また我々が、特にこの羽衣の曲についていはねばならないのは、この美しい曲の中にも、いかに微妙に我が國民性が織りこまれてゐるかといふことである。それは、白龍が松の枝にかゝつた羽衣を取つて歸らうとするところで、前には「家の寶となさばやと存候。」といひ、天人の羽衣と聞いて急に「國の寶となすべきなり。」といつてゐるところが、いかにも家と國、私と公との輕重の差をよく現し、當然私よりも公を重んずる我が國民性の發露と見べきであるし、またクセにも「その上、天地は、何を隔てん玉垣の云々」といふ所があり、天人も亦「君が代は天の羽衣稀にきて……」と謡つてゐる所などは、日本は神のつくつたものであり、その君は、神の末であるといふ、我が國古來の國民思想が語られてゐるのである。しかもかういふことが、この優美な曲中にあつて、いさゝかも不自然さや破綻を見せてゐないところに、作者の才能も窺知し得られるのである。なほ、「疑は人間にあり天に僞なきものを。」「あら耻づかしや……」などいふところも、以上のやうな見地から見て、いかにも意味深いものと思ふ。

參考

羽衣の能

三番目物に普通な悽婉妄執の氣なく、一曲を通じて、春の日のうらゝかな長閑な趣に充ち滿ちてゐる。その結構の美しい上に、めでたい文句も少くないので、喜が多き曲として、新年の初會や祝の催しには、番組に上せられるのが常である。季は三月。太皷がある。

囃子方が座に着くと、後見が松の作物を持つて出て、舞臺正面先に置く。松には紫地の長絹が懸つてゐる。いふまでもなく、天人の羽衣に擬したものである。

後見が引くと、一聲の囃しになつて、ワキはツレ二人を從へて出る。段鼓斗目の着附、白大口、紐水衣の肩を取り、縫紋腰帯、扇を指す。ツレは水衣が縷、そして漁

夫のことであるから、三人とも釣竿をかたげてゐる。三人は舞臺内へ入つて向きあひ、「風早の」と謡ひ出す。この謡が濟むと、ワキだけ正面へ向いてサシになり、白龍といふ漁夫なりと名のる。「萬里の好山」にから又向きあひ長閑な景色にさそはれて、釣に出た由の下歌、上歌があり、終るとツレ二人は地の前に着座し、ワキは後見座にくつろぎ、棹を置いて扇に持ちかへ、常座に立ち出て三保の松原に上つた詞となり、「これなる松にうつくしき衣掛れり。」と作物の松を見て、長絹に目を留め、立ち寄つて長絹を取り、兩手に持つて家の寶ともなすべく歸り行く心で、ワキ座の方へ行きかゝる折しも、幕が揚る。

「のうその衣はこなたのにて候。」とシテは呼掛けながら出る。面小面、襟白二つ、天冠、長鬘(平元結附け)、髪帶、着附箔、縫箱腰卷、葛扇を持つ。いはゆるモギドウ姿である。シテは己の衣をワキが持去らうとするを咎めワキは拾つた物であるからかまはぬといひ、衣を返せ、返さぬの押問答となり、このうちにシテは、靜々と橋掛りを歩み來つて、舞臺内へ入り、常座に止つて、羽衣なくては飛行の道も絶ゆるを悲しむ詞となり、「さりとては返したび給へ。」と嘆願する。ワキに情なく斥けられて、

今はせん方もなく、「かざしの花もしを〳〵と」とうち萎れたる心持で、「天人の五衰も……」と面をくもらせる。

「天の原ふりさけ見れば」と空を見あげて、ゆくへに惑ふものの如く、「住馴れし空にいつしか……」と右を受けて、上を見やつては行く雲を羨む心をあらはし、打切に直して、「迦陵頻伽のなれ〳〵し」の返しから、徐ろに出、雁の歸り行くを見て、「天路を聞けばなつかしや。」と前を見上げ、「千鳥鷗の」左へ廻り、「空に吹くまで」とシテ柱先で、前に「天の原」と見上げた空を再び見て、しをしをと少し退りながらシオル。

ワキはさすがに憐に思ひ、月宮の舞曲を奏する約束をさせて、衣を返すこととし、「羽衣を返し與ふれば」と謡ひながら、ワキは長絹をシテへ渡す。シテは默つたまゝ兩手で受取り、後見座へ行つて物著となり、長絹を着る。

物着が濟むと常座へ立ち出で、「少女は衣を着しつゝ」と謡ふ。この物着後は、前と變つて晴々しい心持になる。ワキと懸合になつて、その止「舞ふとかや。」とワキへ詰足。地の「東遊の駿河舞」でサシ込み聞いてくつろぐ。

クリの打カケを開きながら大小前へ行き、クリサシ以下正面を向いたまゝで、何も形はない。たゞクセ前「世

に傳へたる曲とかや。」とユウケンする。

クセは舞クセ。「春のしるしかや」と拍子一つ踏み、「面白や天ならで」と右を受け、「ここも妙なり」と直して「雲の通路」と正へ出、「少女の姿」と開き、「しばしとどまりて」と右を受けて二足詰め、「この松原の」とサシ廻して、「春の色を」と開き、「三保が崎」と角へ行き、「月清見潟」と角を取つて左へ廻り、「春の曙」と中程で開いて、打切までに左右、打込んで開く。「その上天地は」と正へ直して、「何を隔てん」と右へ廻り、「內外の神の御末にて」と中程で開き、以下左右、打込んで扇を廣げる。

「君が代は」と謡ひながら上ケ扇をし、以下例の如く大左右拍子一つ踏んで正先へ打込み、「數々の」と開いて、「笙笛琴箜篌」と身を變へ、「孤雲の外に充ち滿ちて」と正へ出て開き、「落日の紅は」と右へ廻り、「蘇命路の山をうつして」とシテ柱先で正へ雲の扇をし、「緑は波に浮島が」とサシて角へ行き、「拂ふ嵐に花ふりて」と下からカザシ見て左へ廻り、大小前で左右する。

クセ止めに太鼓打出し、聲合を聞いて、「南無歸命月天子云々」と合掌しながら謡ひ、「東遊の舞の曲」と常座へくつろぎ、序ノ舞となる。舞上げてワカ上ゲ扇し、「又

は春立つ霞の衣」と左右しながら出て、「色香も妙なり」と謡ひながらサシ込み開き「さいうさ」と左右し、角へ行き、「花をかざしの」と扇で頭をサシ直して左へ廻り、大小前で「靡くも返すも」と小廻りし、「舞の袖」と打込み開き、破ノ舞。キリは一曲中で最も快く、爽やかな氣持のする見所である。さて「東遊の數々に」と中左右、打込んで開き、「その名も月の」と正へ出て、「色人は」と開き、三五夜中のと角へ行つて角を取り、「空に又」と上を見て左へ廻し、「國土成就」と中程で正へ開き、「七寶充滿の寶を」と招き扇をして正へ出て開き、「國土にこれを」と扇を左手に取り、「施し給ふ。」と扇を平にして、寶を施與するものの如くに扇を前へ出し、「さるほどに」と扇を下げて左へ廻り、「時移つて」と地の前から常座へ行き、「天の羽衣」と脇正面の方へ三足出、「たなびきたなびく」とハネ扇をしながら正先へ出、「三保の松原」と扇を折返して角の方へ向いて見、「浮島が雲の」と扇を左手に持直しながら角へ出て左へ廻り、「愛鷹山や」とワキ座からシテ柱の方へ、高嶺を目當の心でサシて行き、「幽になりて」と常座でカザシ廻り、「霞に紛れて失せにけり。」と開いて右受け、袖返し留拍子踏む。(謡曲界による)

一一 孔明出廬

土井晩翠

（天地有情）

扱方 南陽隆中に閑臥すること二十餘年の孔明は、天下の覇者たらんと雄視する蜀漢の劉備に見出された。備みづからその草廬に孔明を訪ふ事三度、孔明その意氣に感じ、一朝にして蹶然起つて天下三分の計を策したのである。二英傑の邂逅まことに千載一遇、備が「孤の孔明あるは猶魚の水あるが如し」といひ、孔明「臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を效し、これに繼ぐに死を以てせざらんや」と明言したのも、また故なしとしないのである。人生只意氣に感ずる。一つの史詩の形を藉りてそれをあらはした崇高な、莊嚴な、悲壯な詩美を、高吟又は低唱、心ゆくまで味はせたい。

教授

作者

土井晩翠　ツチヰバンスヰ

英文學者、詩人。第二高等學校名譽教授。名は林吉。明治四年十月二十三日、仙臺に生る。第二高等學校を經て、同三十年東京帝國大學英文科を卒業。突如詩壇に出でて獨自の詩風を拓き、その詩情の衰へた頃、英佛獨の諸大學に學び、歸來久しく母校教授となつて、今日に至つてゐる。處女詩集「天地有情」をはじめ「曉鐘」「晩翠詩集」「東海遊子吟」の他に譯著「衣裳哲學」「チャイルド・ハロウドの巡禮」「ナポレオン性格論」「カーライルの英雄論」がある。

引用書

天地有情——土井晩翠の詩集。明治三十二年四月、東京、博文館發行。詩篇四十。附錄にカーライル、シエリ、ジョルジュ・サンド、エマスン、ユゴオ等の詩論抜萃を收めてゐる。暮鐘、星落秋風五丈原、星と花、馬前の夢、夕の思等が代表作である。これは處女詩集であるが、同時に晩翠の最高詩境を示してゐるのである。本課は星落秋風五丈原と題する六齣より成る史詩（孔明の一代を叙したもの）のうちの第二齣で、孔明が劉備の知遇に感じて南陽の草廬を出ることを歌つたもの。

語釋

〔南陽の舊草廬〕「南陽」は支那河南省南陽府から湖北省襄陽府にいたる一帶の地をいふ。諸葛孔明はもと

この地に住居してゐた。本課の「星落秋風五丈原」（六齣より成る）の第一齣は、孔明が五丈原の陣中に病重いことを歌つてゐる。本課に採つたのはその第二齣であつて、その病中の懷古といふ形式になつてゐるので「舊草廬」といひ、次句も「二十餘年のいにしへの」と言つたのである。

〔隴畝〕 田園といふ程の意。「隴」はろう。田中の高處の意。「畝」は田のうね。

〔王佐の才〕 王者の輔佐となるに足る偉大なる才能。

〔たゞ一曲の梁歩吟〕 ただ一曲の梁歩吟（歩は、甫または父に作る）にその懷抱を寄せるに過ぎないといふ意。「曲」は歌謠の一章一闋をいふ。孔明の詩作になる「梁歩吟」は次の如きもの。

歩出二斉城門一、遙望二蕩陰里一、
里中有二三墳一、纍々正相似、
問是誰家塚、田疆古冶氏、
力能排二南山一、文能絶二地理一、
一朝被二讒言一、二桃殺二三士一、
誰能爲二此謀一、相國斉晏子、

この詩作の由來は、齊の景公に田開疆、古冶氏、公孫埼といふ三人の勇士があつた。或時、景公は宰相の晏嬰の勸に從ひ、三箇の桃の實を採り、三人を喚んで自らまづその一箇を食ひ、三人に各自己の武功を說かせて、高いものに一箇づつを與へた。田と古とがまづ之を食つたので、公孫の得るものがない、自然と公孫の功が他の二人に劣つた形となつたので、遂に彼は自刄して死んだ。田と古とは大に愧ぢて同じく自刄した。孔明はこの三墳を見て、この詩を作つて歎いたといふ。（晏子春秋、事文類聚に出てゐる）これは「二桃殺三士」といふ故事として名高く、孔明のみでなく、李白の「懼讒詩」や「梁甫吟」にも歌はれてゐる。

〔閑雲野鶴云々〕 自由の天地に飛翔することを喩へたのである。

〔風にうそぶく〕 風月に吟嘯するといふ意。

〔ゆくへ波間の舟ひと葉〕 波間の一葉舟に行方も知らぬといふ意を轉倒して言つた。「ひと葉舟」は木葉に小舟を喩へたのである。

〔江山さむるあけぼのゝ〕 曙に江山の影が見えて來るのを、夢より醒めることに喩へた。

〔寒梅痩せて春早み〕 寒梅はまだ癒せてゐて春早く

うすら寒いのをいふ。「春早み」は春早くして。「み」は名詞化するための接尾語。

〔幽林風を穿つ〕　奥深い林のうちに、肌寒い風がさつと吹きわたるのをいふ。

〔紫雲たなびく洞の中〕　隱者の家のうちといふべきところを、仙洞御所に喩へたのである。

〔棊局〕　碁盤。

〔隆中〕　今の湖北省襄陽縣の西。通鑑に「諸葛亮寓居二襄陽隆中一」

〔別天地〕　人間の外なる世界。風流の天地。

〔大盜競ほひはびこりて〕　後漢の末、天下麻と亂れて群雄割據してゐるのをいふ。「競ほひ」はきそひに同じ。

〔おもほへば〕　「おもへば」の延語。音調の上からさうしたのである。

〔世は一局の云々〕　世の治亂興亡といふものは、それは全く一局の碁戲と同樣なのであるといふ意。感動の强い結句である。

〔經綸胸に云々〕　國家を治める方策が大いに胸中にはあるけれども。「經」はたていと、轉じて法則、治むの意。「綸」は靑絲で糾つた印綬、轉じて大綱、つかさどるの意。卽ち熟して、天下國家を統治し經營すること。易經屯卦象傳の疏に「經謂二經緯一、綸謂二綱也一、以織二綜經緯一也」

〔榮利を俗に云々〕　自分のみの榮譽や利益を俗世間に求めようとしないから——。

〔岡も臥龍の名を云々〕　それ故に世人が孔明をさして臥龍といひ、その住居の岡をも臥龍岡といふ名が附けられたといふ意。通鑑には世人が孔明を臥龍と呼んだことは見えてゐるが、その岡を臥龍岡といつたことは、演義三國志以外には詳にしない。

〔春秋〕　歲。一ケ年をいふ。

〔うつりはこゝに二十七〕　歲月移つて、ここに孔明は二十七歲を迎へたといふ意。

〔高眠〕　高臥に同じ。「その世を治め世を救ふ經綸胸に溢るれと、榮利を俗に求め」ずに居ることを指してゐる。

〔信義四海に云々〕　信義の非常に深厚なるをいふ。

〔君が三たびのおとづれ〕　劉備が三度孔明の草廬を訪問したことをいふ。蜀志諸葛亮傳に「亮上疏曰、先

帝不レ以二臣卑鄙一、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中一、諮レ臣以二當世之事一。由レ是感激、遂許二先帝一以二驅馳一」とある。「前出師表」中の語である。

〔そむきはてめや〕　違背することがとうてい出來得ようや、といふ語勢である。

〔知己〕　善く己の心を知つてくれる人。ここは劉備を指す。

〔羽扇〕　鳥羽で編んだ團扇。はうちは。

〔綸巾〕　綸子で作つた頭巾。

〔草廬あしたの主やたれ〕　飄然と立出でてしまつた後の、朝の草廬の主たる者は一體誰であらうか、もう居まいといふ意。

〔古琴の友よ〕　友としてゐた古琴よといふの轉置法。

〔曉さむる西窓の云々〕　曉に目覺めて見る西窓の殘月よ——。

〔白鶴歸れ〕　白鶴よ嶺の松に歸れといふの轉置法。

〔蒼猿〕　老猿に同じ。「蒼」は老、古である。

〔岡も替へよや〕　今は草廬の主も居らぬ故、その臥龍岡といふ名も別名に替へたがよいといふ意。

鑑賞批評

星落秋風五丈原は六齣から成る史詩であるが、本課には第二齣を採つた。第一節から第五節までは孔明が王佐の才を抱きながら南陽の草廬に悠々自適してゐること二十餘年の狀を叙べたもの、第六節以下は劉備三顧の知遇に感激して、所謂天下三分の策を抱いて草廬を出ることを叙したものである。二英傑の邂逅、只意氣に感じて大丈夫の偉業は成るのである。孔明出廬に及ぶ第六節が本課の頂點である。そして多年友として來た懷かしい周圍の景物を顧み、しばし深い感慨に浸つて惜別の心を寄せる英傑の情緒が、雄健流暢の詩句の內に泌じみ出てゐる點は、又絶唱といはざるを得ない。作者詩作に於ける修辭上の特長が本詩に遺憾なく表れてゐる。例へば「月を湖上に碎きては、ゆくへ波間の舟ひと葉。ゆふべ暮鐘に誘はれて、誘ふは山寺の松の影。」「幽林風を穿つとき、伴は野鳥の暮の歌、紫雲たなびく洞の中、誰そや棊局の友の身は。」「白鶴歸れ嶺の松、蒼猿眠れ谷の橋。」などは漢詩文脫化の對句として指摘される。又比喩法として「光を包み香をかくし」「世は一局の棊なりけり」が巧みに使はれ、頓呼法としても「古琴の友よさらばいざ、曉さむる西窓の、殘月の影よさらばいざ」などと疊句を成して、切實なる感情を叙べてゐる點は、特に作風

を知る上に見逃せないことである。

參考

◇補遺（本文中にはその名がないが教授補遺として）

「劉備」――支那三國時代蜀漢の始祖。字は玄德。前漢景帝の子中山靖王勝の裔である。始め曹操に從ひ軍事にあつたが、後、これを除き自立しようとして成らず、走りて襄陽に入り諸葛孔明を得て、天下三分の謀を立て、孫權と共に曹操の軍を赤壁に破り、遂に巴蜀の地を取り成都に入つて蜀漢國を建てた。漢室の復興をその理想とし、西紀二二一年帝位に卽いて昭烈帝を稱した。後、吳を伐ち夷陵に大敗して憤死したのは二二三年であつた。

「諸葛亮」――字は孔明。漢の司隷校尉諸葛豐の後である。初め隆中に隱れて躬ら耦畝に畊し、好んで梁父の吟をなした。蜀漢の先主劉備その名を聞き、三顧の禮を採るに及び、その知遇に感じ、天下三分の策を述べ、先主を佐けて、荊州を取り、益州を定め、遂に魏、吳と鼎立の勢力をなした。先主卽位するや丞相となり、その歿するに及び、遺詔を承けて後主劉禪を補翼し、武鄕侯に封ぜられた。官制を整へ、法度を修め、北魏を討つて中原を回復し、漢室を復興するのをその志とし、東は吳の孫權と和し、南は雲南を征して背後の憂なからしめ、西紀二二七年出師の表を奉つて北伐し、魏と相攻戰すること數年、遂に病を得て五丈原の軍中に歿した。時に二三四年。忠武と謚せられたのであつた。

◇孔明を詠じた詩。　　李　白

漢道昔云レ季、群雄方戰爭、覇圖各未レ立、割據資二豪英一、赤符起二潁運一、臥龍得二孔明一、當二其南陽時一、隱畝躬自耕、魚水三顧合、風雲四海生、武侯立二岷蜀一、壯志呑二咸京一、何人先見レ許、但有二崔州平一、

◇孔明に關する評論文を、杉浦重剛猪狩又藏共著「諸葛亮」から引く。

「陳壽曰く、

亮が才は戎を治むるに於て長と爲す、奇謀を短となす。民を理むるの幹は將略よりも優れり。而して與に對敵する所或は人傑に遇ふ、加ふるに衆俟しからず、攻守體を異にす、故に連年衆を動すと雖も未だ克つこと能はず。昔は蕭何韓信をすゝめ、管仲王子城父を擧ぐ、皆己の長を忖り、未だ兼ね有すること能はざるが故なり。亮の器は政を理むるによし、抑も亦管蕭の亞流なり。而して時の名將に韓信城父なし、故に功業陵

遲し、大義及ばざらしむ。蓋し天命歸するあり、智を以て爭ふべからざるなり。

陳壽は孔明が奇謀に短にして將略に長ぜざることをいふこと兩度なり。孔明果して奇謀に短なるか、將略に乏しきか。奇謀に短なるに非ずして奇謀を好まざるなり、常に王者の師たるを失はざらんことを期したるなり。事の成らざりしは將略の乏しきが故にあらず、內諸政を整理し、外强敵を挫かざるべからざるに、地は偏僻にして人材窄しく、一身百難に當りて韓信なく城父なきなり。加之五十四歲の中老を以て夙く旣に長逝す、事の成らざりし所以亦想ひ見るべきにあらずや。

更に一步を進めて考ふるに、事の成敗奇謀將略の長短は以て孔明を輕重するに足らず、その能く大なりし所以は固より人格の如何に在りて存す。陳壽の言は此の點に關してその要を得たるものといふべし。若し孔明にして曹操の如く奇計に長ぜしめんか、その人格は大半を破却し去らるべし。

陳龍川はその諸葛孔明論下篇に於て曰く、

夫れ衆人皆進んで我ひとり退き、草廬に雍容として三顧の後起ちて身を挺し、孤を託せられて放ならず攝な

らず、而して人間言なし。權は人主に偪りて上疑はず、勢は群臣を傾けて下忌まず、厲精蜀を治め風化肅然たり、宥過大なく刑故小なし、帝者の政なり。佚道を以て人を使ふ、勞すと雖も怨みず、生道を以て人を殺す死すと雖も殺者を怨みず、王者の事なり。孔明皆優に之を爲す、眞にこれ伊周の徒たり。

自ら管樂に比するを以て管樂を出でずとするは誤れるの甚しきものなり、管仲は才識明敏なりと雖も進退節操に於てはなほ許すべからざる所あり。樂毅は將略萬人に秀でたりとするも一時の流言に離間せらるゝは、その人稍輕くして薄きを覺ゆ。孔明自ら之に比せしは一時の寓言のみ、何ぞ之を以て理想とすることあらんや。孔明の人格は眞に伊尹にちかしといふべし。兄弟分れて蜀吳に仕ふるも人疑はず、玄德に勸めて劉璋を取るも人は之を貪れりとせず、國を專らにすること十有二年にして人之を專橫なりとせず、何を以て此の如きを得たるか。他なしその志公明正大にして一點の私心なく、君國の爲に一身を捧げて鞠躬盡力終始渝らざりしが故のみ」。

一二　光頼卿の參内（平治物語）

扱方　平治元年十二月九日、平治亂の將に起らうとして殺氣に充ちた時、この亂の張本藤原信頼の輕擧妄動ぶりを、その伯父にあたる藤原光頼が、公卿僉議の席上、大いに挫く、剛毅不屈の堂々たる態度と、席を蹴立つて後に敵方に加擔してゐる弟の惟方を大いに詰り誡め切切たる尊王論を高調してゐる誠忠さとの二點が正しく認識されるやう導くべきである。（惟方はこれにより悔悟して帝をお護り申すやうになつたことも附言しておきたい）文學史的取扱ひとしては源氏物語を頂點として次第に頽廢的傾向となつた反動として事實の批判を基とする歴史物語が起り、これが鎌倉時代に入ると戰爭を主題とした戰記物語を產むにいたつたといふ點と、從つて雄大悲壯な武勇譚と優雅哀切な風流譚との混合してゐることを內容とし、剛健な漢文調と優麗な國文調との調和された所謂戰記文體が生まれて來たのであるが、そこには時代特色である公卿道と武士道との二潮流の交錯面を見ることが出來るのである。從來とは異つたかうした特殊性を持つてゐる點をそれ〴〵說明すべきであらう。尙この機會に淸涼殿內の御模樣や、束帶着用の事など常識として概說すべきであらう。

教授

引用書

平治物語――平治の亂の顚末を叙した戰記物語であつて、三卷（異本には二卷としたものもある）から成り、體裁・編次・內容・文章など、「保元物語」と類似し、姉妹本をなしてゐる。作者としては、葉室時長・中原師梁・源喩（又は公喩）僧正などが擬せられてゐるが、憑據が薄弱で信ぜられない。成立時期も不明であるが、大體において、承久以前、源氏將軍時代に成立したものと目せられてゐる。本書の叙事においては、藤原通憲・藤原信頼・源義朝・平淸盛などが中心人物となつてゐるけれど、合戰の叙寫においては源義平と平重盛とが花形となり、殊に義平が大立物として活躍し、叙寫の中樞を支配してゐる。そして、合戰の勝敗が決し、義朝の一族が沒落破滅するところに大團圓があつて、悲哀なる情調が漂ひ、頗る興趣を深めてゐる。本書の叙寫は簡單であるけれども、結構も整ひ、文章も簡素勁健にして生氣があり、作品として成功してゐる。本書には二十餘種の異本があり、繪卷物としては有名な「平治物語」がある。

語釋

〔光頼（みつより）〕　藤原氏（葉室家第三代の主）。權中納言顯頼の長子。累進して正三位權中納言に至り、左衞門督を兼ね、平治元年、檢非違使を兼ねた。この年、甥の信頼が兵を擧げんとした時の光頼の態度に就いては本課に詳しい。亂に當つて、藤原惟方が二條天皇を奉じて六波羅に幸し、官軍方卽ち淸盛方が力を展ぶるを得たのは、光頼が與つて力があつたといふ。次いで正二位權大納言に進み、寬長二年致仕し、剃髮して光然と號し桂の里に居たので、世に桂大納言と稱した。承安三年歿、年五十。

〔さるほどに〕「しかあるほどに」の略で、さうしてゐるうちにの意。戰記物語には、單なる發語として、「さて」といふほどの輕い意味に用ひられることが多い。

〔內裏（だいり）〕　皇居の稱。また「うち」といふ。後皇居の附近の諸官衙までを含めて大內裏と美稱するに及んで、その中の皇居の一廓を特に內裏といつた。

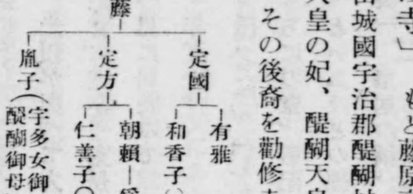
〔同じき十九日〕　平治元年十二月十九日で、平治の亂が將に本舞臺に入らうとする八日ばかりの前である。そして藤原信頼が源義朝と結んで院の御所三條殿を襲ひ、御白河上皇を一本御所に幽し、二條天皇を、黑戶御所に置き奉つた日から、十日ばかり後である。當時勝に誇る信頼は、自ら大臣大將と稱してゐた。「ひとへに天子の御擧動（ふるまい）の如く」ふるまつてゐた。が、その時にはすでに、熊野參詣の道中にあつた平淸盛に六波羅より早馬が立つてゐたのである。報を得た淸盛はもう引返して都近く迫つてゐたのである――さういふあわたゞしい時、大內で行はれた公卿僉議、つまり十二月十九日光頼の參內を促した公卿僉議は、文字通り「山雨將に至らんとして風樓に滿つ」の慨ある緊張した雰圍氣の中に行はれたのである。

〔公卿僉議（くぎやうせんぎ）〕　大臣以下公卿が參內して會議をすること。「公」は卽ち攝政、關白、大臣と、「卿」は、大中納言、參議、散一位並に三位以上の稱、又殿上人の總稱。くげ。「僉議」は會議。「僉」は皆の意。

〔催されけり〕　公卿等はその會議に出席せよと促したの意。卽ち公卿を會議に召集されたの意。會議を開催

されたの意ではない。

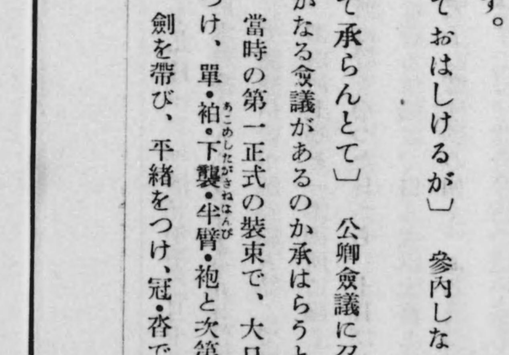
〔勸修寺〕 もと藤原高藤から出た家であるが、勸修寺は山城國宇治郡醍醐村にある寺で、高藤の女胤子（宇多天皇の妃、醍醐天皇の母）の創建せしめられたもので、その後裔を勸修寺と號したのである。



〔左衞門督〕 左衞門府の長官、衞門府は左右に分れ、禁中の諸門を守護し、又は巡邏して警戒することを掌つた役所で、督、佐、大少の尉、志等があつた。「卿」は三位以上の人の敬稱。

〔この程は〕 この頃は。

〔信頼〕 藤原忠隆の子。その母は顯頼の女で、光頼の妹であつたから、光頼からは甥に當る。累進して、正三位權中納言に至り、次いで檢非違使別當を兼ね、右衞門督に轉じた。その近衞大將たらんとして却けられ遂に平治の亂の張本人となり、大臣、大將と稱したことは前記の通りだが、合戰に際し、守りを捨てて仁和寺に走り、哀を後白河上皇に乞うて許されず、同年十二月二十七日、六條河原に斬られた、二十七。



〔擧動過分なりとて〕 振舞が身分を越えてゐると憤慨しての意。信頼が宮中にあつて權威を振つてゐることを指す。

〔不參にておはしけるが〕 參內しないで居られたが。

〔參內して承らんとて〕 公卿會議に召集せられたので、いかなる會議があるのか承はらうと思つて。

〔束帶〕 當時の第一正式の裝束で、大口の袴をはき、表袴をつけ、單・袿・下襲・半臂・袍と次第に重ね、石帶をしめ、劍を帶び、平緒をつけ、冠・沓で笏を持つ。

〔つくろひ〕 整へかざつて着る意。

〔蒔繪の細太刀〕 鞘に蒔繪を施した細身の太刀。儀裝の時佩用する刀である。

〔おとなしやかに〕 やさしく、上品に。

〔傅子〕 乳母子。守役であつた人の子。「めのと」は必ずしも乳母には限らない。保育の任に當る人をいふのである。

〔桂右馬允範能〕 右馬は右馬寮で、ここには頭、助、允、屬の四等官があつた。允は右馬寮の判官。七位相當であるが、後には六位の侍が任ぜられた。桂範能の傳は未詳。

〔膚に〕 上衣の下にの意。

〔腹卷〕 鎧の一種。腹に卷いて引合はせるやうに作り、その空隙をば背板でふさいだもの。背割具足ともいふ。普通の鎧は右脇で合せる。

〔雜色〕 又ザッシキ。昔雜役驅使に任じた無位無官の役人。服色の定めある衣袍を着ることが出來ないために、この名がついたといふ。藏人所、院御所、攝關以下の家司、勸學院、國司廳等で皆これを置いた。

〔自然の事〕 もしもの事、自然の出來事。萬一の事などの意。

〔人手に懸くな〕 人の手で我を殺させるな。

〔清げなる〕 さつぱりした、見苦しくない。

〔先高らかに追はせて〕 前驅に聲高に前拂をさせて。前驅は貴人の行列の前に立つて、途上の人を拂つて行く役。

〔弓をひらめ、矢をそばめて〕 弓をたひらにし、矢をわきにむけて。「ひらむ」はここでは引いてゐた弓の弦をゆるめたことの意に解してよいと思ふ。これは矢をたひらに伏せる意にも解される。又「矢をそばむ」は矢をそばに引きよせるの意にも解し、又は矢を伏せる意にも解されるが、射る用意をしてゐた矢を、わきにむける意に解してよいであらう。

〔殿上〕 清涼殿の南部殿上の間、殿人上のつめる所。

〔一座して〕 一の座に着いて、卽ち首席しての意。

〔上﨟〕 身分高い人の稱。﨟は臘とも書く。出家して受戒し、（一夏夏期三箇月の行）を經るを一の臘といひ二夏を經るのを二の臘といふ。だから僧の修行の年數によつて上﨟、下﨟などといつたのが、朝廷の諸官人の間にもいはれるやうになつたのである。又後には婦

人に移つて、二位三位の典侍、一位二位の大臣家の娘などをいふやうになつた。

〔人はいかにふるまふとも〕 自分以外の人はどうふるまつても勝手であるがの意。上官の人たちが信頼よりも下の席に着座してゐたことを指す。

〔彼は右衛門督、我は左衛門督なれば〕 官は左右のあつた場合には、左を以て上官とするのである。

〔下には著くまじきものを〕 自分は信頼の下席には著くはずのものではない。

〔左大辨宰相〕 左大辨は中務、式部、治部、民部の四省を管し、庶事を受付け、太政官内の事を糺制し、所管の諸司の宿直、諸國の朝集を知る事等を司どる役、左中辨、左少辨があつてこれを輔ける。

〔左大辨宰相長方〕 藤原顯長の子で、累進して従一位權中納言に至つた。性剛直にして清廉、清盛が福原に遷都した時、獨り舊都に留まつて、留守中納言と呼ばれた。又、清盛が後白河上皇を幽し奉るに當り、硬論してこれを解かしめたこともあり、賴朝が總追捕使たらんことを請うた時、その不可を主張したこともある。建久三年歿、年五十三。梅小路中納言ともいふ。

〔末座の宰相〕 宰相は參議の唐名。參議は令外の官で朝政を參議する太政官の職員。定員が八人だから八座ともいふ。末座の宰相は八人中、末座にゐる參議である。

〔世に〕 世の中にとりわきて。世になく。殊のほか。いみじく。ここは大いに、甚だしく、誠にの意。

〔しどけなう〕 ふしだらに、しきりなしに、無秩序にの意。「倭訓栞」に、「無二靜氣一の義なるべし。」とある。

〔色代して〕 (長方卿に)會釋して。挨拶して。色體とも、式體とも、式退とも書く。

〔母方の舅〕 信頼の母は忠隆の室で。信頼の妹である。「をぢ」は妻から呼ぶ夫の父、夫から妻の父、卽ちしうとの意と、母の兄弟にいふをぢの意とがある。ここでは後の意。「信頼」の項參照。

〔大力の剛の人〕 力が強く剛膽な人。

〔右の袖の上にゐ懸けられて〕 信頼が光頼の爲に右の袖の上にかゝつて坐られて、光頼が信頼の上席に坐つた結果、さうなつたのである。

〔伏目になり〕 俯いて目を伏せ。

〔色を失はれければ〕 驚き恐れて顔色が蒼白になつたから。

〔着座の公卿〕 その會議の席に列してゐる公卿。

〔あなあさましし〕 あゝ呆れた。信頼が今まで傲慢であつたのが、急變した醜態に呆れたことをいふ。「あさまし」は意外の事に驚く、肝がつぶれる意。(善い事にも悪い事にも用ひる)

〔下襲の裾引直し〕 坐る時、下襲の裾の曲つたのを正しく引直し。下襲は束帶の時、半臂の下、袍の上に着る衣で、背後の裾を長くして袍の下に出し、後に曳くもの。

〔衣紋つくろひ〕 着物の着やうを直すこと。特に襟の邊りを正すこと。衣紋は裝束を整へて着用すること又着物の襟を胸で合はせたところ。ここは後者の意。

〔笏〕 束帶の時、右の手に持つ板。長さ一尺二寸、幅二寸ばかり。もとはこれに事を記しおいて、備忘に供したものであつたが、後世は全く儀式用のものとなつた。

〔氣色して〕 面を正して。色を改めて。

〔衛府督〕 右衛門督信頼を指す。

〔一座すると見えて候〕 その集會の主席となつて、會議を行ふやうに思はれます。もつとくだいて言へば、主宰者と見えますの意。

〔行はるべしとやらん〕 行はるべしとやら。行はれるはずであらうに。「やあるらむ」の義。

〔抑〻何事の御諚ぞ〕 いつたい今日の付議に召出されたのは何事についての御命令であるか。どういふ趣意で會議を開かれるのかの意。「御諚」は御仰言。貴人の命をいふ。

〔まして會議のさたもなし〕 開會の趣意の質問にさへ誰も答へないくらゐだから、まして會議を始めるといふ指圖もなかつた意。「さた」は沙汰で、命令。

〔つい立ちて〕 つと勢よく立ち上つて。突然立ちあがつて。

〔悪しう參つて候ひけり〕 私が參つたのは悪ふございました。會議の邪魔をしたことを皮肉に謝した語。

〔あはれ、この殿は大剛の人かな〕 あゝ、この御方(光頼)は非常に剛膽な人だ。

〔さんぬる十日〕 去る十二月十日、卽ち三條殿夜襲の翌日。

〔出仕〕 出勤。ここでは役目を帶びて參內することを

いつてある。

〔し出したる事よ〕　しでかしたことよ、えらいことをやつた。人の行爲を譽めていふ語。

〔體〕　「てい」とよむ。

〔賴光〕　源滿仲の子で、驍勇、比肩するものなく、攝津伊豫美濃等の國守に歷任して、內藏頭を兼ね、左馬權頭となり、內昇殿を許され、正四位に叙し、長保中春宮大進となつた。治安元年七月歿。大江山の山賊退治の話は有名。

〔賴信〕　賴光の弟で、やはり驍勇にして兵法に練達し治部權少輔、左馬權頭、伊勢・陸奥・甲斐の國守を經て上野・常陸の介となり、從四位上、鎭守府將軍に拜せられた。永承三年九月歿。平忠常の亂を平げたことは有名。

〔うち返して〕　轉倒して。

〔など〕　どうして。

〔信賴と附き給ふ〕　信賴といふ名のつき給ふの意。

〔壁に耳に、天に口〕　壁に耳あり天に口あり、祕密といふものはとかくもれ易いといふ意味の俗諺で、多言を戒めるやうな場合に多く使ふ。

〔怖し〳〵聞かじ〕　その惡口がもれて信賴の耳に入つたなら、いかなる叱責を蒙るかも知れぬと思つて、その惡口を聞くのをも怖れていつた語。

〔忍び笑ひ〕　內々に笑ふこと。くす〳〵笑ふこと。

〔急ぎても出でられず〕　急いで宮中を退出することもなさらず。

〔小じとみ〕　小蔀。清涼殿の六間にあつた小窓で、天皇がこれを通して殿上を御覽になつた。位置は石灰壇と上の戶との間で、格子がかけてある。物忌の日には格子を下して塞いだ。

〔見參の板〕　清涼殿弘廂、殿上の間に通ふ所に設けてあつて、これを踏みならして、謁見、退出等を知らせるもの。鳴板ともいふ。建曆御記に「清涼弘廂南切妻板不レ打レ釘是號二鳴板一、又號二見參板一。」

〔荒海の障子〕　清涼殿の萩の戶の前なる弘廂の九間の所に立てた布障子をいふ。南表に荒海に手長、足長、（山海經の長臂、長股）の繪、北裏に宇治川に網代をかけて氷魚を捕る圖が書いてある。上の色紙に「紅葉をば波のよせくる宇治川やあじろの床を錦さらせり」といふ歌が書いてある。

〔萩の戶〕　清涼殿の夜の御殿の北、弘徽殿の西にあつて、障子に萩の圖が描かれてゐる。主上の常の御殿であつた。

〔別當惟方〕　檢非違使別當惟方。藤原顯賴の次子で、光賴の弟に當る。平治亂には初め信賴の味方となつたが光賴の戒に悔悟し、藤原經宗と謀つて、夜陰に二條天皇を奉じて大內を出で六波羅に至つたので、中媒といふ綽名を得た。後、寵を恃んで權を專らにしたが、罪を得て阿波に流され、剃髮して寂信と號した。仁安元年赦されて歸つたが終は不明。信賴に味方したのは惟方の女が信賴の弟信俊に嫁して居た關係による。

〔承り定めたる事もなし〕　この語は曖昧な語であるが、「これといつて定まつた仰も承らない、卽ち要領を得ない。」の意に解してよいと思ふ。

〔まことやらん〕　本當だらうか。

〔死罪に行はるべき人數にてあなる〕　死罪に處せらるべき人數の中に入つてゐるとかである。「あなる」は「あるなる」の約。「まことやらん」に對して連體形で結び、疑問を含ませた。

〔傳へ承る如きは〕　噂に聞いてゐる死罪に行はれんといふ人々の如きは。

〔有職〕　又イウソコ。ものしり、學者、轉じて、朝廷の儀式等に通ずる人。ここでは從つて高官の人と解してよい。

〔然るべき人ども〕　相當なえらい人たち。

〔面目なるべし〕　名譽であらう。

〔先日〕　十二月十四日のこと。「平治物語」の「信西の首實檢の事」の條に「同じき十四日に、（信賴が）別當惟方と同車して、光保の宿所神樂岡に行向つて、この首を實檢す。」とある。

〔車の尻〕　牛車に二人乘る時、後の方を車の尻といふ。信賴が前、惟方が後方に乘つたのである。

〔少納言入道〕　藤原通憲入道信西のこと。鳥羽・崇德・近衞の三朝に歷任し、正五位下日向守に任じた。典故に詳しく、經學・佛敎・天文・算數に通じ、また詩歌管絃にもすぐれて、當時凡庸の長袖者流と選を異にしたが、南家儒流の出であつたために、榮達意の如くならず、天養元年、鳥羽法皇に請うて辛うじて少納言たるに及んで、薙髮して信西と號した。後年、後白河天皇の卽位されるに至り、彼の妻が天皇の御乳母であつた關係

から、大いに親任を得て、遂に信頼との間に隙を生じ平治の亂に當つて斬られたことは、前記した通りである。

〔首實檢〕　古、戰で將卒の獲た敵の首級を、大將自ら檢査すること。

〔向はれける事はいかに〕　出向いたのはどうした事か。詰問の語である。

〔以ての外然るべからざる云々〕　とんでもないよくない行動であるの意。

〔近衛大將〕　近衛府の長官。左右各二人ある。行幸の際は中將、少將と同樣に、弓箭を帶びて供奉をする。從三位相當官、攝關の息は大抵左大將となつた。普通は大納言、時には大臣、參議等が兼任した。近衛府は皇居に近く伺候して守護に任じた武人、卽ち近衛の官人を統べる役所。大將、中將、少將、將監、將曹の四等官がある。

〔檢非違使別當〕　檢非違使の長官。參議以上、衛門督、兵衛督兼帶の人を以て任じたが、中納言で兼任することが多かつた。重職なので人選が嚴重であつた。別當から出る令達は、別當宣、廳宣などといひ、これに背いたものは、違勅と同樣の罪になつた。檢非違使は京中の非法、非違を檢査し、追捕、糺問、裁判、訴訟などを取扱つた職。

〔先蹤〕　先人のなしたあと。「蹤」は足跡。先例。「先蹤も未だ聞及ばず」は、さういふ先例もまだ聞いたことはない。

〔當時も大いに恥辱なり〕　現代の習慣からいつても、大いに恥辱なことであるの意。

〔就中首實檢は甚だ穩便ならず〕　中でも首實檢などをするといふことは、おだやかならぬことである。穩便はおだやかで、かどのたゝぬこと。

〔天氣〕　天機。天皇の思召。主上の御仰の意。

〔こはいかに敕諚なればとて〕　それはどうしたことか、たとひ天子の仰であつたにしても。「こはいかに」と切つて解釋した方がよい。「いかに勅諚なればとて」とつゞけても解釋出來ないではないが、さういふ語法は現代には用ひるが、古語としてはどうかと思はれる。

〔いかで存ずる旨を云々〕　どうしてそれに對する意見を一議論申し上げないでよいことか。「一議」は一言異論を申したてること。

〔曩祖〕　先祖。

〔延喜の聖代〕　第六十代醍醐天皇の御代を指す。

〔君既に十九代〕　醍醐天皇から二條天皇まで。卽ち醍醐、朱雀、村上、冷泉、圓融、花山、一條、三條、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條、白河、堀河、鳥羽、崇德、近衛、後白河、二條。

〔臣また十一代〕　高藤から光頼まで。後出。

〔承り行ふ事は〕　天子の命を承つて行つたことは。

〔德政〕　仁政のこと。恩德を施す政治。

〔させる英雄には云々〕　英雄は英雄家（清華家）のこと、卽ち太政大臣として大臣、大將などを兼ねる家柄の意。攝家に次ぐ家柄。光頼の祖先の官職は次の通りである。高藤（內大臣）——定方（右大臣左大將）——朝頼（左兵衞督）——爲輔（權中納言）——宣孝（右衞門權佐）——隆光（左京大夫）——隆方（左衞門權左）——爲房（參議大藏卿）——顯隆（權中納言）——顯頼（權中納言）——光頼までの十一代。「させる」は「さしたる」と同じで、指して、これといふべきほどの、さほどの意。

〔有道の臣〕　正道を行ふ臣。

〔讒佞〕　うまいことをいつて人を讒言すること。

〔さしもどかる〕　擯斥される。批難される。「さし」は强調の接頭語。

〔御邊〕　同輩に用ひる對稱の代名詞。そこもと。貴殿。惟方を指す。

〔暴惡の臣〕　暴惡は甚だしく無理非道なこと。暴惡の臣は信頼を指す。

〔語らはる〕　方人にされる。徒黨の仲間に引入れられること。

〔累家〕　家累代。先祖代々。

〔佳名〕　よい評判。名譽。

〔大貳〕　太宰府の次官、帥の下、少貳の上に位するもの、權帥を置かない時に置く。太宰府は筑前國筑紫郡にあり、九州及び西海道を總監し、外寇を防備し、外交のことを掌つた官衙。欽明天皇の時始めて置き、大寶の時その制が定まつた。天平年中、廢して筑紫鎭西府とし、後太宰府とした。鎌倉幕府に及び鎭西奉行を置き、又九州探題とした。

〔熊野參詣を遂げずして云々〕　「平治物語」に、「さる程に、十日の曉、六波羅より立ちし早馬、切目の宿

にて追着きたり。……清盛『急ぎ下向すべきか、これまで參りて參詣を遂げざらんも無念なり、如何すべき。』と宣へば、左衞門佐重盛『熊野參詣も現當安穩の御祈請にてこそ候らめ。その上君逆臣に取籠められさせ給へるなり。いかでか武臣としてこれを救ひ奉らざらん。神は非禮を受けず、何か苦しく候べき。急ぎ御下向あるべし。』と申されければ、皆この議にぞ同じける。」かくて清盛は、都の變を聞いて、熊野參詣の途中から引返して來たのである。

〔切目の宿〕 紀伊國日高郡切目村切目王子社がある。

〔家人〕 いへのこ。家來。その家に仕へる人。

〔若干ならじ〕 幾らでもあるまい。

〔時刻をや廻らすべき〕 多くの時間を要しないだらう。卽ち打負かすのに手間ひまがかゝるまいの意。

〔君〕 二條天皇。

〔灰燼の地となり云々〕 內裏が炎上してしまふやうなことがあつたのでは。「灰燼」は灰や燃えのこり。

〔朝家の御歎なるべし〕 朝廷の御歎になるはずである。

〔君臣共に自然の事もあらば〕 火災の爲に君も臣も、ともに若しもの事があつて、生命にかゝはるやうなことがあつたならば。

〔天下の珍事〕 國家の大事件であるとの意。

〔王道の滅亡〕 王政の滅亡。「王道」は王者の政を治める正道の意であるが、ここでは王政の意に解してよい。

〔この時にあるべきをや〕 この時にあるはずだといふことを思ふと、なほ更恐しいとの意。

〔大小事〕 大事も小事も一切。

〔申し合はす〕 相談する。

〔相構へて〕 用心して。十分氣をつけて。

〔隙〕 機會。

〔玉體恙なくおはしますやう云々〕 天子の御身體に御さはりのないやうに工夫せねばならぬ。

〔黑戶の御所〕 清涼殿の北端にある殿舍。御賄所である。

〔一本御書所〕 內裏建春門內。侍從所の南にある建物。書物の一本を別に寫して天皇に進め奉る、その書物を納めておく所。

〔內侍所〕 今の賢所に同じ。もと溫明殿の別名で、八

咫鏡を安置した所であるが、內侍がこれを守護するので、內侍所といふ。轉じて八咫鏡の稱となつた。ここもその意。

〔溫明殿〕 紫宸殿の東、宣陽門の西にある御殿。綾綺殿と竝び、馬道を以て母屋を二分してある。その南部は卽ち內侍所である。

〔劍璽〕 神劍と神璽。

〔夜の御殿〕 天皇の御寢される所。塗籠ともいふ。晝御座の北背にある。

〔朝餉〕 朝餉の間。淸涼殿內、臺盤所の北、朝夕の供御をきこしめす所である。

〔櫛形の穴〕 晝御座と鬼の間の壁端、日記御厨子の側にある櫛形をした窓。女房などの殿上の樣子を見るために設けたもの。

〔人影のしつるは〕 人の影が映つて見えたのは。

〔その方ざまの〕 信賴の方に屬する。

〔女房〕 禁中又は院中にて一房を賜はつて住む官女。貴人の家に仕へる女。ここでは後の意。後世は一般に嫁したる女をいふやうになつた。

〔かげろふ〕 「影」をはたらかせた語で、影がさす、ちら〳〵見える。

〔斯くこそ御座んなれ〕 「こんな有樣だ、ああ」と慨歎して言ふ。「御座んなれ」は「こそあるなれ」の約で、軍記物語に多く用ひられてゐる語である。假名書がよい。

〔末代〕 末は澆末、代は時代の義。佛教で釋尊の滅後、星霜多く積もつた時をいふ。この時は時勢、根機ともに劣惡となつたから、これを末代惡世といふ。

〔正八幡宮〕 眞正の八幡宮の意。八幡宮の本地は阿彌陀佛であるとして、これをば八幡大菩薩と稱するも、神佛混淆說によらずに八幡宮を稱する時には、正八幡宮といふのである。「伊勢貞丈隨筆」に「正八幡宮は正眞の八幡大神宮といふ義なるべし。觀音は三十三身に變化するといふによりて、變化せざる觀音の正體を正觀音といふに同じ。」

〔王法〕 王道。王政。

〔いかに守り給ひぬるぞ〕 如何に守つて居給ふのか、少しも守り給ふ樣が見えぬと、神を恨み奉つた語である。

〔前代見聞〕 前代に未だ嘗て聞かない。

〔のろ〳〵しげに〕　のろはしげに。いま〳〵しさうに。

〔口説く〕　くど〳〵しく繰りかへしていふこと。

〔よにすさまじげにて云々〕　まことに興ざめたさまで立たれてゐたけれど。「よに」は前出。「すさまじ」は心のすゝまぬこと。興さめること。面白からぬこと。

〔且は悲しくて〕　また一方には悲しくての意。ここの「且は云々」の上に、「光頼は」といふのが省かれたので、のろ〳〵しげに憚るところなく口説きながらも、また一方と……續く文脈である。

〔宿業〕　前生に犯した罪業。宿世の業。佛教の三世輪廻說に本づいた考。

〔かゝる世〕　このやうなあさましい世。

〔許由〕　支那古代箕山の隱士。帝堯がその德行を聞いてこれに天下を讓らうとした時、もとより名利の念がないので、耳が汚れたといつて、潁川といふ川で耳を洗うた。箕山に隱れて後は、水を飲むに器物がなく、常に手に掬つて飲むので、人が瓢を送つた。そこで彼はこれを用ひて水を飲んだが、飲み終つて樹の枝にかけておくと、風に吹かれて音がするので喧しいとて打捨てたといふことである。これ等のことは「事文類聚」「莊子」等に見えてゐる。

〔袍〕　束帶の表衣。

〔ゆゝし〕　雄々しくあつぱれなさま。

鑑賞批評　幾度讀返してみても、讀むたびに新しい感動を喚起されるのがこの一節である。始め光頼が傅子の桂右馬允範能に膚に腹卷着せて萬一に備へ、「先高らかに追はせて」參內するところから、すでに讀者は光頼をまのあたり見る心地がするであらう。信頼の座上にむずと着いて「けふは衞府督が一座すると見えて候。」と辛辣な言葉をまづ信頼に浴びせかけ、次いで「何事の御諚ぞ。」と眞向から詰問し、さんざんにまくし立てた後、信頼を始め滿座の公卿が氣を呑まれてしどろもどろに白けきつてゐると、「惡しう參つて候ひけり。」と皮肉な言葉を殘しながら、つと立つて歩み去るゆゝしい態度、又弟の別當惟方の輕卒なふるまひを滔々と難詰して、惟方をして一語をも吐かせない威嚴、又大勢を看破して、信頼の愚を罵り、天下の珍事、王道の滅亡この時にありと痛論して玉體の安穩を祈る至誠、次いで「主上はいづこに云々」以下の息づまるばかりの力の籠つた應答、そして最後に

「世の中は今はかくござんなれ。」と長歎し、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生まれあひ」と袖を絞るところまで、光頼の態度、心情は、極度に緊張した雰圍氣とともに紙面に躍動してゐる。內容の促迫力、運筆の鮮かさを理解させると共に、一讀二讀してこの文章の妙味を味得させて頂きたい。

參考　平治の亂について國史大辭典より摘記しておく。

「起原」源義朝は保元の亂に平清盛以上の軍功があつたのであるが、その賞は却て劣り、始め左馬權頭に任ぜられたが、前から左馬助であつたので、不平の情を漏して辛うじて左馬頭となることが出來た。然るに清盛は、亂後播磨守となり、やがて太宰大貳に任ぜられて、その權威は義朝を凌いだ。そこで義朝は藤原信西(通憲)に賴つて榮達を謀らうとしたところが、信西は之を却けて清盛と結托した。故に源平の兩族は互に勢力を爭つて反目し、信西も義朝と不和を生じた、その時、藤原信賴といふものがあつた。中納言右衞門督に累進し、更に大將たらんと望んでゐた。信西は之に反對して、後白河上皇を諫めて之を妨げた。信賴は之を聞て激怒し、遂に義朝を誘ひ、尙他の有力な人々をも仲間に入れて信西に報復しようとし、義朝も之を利用して平氏の勢力を殺がうと思ひ、偶々平清盛が熊野に詣でてゐる虛に乘じて平治元年十二月四日兵を擧げた。

「經過」九日、信賴、義朝は五百餘騎を率ゐて內裏三條殿を犯し、後白河上皇と二條天皇とを幽し奉つた。信西は變を聞くや、大和に走つたが、石堂山で捕へられた。信賴等は信西を斬つて梟し、その子供達を諸國に配流し、信賴は自ら大將を兼ね、義朝は播磨の守に任じた。ところが一味の中に引入れてゐた藤原經宗と同惟方とは信賴に與した事を悔い(本文參照)、密かに天皇を擁して清盛の六波羅の第に遷れ、上皇もやがて宮を出て仁和寺に遷られた。これより前に、清盛は報知に接して直に京に歸り、六波羅第に天皇を奉じたので、公卿百官等は皆來り集まつた。義朝は二千餘騎を以て內裏に陣した。清盛は其の子重盛、弟の賴盛、敎盛等に三千餘騎を授けて之を討たせた。かくして、義朝や義平のために、重盛等は大いに敗られて退いた。勝に乘じた義朝は追擊して六波羅を攻めようとした。時に、源賴政は六條河原に三百餘騎を率ゐて屯して、何方か都合の好い方に身方しよう

と形勢を觀望してゐた。この煮え切らぬ態度を見て、義朝は怒つて之を討破つた。賴政は遂に走つて淸盛に與した。間もなく義朝は六波羅に攻寄せたが、利あらず、遂に潰走した。

「結末」信賴は遁れて仁和寺に詣り、後白河上皇に就て罪を謝し、死を宥される樣に乞うたが、遂に六條河原で斬られた。義朝は遠く落ちて尾張の長田庄司平忠致の家に潛んでゐたが、遂に忠致は義朝を殺して、其の首を京都に送つた。平氏の一門は之より愈々榮えることとなつた。

◇束帶着用の次第を簡單に述べておく。

赤大口袴　アカオホクチハカマ。表裏とも赤色の平絹で作つた下袴である。

表袴　ウヘノハカマ。地質は絹、綾で、色は表は白、裏は赤。高位の人は有紋のものを用ひた。紐は單に袷を重ねて着た後に結ぶ。

單　ヒトヘ。紅色の綾で作つた裏なしの衣服。袷の下にして着る。

袷　アコメ。名義はあひこめ(間籠)の略といふ。上衣と單の間に着こむもので、後世の小袖に當り、時によつて二三枚重ねて用ひた。但し束帶の具としては、袷にして一枚着る。色は表裏とも普通は赤であるが、年齡によつて異色を用ひることもある。地は表小袿の綾、裏平絹。

下襲　シタガサネ。袷の上に着るもので。裾を長く出して引く。後世には裾を腰から斷切つて別に着けた。地質、染色、紋樣等は季節、及び身分の上下によつて一定しない。一般に夏は單、冬は裏付を用ひた。着用の後、帶又は裾の紐で腰を結ぶ。

半臂　ハンピ。下襲の上。袍の下に着るもので、長さ二尺ばかり、袖は一寸五分程で、臂の半ばまで來るやうになつてゐる。下の幅七寸ばかりの布(襴といふ)を付けて左右兩側と背面とに襞をたゝむ。後世には襴を半臂から引離して別に纏ふやうにしたこともある。地質は位階によつて違ふが、色は深紫、後、黑色が普通になつた。着用後、忘緒で結ぶ。

袍　ハウ。束帶の表衣。まるえりで長さは膝の邊までである。(奈良時代には全體に狹小であつたが、平安時代以來身幅も廣く、袖口も大きくなつた。)縫腋と闕腋の二種がある。縫腋は兩腋を縫ひつけて襴があり、文官が一般にこれを用ひた。闕腋は兩腋をあけて襴をつけず、後の

身を前より長く仕立てたもので、武官が節會、行幸等の際に着用した。平安時代以後の色制は、一位以下四位まで黑、五位は蘇芳。六位以下は縹。地質や紋は位階によつて一定しない。

石帶　セキタイ又はイシノオビ。袍の腰にまとうた革製の帶。黑漆を塗り、玉、瑪瑙、犀角、蠟石など、位の高下によつて樣々の寶石を飾つた。その飾の方形なのは巡方といひ、圓形なのは丸鞆といふ。又、それに彫刻のあるのを有文、ないのを無文といふ。

劍　(飾太刀)鞘を紫檀、沈などで作つた金具で飾をつけたり、蒔繪にして金銀靑貝などで飾つたりした。紐で下げて佩く。

平緖　もとは刀の帶であつたが、後には刀の帶とは別に、腰から袴の上に垂れる平組の紐をいふやうになつた。色絲で種々の模樣を施してある。

冠　上代は絁で袋のやうに縫つたが、奈良時代以來漆沙となり、延喜以後は額當といつて前甲に木で骨を作つて綺羅等を張り、鳥羽天皇以來張板で益々堅くなつた。有紋、無紋、厚額、薄額、半透額の種類がある。

沓　下部を皮で作り、上部にばらの花を織出した錦。(薔薇錦)をつけたもの。細い革に金具をつけた靴帶で締めるやうになつてゐる。束帶の場合には靴の下に襪(白い平絹で作つたもの)をはく。

笏　普通長さ一尺二寸、幅二寸ぐらゐで、牙笏と木笏がある。木笏の用材は椎、檜、櫻、柊、樫、柳等。もとは物を書きつけて備忘の用意にしたものだが、後には全く儀式的のものとなつた。右手に持つて左手を添へる。

一三　皇　道

清原貞雄

扱方　國體教材として中等學校國語科再認識の資たらしめたい。で、本課の解釋に當つては、この論文が幾小節かに分割されてゐることを指摘し、各小節毎に教授を完成し、而して後に全篇を一貫する思想を述べて、整理すべきであらう。第一は「しらす」と「うしはく」の語義の相違とその觀念の相違。第二は三種の神器を中心に中庸の德を述べ、第三、第四、第五は神武天皇の御詔勅に基いて國家と國民との緊密な連鎖を語つたものである。要するに上に天壤無窮の皇道燦と輝き、下に忠君愛國を傳統とする億兆の民を擁する我が國にして、始めて他國と異つて見られる特色を、十分に徹底させたいものと思ふ。

教授

作者

清原貞雄　キヨハラサダヲ

倫理學者。文學博士。廣島文理科大學教授。明治十八年大分縣に生まれた。明治十三年京都帝國大學文科大學史學科を卒業し、神宮司廳大神宮史編纂委員、京都帝國大學司書、廣島高等師範學校教授を經て昭和四年廣島文理科大學教授に任ぜられ現在に至つてゐる。著書には、神道と日本文化、日本史學史、日本道德史、等がある。

語釋

〔王道〕　王者が國土・人民を治める道。儒教倫理に發して仁義を本と爲す大規模の政道。覇道に對する。

〔覇道〕　前者に對して術數及び武力を以て治國の要と爲すみち。覇者のみち。支那に於ては古く孟子が王覇の別を痛論してゐる。

〔簡明〕　簡單明瞭に。ここはかいつまんでの意。

〔御歷代の政治〕　代々の天皇の行はせ給うた政治。

〔名目〕　物事の稱呼。名稱。となへ。

〔獨斷を避けて云々〕　天皇御一人の御意志を以て氣儘になされるといふことなく、彼の神代の昔、安の河原に八百萬の神たちを集めて神問はしに問はし、神議りに議り給うた如く、人民の多くの思考を參酌して政治を行はせ給ひ、常に人民の利益を旨として政を行はせ給うた。（これに反して外國の例は擧げるまでもなく

君主專制政治であつて、君主の私欲をそのまゝ人民の上に當てはめたものが多い。）

〔しらすの政治〕　しらすの語義に就いては本文に要を得て說明してあるが、結局私有とか或は武力的統治といつた要素のない、和やかな愛に滿ちた政治をいふ、卽ち日本に於てのみ見られる政治現象であつて、これを他國に求めて求め得ず、唯我が古代日本より今日まで一貫して傳統するところの政治の道である。

〔うしはく〕　この語の語義に就いても大略本文に說明してあるが、大槪博士の說を參照すると、「その地に主人となりて佩く義といふ。或は食し佩くの轉にはあらぬか、をつつ、うつつ。（現）をめく、うめく（叫喚）」とあり、又その釋に「領す、領知す（神にのみいふ）轉じてうすはく。」又本文と同じく古事記の大國主命を出典とし、別に萬葉集九、「此山をうしはく神」を引例してゐる。なほうしはくの語は萬葉集の多くの歌にみても、神の場合にのみ用ひて、天皇及び皇孫には一切用ひてゐないことは、注意を要する。

〔武甕槌神が天神の命を云々〕　この項を說くには勢ひ天孫降臨に言及せねばならない。天孫降臨に就いてはすぐ後に出てくるので、一括して參考項に記して置いた。

〔汝がうしはける云々〕　古事記上卷に出てゐる。「天照大御神、高木神の命もちて問ひにつかはせり。汝が宇志波祁流葦原中つ國は、我が御子の知らさむ國と言依さしたまへり。故汝が心いかにぞ云々」

〔すめらみこと〕　語義に就いては本文に詳しいのでここには同系統の尊稱を揭げる。すべらぎ。すめろぎ。すべらみこと。おほきみ。みかど。卽ち大日本國天皇の尊稱で、臣下に對して稱せられるものである。

〔私有物〕　公共物に對し、一個人の權限內に保持するもの。國家人民を私有物とするとは、國家人民を我意を以て統御することを意味する。

〔傳位の信標〕　皇位繼承のみしるし。

〔鼎を以て傳位の寶器とす〕　夏の禹王の時、九州より金を貢せしめて鑄造した鼎を、夏殷周三代相傳へて天子傳位のしるしとした。故に九鼎大呂（大鐘の名）とか、鼎の輕重を問はるとかの熟語をさへ生じた。

〔仲哀天皇の條云々〕　日本書紀仲哀天皇八年正月の

條に「又筑紫伊覩縣主祖五十迹手、聞二天皇之行一、拔二取五百枝賢木一、立二于船之舳艫一、上枝掛二八尺瓊一、中枝掛二白銅鏡一、下枝掛二十握劍一、參迎二于穴門引島一而獻レ之。因以奏言、臣敢所レ以獻是物一者、天皇如二八尺瓊之勾一、以曲妙御宇、且如二白銅鏡一、以分明看二行山川海原一、乃提二是十握劍一、平二天下一矣。天皇卽美二五十迹手一曰二伊蘇志一云云。」とある。この原文の「八尺瓊の勾れるが如く曲妙に」に關しては國學者間に異論多く、平田篤胤は、玉の字の脫落と見て、八尺瓊の勾玉の如く曲妙にと讀んでゐる。理由はまがるといふは不吉な語で、ここの如くほめる場合には用ひぬといふのである。ますみの鏡はよく澄んで明かな鏡。十握の劍は十握もある壯麗な劍の意である。

〔平け給へ〕 ことむくのことは、事依さすなどの事と同じく、此方へ向はしめる義から、歸服せしめる義となつてゐる。從はしめる。

〔北畠親房は云々〕 本教科書に於て、既に「神皇正統記」で學んだはづである。

〔鏡は一物をたくはへず云々〕 鏡といふものは、その表面まことに清淨で何のしくみもかざりもなく、自ら映さんとせずして萬象自らこれに映り、萬象はそのありのまゝの姿をそのまゝ照し出され、是非善惡すべて漏るることなく照影してしまふ。卽ちその對象に從つて、そのまゝ感應するのが鏡の德（特質ほどの意）である。これこそ正直そのものの德と一致する。

〔智仁勇〕 智を鏡に配し、仁を璽に配し、勇を劍に配す。卽ち儒教的解釋である。

〔中庸〕 ここは德目の「中庸」の如くとれるが、下に註解の語があるので書名として置く。四書の一。孔子の孫子思が道家に對抗せん爲に作つたものといふ、その名の如く中庸（中正平易）の道を說いたもの。もと禮記の一篇であつたが單獨に行はれ、宋代に至つて大學・論語・孟子と並び稱せられるに至つた。

〔註解〕 ここでは三種の神器の德を鮮明するところの註釋書であるとの意。

〔確乎たる意〕 しつかりと据つて、拔くべからざる意義、理由。

〔照臨〕 日月が上から照らしのぞむこと。轉じて君主が天下を治めること。

〔敕りましけるとぞ〕 御神勅を下し遊ばされたといふことであるよ。

〔潤澤〕 ここは惠むとかなさけをかけるとかいふ內容に就いてゐる。

〔陰影〕 くらいかげ。

〔譎詐〕 いつはりたばかり。

〔不逞の徒〕 勝手きまゝに振まふわるもの。命を奉ぜず惡事をはたらくものども。

〔斷乎〕 きつぱりと、きつと。斷然。

〔破邪の劍〕 よこしまなるを打ちほろぼす劍。

〔天誅〕 上帝の意を奉じて行ふ誅伐といふ義から、正義を以て無道を誅する征伐、天に代つて行ふ誅罰の意となる。

「三月辛酉朔丁卯、下レ令曰、自二我東征一、於茲六年矣。賴二以皇天之威一、凶徒就戮。雖二邊土淸餘妖尙梗一、而中洲之地、無二復風塵一。誠宜下恢二廓皇都一、規中摹大壯上。而今運屬二屯蒙一、民心朴素。巢棲穴住、習俗惟常。夫大人立制、義必隨レ時。苟有レ利レ民、何妨二聖造一。且當下披二拂山林一、經二營宮室一、而恭臨二寶位一、以鎭中元元上。上則答二乾靈授レ國德一、下則弘二皇孫養正之心一、然後兼二六合一以開レ都、掩二八紘一而爲レ宇。不二亦可一乎。」以上の文の如くであるが、

所々字句に小異がある。天神は皇祖を申し上ぐ。中國は日本の意。宮らかは大壯（宮殿）であり、巢に棲む云云は土蜘蛛等先住民族をいふ。大人は日知りの義で、天下を知しめす天皇を申し奉る。聖の字を當てて後世は別義を生じた。寶の位は萬世一系の皇位、高御位。元々は大御寶で萬民をいふ。元々の字は支那で用ひ黎民の義である。六合及び八紘は共にその訓のまゝの意味で、書紀には漢文の熟語を多く用ひてあるが、ここも特に漢文的釋義は施さないでよからう。

〔時宜に適した政治〕 時宜は時のよろしきにかなふこと。よつてここは時勢に適した政治をいふ。

〔私家の利益〕 例へばフランスに於てはルイ十四世がブルボン朝の爲にのみ政治して、人民の利益の爲に政治しなかつた等、統治者が己れの利益に汲々たることをいふ。

〔ルイ十四世〕 ルイ十三世の子。幼にして卽位したが、宰相マザランに輔佐されてよく中央集權を完成してフランスを歐洲一の强國たらしめた。又ウエストフアリア條約、ピレネー條約等によつて領土を擴張した。その他文學美術を奬勵して文藝の黃金時代を現出し、ヴ

エルサイユ宮殿を起してブルボン王朝の極盛を誇つたが、オランダの役、イスパニア王位繼承戰役等の爲國債を山の如く起し、遂に四方に怨嗟の聲を聞くに至り後年フランス革命の素因を爲した。(一六三八―一七一五)

鑑賞批評 神代の古より、この大八島國を知ろしめし給ふすめらみことの、執つて以て治國の道とし給ふ皇道に就いて堂々と宣明した大文章である。王道に似て王道よりも高く、況んや覇道には似もつかぬ高度の政治道を有する我が國民が、自らの誇りとして、一層の認識と讃仰とを深めるべきである。その論旨の整然として透徹せること、すでに「扱方」に於て述べた通りである。時恰も日本精神宣揚の時局下、本課讀後、勿論熱烈なる愛國精神が喚起されるのであるが、それはとりも直さず本課の持つ文章の力であるといふことが出來るであらう。その引證の該博にして適切なる、その表現叙述の淡々たるうちに切々たる愛國的情熱の漲つてゐる點、まことに作者の獨壇上といはなければならない。精讀内省すべき文である。

參考

天照大御神は最初、御子天忍穗耳命に、豐葦原の千五百秋の水穗の國は、汝の治むる國であるぞと仰せられて、天忍穗耳命を遣はされた。天忍穗耳命は天降つて、天浮橋に立たして、下界を見下されたが、下界の水穗の國は甚だしく亂れ騒いで居ると申されて、再び引返して、この事を天照大御神に言上せられた。そこで大神は、天の安河原に八百萬の神々を召集せられて、特に思金神に考へよと命ぜられ、この騒いでゐる水穗の國を治めるに誰を遣したらよからうかといはれたので、八百萬神や思金神は相談して、第一回に天菩比神を遣はされた。然るに、この神は大國主神に媚びついて三年經つても復命しない。そこで第二回の使者として、天若日子に色々精巧な武器を與へて遣はされた。ところがこの天若日子は大國主神の娘、下照姫を妻にして落著き、遂に水穗の國を取ることが出來ず、これも亦復命せずに終つた。ここに大御神は第三回の使者として、雉名鳴女を遣はされた。雉名鳴女は天降つて、天若日子の門側の茂つた樹の上にとまつて、大御神の仰せ言を傳へた。すると天若日子はその侍女のそゝのかしの言葉に迷はされて、大御神から、かつて賜つた天之麻弓に天之鹿兒矢をつがへて、雉

名鳴女を射た。するその矢が突抜けて、天の安河原の天神達の側に落ちたのである。

大御神はその矢を御覽になつて、この矢は昔天若日子に賜はつた矢である。彼天若日子が下界の惡神を射て、その矢が玆に來たのであるならば天若日子には中るな、若し彼に惡心があるならば彼に當れといつて、大御神がその矢を投げ返された。するとその矢が天降つて來て、寢室にゐた天若日子の胸に當つて、彼は死んだのである。で、三回も使者を遣はされたけれども一向に埒が明かないので、大御神は今度は誰を遣はさうかと諸々の神や思金神に御相談になつた。すると神々が答へて申されるには、天安河原の河上の天岩屋に居られる伊都之尾羽張神か又はその子の建御雷之男神が適任でせうといつた。そこで今度は愈々建御雷之男神が天鳥船神を伴はれて天降り、出雲の國伊那佐の小濱に來られ、十掌劍を拔いて、大した勢を示して、大國主神に天照大御神の命令の趣を傳へて、直接談判をせられた。すると大國主神は自分は何ともお答へが出來ないから、子供の八重言代主神に聞いて下さいと申された。で八重言代主神に尋ねると、この國は天神の御子に奉りなさいと申された。そして姿を

かくしてしまはれた。そこで建御雷之男神は大國主神にもう他に子供は居られぬかといはれると、今一人建御名方神といふ子供が居ると申された。建御雷之男神はその建御名方神に談判に行かれたが、この神は大力勇武の神で素直にいふ事を聞かれず、力競べをして負けたならば、命に從ふと云ふ事になつた。建御雷之男神は建御名方神を散々まかして、信濃國の諏訪湖の邊で追ひつめ、ここで降伏させられ、大國主神のところに戻られ、遂に天神の御子に葦原の中國をお渡しになる約束をして高天原に歸り、この結果を天照大御神に御復命になつた。そこで天照大御神は再び御子天忍穗耳命に、もう葦原の中國は平定したから、命令の通り天降つて治めよと申された。すると天忍穗耳命は私に子供が生まれました。その名は邇々藝命といひます。それを遣して下さいと申上げられた。天照大御神は、八尺瓊勾玉、鏡及び、草那藝劍とを賜つて、この鏡は我が大神を敬ふ如く、永くあがめ奉れと申され、さあ千五百秋の水穗の國に行つて、治めよと仰せられて、猿田毘古命を御先導にして天降りをさせられ、下界を御支配になるやうになつた。

一四　建國の大精神

永田秀次郎
（建國の精神に還れ）

扱方　「建國の精神に還れ」の著者永田秀次郎氏の「建國の大精神」に就いての論述であつて、我々すべての日本人は、その精神の中に包含されてゐる三つの理想を理想として、卽ち、第一に平和を愛好する高明な心事を理想とし、第二に萬機公論に決するを理想とし、第三に君臣同治、四民平等を理想として、この國家的難局に處して行かねばならぬことを高唱したものである。流暢なる口調は、明快極まる論旨と相俟つて讀者の理解を容易ならしめ、裨益誘導するところ多大なるものがあらう。時局重大を加へるの秋、眞に國家の要望に應へる人間となるには、この建國の精神を體得するにある。先づ一文の段落、要旨を把握し、而して、その論述の跡を辿つてその事實を批判、檢討しつゝ、十分にその精神を認識、體得せしめるやうにされたい。

教授

作者

永田秀次郎　ナガタヒデジラウ

政治家、貴族院議員。氏は明治九年七月兵庫縣に生れた。明治三十二年判檢事登用試驗に合格し、兵庫縣洲本中學校長、大分縣視學官、大分石川熊本岩手各縣事務官、內務書記官、福岡縣事務官、同內務部長、內務省警保局長等に歷任し、後、東京助役に擧げられ、次いで大正十二年東京市長となり、昭和五年五月再び東京市長に推されて令名あり、殊に大東京市制實現に盡瘁して功があつたが、昭和八年辭職した。氏はまた拓殖大學長であり、建國會名譽會長である。昭和九年五月衆望を擔うて帝國教育會長々に就任した。一方氏は靑嵐と號し、俳句をよくする。著には「建國の精神に還れ」、「日本の堅實性」「梅白し」、「高所より觀る」等がある。

引用書

建國の精神に還れ——永田秀次郎著。著者が建國祭準備委員長として、建國祭の宣言書を敷衍したもの。我國の現狀、建國の精神、國民的信仰、外國の教訓、模倣は自殺なり、我が國民の進路の六章から成る。大正十五年一月、東京實業之日本社發行。

語釋

〔我が國の現狀には云々〕　我が國の現狀にはいかなる憂慮すべき問題があるかを明らかに識認することは極めて重要であるから、一通り具體的に叙べてみる。

先づ國際關係に於ては、去る昭和八年三月二十七日國際聯盟を脫退してから、我が國は孤立の狀態となり、東洋平和維持の責任者たる重大な地位に立つことになつた。滿洲國は我が國の援助と保護の下に着々と國礎を固め、遂に帝制を實施するに至つたことは慶賀すべきことであるが、一方滿洲上海事變に於て絶大な痛手を蒙つた支那は、國際聯盟及び英、米、獨等の列强に賴つて頑强な抗日政策を取つてゐる。ソヴエート聯邦は共產主義の國で、根本から我が國體、思想に於て相容れぬが、我が國が友好的外交政策を採れるにも拘らず、新聞通信等によつて我が國を批難し、五ケ年計畫を完成して尨大な軍備を充實し、ソ滿國境地方に嚴重な軍事的施設を施して極東戰爭の危機を誘發してゐる。米國との關係は表面困難な問題はないが、排日移民法の實施以來國民の感情は疎隔してゐる。數と量とに於て世界第一を誇る米國海軍は、太平洋上に我が海軍と大會戰を交へる日の準備に餘念がない。大西洋艦隊の太平洋常駐、ハワイを中心とする海軍大演習、海軍機の米大陸ハワイ間無着陸飛行などはその現れである。東洋に於ける米國の機會均等主義と我が國が東洋平和維持の責任者として、歐米の容喙を許さざる主義（彼等は東洋モンロー主義と呼ぶ）とは相容れない。英國とは嘗て日英同盟を結んだ間柄であるが、今日では經濟戰に於て相戰ふに至つた。殊に面倒なのは印度の通商條約破棄の問題である。我が商品の海外進出の目覺しさは、世界の各地に邦品壓迫の問題を卷起してゐる。次に內政方面では、政黨の腐敗、綱紀の紊亂、勞資の衝突、失業問題、農村漁村の疲弊、中小工業者の匡救、選擧法の改正等幾多の解決すべき問題が山積してゐる。經濟的方面に於てもまた多事多難である。昭和九年度の豫算案を見るに、歲出は滿洲事件費、時局匡救費、爲替相場の差損、國防費の增加等により膨脹し、二十一億圓を突破してゐる。然るに歲入の方は、不景氣の爲租稅收入も減少し、到底歲出の增加を賄ふことは出來ぬ。遂に八億圓の不足額を公債によつて調達することになつた。昭和七年六月に六十億であつた公債は、昭和九年には八十億になつた。こ

の狀勢で進めば國債が百億圓に達するのは一兩年の後に迫つてゐる。財政基調の破綻を憂慮されるのも當然である。國民の經濟生活はどうかといへば、不景氣と物價昂騰との裡に、不定な狀態にあることはいふまでもない。次に思想方面にはどういふ問題があるかといへば、數年前までは思想問題といへば、マルキシズムの思想で、國民の思想を動搖せし、種々の不祥な事件を惹起し、思想界の癌として深く憂慮されてゐたが、佐野、鍋山等の共產黨員の轉向を機として大分下火になつた。今日では、五、一五事件以來、暴力行爲を用ひて社會の秩序を亂し、經濟機構を破壞し、政治組織を變革せんとする所謂右翼の思想が起り、これが爲人心を不安ならしめ、政治家や實業家の新たな惱みの種となつた。しかし右翼の思想は國粹主義に根ざしてゐるだけに取締は困難であるが、國民思想に對して左翼の思想ほど危險性はないものと見られてゐる。尙、今次日支事變が發生してからの帝國の現狀については、今更いふまでもあるまい。

〔未曾有〕 未だかつて有らずの意。これまでにない。前代未聞。

〔國難來〕 國難の來たこと。國難は一國の危難、國家のわざはひ。

〔我々の祖先は神代の昔から云々〕 我々の祖先が國難に遭つても、徒に悲觀したりせず、談笑の間にその運命を開拓し來つたといふ事を神話に求めれば、先づ天窟戸の變にそれを見るであらう。素戔嗚尊は種々な惡戲をされたが、或時、神衣を織る忌服屋に、逆剝ぎにした斑駒を陷れたので、織女は驚いて死に、天照大神は怒つて天石窟戸を立ててその中に隱れられた。その爲に世の中は眞の闇となり、禍神は忽ち起つて騷ぎ出した。八百萬の神々は天安河原に集り、思兼神に考へさせ、岩戸の前に常世の長鳴鳥(雞)を集め、天香山の眞榊を立て、その上枝には太玉命の造つた八坂瓊勾玉をかけ、中枝には石凝姥命の造つた八咫鏡をかけ、下枝には幣をかけて祈禱し、天鈿女命は日蔭蔓をたすきにかけ、手に矛を持ち、伏せた桶の上で神憑りして踊つたので、諸神は大笑ひ囃した。大神は不思議に思ひ、戸を細目に明けて窺ふと、手力雄神はその手を取つて引出し、戸にはしめ繩を張り渡して再び入られぬやうにした。これで世の中は再び明るくなつた。

〔哀號する〕 聲を立てて泣きさけぶ。

〔談笑の間〕 打解けてはなしたり笑つたりするそのあひだ。

〔內外多事の秋〕 國の內外に事柄の多い大切な時期。

〔高明な精神〕 高く且つ明らかな精神。

〔適用する〕 あてはめて用ひる。

〔目して〕 見て。

〔好戰國民〕 戰を好む國民。

〔軍國主義〕 英語 militarism. 國家の統制力即ち統治權を主として軍隊の力によつて維持せんとするものであり、隨つて軍隊の組織を完全にすることを、國家の第一義的施政方針とし軍隊の爲には絕對的權能を認め、動もすれば法的權威すらも軍隊の勢力に左右されることがあるものである。それが爲に國家の財政產業政策の如きものすら犧牲とされる事が多く、總ての施政が軍隊中心に行はれるものであるから、軍國主義はまた往々武斷政治をも伴ふものである。而して軍隊が政治を左右することはそれ自身の目的でなく、往々にして侵略的帝國主義の方便となる。カイゼル統治下のドイツには軍國主義的政策や思想が盛んであつた。しかし軍國主義は到底、將來に於ける政治の原理となり得べきものではないといはれる。

〔第二のドイツ〕 カイゼル治下のドイツは軍國主義のドイツであつた。而してそのドイツの野望がかの世界大戰を惹起したといへる。世界大戰によつてしみじみ戰爭の慘禍を味はされた西洋諸國は、五六十年來急激に發展した日本を、第二のドイツと稱して恐怖してゐる。自ら描いた鬼面に驚く類といはなければならない。

〔日淸戰役〕 明治二十七年六月から同二十八年四月に至る日淸兩國間の戰爭。明治二十七、八年戰役ともいふ。明治二十七年東學黨の亂後我が國は淸國に對し、兩國協同して、朝鮮の內政を改革し、東洋の禍根を絕たんことを勸めたが、淸國は我が勸告に從はず、却つて我に向つて撤兵を要求し、自國からは水陸の大軍を朝鮮に送つて我を威壓しようとした。會々我が軍艦は豐島沖に於て淸國軍艦の發砲に應戰してこれを破り、在韓の陸兵は朝鮮王の依賴を受けて淸兵を成歡、牙山に破つた。かくて宣戰の大詔は發布せられ、陸軍は平壤を陷れ、海軍は北洋水師を黃海に擊破した。尋いで

第一軍は鴨綠江を渡り、第二軍は花園口に上陸し、共に進んで遼東半島を占領し、將に北京を衝かんとした。ここに於て清國は大いに恐れ李鴻章を全權大使として我が國に和を請ひ、彼我全權下關に會して講和談判を開き、四月十七日平和條約を結んだ。

〔日露戰役〕　明治三十七年二月から翌三十八年十月に至る日露兩國間の戰爭。明治三十七、八年戰役ともいふ。明治三十五年露國は滿洲から悉く撤兵することを清國に約しながら履行するの意なく、益々旅順の要塞を修め、更に手を韓國にまでも伸した。我が國は自國の防衛と東洋平和の爲、屢々交涉を重ねたが、露國は誠意なく、愈々武備を修めて我が國を威壓せんとしたので、遂に兩國の國交は斷絕した。かくて我が海軍は旅順港に敵艦を封鎖して海上權を獲得し、陸軍は滿洲に出兵して第一、第二、第四軍は連勝して北進し、第三軍は旅順を攻圍して惡戰苦鬪十一ヶ月の後これを陷れ、尋いで諸軍聯合して奉天の大會戰に大勝を獲、次いで日本海々戰に大勝して戰役の大勢定まるに及び、三十八年八月米國大統領ルーズベルトの斡旋により、彼我全權はポーツマスに會し講和談判を開始し、十月十六日平和條約は公布されて終局を結んだ。

〔中傷（ちゅうしやう）〕　他の惡事を虛構して、その名譽をきずつけそこなふこと。（人の過失をねらひ射あてて傷つける義）。

〔德川三百年の間〕　寬永十年（一二九三年）德川幕府は耶蘇教禁制の政策上、法令を發して支那、オランダを除く外、外國との交通及び貿易を嚴禁し、またこの兩國にも長崎一港を限つて貿易を許し、これを永世の法とした。嘉永六年（一二五一三年）に至り米國通商を求め、幕府これを許可して開港することとなり、ここに鎖國令は解かれた。幕府の鎖國政策は我が政治、經濟、文化の上にそれ〴〵至大の影響を與へ、永く我が國を世界から隔離して、損失するところ少くなつだ。洋書輸入の禁によつて、從來盛んに傳來した歐洲の學藝は、その途を全く斷ち、國民は爲に西洋の文明に遠ざかり、永く世界の進運に後れるに至つた。また戰國時代以降社會に漲つてゐた海外發展の氣運は空しく挫折するに至つた。

〔資源〕　もとづき依つて利用する本源。

〔歐米からの勢力〕　嘉永六年米使ペルリは浦賀に來

り開國を促した。同年露國使節プーチャチン長崎に來り通商を求めた。翌安政元年ペルリは再び來り前年の回答を促した。幕府は已むなくこれと和親條約を結び、下田、函館の二港を開き、薪水、食料を給することを約した。これを神奈川條約といふ。後、英船長崎に來り、露使プーチャチン再び下田に來り、幕府はこれと各々和親條約を結んだ。安政三年米使（總領事）ハリス來り、開國通商を說いたので、幕府は安政五年米國との通商條約に調印した。次いで幕府は蘭、露、英、佛とも略々同樣の通商條約を結んだ。かくて寬永以來久しく鎖國してゐた我が國も、世界の大勢に促されて、遂に愈々開港することになつた。

〔鞏固（きようこ）〕　かたいこと。たしかなこと。

〔外敵〕　外國から侵入する寇。

〔根柢〕　ね。ねもと。根底とも書く。

〔自ら生きん爲云々〕　いはゆる自衛の發動である。

〔水火をも辭せない〕　水や火の中に飛込むことも辭退しない。どんな苦痛も甘んじて受ける。

〔本體〕　まことのかたち、もとのさま。

〔先天的〕　本來具有すること、うまれつき。後天的の對。

〔春は東郊に云々〕　春は東の郊外に櫻花をさがしもとめ、秋は西の山に紅葉をめでる。「東郊」、「西山」は對句として用ひたもので、固有名詞ではない。

〔衆と共に歡樂す〕　多くの人と一緒によろこびたのしむ。

〔天祖〕　天皇の御先祖。

〔八百萬（やほよろづ）の神〕　「八百萬」は數の非常に多いこと。

〔歸依仰望（きえぎやうばう）する〕　たよりたのみあふぎのぞむ。「歸依」は佛語で、信仰して我が身命を依託すること。

〔明德〕　公明な德行。よい德。善行。

〔天孫の降臨〕　瓊瓊杵尊が我が國にあまくだり給うたこと。

〔神敕〕　神のおつげ。

〔豐葦原の千五百秋の云々〕　日本書紀一書に見える有名な神敕である。この神敕は實に我が國の主權者と坐す天皇が、皇統連綿、萬世一系たる所以の本源であつた、天壤無窮の皇運、國家長久の理想に對する莊嚴な宣言と謂ふべきである。「豐葦原の千五百秋の瑞穗國」――大層長いがこれ全體で我が日本國の美稱であ

る。我が國の土地の豐饒で、秋には米穀の豐かであることを賞め稱へたのである。葦原といふのに、まだ開拓しない地には到る所葦が茂つて居つた有樣が窺はれる。釋日本紀に、「豐葦原千五百秋瑞穗之地、是肥饒豐富之國也、凡肥美之地、葦草多生、故取喩之、殊云千五百秋者、是遠指長久、蓋古人以此爲極多之數歟。」また國號考には、「豐は美稱にて、大八島の大のたぐひなり、そは此國號へすべて係れり、葦のみにかけて云にはあらず、水は徒の假字にて、物のうるはしきをほむる言にて、これは穗をほめたるなり、書紀に瑞字を書れたるはあたらず、彼字につきて祥瑞などの意とな思ひまがへそ、穗は稻をいへり、葦のにはあらず、凡て稻穗をたゞに穗とのみいへるは、萬葉に秋穗などもいひ、書紀に『天照大神又敕曰、以吾高天原所御、齋庭之穗、亦當御於吾兒』とあるがごとし。」

〔吾が子孫の云々〕　吾が御子の繼々に君たるべき國である。

〔就いて治らせ〕　行つて統べ治め給へ。「治らす」は「知らす」で、「知る」の敬語。「知し召す」と同義。

〔さきくませ〕　さいはひにませ、つゝがなくおはせ。

これは大神が皇孫を天降し給ふに當つて、その着かせ給ふまでの御平安を祝はれたものである。

〔寶祚の隆えまさんこと云々〕　神聖な皇位は一系を以て萬世に亙り、皇運天地と共に窮りなく、永遠に彌榮えるに相違ないの意。隆んなる日本皇統の將來を祝福し給へる御言葉である。「寶祚」は天照大神が任さし給ふ日の御位を承け繼ぎ給ふ意とするのが、古事記傳來一般に行はれた解釋である。

〔五つの伴の緒の神〕　天兒屋命、太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉屋命の五神である。「五つの伴の緒」は、五つの部族の首長の意。「伴」は「ともがら」の「とも」と同じく、「緒」は玉を統べる緒と同義で、統帥の意がある。「伴」は部とも、品部ともいつて、一定の職業に從事する部民で、「伴の緒」はその部民を率ゐて公に仕へる首領である。

〔配侍せしむ〕　書紀では「使二配侍一」と訓ませてゐる。天孫の御前に陪從て、供奉せしめ給ふの意。

〔八尺瓊の勾玉〕　書紀に「八坂瓊五百箇御統之玉」と記してある。美しい勾玉を數多緒に貫き連ねた長い玉飾である。「八尺」に就いて種々の說がある。美玉を產

する地名であるといひ、彌榮の義ともまた彌眞明の義ともいひ、また彌尺の義で長い緒に貫いた意であるともいふ。「勾玉」は曲り玉の義である。牙の形の稍扁平で聊か彎曲した長さ一寸ばかりの玉である。もと動物の牙に孔を明け、緒に貫いて裝身具としたのが起原であるといふ。遺物によれば質は斑瑪瑙を普通とし、次いで碧玉岩、滑石、紅瑪瑙等を用ひる。

〔八咫の鏡〕　ヤタの解釋に就いて從來種々の說があつたが、最も有力なのは次の記傳の說である。記傳には二說を擧げてあるが、その第一說に、ヤタはヤハタを約めたので八頭の義であつて、そのハタは魚の鰭と同義で物の端をいふのであると。(第二說には八つの頭の意といふ。)この解釋によれば、八葉鏡即ち菱花鏡を指すものであつて、今も御鏡の圖には多く八葉鏡が描いてある。しかし考古學の教へる所によれば、上代の鏡はすべて圓鏡であつたから、記傳の解釋は穩當でない。高橋健自氏著「鏡と劍と玉」によれば、ヤハタは多くの端の義で、卽ち鏡背の中央にある紐座から緣に至るまでの模樣に、多くの紋帶がある。精巧なる鏡の意である。而して形は上代一般の鏡が圓鏡である以上は、こ

の御鏡もまた圓鏡であり、その大さは延喜式及び儀式帳に、御樋代の內徑一尺六寸三分とあるから、略直徑一尺內外のものと推測され、その質はこれも上代一般の鏡から推して白銅鏡であるといふ。

〔天叢雲劍〕　日本武尊の故事によつて草薙劍とも稱する。書紀に「中有二一劍一、此所謂天叢雲劍也。」とある。その名の起原に就いて古語拾遺に「大蛇之上常有二雲氣一、故以爲レ名。」とある。

〔この鏡は專ら云々〕　この鏡は專ら我が御魂として、我が御前に齊き仕へた通りに、この後はこの鏡を齊き祭れといふ意。この神は古事記に見える。これに續いて、「次に思金の神は前の事を取り持ちて、政せよ」とある。

〔治國の要諦〕　國ををさめるかなめなみち。

〔勾玉の勾れるが如く云々〕　勾玉のまがつてゐるやうに廣く行渡らぬ所なく、和やかに穩かに靈妙の御心をもつて、天下を治め給へとの意。

〔白銅の鏡云々〕　よく澄んで極めて明らかな鏡のやうに明らかに山川を御覽になり……。

〔十握の劍を云々〕　刀身の長さが十握(一握は四指

を並べた幅）もある長い劍を把つて天下を平げ給へ。

〔北畠親房〕　吉野朝の忠臣。正平九年（一三五四）歿、年六十三。著に神皇正統記の外、職原抄、古今集註等がある。

〔神皇正統記〕　六卷。神代から後村上天皇の踐祚（一九九九年）に至る歷代の事蹟を述べ、南北兩朝の正閏を併せ含めたもの。延元四年の秋、常陸の小田城に於て著はし、後村上天皇に獻じたものといふ。但しこの延元四年の初稿は、今傳つてゐない。今日見る所は興國四年（一三四三年）七月、關城に於て修訂した本である。

〔この三種につきたる神敕云々〕　この三種の神器に就いての神敕は、疑ひもなく國家を平安に治め給ふべき方法といふべきであらう。

〔鏡は一物をたくはへず云々〕　鏡は本來の色といふものがないから、それに映る物は皆その自然の形を顯して、是非善惡そのまゝに見えぬといふことはない。故に先方次第で、どんな事でも自在に相應ずるのが鏡の持前で、實に正直の根源である。

〔玉は柔和善順を德とす云々〕　玉はおとなしくすなほなのが持前であるから、物を憐み慈しむ本源である。

〔劍は剛利決斷を云々〕　劍は剛健銳利で、一揮して亂麻を斷つやうなものを持前とするが、事物の疑を決する才智の本源である。

〔詞つゞまやかに云々〕　語は簡略でその意味は深い。「旨ひろし……」。の次に「剩へ神器にあらはし給へり。いと忝なき事にや。」とあるのが、略されてゐる。

〔心性明らかなれば云々〕　心だに明らかであれば慈悲を加ふべき所には慈悲を加へ、決斷すべき所には果斷をするから、鏡の德の中に劍と玉との德は含まれるとの意。

〔まさしく御影をうつし云々〕　御鏡は初め大神の御像を模し造つたものだから、大神もこれに深く御心をうつし留め給うたのであらう。「かし」は敷辭。

〔智仁勇の三德〕　智、仁、勇は儒敎で三德と稱して重んじてゐる德目であるが、これに當嵌めて、鏡は智を、玉は仁を、劍は勇を表すものであるとなす說が古くからある。

〔尙武〕　武事を尙ぶこと。

〔立國の要義〕　國の基礎をたてる大切なみち。

〔萬機公論に決すべし〕　明治天皇の五箇條の御誓文の一箇條。天下の政務は輿論の歸向する所に從つて處理せよ。

〔天の安河原〕　天の安河は傳記によれば、古語拾遺に天八湍河原とあるから、彌瀨之河の義であらうといふ。卽ち幾瀨もある廣い河の意である。英人の日本研究家アストンは、支那の所謂銀河であるといつてゐる。

〔神集ひに集ふ〕　「神」は神に關する事に添へる接頭語。集ひに集ふこと。「神集ひに集ふ」、「神やらひにやらふ」のやうに、同じ動詞を重ねてその意義を強めたり、その動作がひたすらに行はれるやうな意を表す語形は、上古文には頻繁に用ひられてゐる。重ねた動詞の上のは連用形で、それに「に」を添へたものは、下の動詞に對して修飾語となつてゐるのである。中古語法の「降りに降る」、「泣きに泣く」、また口語の「言ふに言はれぬ」、「行くに行かれぬ」も同じ語形である。

〔衆議〕　多人數の評議。多數者の評定。

〔思兼神〕　數多の人の思慮を一人で兼ね持つ程に智謀に長じた義の名である。

〔舞樂を奏した〕　「舞樂」は舞の副うた雅樂をいふ。唐、韓より傳來し、または我が國で製作せられた。天岩戶の前に、八百萬の神々が集ひ、大神の御心を慰めんとして、歡樂を行つた事は、「舞樂」といふよりも、「神樂」といつた方がよいであらう。何故ならば、それは「神樂」の起源とされてゐるからである。「神樂」は人の知れる通り、今日に傳つた古代の音樂で、歌があつて舞のあるもので、專ら神事に行はれる。

〔大國主神に歸順を云々〕　大國主神の勢力は出雲を中心として山陰山陽を併せ、なほ東方は越後や信濃にまでも及んでゐたらしく、その文明は大陸との交通によつて、既に相當の進歩を遂げてゐたもののやうである。それ故高天原に於て國家統一の方針を立て、出雲氏族の開拓した土地を併合しようとするに當つても、事が容易に進行しなかつたのは當然で、天の安河原に、八百萬の神を神集へに集へ、思兼神に思はしめ、神議りに議つて、天菩比神以下再三の使者を遣はされたことが古事記に見える。

〔獻策〕　はかりごとを進言すること。

〔萬衆相融和す〕　多くの人々が互ひにうちとけて一

つになる。

〔私心（ししん）〕 自分一己の私欲をはかること。

〔規範〕 のり。てほん。

〔君幹臣枝〕 君は幹であり、臣はそれから岐れた枝であるとなす思想。

〔直系〕 祖先から直線的に繼續して、その人に至つた系統。

〔傍系〕 直系から分れ出た系統。

〔血族〕 同始祖から出て血統の續いた親族。

〔大義名分〕 君國に對する臣民の節義と分限と。

〔疑問を超越してゐる〕 疑問をこえてゐる、卽ち明白で、疑問となり得ない。

〔天皇の尊嚴は云々〕 宗家たる天皇の尊嚴はとりもなほさず分家たる我々自身の尊嚴であるに外ならない。

〔統治權〕 主權者が一國の人民を統治する權力であつて、主權または國權といふに異ならない。

〔所有權〕 物權の一。物に就きて一般的支配をなすことを得る權利。一般的支配とは、法律の範圍内に於て自由に物の使用、收益、處分または占有をなし得ることをいふ。所有權は財産私有制度が生んだ法律上の權利で、一般人民は財産の所有を國法によつて承認保護されてゐる。財産の私有は實に今日の社會の基礎をなすものであつて、所有權を犯すことは卽ち社會を危くすることとなる。故に所有權に關する事柄は今日の法律の大部分を占め、所有權を犯す者に對する罰則は精細嚴重を極めてゐる。所有權はあらゆる有形の財産をはじめ、鑛山採掘權、商標使用權、專賣權の如き無形の權利に至るまですべて認められてゐる。しかし戰爭その他の事變に際して國家を防禦し、公安を維持する必要のある時は、一時所有權を停止し、或は公共事業の爲、止むを得ない場合には一定の代償を與へて强制的にこれを公共の私有に移し、また國家保安の立場から、最初から或種の物の所有を禁ずる等の制限が存してゐる。

〔普天の下、率土の濱〕 天のおほふかぎり地の續くかぎり。天下中の義。詩經の小雅北山篇に「普天之本莫レ非二王土一、率之濱莫レ非二王臣一。」の註に「土ノ廣キ臣ノ衆キヲ言フナリ、率ハ循、濱ハ涯ナリ。」

〔今日の法律論では云々〕 天が下これ悉く陛下の臣民でないものはなく、陛下の領土でないものはないと稱することは、今日の法律論から見ても、妥當であつて一向差支へない。何となれば、天皇は統治權の主體であらせられ、その統治權によつて、その領土及び臣民を支配し給ふからである。然らば作者が、「さうは言へないであらうが……。」といふのは何を意味してゐるのであらうか。推量するに、それは臣民の生命及び所有權は、天皇と雖も素りにこれを侵し給ふことはないの意ではなからうか。抑々統治の目的は國家に於ける全團體員の共同生存を保護するにあるのであるから、さやうなことはあり得ないのである。されば我々臣民の權利は憲法によつて保障されてゐる。但し臣民の權利は統治權（統治權は絶對である故）に服從する義務を有する。故に統治の必要のある場合には、臣民の權利は法律によつて制限を受けるのである。例へば臣民にして統治を妨害するが如き行爲ある時は、逮捕し、監禁し、處罰される。また統治の必要上、一部の或土地その他一部の或財産を國家所有となす等のことがある。

〔斯くの如き感情〕 我々の身體も我々の住む土地も、すべて天皇陛下のものであるといふ氣持。

〔皇室以外は總て平等〕 「皇室」とは、總皇族の一團たる家といふ義であつて、その家長は卽ち天皇である。皇室の家族を皇族と稱する。皇族と稱するは、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王をいふ。（典範第三十條）君主國に於ける統治者は、君主であつて、君主は唯一人である。被治者は臣民であつて、臣民は君主を除く外、國家組織分子の全體である。それ故に皇族と雖も臣民である。實際の取扱上には、皇族外の臣民とを區別するけれども、その本質上には何等の差異を存するものではない。この意味に於て、「皇室以外はすべて平等だ」の觀念は間違つて居らない。

〔族制政治の結果云々〕 「族制政治」は氏族制度の政治の意である。上古我が國に行はれた氏族制度は一種の封建制度であつて、臣、連、國造、稻置、公、別など各々土地人民を私有し、世々同一の官職を以て朝廷に仕へ奉つた結果、中には權勢を擅にして土地人民を兼併して、その勢皇室をも凌ぐやうな者を生ずるに至

つた。蘇我氏の横暴などはその極點に達したものといふべきである。故に中大兄皇子は中臣鎌足と謀つて、蘇我氏を滅した勢に乘じて、一大改革を決行し、唐の制度を參酌して中央集權の制を立てようとせられた。孝德天皇は卽位の日、中大兄皇子を皇太子とし、中臣鎌足を內臣とし、さきに入唐留學し、支那の制度文物に通じてゐる高向玄理、僧旻を用ひ、先づ始めて年號を立てて大化といひ、着々改革の準備を進められた。

かくて翌大化二年（一三〇六年）に至り、改新の詔を發せられたが、その主要な點は、(一)從來皇族以下各豪族の私有してゐた土地人民を收めて公地公民となし(二)官職の世襲を廢して、人材登庸の途を開き、(三)中央の官制を定め、地方は國、郡に分ち、國司、郡司を置いて治めしめ、(四)新たに戶籍を作り、班田收授法を立てて、人每に口分田を給し、(五)稅制を定めて租、庸、調の法を設けられたことなどである。

〔薩長土肥の四藩が云々〕 明治元年四月朝廷は幕府の舊直轄地四六萬石を收め、次いで舊旗本の知行所約三百萬石をも收め、これを八府、二十一縣に分つて知府事、知縣事を置いて之を治めしめられた。しかし二百七十餘の舊大名の封土は元のまゝであつたから、朝廷は全國劃一の政治を行ふことが出來ず、且歲入も乏しく財政の基礎が定まらなかつた。同年十二月に至り姬路藩主酒井忠邦は上表して、諸藩の土地人民を收められんことを建言した。この時木戶孝允も版籍奉還の急務なることを感じて居つたから、自ら國に歸つて藩主毛利敬親を說いてその快諾を得、更に大久保利通に謀つた。利通も大いにこれに贊し、その藩主島津忠義を說いて同意を得、次いで土佐藩主山內豐範、肥前藩主鍋島直大もこれに贊したから、同二年正月に至り薩、長、土、肥の四藩主は連署して、その封土人民を奉還せんことを請ひ、次いで他の諸藩も相次いでこれに倣つた。朝廷はこれを嘉納してその請を許し給ひ、舊藩主をして知藩事とし、賢良の者を擧げて參事とし、府縣に倣つて藩內の政務を掌らしめられた。是に於て天下萬民は悉く朝廷に直隷し、全國劃一の政治を行ふこととなつた。この時全國に八府、二十六縣、二百六十二藩あつた。かくの如く政治上の大變革が、流血の慘事を見ないで平和の間に行はれた事は、世界史上類例のない所である。

〔率先す〕 さきがけとなる。

〔版籍〕 版圖と戶籍。轉じて土地と人民。

〔階級鬪爭〕 社會的地位の相異なるものの間に於ける紛爭。富者と貧者と、または上流社會と、若しくは資本家と勞働者との間に於ける對立的葛藤。マルクスは歷史の推進力を階級鬪爭に認め、「從來のあらゆる社會の歷史は階級鬪爭の歷史である。」といつた。現代では無產者階級が、有產者階級に對する現存私有財產制度撤廢を目的とする鬪爭が存する。

〔革命〕 廣義に解すれば萬物の狀態及び進行上に於ける根本的突發的の變化を意味する。これは從來行はれた觀念であるが、マルクス社會主義によつて新たに社會革命なる觀念が普及されるに至つた。社會革命とは社會の基礎たる經濟組織と、その基礎の上に建てられてゐる政治上、宗教上等の一切の組織制度の總體的變化を意味するもので、政治革命は卽ち社會革命の一部をなすに過ぎない。

〔社會改造〕 社會の組織を全くつくりかへようとすること。

〔心事〕 心に思ふ事。こゝろのほど。

〔四民平等〕 四民、卽ち士、農、工、商の間に階級的差別のないこと。

〔これを古今に通じて云々〕 これは昔に行つても今日に行つても少しも間違ひがなく、これを國の內外に施して行つても少しももとらない。卽ち時間、空間を超越して眞である。「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」（教育敕語）

〔我々はこの精神を云々〕 我々はこの建國の精神を現代に當てはめて、活用して行かなければならぬ。

鑑賞批評 本文は、量的には、我が國民はいかに先天的に平和を愛する人種であるか、といふことを納得させる點に最も多くの努力を費してゐる。作者は、第一に、外國人のうちに、動もすれば我が國民を目して好戰國民であるかの如く見做すもののあることを難じ、恐らくはかく見做される原因となつたであらうところの日淸、日露の兩役は、決して故意に事を構へたものではなく、いかに止むを得ざるものであつたかを辯論してゐる。日淸、日露の兩役、または先年の滿洲事變、今次の日支事變等は、いはゆる我が生命線の確保、延いては全東洋の平和のために、いかに起たざらんと欲しても起たざるを得ざ

る結果のものであつたにも關らず、一部の外國人から、ミリタリズムに根ざした挑戰であるかの如く解されてゐるのは、我々も亦作者と共に慨歎に堪へない。尤も、一部少數の日本人の中にも、めくら滅法な强がりをいひ、取るにも足りない些細な事にも、直ちに腕まくりをして見せるといふやうな人がないわけではなく、かういふ人たちの言動が全日本人のそれであるかの如く誤解されてゐるやうな點もあるらしい。本文の讀者は心して、さういふ似て非なる愛國主義の安賣を愼しむやうにしたいものである。次に作者は、八百萬の神々が、荒神の素戔嗚尊を敬遠して、天照大神に歸依されたこと、三種の神器のうちで、鏡をもつて第一位に置かれたことに據つて、我が國民が何よりも平和を愛し、正義を尊んでゐるものであることを證據立ててゐる。(このあたりの論調は、筆者の得意とする座談的演說の如く爽快である。)いふまでもなく天照大神は光明の神である。天上に於ては太陽によつて象徵され、地上に於ては鏡によつて象徵されてゐる神である。光明は必然的に暗黯を厭ひ、陰慘を憎む。國土草創の始より、かゝる神を天祖と仰いでゐる我が國民が、殘鼻なる戰亂を積極的に好む道理は決してあり得ないのである。覇道を以て外國を威服せしめんとした、いはば當方から手出しをした戰役を、强ひて國史上に求めれば、豐臣秀吉の朝鮮征伐ぐらゐなもので、然しそれも、日本國民の好戰心から出たものではなく、秀吉個人の覇氣から生れたものと見るべきであらう。次に筆者は萬機公論に決するの理想、君臣同治、四民平等の理想を高揚してゐる。それを解說するに、或は天の安河原に於ける神集ひの例を引き、或は大化の改新の例を引き、或は明治維新の例を引き、遺憾なき理解を與へてゐるが、ここでは、特に、大化の改新に於て群臣が所有の私民私田を獻上したり、明治維新に於て、三百諸侯が一齊に版籍を奉還したり、「外國に於ては、階級鬪爭とか、革命手段とかに訴へなければ成就し得ない社會改造でも、我が日本では必要に應じ、平和的手段を以て」これを解決し得たる事實について、深く考察せしめねばならないと思ふ。

附錄

江戸時代の文學

扱方 第一學年から第五學年に至るまで、上は古事記、源氏物語から下は明治大正昭和の各時代に至るまで兎も角もその代表的作者の作物の一斑を讀み味はつて來た。卷九及び卷十の附錄はこれ等既得の國文學の作品を系統づけ、更にその展開の迹を辿らして、その思潮の流を明瞭ならしめたいと、上古から現代に至るまでの國文學史の大體を述べたのである。既得の各文學作品の相互關係を知り、その知識を確實ならしめ、苟くも中等學校卒業者として、當然な常識であらう我が國文學の概括的な體系を知らしめたいのである。本附錄は文學史潮の收得が主意であるから、文學史的區分を先づ十分に理解せしめ、その間に發生し、發達した文學に就いて、既得の知識を整理せしめつゝ、未知の文學に就いて說明し、これを體系づけるやうにされたい。——それに就いて、本文學史は、單に中等學校卒業生の常識、廣く日本國民としての一般常識とさせるものであるから、最も常識的に概括的に、說明されて、餘り新しい意見、學說などは敎へられぬやうにされたいと思ふ。——又、文學史的區分であるが、これは決して歷史的區分、政治的區分とぴつたり一致するものではないから、出來るだけ歷史的區分を土臺として說いて來た、これに對して異論を生ずる事と思ふが、文學史と、その時代の歷史とを相關聯させて說明することは、印象的であり、生徒の理解にも便利だと思ふから、可成このまゝで說明されたい。要するに、本文學史は文學史そのものゝ敎授といふよりは、生徒の既得の國文學的知識を整理し、體系づけ、我が國文學の一貫した風潮、特質を知らしめるのであるから、あくまでさうした用意の下に敎授されることを望む。徒らに新說異論を樹て、或は煩雜な說明をして、生徒の頭を混亂せしめないやうに注意されたい。尙かうした取扱方は以下の總てに亘るから、以下の文學史に對しては扱方の詞を省略する。尙語釋は固有名詞の解釋に止め、文意の上には原則として言及しないことにする。

敎授

〔江戸時代〕 第百七代後陽成帝の慶長八年(一六〇三年)德川家康が江戸に幕府を開いてから第百二十二代

明治帝の慶應三年（一五二七年）慶喜が大政を奉還し王政復古するに至るまで二百六十四年間の稱。治平の世となつてからは文教政策が家康の根本政策であつたので、當代文學の根本思想は儒教精神に基づいてゐた。文學史的區分は東西の地理的關係によつて京阪文學（元祿時代中心）と江戸文學（文化文政時代中心）とに分れ、更に各二期宛を含んで四期に分つを便利とする。

〔家康の治國策云々〕　德川家康は慶長八年（一二六三年）二月征夷大將軍に拜されてからは文教政策を以て治國策とし、儒者を招き典籍を蒐集せしめ古書を印行し學者を保護するに力を注いだ。周防國大內氏の遺臣南村梅軒や播磨國細川藤原定家の遠孫惺窩はその召に應じて門弟林羅山を薦めて昌平黌が創設されたりした。故に文藝復興は漢學に端を發し、和學次いで興り、洋學も後に起つた。その根本思想は儒教にあること勿論である。

〔官儒設定〕　藤原惺窩は門弟林羅山を初代將軍家康に薦め、慶長十一年羅山は召されて博士となり政治上の顧問となり、又教育の事に當つた。後、寬永七年第三代將軍家光は忍岡の地を羅山に賜ひ興學の地とした、後の幕府學問所（昌平黌）はこれであり、子春齋、孫鳳岡と代々大學頭となり、三百年の間幕府の學政を掌るに至つたが、官儒設定に力を注いだのは勿論羅山であり、その學說は純正朱子學派であつて、佛老莊基を排斥し、神儒の調和を計らうとした。その他招かれた學者の主なる者には公卿では舟橋秀賢、山科言經、僧侶では相國寺兌長老、南禪寺三長老、東福寺哲長老等中にも金地院崇傳長老は內典外典に通じ、羅山と共に幕府の施設に貢獻する所多大。又和學者方面には冷泉爲滿、飛鳥井雅庸がゐた。これ等學者を擁して計畫した家康の仕事は、古書蒐集とその印行との二つであつた。

〔典籍蒐集〕　書物を多く集めること。應仁の亂以來戰爭續いて奇書珍籍の多くは散佚されたので、家康はこれ等を恢復しようとして公卿寺院等の秘底を探索して古典籍を求め、江戸城內富士見櫓に文庫を設けて保存したのが慶長七年の事で、これが後の紅葉山文庫である。更に五山の僧侶に命じて典籍の筆寫をも爲さしめたが、時は大坂役にも拘らず京都南禪寺で大いに謄寫し、舊事記、古事記、日本後記、文德實錄、三代實錄、類聚國史、律令格式、百練抄、江家次第、北山鈔、西山鈔等皆寫された。

〔書物の公刊〕　家康は以上の理由で蒐集した他に足利學校第九世の庠主閑室を聘して伏見の學校の主宰とし、木活字十萬餘を刻して書籍刊行の事業を管理せしめた。慶長四年に開板せられた孔子家語を幕府開板の最初とし、貞觀政要、武經七書等が出、後に開板事業を駿府に移し、羅山と崇傳が主宰となり、同二十年に大藏一覽、元和二年に群書治要の開板があつた。これを駿河板といふ。別に早く後陽成帝は文祿二年に古文孝經を開板せしめられたが、これが木活字版の嚆矢で、錦繡段、勸學文、日本書紀神代卷、職原抄、五妃典等がある、これを慶長勅版といふ。以上二板の他に私板として多出した中で直江山城守の直江本、角倉素庵の角倉本が名高い。國文學書の印行は角倉本で、源氏物語、伊勢物語、古今集等の如きはこれによつて世に出た。かくして印刷術の進步は、實に近世文運の母となり、王朝文學時代と相俟つて文藝は復興し、黃金時代を現出するに至らしめたのである。

〔松永貞德〕　貞風（古風）の開祖。幼名が勝熊、老名が延陀丸、長頭丸。細川幽齋以下五十餘人にそれ〴〵師事して和歌を學び、紹巴について連歌を學び、壯年に及んで一家風を立て、慶長三年攝政久前から花唉翁、花の本の號を許され、俳諧宗匠の免許は彼に始る。承應二年（一二三一三年）歿、年八十三。彼の功績は俳諧の法式を定めたこと（著書御傘）、衰頽しかゝつてゐた俳諧を復興せしめたこと、發句獨立の先蹤をなしたこと、多くの俳星を門下から出したこと、和歌を堂上から民衆の手に移して普及せしめたこと等である。貞德和歌集の他に俳書御傘、淀川（一名新增犬筑波集）、油糟を三部書といふ。作風は守武宗鑑時代と何等の進境がなく、附味に從來の可笑味のみならず、優美で高雅の趣致のあることや、用語に俗語が多くなつたことや內容に人事を多く取材したこと等が變つてゐる。俳句は前代と變らず、秀句と緣語の舊技巧である。「霞さへまだらに立つや寅の年」

〔法格〕　貞德の御傘十卷。內容は應安新式を簡易にした規則といふに變りはないから、後に檀林派から攻擊された。要するに俳諧とは句ごとに俳言を賦した連歌であるといふ意。俳言とは古來和歌や連歌に用ひられ

なかつた俗語、漢語のことで、これ等を詠みこんだものであるといふのである。又禁制としては正體ない句（一句にその理―俳言―なきもの）、用付（前句と同じもの）、同意（前句と付句と同想のもの）を擧げてゐる。これを史的に眺めると、守武宗鑑等が自由の俳風を布いてから放逸無拘束に流れたので、貞德は御傘によつて更に新しい拘束を設けたのである。

〔貞風〕　古風ともいふ。貞風の特質は文學としての價値は低い。が、文藝資料として範圍が擴大されてゐる。伊勢源氏の古典や謠曲小唄の類をも自由に取入れ、言語上の技巧的をかしみが多く、內實には重苦しい眞面目さがあると同時に、他面にやさしみといふ典雅な趣がある。「これはこれはとばかり花の吉野山」（貞室）「庭にさへさぞな落葉は東山」（立圃）。俳諧では「うすがすみ衣通姫が桃の色（季吟）柳の髪もしなだれし庭（友光）」同門の主なる者は野々口立圃、北村季吟、松江重賴等。

〔西山宗因〕　檀林派の開祖。名は豐一。梅翁、西翁と號す。肥後八代城主加藤右典厩正方の侍臣であつたが、寬永九年主家の滅亡と共に上方に放浪し、豪信法師について和歌と連歌を學び、更に懷惠庵里野昌琢に連歌を學んだ。時に京都は貞風の宗匠松江重賴、山本西武等がゐて俳諧が流行してゐたので、彼も寬永十三年二十二歲の時重賴と談論を交し、遂に斯道に入り、始は貞風に沈滯してゐたが次第に自家獨得の俳眼を開き、檀林の一派を立てて全國を行脚し、入門者多く、遂に貞風を壓倒した。天和二年（一六八二年）歿、年七十八。特徵は主として發句に力を注いだこと、用語を自由にしたこと、調に字あまりを好み用ひたこと、想に貞風よりも輕快味を多く取入れたこと等。句集は西翁十百韻、梅翁宗因句集。「花に吹曉風殘念この時なり」

〔檀林風〕　檀林風。檀を談とも書く。貞德の貞風の後に現れたもので宗因の立てた俳風。明曆二年（一六五六年）に宗因が大阪天滿宮境內に向榮庵を結んで「神やうけしついによるべの菊の水」と詠んだのがこの派の產聲で、元祿の芭蕉が出てからも多くの門弟があつた。俳風は談林十百韻が最もよく表してゐるが、奇想と奇調とを好み、字餘りや謠曲がかりの句が多い。中には溫藉優雅で、後の蕉風を想はせるものもある。「頭巾寒うして北に峨々たる青山なし」（宗因）「長持に春ぞくれ行く更衣」（西鶴）「とく散つて見る人歸せ山櫻」（惟中）俳諧は「ところてんすゝめを聞召されぬこと。ついに伍子胥が西瓜はねられ。」同門の主なる者に井原西鶴、岡西惟中、前川由平、內藤露沾等。

〔假名草子〕　眞字本、漢文書に對して主として假名で書かれた書で、廣義では平安朝以後假名書の總てを含むが狹義では德川初期寬文年間主として京都に行はれた文學書類に限る。物語、小說を主として說話集、隨筆その他を含む。內容は短篇で婦人童蒙等廣い讀者層に對して作られた啓蒙教訓娛樂のためのもので挿繪がある。室町時代の御伽草子の後を承けて戀愛物、兒物、本地物、異類物、又は本朝、支那、印度の傳說を取入れたものもあるが、一般に佛教的內容が多い。この他に笑話を主とした醒醉笑や、名所記の最古であるあづま物語や、遊女に關した浪花鉦等がある。主なる作者は如儡子、鈴木正三、山岡元隣、淺井了意、野々口立圃、中川喜雲等。主なる作品は右の他に薄雪物語、うらみのすけ、しぐれのえん、二人比丘尼、竹齋、竹齋狂歌物語、東海道名所記、御とぎぼうこ、浮世物語等。

〔元祿時代〕　江戸文學史的區分の第二期に當る。天和元年（一六八一年）から元文五年（一七四〇年）までの五十九年間をいふ。元和偃武後約百年を經て治國平天下となつた時代で、元祿年間を中心として前後に亘つたいはゆる元祿時代。江戸時代中最も豪興の氣風が充滿し、前第一期をうけて平民文學が殆ど全く何等の抑壓を受けないで自由に發展した、いはゆる發展時代。大阪が中心であり、作者の多くは町人であるので町人文學ともいふ。當時の江戸は未だ殺伐の氣に充ちてゐて、わづかに金平節に喝采をするやうな幼稚な文藝にすぎなかつた。

〔華奢に赴く世相〕　大阪は商業の中心地、富有商人の密集地で、昔、周防山口と交通して早くからその趣味性を養つた堺町民の移住した地で、この二點により文化は急進し、華奢を極めるに至つた。京都の清水八幡の舞臺で石川六兵衞の妻が難波屋十右衞門の妻と衣裝競をしたことや、嵐山で緒形光琳が蒔繪をした竹の皮を惜しげもなく河水に投じたりしたことは著名な華奢ぶりの一つに過ぎない。淀屋辰五郎事件も華奢故に家沒收の悲劇であつた。又、江戸では紀伊國屋文左衞

門對奈良屋茂左衞門の華奢ぶりは名高い。これ等遊興の地は京の島原、大阪の新町、江戸の吉原といふ遊廓であり、劇場であつた。その歡樂場裡から文藝が花と咲き誇つたのである。

〔武家は漸く軟弱の風に染み〕　武力に代るに金力を以てし、社會の中心勢力は町人の上に推移した。で、武家はその經濟的逼迫ために町人から金融の方法を講じたりしてゐた、經濟的關係以外は、江戸末期のやうに細身の大小に着流しといふ風態はさすがに見られない。幕初以來奬勵された儒學思想は上下に浸染し、天下の道德は孔孟の道を根本として鼓吹せられ、今まで慣習的に守られてゐた忠孝節義の觀念は文理的の修養に進み、文武兼備を以て武士道の典型とするに至つた。赤穗義士はその代表である。しかし、一般の武家風はどちらかといへば軟弱の風に染みて行かうとする傾向にあつたことは勿論である。

〔儒學〕　支那周末魯の孔子によつて首唱せられた倫理說で、十哲や孫の子思の門人孟子によつて弘通し、遂に支那朝鮮日本の上下數千年に亘つて思想風教を支配するに至つた。その理想は一種の尙古主義ともいふべく、夏殷周三代の治、堯舜禹湯文武周公を讃美し、五倫五常を首德とし、その教義の典據とするものは十三經（易經、書經、詩經、禮記、春秋、孝經、周禮儀禮、公羊傳、穀梁傳、爾雅、論語、孟子）である。春秋戰國より漢を經て宋代に入り、新に佛教思想を取入れ一個の道德哲學を立說するやうになつた。陸象山、朱晦庵はその最たるもので、明代に又王陽明が知行合一說を唱へ相當に廣まつた。日本では應神帝の時已に論語の渡來があり、後代々渡來の書多かつたが、單に讀解に過ぎず、王朝時代鎌倉室町時代を經て德川時代に入つて始めて內面的な儒道研究が起り、藤原惺窩から林羅山に傳はつた朱子學は、遂に官學となつた。これ以外には中江藤樹の陽明學派、伊藤仁齋の復古學派、荻生徂徠の古文辭學派、片山兼山、井上金峨の折衷學派、吉田篁墩の考證學派等多數。さて幕府官學である朱子學は宋の大儒朱熹（晦庵）の學說をいふので、要するに周濂溪の大極說と程子の理氣說や張橫渠の立說や、古聖賢の說や、佛教までを集大成した東洋哲學で、理氣二元論で、理に氣を配して宇宙の萬物生ずるといつてゐるが、理とは本體、氣とは現象の如きものをさして

ゐる。

〔國學〕　漢學に對する日本學の意で、日本固有の事物に關する學問。廣義には國民文化の闡明であり、狹義には古典古文學神道等を中心として研究する學問で、共に復古思想が中心をなしてゐる。

〔綱吉の文學尊重〕　五代將軍綱吉は儒狂と目せられた程の好學の君であつたので、學者の優遇登庸はいふまでもなく、自ら諸侯を召して經書を講じたりした。又、林羅山が私に忍岡に弘文館を建てゝ孔子及び十哲の像を安置し奉祀してゐたのを、元祿四年その孫で當主である鳳岡（信篤）に命じて、これを湯島に移して官祀とした。

〔多くの學者文豪〕　林家の鳳岡（信篤）の官儒以外に木下順庵、山崎闇齋、貝原益軒（以上朱子學）、伊藤仁齋（古學）、荻生徂徠（古文辭學）等の大儒出で、近松門左衞門（戲曲）、井原西鶴（小說）、松尾芭蕉（俳諧）等の文豪が出て、文藝の黃金期を出現せしめた。

〔和漢混淆文に新境を拓いた者〕　前代の軍記物は勿論和漢混淆文であるが、多く修辭の絢爛さを求めて對句疊句を重ね、範を四六駢驪文に取つてゐた。が、當代のはそれとは異なつて、骨法は多く唐宋の文體に求めて必ずしも詞藻の美を求めない。林羅山の大學和字鈔や、熊澤蕃山の集義和書や、伊藤東涯の輶軒小錄や、荻生徂徠の南留別志等多く出た。中にも貝原益軒、新井白石、室鳩巢の三家の文は著名で、益軒の初學訓、童子訓、大和俗訓以下いはゆる十訓の如き、文は謹嚴、にして懇切である。白石の藩翰譜、讀史餘論、古史通、折焚く柴の記の如き國文學上重要なもので、藩翰譜の如きは叙事文の上乘で混淆文の至粹といはれ、折焚く柴の記は混淆文中に雅文の趣を具へたものである。鳩巢の駿臺雜話、鳩巢小說の如きは雅俗折衷の流暢さがある。これ等は元祿期のものであるが、この開拓によつて、更に天明寬政を經て文化文政の隨筆物は多く混淆文で書かれるに至つたのである。

〔戶田茂睡〕　本名恭光。名門の子で駿府城內に生れ、父の流謫について下野國那須の里に育ち、江戸に出て本多侯に仕へ、後、淺草金龍山の邊に隱息し著作に從ふ。寶永三年（一三六六年）四月歿、年七十八。德川初期反堂上派歌人の先驅者として名高く、元祿十二年、七十一歲の身で梨本集を著して中世歌學に反抗し、制禁の

詞の無意味なること、歌詞の自由なることを主張して和歌革新の曉鐘を打つた。彼は才氣喚發で好學の念強く、和漢の學に通じてゐた。歌風は彼の主張程ではないが、當時の二條派よりも遙かに新味があつた。「家づとにゆるせばとても櫻花みすべき人のあらばこそあらめ」

〔復古を唱道した〕　七十一歳になつた茂睡は元祿十二年（一三五九年）七月發行の梨の本集によつて唱道した。前代の制の詞といふものが甚だ煩瑣で、初五文字には、ほの〴〵と、月やあらぬ、さくらちる、我が戀は等を置くべからずとした等に對して、茂睡のはその用語自由論を唱へ、「歌は大和詞なれば人の言ふと言ふ程の詞を歌によまずといふことなし」と制の詞を攻撃し、「人丸業平貫之より初めて定家の歌の五文字をさへ遠慮せよといふに何とて三十一字歌のはじまり、殊にそさのをの歌八雲立の五文字をば制せさるぞ」といひ、その論據の的確、例證の豐富さを以て、制の詞の矛盾を攻めて數百年來の弊を矯正せんとした。この意見は寛文五年頃壯少時代既に見られたが、こゝに始めて堂々と論陣を張つたのであつた。

〔堂上趣味〕　いはゆる堂上風。徳川時代天皇公卿等專ら宮廷に關係のある人々の詠んだ歌風で、古今傳授を重んじ、三玉集（柏玉集、雪玉集、碧玉集）や頓阿の草庵集くらゐを模範として、典雅優麗の趣はあるが、潑溂たる生新の氣はなかつたが、元祿頃民間歌人の出るまで歌壇の中心勢力となつてゐた。

〔芭蕉〕　正風の開祖、俳聖といはれる。名は宗房。號は桃青、別に桃華園、芭蕉庵。伊賀國阿山郡に生る。九歳の時、伊賀の國上野の城代藤堂良精の長子良忠に近侍したが良忠が卒したので追慕して出家したのが二十三歳。北村季吟について和歌俳諧を學び、寛文十二年九月江戸へ出、後、深川に芭蕉庵を結んだ。禪や畫を學び宗祇や西行を仰慕し、大自然に親しんだ。その俳諧に閑寂の特質を持つてゐるのはこの時の修養の結果で、蕉風とも正風ともいふ。元祿七年（一三五四年）十月歿、年五十一。作風は彼の全人格が表れてゐること、唯美的であること、自然美に沈潜してゐること、不易流行を一の誠をもつて調和してゐること、俳材俳想の多様であること等が特徴で、特にその第三はいはゆるさび、しをりであり、幽玄閑寂の趣致がこれであ

る。門人多く蕉門十哲は名高く、この正風から江戸風（江戸座、雪門派）と上方風（美濃派、伊勢派）とが分れた。主なる著は奥の細道、幻住庵記。門人編に俳諧七部集。「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」「古池や蛙飛びこむ水の音」等最も有名。

〔諸國を行脚し〕　第一回の行脚は四十一歳からで、伊勢參宮、上野、大和、山城、近江、美濃、多度、桑名、熱田、名古屋を經た。（冬の日）。第二回は、四十二歳で、奈良、大津、尾張、名古屋、木路、甲斐を經て深川に歸つた。（野ざらし紀行）。第三回は四十四歳で、明石まで（笈の小文）。その間、鹿島まで行く（鹿島紀行）。第四回は四十五歳で、明石、大阪、大津、岐阜、善光寺を經て江戸に歸る（更科紀行）。第五回は四十六歳で、奥羽、北陸の長途（奥の細道）。第六回は五十一歳で、名古屋、京都、膳所、大津、伊賀上野、大和、浪花、この浪花で胃腸を害して歿した。

〔芭蕉の俳諧は云々〕　これが正風の根本藝術相である。芭蕉は不易、流行、寂、栞、細味といふがこれをいひかへれば幽玄相である。「不易」とは永遠性の詩的生命であり、「流行」とは不易の生命も時代により個性によりその形態を異にする方面があるから、詩に於ける流轉の相をいつたのである。「寂」とは沈靜の風であり蒼古の趣で、この幽玄閑寂の境地が靜的な東洋藝術の殿堂であり、蕉風の根本藝術の一である。「栞」とは句の内容形式を含めた諧調上の彈み、粘りの意で、これによつて風雅が生ずる。「細味」とは優雅な情趣の意で、しんみりした實意のこもる味はひをいひ、粗奔豪放の反對である。又、特に連句では心附を主張したが、それには、うつり、ひゞき、にほひ、くらゐ等の語がある。「うつり」は取合せて前後の反映對照から生ずる美感、「ひゞき」は音調上の諧律、「にほひ」は風韻で餘情のあること、「くらゐ」は句の品位であり樣姿の高い事をいふ。是等の俳諧は概念的な智的要素でなく、どこまでも情緒をからませた詩趣そのものである。以上が完全に融合されたものが正風の俳諧である。

〔三味線〕　永祿五年（一三二二年）の春、琉球より始めて渡來した。この「三絃」は蛇皮を張り二絃であつたが、和泉國境の琵琶法師小路が三絃とした。尋いで虎澤といふ者が本手破手といふ手を定めて人に傳へ、後澤住檢校はその妙に達し、別に淨瑠璃三味線と稱すべ

き一流を立てた。次に寛永の初に攝津の人加賀都、城秀の兩座頭が江戸に來て加賀都は細川流、城秀は八橋流を開き、是より世に流行し、歌舞伎芝居に用ひられたのもこの時代であつた。

〔操〕　操人形。德川時代竹本座豐竹座で盛んに興行した偶人劇で、戯曲の臺詞により人形遣が人形をあやつて劇を演ずるもの。吉田三郎右衞門や辰松八郎兵衞はその名手で表情眞に迫るものがあつたといふ。これは攝津國西宮の傀儡師引田某が始めたといふ。當時から續いた操人形には今大阪の文樂座がある。

〔淨瑠璃〕　義太夫。大薩摩、新内、常磐津、清元等皆三絃に合せて謠ふ語り物の總稱。が、今は義太夫節の淨瑠璃が最も流行するから義太夫節の語り物のみを淨瑠璃といつてゐる。淨瑠璃といふ名は永祿年中織田信長の侍女小野於通が淨瑠璃姫の故事を脚色した淨瑠璃物語十二段草子を慶長年中に岩船檢校が琵琶に合せ、又澤住檢校等が三絃に合せて語つたのに起つたと傳へられてゐるが、享祿四年（一五一九年）の宗長日記に淨瑠璃の語が見えるから足利時代末には已に流行してゐたと思はれる。その一派の義太夫節は大阪の竹本義太夫によつて始められ、三味線の發達と共に平家琵琶、謠曲、說敎節、祭文等を混へて發達し、各派を生じた。最初は樂器の伴奏がなく扇拍子をとつた。次に文學としての淨瑠璃は室町時代から德川時代の近松の出現するまでは謠曲まがひの短篇や荒唐無稽の脚色で（古淨瑠璃といふ）價値はないが、近松によつて操り劇の臺本として幾多の藝術品を生み出し（新淨瑠璃といふ）てからは、文詞は凡て戯曲的性質を帶びるに至つて、後期江戸文學の一勢力となつた。

〔竹本義太夫〕　義太夫節の開祖。義太夫は初め井上播磨の門人清水理兵衞について播磨節の奥義を學び、後宇治嘉太夫の門に入つて嘉太夫節の奥義を極め、二派の長を折衷して新調を生み、竹本義太夫と名乘つて貞享二年大阪に興行し、後、近松の新作物語を興行して名を揚げた。後に豐竹座が起り、これと爭つた。

〔近松門左衞門〕　姓は杉森、名は盛信。巢林子、平安堂と號す。近松門左衞門とは淨瑠璃作者の名。享保九年（一三八四年）十一月歿、年七十二。延寶四年二十四歳の時、宇治嘉太夫のために源氏供養を作り、山本角太夫のため瀧口横笛を作つたのが作家生活の第一

歩。後、貞享三年に竹本義太夫と提携してその座付作者となり、出世景清を作り壓倒的名聲を博した。そして京都から大阪へ移り曾根崎心中以下の名作を竹本座にかけたが、義太夫の歿後（正德二年）は二代目義太夫と提携して國姓爺合戰以下を新作した。時代物の革新と世話物の創始との二點に文學史的價値があり、文學的價値には構想の巧緻と表現の精彩とが中心思想を明確にした點であつて、永遠の人間性を摑み、愛の心を以て描き出した愛の詩人といへる。作品百餘曲を時代物と世話物と心中物と折衷物（時代物と世話物を含む）とに分けられる。

〔時代物〕　史劇的のもので、近松は初は多くこれに筆を染めた。材料は源平盛衰記、平家物語、又は謠曲から多くとつたが、これは事件の變化を主とするので、その人物は只普遍性を有するのみで、人物の行動も事件の變化も皆宿命によつてゐる。時代物に屬する傑作の中傾城佛の原、蟬丸、一心二河道、國姓爺合戰、曾我會稽山、出世景清、碁盤太平記等は名高い。

〔世話物〕　社會劇で、近松は晩年この方に多く筆をとつた。時代物に對して人物が主因となつてゐて、個性を發揮して居り、吉凶禍福、幸不幸は皆人物の性情から生じてゐる。世話物の人物は現實的であり、時代物の人物は模型的である。そして現實的な人物はその行動によつて境遇を作り、模型的な人物は境遇に應ずるやうに作られてゐる。これが時代物と世話物との根本異である。傑作には長町女腹切、女殺油地獄、夕霧阿波鳴門、山崎與次兵衞壽門松その他。又、別に心中物をもこの部類に含めていふが、心中物には曾根崎心中、心中宵庚申、今宮の心中、冥途の飛脚、心中天網島その他。

〔紀海音〕　本姓は榎並、俗稱は喜右衞門。父は俳諧師貞田、兄は狂歌師貞柳で文學が遺傳であつた。彼は契沖について國學を學んだ。元祿十五年豐竹座の座付作者となり、竹本座の近松と相對して。元文元年法橋に叙せられ、寛保二年（一四〇二年）十月歿、年八十。作風は學識と着想と文詞の流麗とを以て近松に迫つてゐる。三十餘曲の中の傑作には鎌倉三代記、心中二つ腹帶、八百屋お七歌祭文、椀久末の松山その他。

〔竹田出雲〕　名は清定。江戸の生れで京で傀儡師をして大阪へ來て寛文二年竹本座主となる。寶曆六年（二